THE CENTRAL REVIEW

中央公論

春期大附録號

第廿四年　第四號



クラブ洗粉の常用は現代紳士の特權なり

洗面料として
クラブ洗粉が如何に
舶来石鹸に優越せる
特色を有するの？

新學年校

早稻田中學講義

◉各科共四月初旬——新學年第壹號——發行す◉

本講義錄は文部省令の中學校教授細目に準據し之に加ふるに時勢に切要なる學問藝術を教授するものにして講義の平易明快教授法の斬新懇切修了の短期學資金の低廉なるは勿論圖書豐富、雜錄雜報の敏活多方面なるは實に其特色たり他に類似の講義錄多しと雖ども第一流の大家が親しく講義文を草しこれに署名してその責任を天下に明にするものに至りては獨り本大學の講義錄を推すべし

貳年卒業

早稻田商業講義

貳年卒業

◉道德の要領 文學博士 坪内雄藏
◉倫理學一斑 文學博士 坪内雄藏
◉國文 永井一孝
◉文法 文學士 橘地清次郎
◉作文 五十嵐力
◉漢文 文學士 丸山圭治郎
◉習字 小山雲潭
◉國文學史要 土屋詮教
◉英語(發音、綴字、讀方、會話、習字) マスター、オフ、アーツ 岸本能武太
◉英語譯解 增田藤之助
◉英文法作文 二木千年
◉英文軌範解說 武信由太郎
◉支那語 青柳篤恒 宮島吉敏
◉獨、佛、羅甸、希臘、露 朝鮮語發音文字 各專門講師
◉日本史 文學博士 原秀四郎

◉東洋史 文學士 高桑駒吉
◉西洋史 文學士 本多淺治郎
◉日本地理 農學士 志賀重昂
◉外國地理 理學士 山上萬次郎 野口保興
◉地文學 理學士 石川成章
◉算術 理學士 吉田好九郎
◉代數 理學士 吉田好九郎
◉幾何 理學士 田邊尙雄
◉三角法 理學士 田邊尙雄
◉鑛物 工學士 丸澤常哉
◉動物 吉田貞雄
◉植物 理學士 草野俊助
◉生理衞生 系佐近
◉化學 理學士 池田清
◉物理學 理學士 田中三四郎
◉法制 法學博士 高田早苗
◉法制 法學博士 有賀長雄

◉經濟 法學博士 添田壽一
◉圖書 山口大藏
◉音樂 東儀季治
◉簿記 商學士 吉田良三
◉農業大意 農學博士 橫井時敬
◉工業大意 米國工學士 關口八重吉
◉商業大意 商學士 小林行昌
◉自修法 土屋詮教
◉體操一斑 熊谷主膽
◉應用數理 藤野了祐
◉體育談 安部磯雄
◉史傳逸話 文學士 中野禮四郎
◉和歌講談 大口鯛二
◉俳句講話 本多文雄
◉軍事談 巽來治郎
◉法律顧問 寺尾元彥
◉漢字の話 松本洪

外生募集

大學商科の教授學科と時代の要求とを參酌して最も普通の商業教育たるの外最も進歩せる商業の智識

學術の修養を目的とし普通學の應用に初めて商業學の大綱に入り尚ほ經濟財政法律及び工業等の専門學の思想一斑に亘り終に商業經營の奥義に達す且一面に(實業雜誌の體裁と内容とを加ふ)實に我國唯一の商業通信教授機關なり

◉德道の要旨　文學博士　坪内雄藏
◉商業學大意　ドクトル、オヴ、フイロソヒー　伊藤重治郎
◉經濟學原理　法學博士　添田壽一
◉貨幣　法學博士　井上辰九郎
◉日本商業地理　商學士　松村吉則
◉日本商工歷史　文學士　平沼淑郎
◉法制一斑　法學博士　有賀長雄
◉民法要義　法學士　鈴木喜三郎
◉商法　法學士　山田浩藏
◉商業簿記　商學士　吉田良三
◉商業算術　商學士　小林行昌
◉商業實踐法　土屋長吉
◉商業道德　杉山重義

◉商事要項　ドクトル、オヴ、フイロソヒー　伊藤重治郎
◉外國貿易　法學博士　井上辰九郎
◉外國爲替　法學博士　河津暹
◉商業書簡文　品川卯一
◉世界商工地理　商學士　松村吉則
◉世界商工歷史　文學士　平沼淑郎
◉内外重要商品　商學士　武田英一
◉財政一斑　法學博士子爵　田尻稻次郎
◉銀行簿記　商學士　吉田良三
◉工業簿記　十屋長吉
◉應用代數學　理學士　遠藤又藏
◉應用幾何學　高見豐
　　　　　　　佐久間謙

◉化學工業大意　理學士　加藤與五郎
◉機械工業大意　工學博士　阪田貞一
　　　　　　　　米國理學士　關口八重吉
◉實用國文講義　文學士　松本洪
　　　　　　　　　　　　下村英
◉日用作文一斑　宮坂鐐吉
◉普通英語譯解　平田祖助
◉商用英語譯解　平田祖助
◉普通英語作文　品川卯一
◉商用英語作文　品川卯一
◉普通英語會話　今井友次郎
◉商用英語會話　今井友次郎
◉科外講義及研究法　各専門家擔任

高等國民教育

壹年卒業

本講義録は中等教育と一種の職業教育とも云ふべき大學教育との外に立ち政治經濟法律文學科學等の
兼ねて**立憲思想と文藝趣味**との涵養に務め以て天下に**活歩し得る紳士**を養成せんことを期するものなり
高等國民必須の專門的智識を網羅して最も簡明に最も趣味あるやうに講述し

◉政治學　法學博士　浮田和民
◉憲法要論　法學博士　有賀長雄
◉自治制度　法學博士　清水澄
◉法律學大意　法學博士　山田三良
◉民法要義　法學博士　中村進午
◉經濟學　マスター、オヴ、アーツ　田中穗積
◉財政一斑　法學博士子爵　田尻稻次郎
◉都市問題　安部磯雄

◉列強大勢　來治郎
◉倫理學　文學士　藤井健次郎
◉文學論　島村瀧太郎
◉宗教研究　加藤咄堂
◉哲學綱要　平野履道
◉社會學　法學博士　浮田和民
◉藝術叢話　文學博士　坪内雄藏
　　　　　　紀淑雄

◉漢文學　松平康國
◉國文學新論　五十嵐力
◉日本最近世史　文學士　煙山專太郎
◉地理　農學士　志賀重昂
◉生物學　理學士　草野俊助
◉工藝叢話　牧野啓吾
◉交通　ドクトル、オヴ、フイロソヒー　伊藤重治郎
◉商業須知　土屋長吉

◉各學課長擔當講師(及見本入)詳細規則書申込次第送呈す◉

東京牛込早稻田
電話番町三百七十四番
振替口座千百二十三番
早稻田大學出版部

御奈良天皇恩賜　本派本願寺所藏

宮内省御歌所寄人　坂正臣先生序

宮内省御歌所寄人　大口鯛二先生撰及跋

三十六人家集寫眞帖

裝幀用、コロタイプ印刷、用紙菊倍判、純良鳥の子、奉書、江戸川別漉、

上質洋紙等各種　一組六十葉特別實價金拾圓（但用帋鳥の子に限り一圓增）

遞送料金貳拾四錢（但東京市内無遞送料）

本帖歌集の原本は、藤原氏時代の舊物にして、長年月の間幸にも蠹魚の災を免れ、料紙の下繪に聊かの變色剝落なく、墨痕亦淋漓たれは、寫眞印刷極めて鮮明にして、一帖の裏、直ちに平安朝時代の書と畵とを併せ見るを得べし、其の如何に天下の貴重品なるかは、乞ふ左の撰者の跋文に就きて知らるべし、本帖は本願寺に乞ひて百部を限り、世の全好者に頒つものなれば速かに申込まざれば、直ちに賣切となるべし

大口鯛二先生の跋に曰く

去明治二十九年の八月、おのれ賜暇にて、京都に遊びたりし頃、故明如上人の許にありて本願寺の庫裡に藏せらるゝ古書ども、これかれ取調べし中に、家集と外題したる一函あり、ひらき見れば即ちこの三十六人家集三十九帖なりけり。筆者の名もなく、傳來の故由もみえねど、その書は、道風、佐理、行成の三蹟をはじめ、公任、俊頼などの筆蹟とおぼしくて、料紙など、目もあやにいみじうめでたければ、先うちおどろかれつゝ、かく貴き天下の寶物を、なにとてよのつねの圖書の中に、うちまじへてはおかれたるならん、といぶかりあやしみつゝ（中略）時なるかな、時なるかな、天文日記とて六十餘卷あるを

上人がとうでられてこは證如上人(光教)の自筆にかゝる座右日記なり、見ずや、といはるゝまゝに、まづそか中なる一卷をうけて、ひらきみしに、そのはじめ程に、ふと目にたまりたるは、左の一條なり。

天文十八年正月

二十日從禁裏以女房奉書三十六人家集令拜領、門跡經乘へ以御書被仰越候、僧正事來二日以前御申沙汰有度下山被仰候。

天文は、後奈良天皇の御代なり、これなり〳〵、此の時拜領の御品こそ、この三十六人家集なりけれ、六十餘卷の日記かたはしより見もてゆかば、數日を費すべきを、たま〳〵何心なくひらきみつるその一卷の初にしも、この事を見いでたるは、まづ不思議の緣なるに、明如上人が、その事ともなしに、見せたまひし日記の中に、この事のまさしく記されてありしは、全く本書の世に出づる時到來せるにて、證如上人のみたまの、暗に示したまへるわざにこそ、とかしこくおぼえたりき(中略)やがて上人より本書を借受けて、東京にたづさへかへり、ひろくその道の博士等にも見せて、その說をもとめしに、誰も未だ見聞せざる珍書なり、寶物なりとて、ひたすらおどろきたふとむばかりなりけり、(中略)本書はかくの如く、後奈良天皇恩賜の由緒貴き平安朝の舊物にて、世に傳へたる三十六人家集中の最古最良の證本たるのみならず、その筆者は前に記せる如く、本朝三讀とたゝへられたる能書たちの筆もまじり、その料紙はた世にたぐひを見ざる結構にて、藤原氏全盛時代の美術の粹を鍾めたる物なれば、美術家の參考品としても、無比の重寶たるものなり。本書中の一片にして、また〳〵世に傳れるは、千金の價値ありと、然るに、後西院天皇の返させたまひしより後、二百餘年の間塵埃のそこに埋もれて、しかも蠣喰のうれひなく、今日に至れりとは、おもへども〳〵不思議の至なられや、おのれはからずも、これを發見して、かく世に紹介することを得しは、實におのれが一生のさいはひにて、うれしともうれしきことのきはみになん。本書一たび世にあらはれて、古筆家の從來の鑑定を一變せしめたること、又本書の料紙の下繪その切り繼、破り繼、重ね繼などの製によりて、美術家の意匠を啓發せしめたる力の頗る大なることなどは、既に洽く世に知られたれば、今又いはず。又おもふに本書のかくの如く貴重なること、もしはやく世に知られてありしならんには、かの戰亂の時代などに、よからぬものどもありて、いかにもてはふらかしけんも、はからざるを、なか〳〵に絕えて知るものなかりしは、今日まで滿足に傳はれるもとゐなりけんかし、とにもかくにも天下の致寶なれば、神佛の加護ありしなるべし(中略)又本書は、もと御室關白道長公の意匠になりて、上東門院の御遺物ならや、と紫式部の日記によりて、おのれが思ひよれることゞもは、坂ぬしの序文にもいはればあらしつ、さてこの寫眞版は、故明如上人世にいまそかりしころ、本書を見ることあれはざる人にも、ひろく見せ、又おのれらが手習の本にもせまほしとて、おのれせちに上人にこひきこえて、一帖のうちより、一葉二葉あるは五六葉あるはまでづゝえりいて寫しとり、かくはものしつるなりけり。

發賣所 婦人社

東京市本郷區西片町十番地はノ十四

電話下谷九百十九番

振替口座東京卅四番

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●文字が上手に書ける程愉快なものはない

惡筆は一生の損

本會獨特の特許速成通信教授の方法にて練習すれば如何なる惡筆にても短日にて頗る上達すること全く機械的であります

顧問 伯爵東久世通禧閣下◎楷行草三體及書簡文細字とも六ヶ月卒業

書者 文部省習字檢定試驗委員 高等商業學校習字教授 稻川雲谿先生及玉木愛石先生外講師大家數名

女子部書者 小野鵞堂先生 草行假名書翰文及和歌等六ヶ月卒業

見本 詳細會則無料進呈

東京本郷森川町 電話下谷三〇一一

帝國習字速成學會

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

世界を動かしたる名著

肉彈は世界最大著述の一に算せられ歐米讀書社會の好評嘖々或は近時文壇の傑作と稱し或は之をトルストイ伯の『セバストボル戰記』に比して不朽の著と稱す。英國皇帝陛下は此書を愛讀せられ日本國民の勇壯濃情なる精神を學ぶは此の書を讀むに如かずとの聖慮より之を皇族近臣の間に薦められ爲に今や英國上流交際社會の最大の談柄となり淑女紳士共に『肉彈』を讀まざるを恥づるの風あり。又獨逸皇帝陛下は此書獨譯の一日も早く出版せられんことを侍從武官を通じ譯者シンチンゲル大尉に勅諚ありたりと承はる。

邦文肉彈

定價七拾錢　郵税金八錢　第五十八版

英文肉彈

定價壹圓　郵税金八錢　第五版

新渡戸稲造先生著

武士道

邦文（櫻井鷗村譯）第六版　定價壹圓　郵税八錢

英文　定價壹圓　郵税金八錢　第十四版

新戸渡稲造先生著

隨想録

定價壹圓　郵税金八錢　第八版

發行所　東京市麹町區五番町　丁未出版社

振替口座東京七八四七番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

國民文庫刊行會 會員募集

國民文學は民族の血脈國家の生命也。わが國民文庫は過去二千年の歴史を作り又我民族と共に萬代不滅なるべき日本古文學の精粋を鍾む

稱して國民文庫と云ふ。これ汎く國民に讀まるべき我國古來の名著傑作を網羅せる一大文庫の謂也即ち學者と云はず、政治家と云はず、實業家と云はず、何人も國民として必ず其一部を藏すべき底のもの也。校訂の嚴正なる、印刷の鮮明なる將たまた裝幀の堅牢高雅なる優に書齋の裝飾ともなるべし。思ふに世の愛書家は之によりて其渴を醫すべく、また家庭の趣味を養ひ高尚なる娛樂の料を得んとするものは之によりて其望を滿たし得べき也。……（往復端書にて御申越次第規定書送呈）

略則

△會期　滿二ヶ年　△入會期限　來る四月末日　△入會金壹圓

△會費　一ヶ月　金二圓　△製本　中村不折書伯意匠　菊判クロース約八百頁　△定員三千名

書目

- 源氏物語　二冊
- 枕草紙・竹取物語・伊勢物語・土佐日記　一冊
- 方丈記・徒然草・寶物集・砂石集　一冊
- 大鏡增鏡今鏡　一冊
- 萬葉集　二冊
- 和歌八代集　一冊
- 山家集・金槐集・新葉集・其他數種　一冊
- 源平盛衰記　一冊
- 太平記　一冊
- 平家物語・保元物語・平治物語　一冊
- 曾我物語・義經記　一冊
- お伽草紙・謠曲五百番　一冊
- 狂言集　一冊
- 落語集　一冊
- 近松集　二冊
- 八犬傳　三冊
- 西鶴集・其積集　一冊
- 川角太閤記・浦庵太閤記・其他三種　一冊
- 德川時代小說集　九冊
- 俳句俳文集　二冊
- 淨瑠璃集　一冊
- 弓張月　一冊
- 心學本　一冊
- 狂歌、狂文川柳集　一冊
- 近世歌文集　一冊

計卅六冊　一冊一圓卅三錢餘の割

評議員（イロハ順）

- 文學博士　芳賀矢一
- 文學博士　荻野由之
- 國學院大學講師　畠山健
- 帝國大學圖書館長　和田萬吉
- 山路愛山
- 高等師範教授　松井簡治
- 文學博士　藤岡作太郎
- 文學博士　小杉榲邨
- 朝比奈知泉
- 高等師範教授　佐々政一
- 東宮侍講　本居豐穎
- 女子高等師範教授　關根正直

△申込取次所　東京　東京堂　至誠堂　上田屋　林平　東京 大阪　寶文館

東京市神田區小川町一番地
（電話本局七三二番　振替東京一八五七二番）
國民文庫刊行會

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

初版即日賣切●再版出來

夏目漱石氏著

文學評論

（大册六百三拾餘頁）

實價壹圓八拾錢
郵税十二錢

本書內容は下の六編より成る

本書は著者が曾て**大學**で講じた泰西**作家**の**批評**を**訂正增補**したのである本書の**特色**は日本人たる著者自身の性情を通じて**如何**に外國の作家を**觀たかの點である**

●第一編序論には**鑑賞**の態度と批評の態度と鑑賞的批評の態度を論じてある**第**二編十八世紀狀況の一般には政治哲學其地の梗概と風俗習慣及び文學者の地位等の精細な叙述がある第**三**編にはアヂソンとスチールを通じて**常識文學**を評論してある**四**編スキフトの部には**厭世**文學及び文學は**趣味**の表現なり等の諸説が述べてある**五**編ポープと所謂**人巧**派の詩中には文學の**要點**其他の重要問題を論じてある。**六**編はデフォーを基礎として**一般小說**組織、及性格、事件、背景の關係區別其他が根本的に論じてある。

發兌元 （東京日本橋通四丁目角 振替東京一六一七番） **春陽堂**

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

雑誌界空前の光榮

實業之日本

四月一日發行 第拾貳卷第七號 （毎月二回） 一冊郵税共拾貳錢 半年前金郵税共壹圓五拾五錢 一年同參圓

内容

▲青年修養法（其三）……青年は如何に職業を選擇すべきか……實業之日本顧問 新渡戸稲造

△職業選擇に際して第一に考ふべきは何か
△職業選擇は何人に相談すべきか
△フランクリンは如何にして職業を選擇せしか
△僕も之に就て失敗の經驗あり
△己の所望が親の意思に反した時は如何にすべきか

皇太子殿下には畏多くも去る日本多侍從を召させられ自今『實業之日本』を毎號取揃へ置くべしとの御沙汰ありたり如斯光榮は雑誌界空前の事にて本號に詳記せり

▲東京は必ずしも羨むべき成功の地に非ず……實業之日本社長 増田義一

▲實業界を退隱するに當り余の心事を告白す……安田善次郎

▲中學時代に於ける學科の好き嫌ひと出世後の實驗……（數十名士の告白）

東京京橋南紺屋町 電話新橋八七四番 實業之日本社 郵便振替貯金口座參貳六番 賣捌全國各地書店

田山花袋君著　中澤弘光君畫　齋藤松州君裝

花袋集　第貳

著者の近業十八篇を集めて花袋集第二成る、本書は自然主義を首唱せる以來公刊せる著者の三大小說集の一にして、既往一年間に於ける其の傾向を詳にするを得し而してそは軈て自然派の傾向を知るに足るものなるべし。

金壹圓拾五錢　送費金十四錢

村山鳥逕君著　鏑木清方君畫

野心

金六拾五錢　送費金八錢

塚原澁柹君著

新刊　長篠合戰

一度敬虔なる牧師となれる著者が公餘の閑を得て物せる第二の勞作也。さゝにごり以來の著者の進境を窺はん人は、乞ふ先づ本篇を繙いて其の說く所に聞け。

巻第拾　金八拾五錢　送費金十錢

巻第一　金壹圓貳拾錢　送費金拾八錢
巻第五　金八拾九錢　送費金拾貳錢
第九巻　金八拾五錢　送費金拾貳錢

巻第貳　上下各金八拾錢　送費各拾錢
巻第六　金九拾錢　送費金拾貳錢

巻第三　上下各金七拾錢　送費金拾錢
巻第七　金壹圓拾錢　送費金拾四錢

巻第四　金九拾錢　送費金拾貳錢
巻第八　金壹圓貳拾錢　送費金拾い錢

東京市神田區富山町十八番地

佐久良書房

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼全一册 定價金五拾錢 郵税金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はさる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに**試驗問題**に**擬**し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

されば、一般英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 **反省社出版部**（電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他



中央公論第二十四年第四號春期大附録號目次



春季大附録

有僞造物

家庭常備藥

起死回生 寶丹

旅行懐中藥

乞御注意

金の匙か銀の匙か

寶丹は……
口中を清め　鬱を散じ
胸をすかし　神を休め
氣を養ふ

主治としては
其功能多大なれば
枚擧に遑あらず

寶丹用の匙に十德あれども茲に載せ難ければ略しぬ詳しくは弊店發行のカタローグにあり就て御高覧を希ふ

東京上野池之端仲町



寶丹本舗　守田治兵衛

弊店意匠部の新案にて昨年より金卅錢以上の寶丹に優美高尚の匙を添へて進呈仕候處望外の好評を博し候に就ては來三月七日より九月卅日まで寶丹御愛用家の御なぐさみにもとぞんじ金參拾錢以上金參圓以下の寶丹壹萬個に對し

金製十本（量目壹匁四分附　價格金五圓）銀製五十本

の割合を以て從來添附の匙と同形の品を進呈仕候間『金』が御手に入るか『銀』が御手に入るか御ためしの程を希上候

戰勝のビスマルク戰敗のナポレオン三世を護送す



カムプハウゼン筆



第二十四年第四號
第二百四十一號
春期大附錄號

新政黨竟に成るや

（一）

吾人が前月の本欄に於て叙述したりし新政黨は、早晩將さに成立せられんとす、政治問題に注目する人々の參考のため、茲に少しく其の來歷の眞相を語るべし。

新政黨組織の根源は、實に昨年初夏の交にありと視るを當然とす、當時西園寺內閣の財政策が多數實業社會の反對を受け、其の影響は延きて元老の怒りを招かんとするも、總選擧の結果、政友會多數を占め、將さに幾んど衆議院の過半數を占めんとする傾向あり、內閣は此の勢ひを恃み、且つ一方には鋭意して貴族院に勢力を延べ、其の形勢を一變せずんば止まざる元氣を以て、內閣を死守すべく思はれしか

ば、政友會以外の策士等は、非西園寺内閣非政友會の同盟を訂し、進んで政友會に對抗すべき大政黨を作らんと欲し、進歩黨の合田福太郎（非改革派）。大同倶樂部の野尻邦基の兩氏を始め、兩黨派の院外者及び今の又新會の前身たる政界革新會猶興會等を代表すべき政客新聞記者等發企して同盟の旗幟を翻へし。兩黨派及び今の又新會に列する代議士等も數次會同を重ね、大石、河野、島田の諸氏また密かに築地の某旗亭に會して協議するまでに運びたりき、殊に此の運動の背後には、桂系統の人々の密かに聲援するあり、天下靡然として之に向はんとする狀態なりき、然るに西園寺内閣の運命俄然として盡き、桂内閣之に代るに及び、形勢急變して大同盟の必要を見ざるに至り、自然之を解除したりしも、然かも尙ほ之を緣故として必らず非政友同盟を作爲せんとを期待するもの稀れならざりき、少くも進歩黨中の改革派と大同倶樂部とは其の最も熱心なるものなりき。

第廿五議會と共に出で來れる又新會は、猶興會と政界革新會との合併して、更らに中立にして辨論を好む人々を集合したるもの也、戊申倶樂部は比較的に桂系統に近き政友及び一部實業家の團體にして、兩派共に四十餘人宛の代議士を有す、彼等は議會の狀勢を視て、多數黨たる政友會の專恣を今更の如く感知して憮然たらざるを得ず、其の議長も、其の議事を左右し進行するものも、總て政友會員にして、他の進歩、大同、又新、戊申の四派は、有れども無きが如く、徒らに東西の片隅に蟄して議場を看るのみ、恰かも傍聽者と擇ぶなく、偶々何等かの主張を爲すも、政友會の意にあらざれば竟に如何ともする能はざるを觀ては實に切齒せざらんと欲するも能はざる也。

甚に於てか非政友同盟を欲するの感情が、常に四派の議員の間に往返すべきとは自然の數也、况んや昨年初夏の交、既に業に大同盟の計畫ありしをや、此の感情は當時を追懷して殊に切ならざるを得ざる也、而して新政黨組織の計畫は、實に主として此の感情を利用せんと欲せしもの也。

（二）

今回の新政黨組織の發頭人は、實に進歩黨なりき、然り、進歩黨中の所謂改革派なるものなりき、彼等は政黨として其の効果を收め、且つ所謂官僚派を同化せしめて、以て政黨政治を實行せんとせば、先づ其の勢力を大にすると共に官僚派にも近接して以て政權を得るに如かず、斯くせんには官僚派の直參たる大同派と握手し、一方には又非政友派を合同せざる可らずとし、辛苦して大同倶樂部と歡心を結び、形勢の推移を窺へるに、犬養毅氏との釁隙日を追ふて甚だしく、且つ犬養氏が自家の勢位防衛のため、獨り進んで又新會と合同せんとして成らざりしを視るや、機先を制せんとして公然新政黨組織の決議を爲し、大石（正己）、武富（時敏）、箕浦（勝人）の三氏を委員として之を大同、戊申の兩派に交渉するに決したり、兩派の或るものは、進歩黨内の爭鬪に安んぜず、寧ろ犬養氏を處分して以て黨中の勢ひを定むべきとを慫慂し、而して新聞記者の一部また側面より熱心に之を促がせるが如し、進歩黨中の改革派も亦果して犬養氏を放逐せば、氏と進退を共にすべきもの數人に過ぎず、多くも十五人を出づることなしと測度し、寧ろ断じて犬養氏を處分せんとしたるが如し、吾人の聞く所によれば、彼等の或るものは、密かに大隈伯に告ぐるに此の觀察を以てしたるに、伯も形勢果して然らば已むを得ざる處分なりとして之を

默認したりしといへり、思ふに犬養氏の狹量にして他と容れず、且つ善罵に長じて多くの名士を逐へるがため、島田、河野、尾崎、柴(四郎)、中村(彌六)、大竹(貫一)の諸氏と相善からざるを以て、改革派は犬養氏を逐ふて以て却つて各派有力者間の好感情を購ひ得べき所以なりと揣摩せるに似たり、斯くて二月廿七日常議員會を開きて俄かに氏を除名するの決議を爲したりき。

然れども此の猛斷は却つて正反對の結果を齎らし來れり、世を擧げて進歩黨創立以來の宿將たる犬養氏を譏るに、多く人を首肯せしむべき理由を具へず、又代議士多數の意向をも確めず、單に常議員會のみの決議を以て之を斷行したるが如き、假令法定的に差支なしとするも、無情冷酷の譏を免かる可らずとし、同情翕然として犬養氏の一身に集中し、代議士の多數も犬養氏を助けて常議員會の決議を不當とし地方黨員の多數も亦た之に唱和し、而して犬養氏自身猛然蹶起して、改革派を呼ぶに官僚主義者を以てし、茲に飽くまでも此一派を粉韲せざれば止まざるの意氣を示すに至れり、改革派は犬養氏の奮起によりて代議士多數の信用と地方黨員多數の人望とを喪へる結果、殆んど手を出す能はず、交渉委員を設けて新政黨の組織を提議し、三月五日戊申、大同諸派と協議すべき豫定をすら變じて、無期延期の申込を爲し、新政黨組織全く頓挫を見るに至れり。

蓋し改革派の豫想は、犬養氏を放逐せば、非改革派の意氣頓に沮折し、形勢を觀望したりしものの如き皆自派に來り投ずるを以て、少くも進歩黨五十人、戊申倶樂部約三十五人、大同倶樂部三十人と又新會中の五六人を得て、茲に百二十人の代議士を有する新政黨を見るべしといふに在りき、然るに改革派と

して新政黨に趨くもの廿五六人に過ぎず、而して戊申派より廿五六人の參加者あるのみ、結局八十人內外の小黨を得るに過ぎざる實況なりしが故に、彼等色を失ふて其の計畫を中止したる也。

（三）

然れども改革派また全く人なきにあらず、彼の島田三郎氏が多年孤立の地位に在て言議の一も行はれざるを慨して、漸く大政黨の必要を感知し來り、而して河野廣中氏等亦同一の意見を懷抱することを察し、改進黨創立以來始終一串進步黨に在りて島田氏と交情の淺からざる角田（眞平）、大津（淳一郎）、肥塚（龍）、鹿島（秀麿）の諸氏をして、島田氏に說くに改進黨再興の意味より大政黨を組織せんとを以てせしめんと欲し、先づ角田氏鹿島氏等をして島田氏に說かしめ、一面には又大石正巳氏自から河野、島田の諸氏に內議し、而して側面より亦之を助けて熱心に運動するものありき、改革派は斯くして又新會をして更らに新政黨の計畫を發企せしめ、非改革派が自から廿二日を以て大會を開き、大に改革派を攻擊して進步黨の本城を乘取らんとする計略に齟齬を來さしむると共に、新政黨成立の宿謀を遂せんと欲せし也。

河野島田の兩氏は共に改進黨自由黨の創立者にして、若し永く其の黨に在らば、素より夙く大臣の地位を贏ち得べかりき、尾崎、犬養、大石諸氏の先輩たり、松田、原、星の諸氏を後進とするに於て、素より然るべき理ならずや、唯だ常に清議に拘泥して去就を輕々しくし、若くば或る事情の下に多年來の地位を捨てしため、今や零丁奇苦、僅かに四十餘人の一團體（又新會）に止まるも、然かも其の團體に長

たるにも非ず、之を今日の議會に於ける大岡、元田、鳩山の諸氏に對照せば、自ら撫然たらざるを欲するも得ざらんとす、河野氏島田氏が大政黨組織の必要を痛切に感じたるは、最も苦き經驗の結果也、且つ兩氏の外尙ほ大政黨の必要を唱ふるもの少からず、殊に三稅廢止案の討議に於て、政友會の竹越與三郎氏が「吾人と雖も三稅廢止の如き人氣案を取るの政略を解せざるに非ず、之を廢止せんとすれば、吾人の一言にして足る」といへるに視て、今更大政黨の意氣の剛壯なるを欽すると共に、又自から其の豪語を嫉むの情湧然として禁ず可らざるものあり、又新會竟に自から起て新政黨組織の發企者たるに決し、現在島田、河野、大竹、坂本(金彌)、山口(熊野)五氏の外、花井(卓藏)、小川(平吉)、櫻井(一久)、鈴木(力)高木(益太郎)の五氏を委員として、其の宣言綱領を起草せしむるとし、三月十六日夜大討論の末兎も角も其の綱領及び宣言書を定めて之を進步、戊申の兩黨派に交涉するに定めたり、吾人は左に後の參考のため宣言書及び綱領を掲け置くべし、會員の多數は寧ろ意義の廣汎なる綱領を定めて、各派の大合同を成すに便し、以て全然非政友黨を組織せんとしたりしも、十數人の所謂硬派と自稱するものあり、自から一團となつて頑强に官僚打破、三稅廢止、軍備縮小論等を唱へ、兩々論戰して數時間に亘るも決せず、竟に尾崎行雄氏に其の取捨を一任するに決し、尾崎氏乃ち兩派の意向を容れて、十八日宣言と綱領とを決定し、更らに當日の代議士會の議を經て之を發表するに至りし也。

宣言

帝國議會開設以來玆に二十年歲を閱すること少しとなさず而も未だ健全なる國論を發揮して之を政治の上に實施すること能はず內外の政務は未だ擧らずして政界は早く已に腐敗の兆を呈し天下將さに漸く議會を輕んずるに至らんとす是れ實に國民を本とし國家を先とす

ろ眞箇有力なる大政黨の存在を欠くに職由せずんばあらず豈に慨嘆に勝ふべけんや我國今や空前無比の大戰に勝ちて內に外に未曾有の大發展をなすべきの時に方り政界の萎靡不振此の如くんば何を以てか興隆の國運に副ひ開進の鴻謨を翼賛するヿを得ん吾人此に感ずるあり大に同志を糾合して一大政黨を組織し正義を執り公道を履み健全なる國民の輿論を發揮して官僚政治を打破し責任內閣の實を擧げ當面の急務先づ惡稅を廢止し進んで軍費偏重の弊を矯め以て憲政運用の妙を効し以て國運の進暢に資せんと欲す玆に左に綱領を揭げて普く公衆に宣示す苟も此綱領を是認して衷心國家の爲めに竭さんと欲する者は悉く是れ吾人の良友なり天下公事固より親疎遠近の差別あるなし同感の士冀くは奮て來り會せよ

綱領

一立憲思想の普及を圖り責任內閣の實を擧げんことを期す
一外交を振作して國利を發展せんことを期す
一清國保全韓國保護の實を擧げて戰勝の効果を完全に收得せんことを期す
一制度を更新し紀綱を振粛して行政改革の實を擧げんことを期す
一政費の分配を適正にし稅制を釐革し財政整理の實を擧げんことを期す
一殖產興業を奬勵し運輸貿易の機關を改善して富力を增進せんことを期す
一教育制度を改革し併せて風敎維持の道を講じ强健なる國民思想を養成せんことを期す

又新會は此の決定を爲すと共に河野、島田、大竹、小川、櫻井の五氏を委員として各派に交渉するとしたれば、五氏は第一に進歩黨の非改革派に通告し、次て改革派に計り、更らに戊申倶樂部に內議するととし、而して大同倶樂部には、大竹、小川の兩氏より個人の資格を以て交渉したり、獨り大同派に然かせしは、同派を目して所謂官僚派と爲し、素より主義政見を異にするが故に、公然交渉せず、個人として入黨を勸誘せしなりといふ。

然るに第一に交渉を受けたる進歩黨の非改革派は、此の宣言と綱領とに反對する口實なきが故に之を賛するも、大同倶樂部を新政黨に加ふるに反對し、且つ又新會が團體としても個人としても、之に加入

を勸告すると否とは、我等同志の新政黨に加入するやせざるやの條件なりとまで極言し、次に改革派は常議員會を開きて、全然新政黨に贊成すると同時に、從前自から發起者として各派に交渉したりし關係あるが故に、此の各派にも挨拶すべしと決議して、暗に戊申、大同の兩派とも交渉して進退するの餘地を保留したり。

茲に於て三月十九日進歩黨改革派、戊申倶樂部、大同倶樂部の三派聯合交渉會を開き、大同派は此の闊雅量を以て官僚打破の宣言を承認し、且つ個人交渉としたるの非禮を忍耐するも、唯だ偏武計畫を矯正するの宣言は、軍備縮小論にして全く其の主義に反對するが故に、此の一點に應ずる能はずと主張し、改革派は先づ又新會の發表したる綱領丈けにて合同し、宣言書の如きは、合同の後、各派より委員會を擧げて起草せしめんと論じ、戊申派の委員をして又新會に此の趣意を交渉せしめたるに、又新會の委員は、兎も角代議士會の議を以て確答すべしといひ、翌廿日に至り先づ河野島田大竹の諸氏より從來の經過を報告し、畢竟斯く事の纏まらざるは委員の責任なるが故に、吾々は委員及び幹事（又新會の幹事は河野、島田、大竹、坂本、山口の五氏）をも辭する旨申出でたり。

又新會の代議士會は、更に翌々廿二日を以て引續き開會したるが、結局坂本（金彌）、西村（丹次郎）、入江（武一郎）、村松（恒一郎）濱田（國松）、藏原（惟郭）、佐野（春五）、小寺（謙吉）、佐々木（安五郎）の九氏は又新會より分離して非改革派と合同する決意を爲し、高木（正年）、鈴木（力）、の二氏亦然かすべしといふ、近江谷（榮次 海軍擴張論者として新政黨に加はらずと稱す）服部（綾雄 初めより政黨を無用とす）淺野（陽吉 結局新政黨に加はふべきも新聞記者たるが爲め其の社との關係上局外者たり）大西（五一郎

多分商工黨たらんか）石橋（爲之助新聞社員たるため中立者）多木（粂次郎服部氏と略々相似たり）高木（正年）、加瀬（禧逸）、の諸氏は決議に加はらず、河野、島田、大竹、山口、小川、尾崎、其の他の諸氏は現狀維持に左袒したり、斯くして又新會の十餘名去りて又新會も竟に分離したる也。

（四）

吾人の見を以てすれば、各派黨の意向は大略下の如く解するを以て最も事實を得たるものなりと信ず

第一　又新會には、此の際小異を捨てゝ大同を採り、以て大政黨を組織し、一面には大政黨對立の現象を作りて以て官僚政治の自然に消滅することを期するもの、即ち河野、島田、大竹、小川、尾崎の諸氏是れ也、別に進歩黨中の犬養氏一派と氣脈を通じ、改革派及び大同派を排して別に自から一旗幟を立てんとする者あり、坂本（金彌）、小寺（謙吉）、藏原（惟廓）、村松（恒一郎）高木（正年）氏之に屬す、此の一派は自から純潔分子と唱へ、頗ぶる名聞を好むもの也、前者は新政黨成らずんば暫らく現狀を維持すべしと做し、心密かに犬養派のみと合するを好まず、後者とは頗ぶる區別あり。

第二　戊申倶樂部には、大同派改革派等と共に、新政黨を組織せんとするものと、別に商工黨を組織せんと欲するものと、寧ろ機を見て政友會に走らんとするものとあり、仙石（貢）、肥田（景之）、中村（彌六）、加治（壽衛吉）、富田（幸次郎）、八束（可海）の諸氏は其の第一に屬し、中野（武營）、西村（治兵衛）の諸氏は第二者、加藤（恒忠）、星（一）の諸氏は第三者に屬し、而して戸水氏（寬人）は未定、岩下氏（淸周）等は孰れの政黨にも加はるを欲せざるが如し、第一者比較的多きと言を俟たず

第三進歩黨に在ては、飽まで犬養氏と進退を共にせんとするものと、大同派等とも提携せんとするものと、此の兩派に屬せずして姑らく形勢を觀望するも、其の實新政黨に加はらんとするものとの三派あり、眞に第一派に屬するは藤澤（幾之輔）、坂口（仁一郎）、添田（飛雄太郎）、齋藤（宇一郎）の諸氏約二十四五人に止まるべきか、犬養派自からは堅實なる同志三十三人を有し、他の六七人は形勢觀望者なりといふも、能く洗ひ終らば、眞の犬養派なるものは多分二十四五人に過ぎざらん、第二派は所謂改革派にして大石、武富、箕浦、加藤（政之助）、肥塚（龍）、大津（淳一郎）、木村（半兵衞）、神崎（東藏）、根津（喜一郎）、木下（謙二郎）の諸氏之に屬し、第三派は水野（正己）、村松（龜一郎）福井（三郎）の諸氏是れ也。

犬養派は改革派の新政黨組織を妨害するに全力を盡し、後より又新會の同じ計畫をも密かに咒詛したるが如し。思ふに犬養氏の目的は、己れを除名したる改革派に復讐して、肝脳地に塗れしむるに在るや幾んど疑ひ莫かるべし、又新會の新政黨果して成らん乎、改革派は意氣揚々として先見の明に誇り、且つ犬養派從來の狹量を嘲笑すべく、而して犬養派は第一に廿二日を以て開くべき臨時大會を無意義ならしむるの耻辱を受くるのみならず、犬養氏自身亦假令新政黨に加はるとも、河野、島田、尾崎、中村、仙石、大石、武富、臼井の諸氏と相善からずして、其の勢力の竟に喪失さるべきや明かなれば也、故に犬養氏は又新會の自稱純潔分子か其の名を銜ふがため、痛く大同派一味を嫌ふに乘じ、密かに之を煽動して又新會中に紛議を起さしめ、且つ部下の坂口氏等をして、公然大同派の加入を排斥すべく、又新會

に交渉し、新政黨の計畫をして全然失敗せしめんとは企てしならん、且つ此の失敗を見たる後、招集せる臨時大會に於て、地方黨員の多數を自派と爲し、多數の勢ひを以て進歩黨の本城に迫り、改革派を驅逐して幾んど其の地盤を失はしむる計圖なるべし、若し斯くせずして徒らに議會閉會の後に至らん乎、代議士皆歸國して、犬養氏を助くるものなく、改革派の領有せる常議員のみ依然進歩黨幹部として、恣に其の成さんとする所を成す可ければ也、是れ改革派の犬養派に對して持久戰の計略を取らんとする所以にして、所謂持久戰なるものは、犬養派が死地に陷るゝ所以なるに於て、必らず速戰して功を一擧に收めざるを得ざれば也、吾人は此の點に於て、多年黨界に身を措ける犬養氏其の人の黨略に長け、黨戰に練熟したることを感嘆せざる能はざる也、殊に各派の政客が去年來多く翹望せる新政黨の成立を中止する勢力なるに至ては、轉々其の手腕の辛辣なるに驚嘆せざらんと欲するも得ざる也。

第四、大同倶樂部は今現に廿九人の代議士を有するに過ぎず（井上角五郎氏は新政黨組織の計畫ありと聞き、進歩黨に親友なくして政友會に故人多しと稱し、三月十四日脱して政友會に入れり）、世或は之を穢多組と稱すと雖も、單に利に走りて政府黨と爲れるものは幾んど擧げて落伍し、今は少くも普通黨人と等差なき者多きを占め、殊に其の熊本派の如き寧ろ剛健にして多智なる分子たり、而して其の政黨的節制を有することは、假令少數の故にも由れど、或は政友會以上の處なしとせず、其の幹部は頗ぶる政局の奇變に通じ、假令後日分裂することありとも、兎に角一旦大政黨を組織するを以て利なりと信じ、此の觀念よりして、一切を忍びて新政黨に參加せんと期するが如く、其の偏武説を攻擊して極力軍備縮小

黨に反對するも、單に一種の政略に過ぎざるに似たり、思ふに又新會の幹部其の他にして斷乎として新政黨を組織する方針を繼續せん乎、大同派は多くの議論なしに擧げて合同すべしと想像せらる

且つ戊申派の過半は、大同派と步趨を一にするもの也、換言すれば、少くも其の二十四五名は、大同派と進退を同ふするものなりとす、進步黨の改革派は之を知るが故に、大同派と離れて獨り新政黨に加はらず、戊申派と三派連合を以て又新會に新政黨の宣言更改を迫れる也、而して犬養氏も亦之を察せるが故に、極力大同派排斥を唱へて、竟に又新會をして奈何ともすると能はず、竟に一度は新政黨の組織を失敗するに至らしめたるのみ。

（五）

吾人は既に新政黨組織の經路を敍述し來りたり、最後に多少の評論を加へて暫らく此の篇を結ばんと欲す

吾人の視る所によれば、故星亨、故佐々友房は、實に黨人中に於て嶄然頭角を傑出せる達識者なりき。佐々が歷史的傳記的に英雄の色彩を博せんとし、其の詩文の技能を以て巧みに之を剪綵する丈け、動もすれば、理義に拘むの短ありしに反し、星は直截に事を行ふて毫も婉曲ならず、然かも形勢の推移を視、人情の至微を察するに敏にして、野性的群雄の集團たる政黨を操縱するに、殆んど入神の妙技を有したりき、即ち黨首として二人者を比較すれば、星遙かに佐々の上に在り、而して星が彼の變通の略ありて政黨組織をも敢てする伊藤公を生擒したるに反し、佐々は彼の心よりして政黨を好まず、且つ自から前

說を株守して堅貞なりと信ずる山縣公の一派に結べるがため、星の如く黨首として成功せず、寧ろ失敗を以て半生の歷史を終れりと雖も、二人者が政黨として其の政見を行ふがためには、第一宮中御信任の實狀を思ひ、第二陸海軍との關繫に考へて、所謂藩閥派官僚派と結ぶの外なしと信じ、世を擧げて幼稚なる民吏の爭ひに拘泥したりし時より、夙く手を茲に着けたる鑒識に至ては、吾人の推稱せざるを得ざる所、此の點に於て佐々は寧ろ星より數年の長たりと斷ぜざる能はず、彼の大隈伯の如きは、源客には白の佳を說き、平客には赤の妙を說き、犬養には主義論を賛し、大石氏には利害說を助けて、其の見一定せず、然かも如何なる場合にも斯の如き兩端說を饒舌するが故に、曩には伊藤西鄉の諸友より絕緣を宣告せられて藩閥系より逐はれ、後には進步黨中の多數より敬遠せられて黨界を去るの餘儀なきに至りし也、黨首としては其の見識も、技倆も、總て遙かに早佐々に及ばずとす、况んや伯に及ばざるものに至てをや。

星の遺策を繼承して失墜せざる政友會が今日あるの偶然ならざるを察する者は、また宜しく政黨として執るべき最捷路を看出する難からざるべし、抑も西園寺侯と共に今日の政界に於て大立者たるは桂侯にあらずや、何時にても內閣を組織し得べき一切の資料を所有するもの、今や此の二侯の外に多く見出す得ざるに非ずや、即ち今の政界の分野を兩斷して兩々相當るものは實に二侯なるに於て果して非政友會を標榜し、政友會に對峙して所謂二大政黨對立の理想を實現せんとする者は　また桂侯を戴くを以て最捷徑と爲すと、論理上當然の結果と爲さずや、新政黨の組織者中動もすれば非官僚と稱して侯の直參

黨たる大同派を忌むが如きは、思はざるもまた甚だし、然かも其の政情に通ずるものに至ては、心私かに桂侯を推戴するを欲しながら、自から趨りて侯を起すこと、猶ほ星が大磯に抵りて伊藤公を説きたるが如く、直截明快、心胸磊落にして眞に男子的たる所なきは何ぞや、紛々然悻々乎として今に小黨分立、蝸牛角上の痴を演ずるもの、抑も恠むに足らざるのみ、而して其の遠く星に及ばず、又佐々に及ばざる所以ならずや。

然りと雖も勢ひは水流の如し、何物をも押し流すべし、儼乎として之に抵抗し得べき力を有する者の外は、一切の事物總て押し流さるべし、昨年初夏以來政界の全般に漲れる非政友會同盟、即ち新政黨組織の意想は必らずや一度び實現せらるべし、是れ勢ひ也、此の勢ひのためには、又新會も、進歩黨も、大同倶樂部も戊申倶樂部も、必らず一びは捲き込まるべし、最も露骨に之をいへば、又新會の一部、戊申派の過半と、進歩黨改革派、大同倶樂部とは、早晩必らず合同すべし、而して犬養派即ち進歩黨中の非改革派と又新會との一部（寧ろ坂本派と稱するを適當とす）とまた合同して、一個の最少黨たるべし、此の兩黨と政友會とは、互ひに黨員を相爭ひ相奪うて暫らく消長すべし、吾人は今尙ほ斯く觀察す

但だ新政黨の組織計畫の試みられたるに由て、進歩黨と又新會と、將た戊申倶樂部との瓜分したりしは偶然に似て偶然ならず、玆に於てか吾人の犬養派を放逐したりし改革派の猛斷が、一波萬波を生じて政海を漂蕩し、其の潮流を分ちて各々往くべき所に向はしめたるに於て、寧ろその効果の意外に大なることを認識せんと欲する也。

桂侯は此の早晩成らんとする新政黨に首たるべきや否や、是れ疑問也、吾人の會て繰返し論辯したりしが如く、最も自然の經路をいはゞ、桂侯は其の積極主義者たるに於て、直參黨たる大同派を提げて政友會に入り、西園寺侯と共に政友會を綜理し、而して大浦、平田、後藤の諸傑をして原、松田、鳩山の諸雄と握手せしめ、而して貴衆兩院に絶前の大勢力を占めて以て少くも十五年間政界を獨占するを以て最も利なりとすべし、然れども新政黨の組織者は、能く私學校黨となりて侯を第二の西郷南洲たらしめざるや否や、政友會をして侯を反撥せしむるに至らざるや否や、侯をして敢然新政黨を統御し、政友會の一角を突崩し、玆に西園寺侯とまで飽て對峙し抗爭せしむる能はざるや否や、吾人は新政黨成立の時期を觀ると共に、又此の問題にも注目せんと欲するもの也、政海の新たなる潮流を識別せんと欲する者、恐らくば然らざるを得ざるべし。

伊藤公最後の光明

蟷螂の目は高さ尋に及ばず、見ると遠からざれば也、鯨魚の躍ると丈に達せず、重くして飛ぶに適せざれば也、人の天分にも高下あり、隨つて其の理想にも大小深淺あると辨を俟たざるも、一生涯の間、一ぴは必らず其の最高潮に達する時あるべし、一瞬時と雖も必らず然る時あるべし、人の將さに死せんとするや其の言良しと做すも、抑も此を稱する所以ならざらんや。

伊藤公は現時我が國第一の政事家と稱せらる、公自からは或は豊太閤以上を氣取るやも知れず、其の當否は姑らく史實として後に貽すの外なきも、公が現時の大政事家たるとは、何人も之を承認せざるを得ざるべし、而して此の大政事家の最高理想は如何ぞや、吾人は幸ひにして今正さに之を看取するを得、試みに少しく之を述べん。

伊藤公の統監として韓國に臨むや、一に韓國の君臣を啓發して文明の治澤に浴せしむるを主義とせり、韓國を我が自衛上の必要物として、茲に宗主權を立つるとは、我が傳統の宏謨にして、神功皇后の征韓以來多年其の方針を執れるも、明治の新政に及び、淸國と戰ひ、露國と爭へるも、皆此の實現に外ならず、然れども日本は韓國を保護國として、我が自衛上の干城たらしむる以外、何等の野心なしと做し、其の政治を以て一に韓國君民のためなりとし、此の大主義よりして、宮中府中の別を正し、宮庭の雜踸なるものを驅逐して之を肅淸し、一は韓國王家の威嚴を支持すると共に、民人のために有害無益なる野心陰謀の巣窟たるとを免かれしめ、又政府の基礎を鞏固にするため豫算制度を立て、財政の道を明かにし、韓民のために法律を制定し、裁判制度を搆成して生命財産の安固を保障し、學校を設けて其の智能を啓發し、衛生のため先づ病院を建て、且つ產業を奬勵するため交通の便を開き、以て文明新政の治澤を普遍せしめんとするは、伊藤公の目的にして、其の一半は既に緒に就き、一半は漸くにして將さに實行せられんとす、其の手段方法一に我が明治の新政に則るも、主義として韓國君民のためにするに在るや炳焉として蔽ふ可らず、吾人は此の崇高なる主義に出る公明なる政治を以て、伊藤公の最高理想に出づる

ものと做し、公最後の光明として之を嘆美するに躊躇せざる也。

公はまた韓國に於ける外人の權利利益を尊重して公平無私の態度を執り、統監政治の公明なることを表彰するに鋭意す、思ふに歐米諸國の東洋に對する感想或は一變せんとする兆候なきに非ず、東清鐵道の租借地として、露國管理の下に在る哈爾賓に於て、清國人が納税を拒み、露國官憲に營業禁止を命ぜらるゝや、米國領事は之を不當として清國人を支持し、英獨また米國を聲援せんとするに似たり、我が南滿洲鐵道の併行線として、彼の法庫門鐵道に反對するや、英國人は日本を以て機會均等主義の聲言に反するものと做し、今尚ほ全く攻擊の手を緩めず、爲めに日英同盟薄らぎたりとさへ訛傳さるゝに至りしを看よ、列國の利益線が東亞に延張せらるゝと共に、露國及び日本が其の猜疑の眼中に映せらるゝや事實也、然り、日本が三十七八年以前の露國の如く、動もすれば列國の疑惑を受けんとするの虞あるや蔽ふ可らざる也、此の時に方つて韓國に於ける我が統治の狀態にして、聊かたりとも不公平の傾向あり、之がため韓國の内亂又は一揆騷擾を生ずるに至らん乎、列國の中、或は之に異言を唱へて、列國會議に附せんことを提唱するものなしとは爲す可らず、露獨兩國之が主となりて、竟に列國を動かすが如き全く絶無なりとは斷言す可らず、是れ啻た日本の崇高なる仁義の主意に反するに止まらず、實に外國と事端を滋くし、其の極延きて國家を不幸なる地位に擠すもの也、伊藤公乃ち之を憂慮し、眷々として至誠公明以て文明の治澤を布き、一に韓國君民のためにす、其の理性の高尚にして、而して遠慮達識ある最高政治の本色は、何人も之を認取するに難からざるべし。

韓民の性質を解するもの、動もすれば公平なる政治の寛に過ぎて緩に流るゝをいひ、或は武斷政治の覺に好果を收むべきを信じて、密かに伊藤公の統監政治を難ずる者あり、公の私行の放縱に過ぐるを難ずると共に、此の批判また一應の理なきに非ざるべし、然れども公の主義の崇高にして、其の手段の公明なるに至ては、公の敵人と雖も之を否認するを得ざるべし、吾人は以て公の最高理想の實現と爲し、公最後の光明として之を稱揚せざらんと欲するも得ざる也。

四十年來政治上に於ける伊藤公の功過は、恐らくば容易に論斷し難からん、然かも其の統監政治に至ては、姑らく成敗の迹を論ずるを止めて、其の目的主義よりいへば、吾人は之を頌するを禁ずる能はず、公今や七十の老軀を提げて韓國君民のために其の最高理想を發揮し、公明なる新政を布きて文明の治澤を普及せしめんとす、其の心事は之を欽せざる可けんや、人を以て其の言を廢す可らざるが如く、其の光明も亦隱蔽す可らず、抑もまた善は則ち益々之を奬めざる可らざる也、吾人故に説きて玆に及ぶ。



進歩黨史論

無名氏

昔、羅馬の大將シピオは、カルセージを燒撃して、其餤焔天を衝くを眺め、坐ろにホーマーのトロイ滅亡の詩句を口號みたりとかや。我等も亦今日に於て、嘗ては天下を席捲したる、日本に於ける智識に於て、財産に於て、辯論に於て、資望に於て其第一位を占め、其數量に於てさへ第二と下らざりし進歩黨の碑文を書かねばならぬ場合に立ち至りたるを悲む者である。

今更ら古き歴史を繰り返すまでもなく、進歩黨が改進黨なる名稱を以て生れ出てたるは明治十五年の春である。時をいへば、板垣伯が「板垣死すとも自由は亡びず」といふ警句を吐きたる岐阜刺客事件と前後の出來事である。元來大隈伯は明治十一年大久保公の後を承けて、事實に於ては三條公岩倉公の下に伊藤公等と聯合内閣を組織して居たのである。若し之に井上侯を加ふれば内閣三人男の兄分である。處が明治十四年の下半、伊藤井上と衝突して——名義は議會開設遲速の問題が主であつたが、其裏面には多少權力競爭も含蓄せられたものであらう——野に下り、間もなく其仝志の士と共に政黨を組織したのである。そこで日本全國を見渡せば、地盤からいへば先づ自由黨の地盤である。叛

垣伯は明治七年民選議院建白以來、兎にも角にも民間の輿論を培養して此處まで導いたのである。處が折角板垣伯及び其仝志が開拓した地盤に遠慮會釋もなく大隈伯が種を播いたといふ事は、自由黨一味にとつては甚だ面白からぬ事である。其處で主義政策は兎も角も、自由黨は改進黨の創立を見て、我弟の生れたやうな心持て喜んだてはなくして、寧ろ何ともいへぬ不快の感を抱いたてあらう。但し大隈伯の改進黨は或部分には歡迎された。それは何故かといへば、折角國事に盡さんとするものも、或は自由黨が餘りに壯士染みたるに氣後れしたものもあつた。或は土佐派の跋扈を憤つた者もあつた。或は板垣伯が餘りに理屈ぽくつて實際の政務に當る器てないと思つて居た者もあつた。進んで自由黨に投ずることも厭てあり、退て御用政黨たる福地源一郎、丸山作樂の列に加はることも屑しとせなかつた連中は、何れも改進黨の出來たが爲めに安心立命の地を發見したやうな心持がした。從來の行掛上當然自由黨に加入すべき者さへも、中にはした者さへも、大隈伯の旗下に馳せ集つた。そこで大隈伯は手も濡さず、一朝にして大政黨の首領になつたのである。

我等は先づ改進黨の領袖を吟味せねばならぬ。其幹部といふは、大隈伯を初め、河野敏鎌、前島密、北畠治房、小野梓、矢野文雄、沼間守一、牟田口元學、春木義彰、島田三郎、若手では尾崎行雄、犬養毅などいふ面々である。處で之を分類すれば概して三種となる。第一は大隈直參派であつて、其代表者としては先づ小野梓てあらう。彼は確かに大隈の懷中小刀であつた。政黨で破産した大隈伯が學校で繁昌するのも小野の遺謀といつてもよからう。數理には案外明るきも、法理に暗き、行政事項には不規律極まる、不鍛錬極まる大隈にとつては小野は實に缺くべからざる伴侶てあつた。今日大隈の業を助けて居る高田早苗や、天野、坪内其他大學出身の連中も實は小野が羅致して來たのである。けれども實をいへば小野も一本立の役人からやつて來たのである。處が一方には東洋議政會の名の下に集つた矢野文雄一派がある。先づ矢野、藤田、箕浦、

尾崎、犬養其他慶應義塾出身の面々が「報知新聞」を牙城として一黨を張つて居た。他の方には河野敏鎌を本尊とし沼間守一を頭として島田三郎、肥塚龍、波多野傳三郎など何れも「毎日新聞」を牙城として他の一黨を張つて居た。前島とか北畠とか牟田口とか春木とかいふ連中は、大隈伯と個人的關係あるか、若くは副總理たる河野敏鎌と個人的關係あるか二者其一に居た。何れも役人の古手である。古手といへば沼間も矢野も矢張り役人の古手である。只長くして居らなかつたといふ丈けである。或意味からいへば、自由黨は地盤から先きに出來たのであるが、改進黨は本部から先きに出來たのである。自由黨は地方から中央に及ぼし、改進黨は中央から地方に及ぼしたのである。自由黨は下から其首領を擔ぎ上げたが、改新黨は天降りしたのである。そして今一つ記臆すべきことは自由黨の後ろには百姓や貧乏士族が控へて居たが、改進黨の後ろには金持が控へて居た。金持も金持、日本一の大金持三菱が控へて居た。少くも控へて居たと思はれた。それて自由黨では最初から黨費に事缺いたが、板垣伯などは遊說の草鞋錢にさへ窮したが、改進黨は創立當初よりして其心配はなかつた。當時の大隈伯は隨分世間からは誤解されて居た。臆病者、横着者、收斂の臣などゝいふ事は誰しもいうて居た。征韓論大論判の時に大隈伯は依違塗糊して何れとも明白な意見を立てず、まさかの時には腹痛などゝいふて逃げ出したといふ評判もあつた。又た大隈伯が飯田町に建てた邸宅には珊瑚珠を壁に塗り込んだというので、大隈の珊瑚壁とて隨分世間に矢釜しく噂され、之も民の膏血を絞つたのであらうといふものもあつた。現に大隈の下に副總理となつた河野敏鎌なども大隈は奸物の標本であるとまて、曾て明言したといふ噂もあつた。當時の大隈伯は今日のやうな開放的な大隈伯てなく、何事もお大名染みて居た。そこて大隈は元來政黨の首領になる柄てないと所謂正義の士は斥けたのである。又其旗下に集る面々も、智惠も學問も金も、或は經驗もあらうけれどもが、有志家の氣骨といふものは彼等に許すことが出來ぬとい

ふ定論であつて、先づ一口に云へば、改進黨は氣障たつぷりの長袖者流の團體と目せられて居たのである。それに三菱とは切ても切れぬ關係があるかの如く思はれ、三菱が怨府となつて居た丈け夫れ丈け改進黨も其割前に與つたのである。然し一國の進歩的秩序分子、又は秩序的進歩分子ともいふべき中等社會の面々は喜んで之に加入した向きも少くなかつた。

幾もなくして自由黨と改進黨との軋轢は事實の上に發現して來た。之を煽るについては當時の政府も多少力を用ひたかも知れぬ。殊に政府は危險なる分子としては自由黨を認めたけれども、嫌惡すべき分子としては寧ろ大隈一派を待つたかも知れぬ。それで二黨の喧嘩は政府にとつては此上なき仕合せであつて政府は彼等に多少喧嘩の材料を供給したらしく思はれる。殊に改進黨の財源が三菱であることは分り切つた事で、政府は人を射らば馬を射よの諺の如くいよ／＼三菱退治を初めた。之れは單に改進黨が憎いから三菱が憎いといふ譯でもなかつたらう、然し其意味も全く無いとはいへない。政府は一方には共仝運輸會社を急造して三菱に對抗するの計をなし、他方には三菱退治の材料を自由黨に寄送して頻りに之を煽つたのである。當分の間は僞黨撲滅、海坊主退治が自由黨の實際の政綱であつて、從て改進黨も其防戰の外他に爲すべき手段もなかつた。之れは古澤滋や星亨などが最も骨折つたので、殊に古澤は當時の「自由新聞」に「三菱會社を論ず」といふ大論文を四五十回以上にも亘つて掲載した。之は内幕では當時の農商務大輔品川彌二郎が古澤と申合せてやらせたのであるといふ評判であつた。

扨明治十七年は政黨暗黑時代ともいふべき年であつて、自由黨もいよ／＼解黨をしたのである。改進黨も其幹部では解黨論が出たが、豫てより議論多き黨派であれば、勿論落着すべくも見えなかつた。其處で大隈河野其他は何れも脱黨届を出し、名義丈けは全く無關係となつた。又政黨の活動も從て出來ず、改進黨の看板は僅かに角田眞平の代言事務所に、代言人の看板と並んで掛けられた位であつた。然るに十八年の末には

所謂政府の大改革があつて、初めて内閣の組織が出來、伊藤公が最初の總理大臣になつた。十九年には大隈伯の智嚢ともいはるゝ矢野文雄が西洋より踊り、改進黨も其他の政黨と共にいよ／＼生氣を喚び歸して來た。然し矢野は英國に行て、愈よ英國の保守的精神かぶれとなり、盛んに屯田持久の策を唱へた。そこで尾崎、犬養の徒は、矢野の屯田策とて何れも馬鹿にし切つて居たが、さりとて致し方もなく、其儘に過ぎたのである。

歳月駛るが如く、明治十九年より二十年にかけては井上侯の條約改正事業がいよ／＼緒に就き、之が副産物として歐化主義は社會の中軸をも動かさん許りに流行し、民間の政黨もいよ／＼一仕事を思ふ矢先に、茲に條約改正反對の運動は端なくも政府の内外に出て來つたのである。之れは日本國民に限つた譯てはないけれども、殊に日本國民に於て特徴といふべきは對外問題に對する熱心てある。打ても敲いても動かぬ時でも、一度び對外問題を提げ來れば、忽ち人心は火の燃ゆるが如くに燃えて來る。藩閥退治なども多少は人氣ある題目てあつたが、終に思ふ程の力も出て來なかつた。扨いよ／＼對外問題が出て來るについては、譯の分るものも、分らぬものも、何れも響の聲に應ずるが如く出て來たのである。此勢を見て取つたのが即ち後藤伯てある。後藤伯は自由黨とは最初から親密の關係を持て居たが、板垣伯の上に立つことも出來ず、又下に就くことも面白くなく、是れまて隣家の親類位の關係を保つて居た。處が機を見るに敏なる後藤伯は、今や時來れりといつて、茲に對外論を提げて大同主義を演べ出したのである。大同主義とは、自由黨とか改進黨とか保守派とか進歩派とか種々の歴史的行掛や地方的感情を抛却して、國家問題について小異を捨て大同に就くべしといふ事てあつた。恰かも是れ龍疲れ虎困しみ、何れも新局面の發展せんことを思ふ潮合に此好題目を提げ來たのてあるから、誰も彼も期せずして後藤伯の旗下に集り、後藤の遊説する處殆んど風靡したのてある。

そこで後藤伯の參謀としては誰であらう。即ち今日の進歩黨改革派の首領大石正己其人であつた。大石は最初板垣伯の自由黨に於て重要なる幹部の一人であつたが、板垣洋行事件より分離し、一時は政界の惑星となつて居た。元來粗大なる男であつて、殊に粗大の經綸を喜ぶ性質であるから、後藤伯の參謀には、大山伏の下に小山伏が居る有樣で、大法螺小法螺互に相唱呼して吹き立てたのである。それから之れに全く投ぜざるまでも殆んど投じたともいふべきは犬養、尾崎である。矢野は何處までも屯田持久で居て、後藤伯に改進黨の領地を荒されるかとて頻りに心配して居るけれども、其弟分たる犬養、尾崎は寧ろ大同團結に飛び込んで一入勝負をやるを得策としたのである。沼間の一派も些か動き初めたけれども星亭一派との衝突や何かで大同團結に投ずる迄には至らなかつた。然るに當分默々たる所の大隈は、生きて居るか死んで居るか、世間では深くも知らなかつた所の大隈は、卒然として明治二十一年二月入閣して外務大臣になつた。元來廿年の暮は日本の歷史上に於て決して忘るゝ事の出來ぬ保安條令實行せられ、凡そ自由黨の諸名士、其他尾崎なども退去せられ、彼れ此れ退去せられたるものゝ數が五百七十餘人にも及んだ。此上は誰れしも政府はいよ〳〵壓制をして民論と戰ふであらうと思ふ刹那に大隈の入閣を見たのは實に不思議であるが、事實は決して不思議ではなかつた。窮して通ずるは伊藤公の本領であつて、此儘で進み行けば武斷政治の外なしと見て取つた伊藤は塗壁に馬を乘りかけるか如き愚を學ばず、徐ろに回轉して所謂局面の一變を計つたのである。それには古き政友、新らしき政敵たる大隈と舊交を溫むるの外はないといふ事であつて、とう〳〵入閣を誘ふたのである。其時分に如何に世間を驚かしたるかは、かゝる都々逸が出來た事で思ひやらるゝ。それは

志士(猪)を追ひ出し大隈(大熊)買うてあとの始末をどうなさる(猿)

誰れしも前途の見込が附かなかつのである、聞く所によれば、大隈入閣に際して伊藤、黑田、大隈三人の會

議の節に、大隈が伊藤は長州を代表し、黒田は薩州を代表し、自分は改進黨を代表して云々といふ覺書を出したといふ話てある。之は恐らくは矢野文雄が大隈の命を受けて起草したのてあらう。處が伊藤の爲めに説破せられ、黒田は其書附をストーブにくべて了つたといふ事てある。當時大隈の見識も先づ其邊の事てあつたろう、そこて改進黨は何時の間にやら、反對黨からして御用黨となつたのてある。矢野の屯田持久の策もいよ〳〵効果を齎らし來つたのてある。處が後藤は保安條例以後愈よ手廣く荒ばれ廻つて居る。到る處西比利亞鐵道の建設近きにあるを説き、國家の危急存亡を唱へ、盛ん〳〵人心を煽動した。後藤はデマゴッグの資格に於ては現時の大隈に殆んど劣らなかつた。或は其れよりも進んて居たかも知れぬ。如何に後藤が奔走したかは左の詩によつても想像することが出來る。

東馳西走歳如流　白首壯心歌莫愁
休道前途莫知已　靑山到處是幷州

之れは後藤が四日市邊を遊説の際、山陽の蘇水溶々入海流の詩に次韻したのてある。兎にも角にも事實は此通りてある。

かくて後藤は自由黨及び自由黨に多少縁故ある領地を占め、或は保守黨の連中を引張り、四方八方に其手を延ばしたからして、勢ひ改進黨の繩張も荒されたのてある。然し此場合改進黨ては後藤伯に反抗するものもなく、只消極的に其領地を失ふまいとて防衛を勉めたのてある。之れも改進黨が勉めたといふよりも矢野文雄一派がつとめたのてある。然るに明治二十年十月頃より二十一年を通して全國を荒れ散らした其後藤が大同團結を踏臺として終に二十二年三月に遞信大臣として黒田内閣に入つたのてある。

話は元に戻るが、伊藤が大隈を廿一年二月に誘ひ、其四月には黒田に首相の位置を讓つたのてある。そこて黒田は極めて公平なる心を持て、天下の人才と共に天下の政をする量見て、大隈を相談相手として、後藤さへも同僚として誘引したのてある。後藤は固より渡りに船て之に應じたのである。又内務大臣てあつた山

縣は此大風呂敷の模樣を見て、後藤が未だ入閣せぬ前に即ち二十一年の末に洋行したのである。露骨にいへば恐らくは逃げ出したのであらう。大隈は何の爲めに入閣したか。それは條約改正を成就する爲めである。藩閥の政治家中で第一の切れ者といはれた井上さへ失敗した條約改正を仕遂げやうなどゝは大膽の事ではあるが、殊て自惚の強い大隈ではあり、功名心の盛んなる大隈ではあり、伊藤井上が手を燒いた仕事を自分が成就するのは其事夫自身が快心の業でもあれば、彼は全幅の力を之に傾けたのである。固より伊藤井上は同功一體の男であれば、井上の失敗は伊藤にも影響した事は爭はれんのである。殊て功名に急に、違算の多い大隈であるからして鳥は足元より立つたのである。彼はかゝる問題については一から十まで伊藤に渡りをつけねばならぬのである。然るに何事も輕易に心得る彼は充分の渡りをつけなかつた。只鳩山和夫や加藤高明を相手に全速力で條約の改正を企てたのである。そこで葛藤は外人法官任用の一件から出て來たのである。

其反對を見るや、外人を歸化せしめて用ふるといふ事に振つたのである。然しそれさへなか／＼容易に行はれんのである。天下は井上の條約改正の反對よりも一層激烈なる勢を以て反對したのである。そこで改進黨はいよ／＼御用黨たるの責を盡さねばならぬ場合となつた。大隈の入閣するや改進黨は其贊成の決議をしたのである。そこで大隈の政策については之を擁護すべき義務は彼等の上にある。併し敵は八方である。味方は一方である。反對の建白が出れば之に對して贊成の建白も出した。反對の演說會があれば之に對する贊成の演說會も催された。然し如何に警察官が加勢しても、地方官が味方をしても、此勢は防ぎ止むることは出來んのである。伊藤も之が爲めにいよ／＼樞密院議長の辭表を奉つた。同僚たる後藤は內からして頻りに妨害の運動をした。又松方の如きも頗る之に對して異存を唱へ、明治政府の叔孫通たる井上毅の如きは非常なる熱心を以て反對論を皷吹した。又陛下の師父として寵遇を辱うした元田樞密顧問官の如きは、いよ／＼實行

の時には劍に伏しても諫め申す決心をした。政機には可なり明るき黑田でもかゝる問題については先づ盲人も同樣である。彼は只大隈を助けて、共に立ち共に斃るゝといふ男氣の外に、かゝる場合に於ては何等の取柄もなかつた。そこで御前會議も開き、内閣會議も開き、此上は最早や中止の外はないといふ事になつて、我慢の大隈もいよ〳〵我を折り、其内閣會議から、外務省の官舍に歸らんとする刹那、忽ち爆裂彈が飛んで來て、其一脚を失うたのである。然し一脚を失うた大隈は之が爲めに全身全名譽を得たのである。或意味からいへば、大隈に爆裂彈を投じた來島恒喜は大隈の恩人である。大隈は公人として、政治家として、黨派の首領として此遭難の爲めにどの位利益を得たかといふ事は恐らくは數限りもなからう。それは大隈が臆病者である、奸物である、刀筆の吏に毛が生えたものであるといふ樣な一切の惡名は、爆裂彈の煙と共に一時に消えて了つたのである。大隈は流石にエライ、精神もあり、氣魄もあり、勇氣もあり、度胸もある、實に大宰相の器であるといふ事は、之が爲めに敵にも味方にも殆んど識認せられたのである。之がなくして其まゝ中止に了つたならば、大隈は初めは脫兎の如く、終は處女の如しといふ譏は免れなかつたのであらう。

我等は明治の政史に彷徨する危險を避けねばならぬ。何處までも題目は進歩黨である。

扨て大隈は樞密顧問官として一脚を失うて早稻田に閑居した。改進黨は此問題について全く天下を相手として戰うて敗北した。然しながら勝た黨派は異種異類の者がある。一方には民約主義の論者もあれば他方には内地雜居反對の論者もある。念佛宗もあれば、題目宗もある。之に反して改進黨は一黨の力を以て戰ふたからして、負けは負けても、氣は挫けても、之が爲めに領地は失うても、剩し得た處のものゝ丈けは地盤がいよいよ鞏固となつた。元來地盤の薄弱なのが、改進黨の憂ひであつたが、大同團結の騷動と、條約改正中止事件の二大難關を經來つて漸やく其地盤が鞏固となつた。それで政黨の上から見れば、損のやうでもあり又得の

やうでもある。兎も角も彼等は多少の鍛錬を經て來たそれに平常改進黨に釋然たらざる中立者も、彼等と意見を同じくせざるものも之が爲めにいよ／＼接近して來た傾きがある。九州の如きは現にそれてある。

九州といへば自由黨もあり、改進黨もあつたが、元來土地偏着心の强い地方であるから、大體に於ては上國の指揮を仰ぐを屑しとせぬ。それて大同團結の時分や條約改正中止の時分には隨分之に馳せ參じたるものもあつたが其主力は先づ獨立して居た。處がいよ／＼二十三年も目のあたりになり、最早や議會の開設が迫り迫つたる當時に於て、九州は何れの黨派につくかといふ事が一つの問題てあつた。恰かも善し、薩摩藩閥の花ともいふべき河島醇が先鋒と喧嘩をなし、鹿兒島民間有志の牛耳を握ることになつた。元來經綸湧くが如き男であるから、彼は直ちに九州同志の團結を主唱したのである。固より機は熟して居たのであるからして九州の進歩主義者は忽ち一致したのである。彼等は此勢で直ちに上國に馳せ上り、こゝに所謂進歩主義者の聯合を計つたのである。其時分には自由黨の地盤は後藤に荒され、恰かもアレキサンドル大王帝國の末路の如く四分五裂して居た。土佐に退隱して居た板垣なども出て來て、頻りに其結合を計つて居たが、なか／＼容易に運ばない。處が九州の議論は言正しく名順である。其處て何れも之を驩迎したのてある。殊に九州の進歩主義者は寧ろ改進黨に緣故があつたからして、其相手は――其主としたる相手は寧ろ改進黨てあつた。改進黨も固より之に異存のある筈もなかつた。そこていよ／＼聯合が成立つといふ事になつて政府は政社の聯合を禁じたのてある。此上は筒に込めた丸は放さねばならぬ。最早や聯合より一歩を進んで合同するの外はなかつたてある。改進黨ても島田三郎などは自ら委員となつて合同に奔走して居たのてある。大體の空氣は無論合同てあつた。然るに聯合の時分までは贊成者の一に數へられた尾崎行雄が如何なる量見てあつたか當時彼が主宰して居た「朝野新聞」に「合同十不可論」を書き、之を天下に呼號した。島田などは進んで合同

の周旋をなしつゝあるに味方の主なる一人から散々に攻撃されたのであつて進退茲に谷まつた。一口にいへば尾崎の當時の擧動は恰度犬養が今日に於ける新政黨組織に於ける擧動を暗示したのである。由來議論多き改進黨であるから、とう／＼議論倒れて纏らず、之が爲めに兎も角も一方では進步主義の大政黨が成立したが改進黨のみは之に加はらず分立したのである。若し彼等が加入したならば彼等は素より九州派と一致して其主力となつたであらう。然るに彼等が二の足を踏んだが爲めに九州派は擧つて從前の自由黨分子と一致したのである。又彼等と關係のあつた溫和分子も之と共に赴いたのである。即ち此一擧は彼等が天下の大政黨となる第一の機會を失ふたのである。

二十三年の議會は兎も角も濟んだ。二十四年の第二議會ではいよ／＼民黨聯合の勢ひが出來た。二十五年の選擧干涉では同舟風に遭ふの感を切ならしめていよ／＼改進黨と自由黨との接近を來した。而して政府が大隈に對する迫害は大隈をしていよ／＼其の隻脚をふんばつて政界に縱横するの決心をなさしめた。大隈は樞密顧問でありながら政黨に關係したとの廉を以て其の職を剝がれた。之れは大隈にとつて非常なる剌戟劑であつた。是れ迄改進黨のみが出入したのみの大隈の門戶も、凡そ非政府黨員として彼を訪ねぬものはなかつたといふまでには至らなかつたとしても、追々其の樣な道筋が開けて來た。第三議會に於ける選擧干涉の上奏案や、第四議會に於ける局面一變の問題などに至るまで、いよ／＼民黨聯合は事實となつて來た。然し第四議會の下半からして多少此聯合の勢に異狀を生じて來た。それは何であるかといへば陸奧宗光の策である。

元來陸奧は大隈とは徹頭徹尾相容れなかつたのである。廿一年に大隈が入閣に際して極力之に反對したのは陸奧であつた。然し其入閣するや、機智多き彼は自ら進んで、反對した理由を大隈に白狀し、其儘米國に公使として赴いたのである。即ち大隈を避けて赴いたのである。そこで彼が第二次伊藤內閣の外務大臣とし

て入るや、兎に角自由黨と改進黨とを離すことを第一の手段と考へたのである。民黨聯合は詰り大隈を總理大臣となす道行である。いろ〱批難はあれども民間黨では何をいつても大隈に叶ふものはない。そこで民黨の勝利は、誰の力で勝ても、其獲物は先づ大隈のものである。

◎陸奥は決して之を願はなかつたのである。又陸奥と個人的關係のあつた、自由黨の主力であつた星亨の如きも寧ろ先天的大隈嫌ひである。彼は第三議會の初には九州の首領株山田武甫に伴れて大隈を訪ふた事もある。然し之は彼にとつては苦痛なる役目であつた。彼は民黨の議長となりたいばつかりに斯くした。然し彼は何處までも大隈に平てなかつた。又板垣と雖も大隈よりも寧ろ陸奥と親しかつた。彼は愛國公黨の首領を陸奥に讓る積りで居た。陸奥は愛國公黨の首領と大臣とを兩勝にかけてそれて第一次山縣内閣の農商務大臣となつた。如上の事情にて第四議會の末期頃からは段々自由黨は第二伊藤内閣の陸奥外相等と呼應して、獨立の行動をとつたのである。自由黨が逃げたのは寧ろ幸であつた。何故なれば出剩りのものは改進黨のものであるからである。そこで自由黨の中でも最も有力なる分子、即ち九州の分子や東北の分子はいよ〱星等の擧動に慊らなくなつたのである。九州の長谷場純孝や武富時敏、東北の菊地九郎や工藤行幹などが續々脱黨したのである。そこで第五議會ではいよ〱官規振肅の問題が出て來た。これは星亨が民黨聯合を破つた復讐である。即ち星亨を議長より追ひ下ろし、それに慊らずして除名したのである。除名の演説には高田早苗なども最も努めたのであつた。そこで議會の多數は改進黨を中堅として、革新黨や、同盟俱樂部や種々の名義の下に民黨を糾合して自由黨と戰ふたのである。自由黨は追々民黨と遠かつて、追々政府に近いたのである。

我等は此際に於て又條約問題の出て來りたることを想起せねばならぬ。日本人は對外問題に力を出す人民である。何時も驚天動地の問題は對外問題によつて出

て來た。處が今度は陸奥が條約改正をするについて條約勵行論なるものが出て來たのである。之れは大隈が條約を改正する當時成るべく條約の文句を狭義に解して、西洋人に迷惑不都合を與へ、彼等をして到底現行條約の堪ふべからざるを感得せしむるの手段をとらんとしたるの故智を襲ひ、之れを勵行せよといふのであつた。當時は之を對外硬と名づけたのである。民黨は內治問題で聯合を初めたが、自由黨の脱走以來、端なく外交問題で其欠缺を埋むることになつた。そこで伊藤內閣は之が爲めに二回程も解散を續けた。續けられても決して辟易はしなかつた。凡そ改進黨の勢力を振うた事、前後二十四五年を通じて其時ほど甚しかつた事はなかつた。所謂六派聯合なるものも出來た。所謂新聞記者同盟も出來た。所謂貴族院との聯合も出來た藩閥內閣の私生兒といはれたる國民協會までも之に加入した。新聞政略には改進黨は初めから力を盡して居たが、其時ほど周密に行屆いた事はなかつた。全國の同盟新聞を糾合し、中央よりそれ〳〵の氣脈を通じ、山と言へば川と應ふるが如く、策戰計畫が一から十までよく整ふたのである。そこで流石の伊藤內閣も、內閣の智腦たる陸奥も殆ど之には窮したのである。蓋し策略よりも何よりも偉大なるは偶然の勢力であつて東學黨の亂は此間に出て來つたのである。明治廿七年夏の初めにいよ〳〵黑雲は朝鮮半島の上に棚曳いたのである。其處で和戰の機一髮となつたのである。民黨はまさか對外軟なる伊藤內閣が開戰し得る筈はないと高を括つて頻りに開戰論を主張したのであるが、思ひきや事實は議論よりもより早く進行した。そこでとう〳〵二十七八年の役となつた。此役に於ては當然擧國一致であつた。離れたる自由黨も、反目したる伊藤內閣も何もなかつた。只日本帝國であつた。然し民黨の中には中心欣喜の情に堪へずして戰雲に駕して走つたものもあり、中にはまさか玆までとは思はず、どうして此始末となつたものかと思うて引ずられて行つたものもあつた。分析して見れば等しく民黨でも積極的の民黨と消極的の民黨とあつた事は爭はれない。廿七八年

の役もいよ〳〵三國干涉遼東還附といふ幕にて收まつた。けれども收まらぬは民黨の心てある。彼等は第九議會に於て三國干涉遼東還附に關する內閣彈劾の上奏案を呈出したのてある。之れは幸か不幸か知らぬが、僅かの多數て否決された。而し之と同時に初めて二十九年三月に進步黨は組織せられたのてある。

我等は玆に始めて進步黨なるものが出て來たといふ事を想起するの必要がある。其政綱は三ヶ條てある。第一は政弊を改革し、責任內閣の完成を期す。第二は外政を刷新し國權の擴張を期す。第三は財政を整理し民業の發達を期すといふのてあつた。玆て注意しなければならぬのは第二條てある。元來國權擴張などは改進黨の政綱てはなかつた。十五年に出來た政綱には內治の改良を計り漸次に國權の擴張に及ぼすといふて居る、又外國に對しては、商業の關係を厚うして政治上の關係を薄うするといふて居る。そこて外交問題については全くグラッドストン派の意見を踏襲したのてあつた。然るに今度は帝國主義を豫想する外政刷新國權擴張を標榜したのは、之は改進黨にとつては、一つの變化といつてよいか進步といつてよいか、兎も角も看過すべからざる事項てある。そこて此旗印の下には革新黨や同盟俱樂部や種々雜多の人が百川海に朝宗するの勢を以て來り集つた。即ち九州派の長谷場、武富なども集つた。東北派の工藤菊地なども集つた。楠本正隆や大東義徹や若くは保守黨と呼ばるゝ神鞭知常や、自由黨以外、又國民協會以外ありとあらゆる分子を綜合して、當初は大隈の旗下であつた改進黨がいよ〳〵進化して玆に國民的大政黨となつた。而して名目は兎も角も、事實は當然大隈が首領であつた。

我等は序てながら大隈の進化を語らねばならぬ。元來大隈はお大名風てあつた。役人的臭味があつた。又階級的偏僻があつたかなかつたかは知らぬが、あつたものと思はれて居た。處が其豪華な風は依然としてあつたが、段々門戶を開放して來た。學者でも町人でも書生ても壯士ても誰ても相手とするやうになつて來た愛嬌も一視平等に振り撒いた。世間にも追々顏を出し

て來た。演説も次第に上手になつて來た。それて何時の間にか大隈も民間政治家の資格が出來て來た。首領には大隈が居るし、黨員には濟々たる多士が居るし、進歩黨はいよ／＼天下の大政黨て、最早や遠からず天下を取るべきものといふ事は識者の眼には見えて來た然し如何に進歩黨が大政黨てあつても獨力を以て天下を取ることは出來んのてある。それは取れぬ譯がある。其譯は何といつても薩長の勢力は三十年間政府に蟠まつて居る。薩長兩要素を敵として政府と戰ふといふ事は兎ても出來た話てない。そこて薩に結ばざれば長、長に結ばざれば薩てある。大隈は故西郷を初め、薩人からは寧ろ擯斥せられた男てあつた。伊藤、井上とは築地の梁山泊以來、若くは其以前より一つ鍋の飯を食つた男てある。然し異類相引き、同類相離るゝは自然の理てあつて、長州人とは動もすれば衝突し、薩人の黑田などゝは却て接近するやうになつた。且又廿七八年役以來、天下の大勢一變したるについては、最早や從來の民黨政府黨て行けるものてないといふ事は識者の眼には分つて來た。否其以前から分つて居た。そこて大隈に天下を取らせんには誰ぞ相手がなからねばならんとは夙に識者の看破した處てある。伊藤と板垣、長州派と自由黨との間には最早や關係が出來て居る。此上は進歩黨と薩派を結付くるといふよりも寧ろ薩の主もなるものと大隈とを結付くる外はないといふ事になつたのである。黑田は手傷を負うた猪である。大山は何れかといへば伊藤黨てある。西郷は相手とするには餘りに茫漠てある。只薩摩人て吏務にも通じ、財政に明かに、常識を備へて話の出來るものは松方てある。松方の廿五年の疵は最早や癒えて居る。又伊藤とは二十七八年役にちよつと大藏大臣となつて隨分衝突した事實がある。そこて相手は極まつて居る。大隈と松方てある。此二人の結合さへ出來、進歩黨がいよ／＼融和して、組織して、規律訓練を經て、歩調を一にする日に於ては、天下の政務は座して握ることが出來るとは目のある者の看破したる處てある。但奈何せん大隈と松方とは甚だ仲が面白くなかつた。それは

大隈が大藏卿である時には松方が大輔であつて、大隈の後は松方が繼いだ。その間の彼是で松方も大隈に對しては快くなかつたが、大隈も松方に對して同樣であつた。彼等の個人的感情の行違といふものはなか〳〵容易ではなかつた。それを直すには隨分骨が折れ、又骨を折つた者もあつた、然し物は思ふたよりも易く、多年反目した松方も大隈も明治二十九年の五月京都に於ていよ〳〵會見をした。之れは岩崎彌之助の紹介であるといふ事である。然し會見までにどの位の準備がせられて居たかといふ事は兎ても外から想像は出來ぬのである。又一邊の會見で何處まで話は進んだかといふ事は別問題であるが、いよ〳〵大隈と松方との聯合は、少くとも其端緒は出來たのである。然るに第二次伊藤内閣は戰爭を經て大分弱つて來た。そこで内務大臣には板垣を入れ、拓植務省を新設して高島を入れ、いろ〳〵新らしき要素を入れたが、それでも内閣の資望を繋ぐことは六つかしかつた。そこで此上は擧國一致の内閣を作るべしとて、いよ〳〵大隈、松方を入閣せしむるといふ議論も出て來た。處が板垣退助などは松方丈は承知するけれども大隈は承知せんと言張り、又松方は大隈と共にならば入閣するけれども一人では御免といふやうなことでとう〳〵内閣の統一も破れて其八月の下旬には總辭職となつた。待設けたる松方大隈の聯合内閣はいよ〳〵其産聲を上げたのである。進歩黨はいよ〳〵天下を取つたのである。只其取方が餘り早かつた。三月に結黨して八月に取つたのであるからして其間辛やく五ヶ月のものである。此半年足らずの歲月に總ての分子を融和して、訓練ある御用黨とするといふ事はなか〳〵容易の事ではない。殊に理窟屋の本家本元たる改進黨が中堅であり、野武士然たる九州東北の連中も居り、又頑迷不靈といはれたる保守派の連中も居り、中には一人よがりの豪傑も澤山居たからして、彼等を節度に服せしむる事は容易でなかつた切めて今一議會も經、明治三十年の秋頃にも成つたならば多少は操縱も意の如くなつたかも知れんけれどもが、暴民に同じき新兵を率ゐて政府に立つといふ事は

決して容易の業ではなかつた。一口にいへば松方大隈聯立内閣は當然出來べき數てあつたが、通常の月を經過せず、所謂月足らずて出産したが爲めに、其生長が覺束なかつたのてある。

斯くの如く進歩黨は其創立以來二度まで政府黨となつた。第一次は大隈の入閣の爲めてある。之れは大隈が他の内閣に入閣したのてあるからして有力でも大隈は客位てある。今度は其名は松方が首相てあれども、其實は大隈が主力となつて出て來たのてあるからして進歩黨は取りも直さず天下を取つたのてある。民間黨て天下を取つたのは平常政府と接近した自由黨てなくして却て反對黨てあつた所の進歩黨てあつたも奇なる現像てある。

我等は進歩黨が規律のなかつた事を尤めない。素より規律のないのが當り前てある。折角天下を取りつゝ之を失はねばならぬ破目に立ち至りたるを尤めない。これも止むを得なかつたのてあらう。但天下の大經世家と思はれたる大隈伯が案外口のみ笠子の如く大きくして、其正味は寧ろ少かつたといふ事を暴露したのを遺憾とする。それも初めから正味が其通りてあつたとすれば、遺憾のある筈はない。然し少くとも伊藤井上と對抗し、若くは其上に出づる大政治家と思はれた大隈が案外のものてあつたといふ事丈けは事實が之を證明したのてある。それは外でもない。大隈は頭もわるくはない、腕もある。人を外らさぬタクトもある。然しながら大體の見込を立て、其筋書を作り、之を履行するといふ誠意と堅性とが缺けて居る。それで世間では松方を後入齋といふが、眞の後入齋は松方にあらずして大隈てある。大隈の頭はスポンジも同樣であつて、酢ても砂糖水ても醬油でも注げば何でも入るのである後から入るものは前のものを打消し、其次に來るものは又前のものを打消すといふやうな譯て、所謂後入主となつて行くのてある。それで彼を相手に仕事をするものは隨分困るてあらうし、又困らねばならぬのである。進歩黨は名こそ自ら帝國主義といはぬが、政綱は帝國主義てある。外政刷新、國權擴張といふ事を政綱の

る一として居る。何が爲めに三國の干渉を受けたか、何が爲めに遼東を還附したか。色々理屈はあるけれども詰る所は兵力が不足なのである。軍備擴張は止むを得んのである。擴張するからには増税は又止むを得んのである。増税をするからには農業國たる日本では地租を先づ増徴するより外はないのである。それで縁は遠いやうだが進歩黨の政綱を正直に解釋すれば地租増徴は實に止むを得んのである。これしきの理窟は大隈に分らぬ筈はない。そこで大隈も自ら發議こそせね、止むを得ぬ次第として賛成したのである。處が進歩黨中の舊改進黨分子はなか／＼左樣には行かない。彼等は元來目先きの利く連中であつて、只目先きさへどうかやればよいといふ連中である、といつては些か酷評のやうであるが先づさういふの外はあるまい。殊に犬養などがそれである。それで豫て同僚との折合も惡い大隈は内閣組織以來已に高島、樺山などの薩摩分子と衝突をした。何といふても大隈は兄貴で、高島樺山は弟分であれば、旨く取扱つて行けばよいのに僅に第十議會が過ぎて、組織以來未だ十ヶ月も經ぬのに已に内輪には葛藤を起したのである。進歩黨殊に舊改進黨の連中は出來るとても出來ぬ事でも、わい／＼いうて迫るのである。世の中には政黨というて何ぞ獨り進歩黨に限らんやといふ考で、高島や樺山はそれぞれ自由黨の不平分子と接近して來たのであらう。詰り内閣が内に統一せなかつた結果は外で、御用黨製造の競爭となつたのである。高島や樺山が色目を他の黨派に使ふを見て進歩黨はいよ／＼業を煮やして來た。そこで政府は敵に苦しめられずして味方に苦しめらるゝやうになつて來た。此上は進歩黨に暇を遣るか、進歩者から暇を貰ふか、二つの中一つとなつて來た。我等は進歩黨の仕打について別に深く尤めはせない。然し少くとも進歩黨をかく迄に焦立てた事については犬養共が最も多く責任を負はねばならぬ事であらうと思ふのである。

序ながら犬養について一言して置くが、改進黨で毛色の變つた男は先づ犬養であつた。彼は矢野文雄や何かのやうな長袖者流でもなく、又島田三郎や何かのや

うな理窟屋でもなく、如何にもサッパリした有志家氣質を備へて居た。漢學の素養もあるし、碁も打てば、字も書く、又の鑑定もすれば漢文も作るといふやうに多趣味多方面であつて、殊に彼が壯士を御するの術に於ては他の改進黨に比類ない程の技量を持て居た。兎に角にも改進黨中毛色の變つた男である。然し狹隘が彼の病である。邪推が彼の病である。毒舌が彼の病である。現に神鞭知常や其他進歩黨の老輩が進歩黨内の調和を計るが爲めに主もなる連中を集めて互に肝膽を吐露せんとしたるに、犬養は昂然として其場に出て來て、予は嘔吐ても吐くの外吐くものはないといつた相てある。そういふ調子であるから、纏るものでも犬養の爲めに纏らなくなる、それに大隈に附き纏うて、嚇かすやら、賺すやらして非増税を吹き込んで大隈も後入齋の本性暴露して段々議論が怪しくなり、進歩黨が折角苦心して取つた天下も、之が爲めに何等の効果を示さず、只大隈が政治家として口程でない事、進歩黨が議論多くして共に事を爲すに足らぬ事を證明するの外何事をも示さずして松方內閣は倒れたのである。即ち進歩黨は松方內閣と喧嘩して斃しは斃したもの。何れかと云へば自から先づ斃れたのであつた。

松方內閣の後に出來たのは第三次伊藤內閣であつた。若し大隈伯が今少し政治的常識があつたならば、又進歩黨が今少し政機に通じて居つたならば、此內閣と提携することは六つかしくなかつたのである。何故なれば大隈とは相容れなかつた陸奥も已に舞臺に居らず、伊藤は其舊友井上の外は殆んど便り少なき身てあつたからして、手を握ることも出來、握らるゝことも出來たのである。かくすれば進歩黨も薩派に乘換ゆるに長派を以てして、牛に乘換ゆるに馬を以てした位の事は出來たかも知れぬ。然るに自分の勢力と他人の勢力との權衡が分らぬ大隈はとう〱其機會を逸したのである。かくて當然出て來るべき增租案は出て來つた自由黨も反對した。進歩黨も素より反對した。彼等は反對によつて殆んど聯合の體裁をなした。其結果は解散であつた。機を見るに敏なる伊藤公は最早や超然な

どゝ濟して居る場合でない、毒を制するには毒の外なく、政黨を制するには政黨の外なきを悟り、其政黨も雇兵では間に合はず、寧ろ自ら進んで之れを組織するに若かずといふ意見を以ていよ／＼政黨組織に着手しかけたのである。然かるに反對論は政府の部內より湧いて出た。殊に山縣が有力なる反對論者であつた。又政府が政黨を作らんとする氣合を見て、自由黨と進步黨とはいよ／＼接近して來た。殊に平岡浩太郎などゝいふ策士は今は時機乘ずべしとなし、自ら六國合縱の業を氣取りて一方では自由黨の方に交渉し、他方では進步黨の犬養などとも相談し、いよ／＼一大民黨を作るべく機運は熟して來た。政勢は急轉直下した、即ち委しくいへば、明治三十一年六月二十二日憲政黨の名義の下に、自由黨、進步黨、ありとあらゆる民間黨は結黨したのである。當時に於ては殆んど草も木も靡かぬものはないといふ勢であつて一時は高島、樺山に籠絡せられたる薩派といふものさへも皆競うて之に赴いた。其勢の凄じかつたのは或は之を第二の維新といつてもよいと思ふ位の形勢であつた。處が此形勢を見て取つた伊藤公は、外は民間黨の壓迫に逢ひ、內は山縣一派の反抗に逢ひ、進退茲に谷まり、こゝに彼が得意の慣用手段たる投げ出しをやつた。投げ出しは伊藤の十八番である。彼は碁を打てさへも少し面白くなければ直ぐに投げて了ふのである。彼は投げに妙味を覺えて居る。何故に投げたかは心理學上の問題として保留せねばならぬ。伊藤に聞いても或は自ら分らぬかも知れぬ。一方では山縣一派に面當てゝもあつたらう。又一方では大隈板垣一派に彼等が準備が成らぬ前に內閣を投げ附けて一泡吹かせん積であつたかも知れん。或は又自分が逃るには之より外に道がないと思ふたかも知れん。或人が伊藤に向て、あなたは露兵が那翁をたしなめたる軍略を民黨に向て用ひたのである。莫斯科までずん／＼引込み、家を燒き野を消め、イザといふ時に於て敵を足元まで引きつけ、追擊をした軍略を其儘之を用ひたのであらうといつたら伊藤は苦笑をして居たといふ事である。何れにしても有難迷惑は大隈

板垣である。彼等が兩國の中村樓で手を握つたのは六月二十二日である。伊藤が大隈板垣を後任者に奏薦して、辭表を捧げたるは六月廿五日である。親任式は同月の三十日である、政黨が出來てから四日目に內閣を組織せねばならぬといふ事は隨分厄介である。のみならず、板垣なら板垣、大隈なら大隈、何れにか組織の大命下れば、それで遣り樣もある。然るに意地惡しき伊藤は、其積であつたかなかつたかは分らぬが、大隈板垣兩人を奏薦したのである。そこで大命は兩人に下つたのである。政府を取るが政黨の目的には相違ないが餘り其目的に早く到着して彼等は頗る有難迷惑に思ふたのである。兩人は帝國ホテルの一室に閉ぢ籠りて相談したが、如何に相談しても無い智恵は出ぬ。出來ぬ相談は出來ぬ。朝から晩まで一室に閉ぢ籠て何等の要領をも得なかつたのである。そこで憲政黨自稱産婆の平岡浩太郎などは頗る心配して夫々周旋したのである。かくて兎も角も出來上つたのは隈板聯立內閣である。大隈も豫て一度は斯くあるべしと豫期したる通り兎も角も總理大臣となつた。然しなつて見れば何事も行はれない。松方內閣の亂雜無秩序は甚しいものであつたが、今度はそれに十倍も輪をかけて來た。甚しきは內閣會議の席に浴衣がけの政黨員が飛び込んだなどいいふ話もある。それに內務は板垣が座り、大藏には松田が居るといふやうな譯で、大隈は總理でありながらも手が痒ゆき所に屆かんのである。結黨は名のみで自由黨と進步黨とは其當初より截然別れて居た。別れて居た許りでなく、勢力權衡の競爭は殆んど狂熱を帶びて來た。それに不幸にして尾崎行雄の共和演說事件が持上つて來た。之を持上ぐるについては其本家本元は何處であつたか分らぬが、其表向の責任者は、內務大臣たる板垣である。板垣が其同僚たる尾崎を彈劾したのである。大隈にとつては尾崎と共に斃るゝか、尾崎を斬て局面を轉回するか二つの外はなかつたのである。尾崎から見れば、共和演說問題は畢竟表向の口實であつて、其實は自由黨と進步黨との軋轢であれば、此處で一步を讓れば更らに二步を讓らなければなら

ぬ。所謂唇亡びて齒寒しの譬の通り、朝に自分の首を斬れば夕に大隈の首も落ちねばならぬと觀念したのであらう。處が物事の眞相を見るに疎き大隈は忽ち姑息の手段を施して、犬養を以て尾崎と取代へたのである。我等の思ふ所では、尾崎が多年の政友たる大隈に背きて伊藤に投じたる其本源の理由は玆にあらうと思はれる。何は兎もあれ、内閣は出來ても何一つ仕事は出來ず、只日一日大隈の相場が下落する迄てあつた。即ち大隈は愈よ再度の試驗に於て、落第が確められた。其時遲く那時速く米國公使てあつた星亨は歸朝した。彼は松方内閣の時にも己に一脚の大臣椅子と共に其政治的大賭博を試みんと企てたのてあつた。されば今回も彼は當然外務大臣を以て任じて居たのてある。處が大隈が之を彼に讓らない。讓らなかつたのてあるか、犬養其他の爲めに讓ることを敢てせなかつたのてあるか、それは暫らく措き、星は取るべき獲物をとらなかつたのてある。そして其復讐は覿面にあらはれて來た。素より自由黨と進歩黨との喧嘩は彼が歸朝せぬ前からの事である。又大隈内閣を斃すにも必ずしも彼の力を俟たぬのてある。然し星といふ役者が飛び出して來たのは大いに其機運を早めたのてある。彼が板垣、松田、林などの自由黨出身大臣を叱咤鞭撻して大隈に喧嘩を仕掛け、議員を操縦して辣腕を振うた事は頗る目覺しかつた。かくて十月二十七日犬養毅が文部大臣に親任せられてより中一日を經、二十九日には突然天下を風靡した憲政黨の解散となつた。而して其三十一日には大隈もいよ〳〵辭表を出さねばならぬ事となつた。十一月一日には憲政黨の大會を進歩派が催したが、自由派の西山志澄が警視總監てあつたから直ちに之を解散し、翌日は之を禁止した。これは己に解黨したるものが存在すべき筈はないといふ意味に於てゞある。そこて進歩黨も最早致方なく三日に憲政本黨といふ名義の下に其黨員を取り纏めたのである。此際に於ける自由黨のやり方は實に手早かつたのである。進歩黨との聯合によつて成立したる憲政黨は直ちに解散し。之と同時に自派のみによつて成り立つ憲政黨を組織し。憲政

黨といふ看板は全く自由派のものとなつたのである。其處で後れ馳せに大會を開きたる進步黨は――尤も此會は豫て開くべく期定したものであつた――忽ち解散された。次の日には其看板さへも下さねばならぬやうになつた。終に憲政本黨といふ奇妙なる名義の下に其殘兵を集合することになつた。其位置からいへば大隈は總理大臣である。其閣僚からいへば寧ろ進步黨の方が多數を占めて居たのである。農商務には大石が居た。文部には犬養が居た。司法には大東が居た。外務は大隈が自ら兼任して居た。それで自由黨の三つに對して進步黨は五つの椅子を占て居たのである。然るに其末路に於ては徹頭徹尾自由黨にいたされたといふは如何にも腑甲斐ない事である。これは首領としての大隈の能力と、政黨としての進步黨の能力を試めすに最も有力なる鐵案である、それで此喧嘩の際に當然進步黨に來るべきもので自由黨と去就を共にした者も少くなかつた。而して大隈が伊藤內閣に向て爲すべかりし事は自由黨が山縣內閣に向てした。終に自由派山縣派兩派の提携は出て來つた。是に於て進步黨はいよ〳〵冷飯となつたのである。

そこで山縣內閣の增稅案については自由黨は固より贊成した。彼等は相當の代價を得て贊成したのである。けれども合せたるものは離れねばならぬ。第二次山縣內閣と自由黨との提携も一議會經來りて追々事六つかしくなつて來たのである。其時に於て自由黨は板垣伯の到底物の役に立たぬ事を知つて其政黨を伊藤公の膝下に捧げたのである。政友會は伊藤公が作つたといふけれども、或意味からいへば星亨等が伊藤公を擁立したのである。或識者がいうて居た。大隈は首である。板垣は帽子である。帽子は何時でも取換ゆるとが出來る。首は決して取代はない。其通りに帽子を取換へたのである。板垣は廢兵同樣に隱居し、伊藤は堂々と卅一年來の宿望たる政黨を組織したのである。此時に若し大隈が自ら退隱して進步黨を舉げて之に投じたなら之も一策であつたかも知れん。尾崎などは現に其考であつた。處が伊藤は、平生進步黨、殊に進步黨の腐敗分子

からは軟派の親玉として擯斥せられて居た。そこで伊藤の大なる傘の下に集るといふ事は彼等にとつては非常なる苦痛であつた。そこで彼等は其代りに近衛公を見出したのである。近衛公は或は對外同志會といひ、或は國民同盟會といひ、或は對露同志會といひ、其名稱は時によつて相違はあるが實に明治二十六七年の六派聯合以來進歩黨と少からざる關係があつた。それで進歩黨の或者は大隈伯の代りに追々は近衛公でも首領とせねばなるまいとて其準備をして居たのであらう。然も天進歩黨に祚ひせず近衛公も不幸短命にして逝つた。

話代つて第四次伊藤内閣は三十三年十月十九日に出て來り、茲に大隈もいよ／＼伊藤が政友會總裁で内閣を組織したについては、自ら進歩黨の首領として名乘り出し、以て第十五議會に臨んだが、扨先立つものは增租案である。然るに進歩黨は之に贊成し、若くは反對し、とう／＼此問題について内輪喧嘩を起し、其爲めに、反對の効能もなく、又贊成の効能もなく、詰り只味方としても厄介であり、敵としても怖しくないといふ印象を他に與へた外は何等の仕事も出來なかつた。之は畢竟理窟が根底となつて出來て居る政黨でありながら、其れと同時に餘りに人氣を取ることのみを考へて居るからである。二十七八年役以前、即ち國權擴張を以て政綱となさゞりし以前に於ては減租論も一應の理窟はある。然しながら進歩黨は二十七八年役の贊成者である。遼東還附の反對者である。堂々と國權擴張を其政綱に掲がつゝ增税に反對するといふ事は、如何に理屈を知らぬものでも其不理屈たるを知るのである。處が國權擴張も人氣があるから之を唱へ、減租減税も人氣あるから之を唱ふるといふ事に至ては、到底國民の信用を保つことは出來ぬのである。其出來ぬ事を强て爲さんとするからして、とう／＼仲間喧嘩をして同族相食むの外一事をも爲し能はざる境遇に立至つたのであらう。理窟に初まる者は、理窟に終り、人氣取りて起つたものは、人氣取りに倒る。進歩黨の末路も亦た憐れなるかなである。處が此内閣も内輪の統一を缺くが爲めに不幸短命にして倒れ、三十四

年六月二日には第一次桂内閣が出來た。此内閣の出來た時にも進歩黨には多少の色氣はあつたらしい。然し彼等の戀は處女の戀の如く、只自ら思ふ許りで之を事實にあらはすの勇氣がない。政治上の事は、總てとはいはぬが、槪ね、露骨、むきだし、向ふ見ずが成効して、前に一歩、後に一歩、氣兼、氣穢を取るものには到底何等の獲物もないのである。然るに進歩黨には之が缺けて居るのである。又誰でもさうであるが、進歩黨程世間の毀譽褒貶に頓着するものはない。彼等は新聞からでも攻撃されゝば忽ち縮み上るのである。それて彼等は思はぬではないが終に一度も思ふ通りに遣り附けた事はない。然るに玆に願ふてもない幸が出來たそれは卅五年第十七議會に際して桂と伊藤との衝突てある。此衝突はこゝに關係はないからして立入つて話す必要はないが、大隈にとつては稀有の機會てあつた。加藤高明などはこゝを千載の一遇と心得、兩方の間を取持つて、十二月三日にはいよ〳〵兩人の會見となり玆に政友會と進歩黨との攻撃同盟は事實に於て殆んど成立したのてあつた。兩黨提携の結果は終に十二月廿八日の解散となつた。イザ之からは伊藤大隈が提携して政府を乘り潰さんとすることは双方の黨員共の眼中に歷々として居つたが、思ひきや、何時の間にやら、伊藤と桂とは手を握り三十六年四月二十七日には終に政府と政友會との妥協が出て來り、進歩黨は又しも、一杯の冷飯にさへも與からぬ事となつた。

三十七八年役に際しては素より擧國一致て、黨派の關係などは眼中にあるべき筈てなかつたが、動もすれば政友會は進歩黨と近つき、進歩黨は政友會と近きつゝ、桂内閣が人望を失すれば失する程其關係は親密の趣を呈して來た。伊藤大隈の聯合は三菱前代の遺策にして、其流れを汲めば加藤高明などは必死に之が爲めに骨を折つたのである。從て原敬、松田正久、大石正巳、犬養毅などの間に多少消息の通じた事もあつたらしい。然し肝腎の事になれば進歩黨は何時も失策をする。例へば三十八年のポーツマウス條約については西園寺は男らしく、其止むを得ざることを公言したが大

限はなか〱左樣な事はいはぬ。彼が戰爭中になした言論は、時としては友隣の感情を害なひ、時としては帝國公債の相場を下げ、所謂物言へば唇寒し秋の風て折角の雄辯も只自分のデマゴッグなるを廣告するの外何等の利益を與へなかつたのである。そこて首は首て居つたが、大隈の古首は寧ろ板垣の古帽子に若かなかつた。

かくていよ〱桂內閣に代る場合には再び自由、進步兩黨の聯立內閣を夢みたる大石等は其場になれば全く出し拔かれ、只一片の通知さへ西園寺から來たといふよりも寧ろ自ら出掛けて聞いたいふ位に止り、隨分馬鹿な目に逢つたのである。彼等は幾度出し拔かるれば其目が覺むるか知らないが、自ら智者を以て任じて居る彼等は此通りによく出拔かれて居るのてある。

西園寺內閣以來の事は餘り間近いから我等は詳しく話す必要はないが、進步黨の同志喧嘩は愈よ烈しくなり、いよ〱大隈伯は厄介者てあるといふ事は、進步黨の或部分若くは主もなる部分に於て氣附かれ、此上は退隱を勸告するより外なしといふのて、とう〱退隱させられたのは四十年一月二十日てあつた。然し帽子を取換ゆる樣に首は容易に取換ゆることは出來ぬ。大隈伯は退隱をしても恰かも、昔の天皇が位を讓つて院政を布き給へると同樣に院政を布いて居る。自分ては關係はないというても、其關係はなか〱切ても切れぬ。それに犬養毅などいふものが附き纒うて居るからして、若くは大隈伯を自分の道具として勝手に使ふが故に、なか〱板垣伯を取り除けたやうには參らぬのてある。そこて西園寺內閣がいよ〱更迭する時に於ても、進步黨は又恐らくは色氣を貪つたのてあらう。しかし此時も物や思ふと人の問ふまてといふやうてあつても、終に何人も其謎を解くものはなかつたのてある。それて今日となつては進んて政府黨たることも出來ず、退いて反對黨たることも出來ず、只其日其日を內輪喧嘩て送つて居るのである。かゝる狀態に立ち至つたのは誠に笑止千萬てあるが、事實が即ち此通りてある。

我等は今殆んど結論に近いたが、最後に一言して置きたい。それは日本で最も新聞を利用したものは進歩黨である。其創立の當時からして、多くの新聞は進歩黨の味方であつた。今日でも議員の數の割合に新聞の味方が多い。都下に於て比較的新聞の味方を有するものは、政友會でもなく、桂内閣でもなく、恐らくは進歩黨であらう。然しながら餘りに新聞を利用した爲めに却て新聞にいたされたのである。彼等が松方内閣に於て失敗したのも新聞の爲めである。伊藤内閣と提携するとの出來なかつたのも、山縣内閣と提携することの出來なかつたのも、桂内閣と提携することの出來なかつたのも皆新聞にいたされたからである。而して大隈内閣が彼が如き見苦しき最後を遂げたのも又最も多く之が爲めてある。今日でも進んで新政黨の中堅となることが出來ず、日々齷齪として居るのは全く新聞の爲めてある。若し進歩黨か新聞から何といはれやうが頓着せず其所信によつて勇往奮進したならば彼等は決して今日の位置てはあるまい。之と同時に常に世の人氣のみを考へて居るから物事に立ち後れをするのである。人氣は向から附いて來るのである。だからこちらが思ふ事をやつて行けば十度に一度は人氣に打ち當てるのである。處が人氣の後から〳〵跟いて行くから終に一度も捉へ得ないのである。又進歩黨は最初から理窟を主として出て來つたから其結合が理窟摺みになつて、溫かみも少く、角が立ち、何事も圓滑に行かぬ傾がある。彼等はとう〳〵盲從の美德といふ事が分らぬのである。交讓の必要といふ事を解さぬのである。然し地盤を見渡せば地盤はなか〳〵健全である。幾多の政變を經て蠶食せられ、侵掠せられたが、保存してある地盤はなか〳〵健全である。又人物も個人としては政友會に劣らぬのみか寧ろ優つて居る。大石などはいろ〳〵惡評をいふものあれども、地金で買つても國士丈けの相場はある。彼は天下に何か一つの仕事をしたいといふ願望を持て居る。武富などは若し役人とならば立派な明治の循吏であらう。官僚〳〵といふが、かゝる天性の好官僚はなからう。又箕浦なども重厚の君

子である。一通りの事は何でも出來る。又批難はあるが犬養などもなか／＼の切れ者である。只彼は生物を食ふ鳥も同樣、目の前にあるものは必らず之を餌食とせねば止まぬ。必らずしも己れが爲めといふてもあるまいが。凡そ進步黨を出入したる名士の中て彼の爲めに毒爪にかゝらぬものは少ない。長谷場純孝もそれてある。島田三郎もそれてある。河野廣中もそれてあらう。又最後に於ては平岡浩太郎や神鞭知常なども犬養の爲めに頗る迫害せられたのである。彼等が死んだのは或は仕合てあつたかも知れん。生きて居れば今日ても犬養から追及せられたに相違ない。又中村彌六ても、近頃やうやく頭を出して來た角田眞平てもあらゆるものは彼からいたされて居る。彼と重耳陳餘ともいふべき、前には尾崎、今日に於ては大石、何れも同樣てある。彼の先輩たる矢野文雄の如きも或は然らんてある。今日迄無事て居るのは武富、箕浦の徒てあるが、箕浦は溫厚の君子てあるし、武富は大隈と特別の關係があるから、兎も角も無事にして居るてあらう、然し彼等とても何時までも安全にして居る譯には行くまい。一言にしていへば犬養は進步黨のイヴル、ゼニオスである。彼がある限りは進步黨はいよ／＼小さくなるであらう。然し彼がある限りは、進步黨は、進步黨として彼に於て存在するてあらう。論極すれば嗚呼彼も亦た人傑なる哉てある。之が進步黨の大略の歷史てある。これから先きの事は我等の領分でなくして寧ろ神樣の領分てあらう。(完)

飜譯論

文學博士　三宅雪嶺

飜譯に關して議論區々、或は之を輕んじ、或は之を重んじ、間々一方に偏するの甚だしきに過ぐ。昨年歐米の思潮を紹介する爲め大日本文明協會の設けられ、近く文藝院設置說の出てし際、その主なる事業の一として飜譯を擧げたるものあり、飜譯奬勵の希望は啻に認め得る所なるが、飜譯が果して充分に心血を注くべ

き價値ありや否やは疑を免れず。文學が男兒一生の事業とするに足るやの疑はるれば、飜譯は一層疑はるゝの避くべからざらん。約百年前ヂスレリーは曰へりき摘要者、編纂者、及び飜譯者は、皆な等しく賤めらる學者に不必要にして不學者に解せられずとせらる、而も實は局外者の想ひ到らざる所に苦心すべきものあり、場合により原著者以上の能力を要する無きに非ず。是れ當時の英國のみならず、其後も、又た其他の國も、概ね斯かる狀態にして、我國の現狀も大差なしとすべし。文物の漸く獨立すると共に、飜譯の漸く第二位に落ちんとする傾向あり。舊幕の末、蘭學者は飜譯を專一とし、明治の初め、加藤、中村、西、何、尺等諸氏、皆な飜譯に勞し、福澤氏は自由なる意譯に務め、飜譯は何事よりも重要なるかに見えしが、後ち年を經て變遷し、今は最早や之を重んじ之に熱衷すること前の如くならず、動もすれば譯書を以て學者に不必要、不學者に解せられずとする跡あり、議論の生ずるも此間に在り。

近來人の往々飜譯を盛にすべきをいふは理由なしとせず。我國の思潮は、大體に於て飜譯より成る。帝國大學の講座も或る特別なるを除き、殆んど皆な飜譯若くは飜案にして、甚だしきは原語にて原書を解說するあり。それ以下の諸學校は固よりの事にして、若し飜譯的ならざれば程度卑くして未だ飜譯的たるに至らずと見做さる。而して實際何程譯書の出版せられたるか歐洲の名著にして一斑だも譯せられざるあるに非ずやといふを考ふれば、飜譯の愈々益々盛にすべくして、決して輕んずべきに非ざるを覺ゆ。而も其の故を以て學者たるものは宜しく飜譯に從事すべしと斷言するを得ず。事實に於て我國は猶ほ飜譯國にして、判斷の標準を原書に取るの多きも、明治十年頃に比すれば勿論、二十年頃に比し、三十年頃に比するに、進歩の爭ふべからざるあり。今日とて整備の域に遠けれど、或る學科に於て既に世界に地歩を占め、僅に獨立を唱ふるに堪ふるより推す、則ち概括して言ひ難きも、徒らに飜譯を以て甘んぜず、著作を本位とし、飜譯を副とする

の早計ならざるを見る。

現在の學者は如何に飜譯を認むるか、自ら之れに當らんとするか、又は之を避けんとするか、性格境遇及び爾餘の事情によりて決すべきが、大略二種に分ちて考ふべし。即ち一は普通の書籍にして、單に新智識若くは材料豐富として紹介すべき者、一は謂ゆる傑作、マスターピースなる者にして、第一流の學者は前者に與らず、飜譯に意あらば唯だ後者を敢てする事とすべし。第一流とは曖昧なる語なれど、帝大教授の職名を帶ぶるものを以て然らずと爲すことを得ず。强國に列せる國家の設立せる至高學府の教官として、漫に他國の學者に隷從するが如きあるべきに非ず、學問に國境なしといふも、國境を爭ふの時代に於て自ら任ずるの重からざるべからず。帝大教授たらずとも、私立大學の主なる講師、若くは之に相當する者は、同じく此邊の注意を缺かざらんことを要す。已れ自ら飜譯せんと欲する所あるも、又た利益の之に伴ふの明白なるも、苟も傑作と認むべからざるものは斷じて之を避くるの當然なり。人をして飜譯せしめ、或は之に助力を與ふるの妨げなきも、爲めに多くの時間及び勞力を費さゞるやうにすべし。普通の書を譯するに堪ふるは其の人に乏からず、或は譯して精嚴ならざるの疑あらんも、殆んど汗牛充棟なる書に就いて、さまで精嚴を求めずして可、略ぼ意の通ずれば則ち不可なし。得べくんば一字一句を苟もせざるの望ましきも、是れとて實益よりも形式に於ける欲望に屬す。

傑作といふも意義頗る茫漠に失し、ラボックが傑作百種を選びし時、スウヰンバーンもウヰリアム、モーリスも各々別に百種を選び、人毎に百種を選び得ると言はれしが、常識にて決定すべきも亦た少からず。呼びて經典とするは内容の如何に拘らず、關係者に於て傑作たるに相違なし。何國に在りても經典は第一流の學者の飜譯に勉むる所とす。佛教は最も經典の數に富み、その盛んに行はれし支那は飜譯の多きに於て世界に冠絶す、如何に歐洲にて希臘羅馬の書を飜譯せしにせよ數に於て遠く及ぶこと能はず。次にホメルスの如

き、ビルギリユスの如き、ダンテの如き、シエキスピアの如き、ミルトンの如き、ゲーテの如き、孰れも傑作として疑はれず、隨て第一流の稱ある者の譯述に勉めしあり、伊國のチエザロッチ、モンチ、獨國のフヲッス、シユレーゲル、英國のドライデン、ポープ、皆な優に一家の作を以て立ち得べく、而して特に飜譯に勞苦するありたり。學術の書にても、カントの批判論、ダーウキンの種源論、カールマークスの資本論等、第一流の學者の飜譯するに相當す。マクスミユーラが批判論出版一百年紀に之を飜譯せしが如き、稱賛すべき事なり。されど第一流にも程度あり、甲國の第一流は乙國の第一流と同からず、獨立せる文物を有せる國に於て飜譯事業を以て最上とするは、事の當を得たりとせず。ゲーテは飜譯もせしかど、自ら作りしは遙に之に過ぐ之に望むに一生を飜譯に委ねんことを以てするは大なる謬りなるべし。カーライルは獨逸文學の輸入に勉め自らも飜譯せしかど、若し之をして飜譯に專ならしめば、則ち何の狀なりしぞ、フレデリッキ傳は缺點の種々なるも、獨國史家の爲さゞりし所に出てたる者にして、以て英國の爲めに氣を吐くに足れりとすべし。傑作を飜譯するは一の大事業たるも、又た此等の事を忘るべからず。

個人より觀て飜譯其物の目的たる事あれど、社會より觀れば固有の文物を助成すべき一の手段とするの外なし。言はゞ肉類を口に入るゝの嚥下し消化して身體を營養するの目的に出づるが如し。社會の進歩を察するに何程固有の文物を發達し、何程他より採用し之れを消化し得たるかを見るの便利なるとあり。我が日本は維新以來世を擧りて飜譯時代に入りしが、七百年間の封建よりしてか、政治は飜譯に勉めて早くも獨立に向ひ、特に軍事に於て其の著しきを示せり。明治年間飜譯に勉めたること軍事の如きはなし、凡そ强國の軍事に關し參考すべきあれば、譯して當事者の用に供し譯書の數は實に計ふるに暇あらず。而も曾て獨立の地歩を失はず、近く大陸軍國の名ある露國と爭ひて勝を制するを得たる、東郷大將は居常マカロフの著書を愛

び而して之と硝烟の間に相ひ見えたり。蓋し元と軍事の獨立せるあり、先進將官は自ら外國語に通ぜず、山縣元帥の如き遂に之を解せず、而も飜譯を活用し、最も進歩せる軍事に與りて過なきを得たるが如きは、他にあらず、素養のあるあり、飜譯を以て目的とせず、之を手段とするに堪へたるなり。學術等未だ此の如く整はざれど、今は必ずしも他國の後塵を拜せず、他の智識を容るゝと共に進んで之に貢献する所なきにあらず此點に於て純文學こそ最も進歩せざるものゝ一に居るなれ、宛ら明治初年の政治軍事の如く、唯だ他國の勢に依りて事を決せんとしつゝあり。飜譯若くは飜案若くは其の趣味の發揮に專にして、自ら如何にすべきかに想ひ到らず、現狀よりせば社會の他の要素に追隨するに猶ほ少からざる歳月を要するに似たり。されど進歩の速かなるも亦た認め得ざるにあらず、二十年よりも十年、更に最近二三年來の進歩を考ふれば、或は遠からず獨立するに至らんも測られず。飜譯に見るべきもの已に復活及び其他二三あり、運命を卜するの甚しく難からず。但し今日は未だ他の進歩に對して稱揚を値せず、正に飜譯時代に彷徨すと爲さゞるべからず。飜譯に對して如何にすべきかは輕忽に附すべきにあらず。

二大政黨對立論

池邊吉太郎

新政黨組織の問題はどうなるか、今日(三月十六日)てはまだしかとした事はいへぬ。世には往々立憲政治は二大黨の對立によつてのみ運用し得べきものだといふ人があるが、然しさういふ理屈で極まつて了ふものてはないと思ふ。理屈がさうだといふ理屈の性質て出來るものてなからうと思ふ。詰る所、其國民の性格、風習、それから智慮、そんな事が事情を產み出し、形勢を造り出し、其事情と形勢とを基礎にして二つの政黨が出來れば出來るといふ事になるだらう。實際て行はれて居る所をいへば、二つの政黨に互に責任內閣を

作らして、國民が自分〱の安寧幸福を進むるといふ仕組は、列國中で英米の二國丈けだ。米國は別として英國でも昔から二大政黨の對立があつたといふ譯ではない。色々な變化を經てさうなつたのだ。此二政黨の對立が最も見事に行つたのはグラッドストンとヂスレリーの時である。其餘勢が今日に續いたのである。けれども此節ではいくらか崩れかゝつてゐる。一體英米の國民即ちアングロサクソン人は二つに分れることの好きな人民だ。ベースボールとか、テニスとか皆二組に分れてやる。レースをやることが極めて好きだ。其競技と全じ樣に心得て政治上の爭をやつてゐるやうにも思はれる、處で日本人も此二つに分れることが存外好きらしい。遊戯ぢやなく、政治上の實際に二つに分れて爭ふたとは歴史上始終やつてゐる。只從來は立憲政體とか國會とかいふ仕組がなく、主として力の爭であつたが故に、動もすれば內亂となり、戰爭となり、血を流し骨を碎くといふ事になつた。然し今の立憲政治ではそんな事がなく、東軍と西軍、南軍北軍といふ風に二つに分れて、關ヶ原の役、大阪の兩陣、又は山名細川の戰を文明流になし得るだらうと思ふ。

今實際を見た所で、先づ政友會といふものが可なり大きな政黨で、甚だ怪しいが先づ過半數の議員を持てゐる、それに對して今の官僚政府。これも私はちやんと政黨らしい形を持てゐると信じてゐる。表向きは官僚として御親任を受け、官僚として政府を組織し、官僚として政治をしてゐる。形はどこまでも官僚たるに拘らず、政治の實際は政黨と全じ事をやつてゐる。先第一に彼等も矢張り國民多數の希望に添ふやうにやつてゐる。桂は一時國民多數の意嚮に反した政治もやつた事があるが、どうも甘く行かなかつて今は意外に國民の輿論を重んずる。多數の氣に入るやうな事をするこれは議員に極まつた味方がないから、議員以外の國民の輿論を成るべく味方にして、强味を附けやうとするのだともいはれやうが、然し結局多數の輿論に從ふ政治を行はなくてはならなくなつた爲めである。何故かといへば議院といふものがある。これを無視して政

治をすることは到底出來ぬ。解散しても一時の事てある。矢張り直ぐに其意を入れなくてはならぬ。山縣丈けはやらぬが伊藤も松方も黑田も解散て皆苦い經驗を嘗めてゐる。實に愚な事だ。それだから賢く出て矢張り輿論に從て政治を行ひ、そして議員の多數を占めなくてはならなくなる。さて此くなれば第二には。其手段として自分で政黨を作るより外なくなる。若し政友會があんまり力の強い政黨てなかつたら其れに對抗する必要もなからうが、今日のやうな有樣ではどうしても對抗する必要がある。一々政友會の言ふ事を聞く氣ならよからうが、それは出來るものでない。今は行掛り上、互ひに妥協してやつてゐる。然しこれは長い事ではなからうと思ふ。いかにも政友會は今度の財政整理案に贊成した。これは西園寺の末路にやりかゝた其の行懸りがいくらかある因緣として贊成したのだ。今后桂は自分の內閣のやることを一々西園寺に相談しまい。又相談も出來まい。若しさうなれば內閣の外に內閣が出來ることになる。桂は詰度西園寺と協議せずにやる。さうなれば西園寺が桂に反對する者自由だ。是非とも贊成をさせらるべき因緣がない。だから私は妥協政治ももう長い事はあるまいと見てゐる。そんなら政友會を全く金て買ひ潰すかといへばそれは出來まい多分西園寺が絕對に受けまい。そこて總裁の手を通じて買ひ潰すことが出來ぬからといつて個々に買ふかといふに、これは非常に手間がかゝる、そして纒つた効能がない。で仕方がないから自分で自分の政黨を作なければならぬと云ふ事になる。而して同じ作るなら政友會に對抗する大きな政黨を作るといふ事になる。さうなれば二大政黨の對立を見ることになる。又此事情の外に、又更らに別の事情があつて政黨の頭を擡ぐる機運を作つて居る。日露戰爭あつて軍人は非常に働いた。若し其大功ある軍人にして政治上の野心があるならば政權が其人の手に歸するかも知れない。然るに東鄕ても大山ても黑木ても奧てもそんな野心は少しもない、山縣も餘程老て、自分で政治をやらうといふ野心はない。桂のパトロンとしてやる丈けてある。桂とても軍事

囊の繰伸をやつて寧ろ軍人を抑へつけて居る。將來軍人政治の行ふべからざるは明白である。大いなる軍功ある、澤山の勳章を下げた、嚴めしい甲冑をつけた連中は全く政治に冷淡で興味を有たぬ。之れが又政黨が頭を擡ぐるに有利な狀况を作つてゐる。こういふ色々の事情がある上に。初めに言つた樣に日本人にも政治の爭に二つに分れるといふ風習があり、歷史もある。只今とは形式が違ふ丈けだ。そこで色々な故障があるに拘らず、二大政黨の對立を見得べき形勢あると信じてゐる。

そこで片や西園寺黨、こなた桂黨といふ土俵の上の形勢を現はし出す。それから先きはハッケヨイだ。

唯物史觀

(マルクス主義の淵源)

藤井健治郎

一

マルクスの唯物史觀は、其獨特の歷史觀であると言を待たない。けれども又その何等の由て來る淵源なくして忽然として彼の如き思想は現はれたものではない。彼は幾多先人の說を研鑽して夫れに依つて啓發せられ居る點が少なからずあるのである。吾人はマルクスの唯物史觀を想へば、一方に於ては直ちにルイ・ブランを想ひ起さずには居られない。ルイ・ブランを想ひ起せば、更らにサン・シモンに想ひ到らざるを得ないのである。また他方に於ては直ちにフォエルバッハを想ひ起さずには居られないし、更らに遡ぼつては、ヘーゲルに迄進まざるを得ないのである。故にマルクスの唯物史觀の淵源をなせるものとして大要二個の方面があると云ふて好い。一つは佛蘭西の社會主義者の考て

あつて、他の一つは獨乙のヘーゲル及び所謂青年ヘーゲル學徒のそれである。吾人は此等の淵漸に遡ぼつて究むる所なくしては、マルクスの見解の筋を正しく會得する事が出來ない。殆も一條の河流を探究し悉くさんには、必ずやそれに附隨する諸多支流の末に迄も遡ぼらずに居られないと同じ事である。それゆゑ、余は今此處にマルクスの唯物史觀の淵源として掲げたる二個の支流に向て多少溯つて見やうと思ふ。

二

ルイ、ブランの著述の中て、マルクスの思想に多くの影響を與へたのは、一千八百四十一年に出版せられたる『十年史』と、一千八百四十七年から一千八百六十二年に到る間に出來た『佛蘭西革命史』の二部である。中ても前者は最も多くの影響を與へて居るのである。而してルイ・ブランの此の著述に最も多くの影響を與へたサン・シモンの著書は、一千八百二十一年の『工業制度論』と、一千八百二十三年の『工業問答書』の二部であろうと思ふ。乃ち今此等の書に就いてサン・シモンの考を窺つて見やう。

サン・シモンは、佛蘭西革命の發端即ち一千七百八十九年から、革命の略々終結せる一千八百十五年に到る二十六年間に佛蘭西國民は人間としてはさまでに變化して居らないのに、憲法は約十回以上も變じて居るのを見て、意ふやう、國家政治の眞の原動力となるものは、決して憲法其ものではない、政治の形を定めるものは人間である。否、人間の所持して居る所の財產である。凡そ一切政治上の影響及び其の價値の、唯一にして眞實なる基礎は人間の富である。其の富の上に政治上の自由が存在する。富と精神上の發達と結合して、此處に國家統治の體をなすものであると言ふて居る。猶ほ彼は、吾人の財產の形が、生產の形を規定し、また反對に生產の形が自からに財產の形を規定するものてあつて、只だ其の中の何つれかの一つ丈けでは、社會上に何等階級の差別を引き起すものでない。否、此等兩者の變化奈何に依つてのみ社會の形は定らるゝものである。少なくとも此の兩者の變化と云ふ事を考ふる

に於て、始めて我が佛蘭西の社會の起源及び發達を說明することが出來るのであると述べてゐる。斯くして彼は佛蘭西革命を批評して次のやうに言ふて居る。

フランケンが、ガリエン地方に進撃し、其の居住を定めた時に當つて、その地方に二つの階級が生じた。一つはフランケン民族の階級で、他はガリエン民族のそれてある。前者は統治者の側てあり、權力者の側てあり、主人公の側てあつて、後者は統治せらるゝ方の側てあり、無權力者の側てあり、奴隷の側てあつたのてある。此の奴隷の側たるガリエン民族は或は農業或は工業等の勞働に服して、多少の賃銀を得て、之を貯蓄して居たのてある。然るに十字軍が起り、其の結果として、社會一般に生活の程度が高まり、風俗頓に奢侈に傾くに至るや、社會の金錢に對する需用は玆に激增して來たのてある。かうかうなつては自から財産を所有し居らざるフランケンは、彼等自からの手てはその需用を充たす事が出來なく、止むを得ず其供給を彼等の奴隷たるガリエン民族に仰ぐこととなつたのてある。

しかしガリエン民族とても無報酬ては勿論その供給に應ずる筈がない。其處て貴族たるフランケンは其の獨占し來たれる色々なる政治の特權、或は自由をガリエン民族に與へて、夫れの代償として彼等より金錢の供給を仰いだのてある。換言すれば政治上の自由をば、金錢を以てガリエン民族に賣り渡したのてある。斯くしてガリエン民族は、次第々々に社會上政治上に重要なる地位を占めるやうになつたのてある。即ち社會の贅澤なる生活は、その步武を進むる每に、農業者或は工業者の社會上の地位を高むるやうになつたのてある事情如此てあつた所へ、彼の路易十一世はガリエン民族と同盟を作つて、其の力を以てフランケン民族の諸々の諸侯を壓服しやうと試みたる爲に、益々彼等實業家の社會上、政治上の地位をして高からしむるの勢を助長したのてあつた。然るに降つて路易十四世の頃になつては、工、商の發達が著しくなり、それに連れて資金の需用は社會生活上愈々大切な事になつて來たのである。其處て專門にそれ等資金の供給、及び蒐集を計

る處の一種の機關が出來、その機關を運用するを營業とするものが出來て來たのである。如此部類の營業者は何であるか、そは外でもない所謂銀行家と呼ぶ所の人々である。彼の一千七百八十九年に佛蘭西革命の發端を惹き起した人々は、所謂市民權を有して居る諸々の階級であつて、その重なるものを擧ぐれば、平民の地位から或る一定の特權を有つた者になつた處の人々しかし未だ貴族にならぬ人々や、貴族ならぬ法律家や、軍隊や、從來の平民の子孫や、または自ら勞働をせざる所の資本家等である。此の佛蘭西革命の餘波は、今日に於ても猶ほその動搖を止めない、如此動搖は何時止むものであろうか。それは農業家、工業家等の實際界の人人に國家統治の實力が承認せられ、この承認があつて始めて革命運動は止むであろうと言ふて居る。此の機會は夙くも一千八百十七年の佛蘭西國債問題の時にあらはれて居る。此の時には單に十八世紀的に專制獨斷的でなく、政府と銀行家とが妥協して此の事を處置したのであるといふて居る。

以上に依つて見ればサン・シモンは稍に經濟事情を以て社會起源及び其の發達の源由として居る見解を持して居つたことが承認せらるゝ。然しサン・シモンは此の經濟的說明を以てのみ充分滿足して居るものではなかつた。彼は此の見解の外に、更に他の見解を有つて居たのである。即ち彼は一面に於ては、かやうに經濟事情を以て社會を說明すると同時に即ち人間の歷史を全く物質界の方面より說かうと試み乍ら、他の一面に於ては、また精神の要素をも附け加へて居るのである。彼は精神上の要素も少なからず封建制度を破壞する上に影響を及ぼして居ると考へて居る。凡ての政治組識は、凡て哲學系統の上に立たなければならぬ。殊に倫理の上にその立脚地を占めて居らねばならぬ。例へば中古の封建制度は、神學にその基礎を有し、また今日の時代の議會制度は、形而上學、及び法律學にその基礎を有し、今日已に萠芽を發し、將來益々發展すべき實業の社會は自然科學にその基礎を有して居るのである。猶ほ中世の思想は、一面は宗敎的の思想があ

り、他面には俗的の思想があつた。宗教的の方の研究法は先天的で、俗的の方は後天的である。偖て此の中世の二大思想たる一つの宗教的思想を打破したる第一歩は新教の勃興である。此に於て、宗教的と俗的との間に第三の階級が生じ、此の三階級の爭は軈て今日の歷史を形式して居るのであると見て居るのである。サン・シモンは此んな風に考へて居るのであるから、社會の變動を惹起するものは、單に物質的方面の事許りでなくして、精神的方面の作用もある事を認めて居つたのは明かである。

三

以上に叙述せる如く、サン・シモンは一面に於て歷史の經濟的基礎を主張すると同時に、他面に於てはまた精神的要素の歷史の發達に閑却すべからざるを述べて居る。即ち彼は人間歷史の基礎として、物質的及び精神的の兩方面を殆んど平等に主張して、未だその一を以て他のものよりも、より根本のものとし、若しくは一のものを以て他のものに服從せしめんとはしかなかつたのである。故に彼の歷史觀は一言にしていへば二元觀である。さてこの二元的見解を其の儘に發展せしめたのは、オーギュスト・コムトである。また同じくこの考を採り乍ら、猶ほ夫れ以上に出て、遂に經濟活動を以て人間歷史の最根本のものとなし、精神的要素をば殆んど認めざるに至つたのは、彼サン・シモンの門下に出でたるルイ・ブランである。

彼は人間の歷史に於て殆んど精神上の要素を認めない。政治上の變遷は全く經濟活動の變化に基づくものであると主張して居る。彼はナポーレオンの覇業一度地に墜ちて其の鴻圖を全くするとが出來なかつたのは畢竟市民の發達に依るのであると說いて居る。要するに今日の歷史上の爭は、畢竟封建制度の精神と、市民の利害得喪との爭に外ならない。人間は寧ろ彼等自身の成し遂げた所のものゝ玩具であつて、決して人間がそのものを玩具として取扱つて居るのではない。此のやうに彼は只た物質的方面のみを認めて、毫もその精神の方面をば顧みなかつた。ルイ・ブランの此の思想

は、マルクスの思想の上に影響したると蓋し多大のものである。

四

マルクスは以上に陳述せる、サン・シモンや、ルイ・ブランの影響を受けて居るのみでなく、猶ほヘーゲルや、フオイエルバッハやの影響をも受けて居るのである。マルクスは夙くも青年時代に於て、郷里の大學を退き態々伯林に出て親しくヘーゲルの敎を受けたのである。此の點より見るも一定の影響をヘーゲルより受けて居るは明なれども、此れ以外に猶同じくヘーゲル派の左黨に屬して居る學者の內で、マルクスと事業を共にしたり、または互に思想の交換をしたりして居るものがあるから、其のお互の思想の間に影響を及ぼし、及ばされたる人々も決して尠くないのである。アーノルド・ルーゲや、ブルノー・バウワーや、及びルードヰッヒ・フオエルバッハ等はみなそれである。中でもフオイエルバッハの所謂『人間學的唯物論』(アントロポロギッシェルマテリアリスムス)は、マルクスに影響して居ると多大である。故にマルクスの思想は、之を直接にヘーゲルより導き出すよりは、寧ろフオイエルバッハに其の直接の淵源を求むるのが至當であると思はれる。ヴオルトマン氏は、ヘーゲル、フオイエルバッハ、マルクスの三人の關係を述べて、ヘーゲルとマルクスとは、一思想の兩極端の發展を示すものであつて、而してフオイエルバッハは、實にその中間を形成して居るものである。フオイエルバッハは、ヘーゲルの神學を人間學に還元し、マルクスはフオイエルバッハの人間學を經濟學に還元したのである。故に若しフオエルバッハの考を人間學的唯物論と云ふ事が出來るならば、マルクスの考は經濟學的唯物論(エコノーミッシェルマテリアリスムス)と云ふ事が出來ると云ふて居る。此れは慥かに至當の議論であつて、好くこの三人の學者の關係を說明し得たものと信ずる。それゆえ、ルーゲやバウワーやの思想のマルクスのそれに及ぼせる交渉は、外の機會に論ずるとして、今はマルクス主義の淵源として、フオイエルバッハハの所謂『人間學的唯物論』とは果して如何なるものを指すのであるかと言ふ事に就いて一言敍述して見やう

と思ふ。

五

フォエルバッハは、一千八百四十二年に公にせる『哲學改良案』なる著述に於て、かう云ふ風なとを言ふて居る。

神學の秘密は人類學にして、純正哲學の秘密は神學である。故に純正哲學を進めて行けば神學に這入り、神學を進めて行けば人類學になるのである。思辨哲學の用ゐた方法は、從來宗教哲學に用ゐられた處のそれと擇ぶ所ない。吾人はむしろ思辨哲學を顚倒して、そこに始めて眞の哲學を得、眞の眞理を得るのである。ヘーゲル哲學の發足點たる絕體の實在と云ふものは、全く抽象的の有限のものて、思考と實在との關係は、實在は主體て、思考は客體てある。實在は主て、思考は屬てある。思考は實在より抽き出す事を得れども、實在は思考より抽き出すとが出來ない。人間その者を放れて、法律、意思、人格と云ふが如き事を考ふるは之れ統一のない、必然のない、實體のない、根據のない、實在性のない所の空想に過ぎないのである。人間は自由の存在てあり、人格の存在てあり、權利の存在てある。彼のフイヒテの大我や、ライプニッツのモナドや、或はヘーゲルの絕體やの根據は、凡て人間に外ならないのである。凡そ有ゆる科學は、其の根據を自然の上に有たなければならぬ。故に哲學は自然科學と結合せなければならぬもの、また自然科學は哲學と結合せなければならぬものである。如此哲學と自然科學とが、兩々相待つて兩者の本質上必然生ぜざるを得ざる所のその結合なるものは、今日成し遂げたる哲學と神學とを全然引き放したと云ふ事よりは、一層有効なものて、一層持續し得るものであろうと云ふて居る。

猶ほフォイエルバッハは次の如き事も云ふて居る。

新時代の職分は、神を現實化する事、人間化する事てある。即ち換言すれば、神學を人類學に變じ、且つそれにまて還元する事てある。ヘーゲルの絕體哲學は神學の彼岸のものをば、此岸に持ち來したと云ふ事は明かなれども、その結果彼の絕體哲學なるものは、此

の現實世界の此岸を、吾人に對して却て彼岸にして仕舞つたのである。現實世界に於ける現實とは如何なるものを指すか、そは感官の對象としての現實に外ならないのである。即ち感覺的のものに外ならない。去れば眞と云ひ、現實と云ひ、或は感覺性と云ふも、言葉の上の相違であつて、詰まる所同一のものを意味すると言はざるを得ない。直觀や感覺の對象は、それ自身で明かなものであつて、吾人は奈何にしても疑ふを得ざるものである。故に吾人に最も直接にして、且つ疑ふべからざる最初の智識は感覺性である。主體と客體との同一若しくは一致と云ふ事は、人間が人間を感覺的に直覺したる所の眞實であり、現實である。精神や自我と云ふものも、要するに感官の對象である。故に經驗論が吾人の觀念の起源を尋究して、之を感覺に求めたのは正しいのである。たゞ彼等經驗論者は、吾人人間の最も重要なる所の感覺の對象は、人間それ自身であると云ふ事を忘れて居る。人間の意識及び悟性の光は、人間が人間自身を觀るとによつて灯さるゝものである。

之に反して觀念論が、觀念の起源を人間そのものゝ内に求めたのも正しい。たゞ彼等觀念論の所謂觀念なるものは、極めて孤立的に見られ、それ自からにして存在するものと考へられて居る。即ち或る固定したる人間の精神として考へる。一言にして云へば、他より感覺的に與へられたる汝なくして、自己のみによりて獨發的に產れるものとして說く。此の點は總て觀念論の缺點の存在となるのである。素より彼の觀念なるものは、人間が人間と交際し、協同するに依つて生ずるものたるは疑がない。然のみならず、二人の人間に於ては、一人は他の一人の生出したるものに屬し、即ち一面に於ては精神的、他面に於ては物質的の人間の精神に屬する。その二人の人間、人間と人間との協同は、眞理と不變の原理であり、その標準である。吾人以外に或る外物が存在すると云ふ智識そのものは、自己に對して、自己以外に自己の傍なる他人の存在を證むるによつて媒介せらるゝものである。予は予自から一人にて見たる所のものを、他人にも斯くに見えるもので

あるかを疑ふ。新哲學は、人間の基礎として自然の決定を以て。不變の最高の對象を人間に歸するものである。故に人間學は、哲學の根本の一つであつて、而してそは普遍科學となり得るものである。人間哲學としての新哲學は、人間に對しての哲學なるは疑ふを要せない。次にフォイエルバッハは有名なる『基督教本義』と云ふ書を著はして、其の中に論じて曰く、

宗教は人間の不變の本質の上に成り立つて居るものてある。併しながらその不變なるものは、人間に於ける主の性質てある。動物は單純なる生活をなし、人間は二重の生活をなして居るものである。何んとなれば、動物の内的生活と外的生活とは相一致して、兩者は一に結合せられて居るが、人間に於ては内的生活と外的生活とは相離れて居る。色々の事は其處から起つて來るのである。人間の内的生活は其の人間の主に對する關係上の生活に外ならない。故に吾人は如何やうに神を寫象しても、そは畢竟主の經過に於ける人間の生產物たるは明てある。神は畢竟自己自身の考へたものてあつて吾人人間が神に對して考へ、神に對して抱く情懷の如く、神は吾々に顯はれて來るのである。宗教に於ける宗教繼續の歷史は、或る客觀的に向つて妥當なりし神は、曾ては主として通用したものである。此の立場よりしてフォイエルバッハは基督教の批評を著はしたのである。即ち人間の自然慾望、及び希望を閑却して居る神は、神としてたゞ一の名號に過ぎない。

神は如此にして保存せられて居るが、人間を外にしては、神は吾人に何等の價値がない。愛情は性の主體の意識てある。而して理性が性の全部の重を托して居れるからして、理性は主の客觀的存在なるが故に、クリストは吾人人間自からの愛てある。主は愛の勢力の上に成り立つて居るものてある。從つてクリストが愛と意識との凡てが主に屬するものなるを意識し、人間に對する自我は、決して何物からも派生せられたものてない。愛情は最も根本的のもてある。かくして彼は有名なる、ホモ、ホミニー、デーウス、エスト、と言ふて居る。此等の如きは最も明瞭に彼の考を言ひ現はして居

ぞと言ふて宜い。

次に遲く現はれたるものでは、人間は食物の如何によつて色々違つて來ると云ふのを書いたのがある。其の中に彼はこんなとを言ふて居る。

胃腸學の對象は神學の對象となり、また反對に神學の對象は胃腸學の對象となる。之れに依りて彼は、心と物との關係に橫はる大なる困難を除き去らうとしたのである。即ち吾々人間は吾々の食べたものゝやうなものになる。ホーマーや、希臘哲學の人々は、神と人を別けて居る。その別るゝ所以は神は不老不死の靈草を嘗めて居るが、人間はそのやうなものを食べ得ないから、人間は人間になるのである。神の不老不死なるはその不死不老の食物に依り、人間の可老可死なるは、また可老可死の食物を取るからであると云ふて居る。此等に依ればフォイエルバッハの所謂人類學的唯物論をを唱へたのは明である。

マルクスはフォイエルバッハの一千八百四十一年に出版したる『基督教本義』を好んで讀んで居つたから其の影響を受けたると頗る多かつたのである。詰り此等サン・シモンや、ルイ・ブランや、またフォイエルハッハの考を一括して現はれ出でたるものはマルクスの唯物史觀である。

次號の本欄には

竹越與三郎氏
上田敏氏
藤井健治郎氏

等の論文掲載せらるべし



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある南米諸國等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

南米と日本移民

岡　實

（南米大陸は、吾國家經綸に對し、至大の關係を有す。農商務省參事官岡實氏、今般新たに南米に入り、深く其の社會狀態を觀察する所あり。左の一篇は、日本移民に就いて、特に我か社のために語られたるものを筆記し校閲を經たるもの也）

南米諸國は、固と西班牙葡萄牙等の殖民なりしが、北米合衆國の例に傚ひ、各其本國より獨立して、共和國を形成せるものにして、其主なる國は、ブラシル、アルゼンチン、智利秘露等の共和國なり。其面積の廣大なるに比し、人口極めて稀薄なれば、人跡未到の場所頗る多く、國と云ひ條、稍人口稠密なる都市を根據として、戸々分離して各地に散在するのみ。即ち南米各國の人口を悉く合算するも、猶且つ僅かに三四千萬内外、而も其多くは、亞米利加、印度人、及び黑人及雜種等の未開人種にして、南米印度人はメキシコ等の其れに比して、其開化の度は著しく劣等なるを覺ゆ。其他白人七八百萬人、白人と印度人とは混血種一千萬人餘あるに過ぎず。然るに、土地の富源は實に非常なるものにして、殆んど無盡藏と云ふも敢て過當にあらず。故に、近時此方面に着眼し、競ふて移住するもの年々増加する傾向を現はし來れり。殊に獨乙の如き、殖民政策に汲々たるの國家は、盛に其渡航を奬勵しつゝあり。古來移民、出稼人の多きを以て名ある伊太利の如きも、南米は南半球に屬し、氣候正反對なるより、其農民は自國の農事際なるの時に乘じ、彼の地に出稼して、農業を營むもの頗る多し。軈て將來は、此地も世界各地の人口を吸收して、北米の今日ある如き狀態となるや必せり。然れども、是は未だ前途遼遠に屬す。我國の如き人口年々増殖し、小天地に跼蹐して其喰の

狀態にあるよりは、如かず、此世界未開の地に、大々的新發展を試みんには。此處には未だ北米の如く、排日思想なし。假し偶々或る方面に唱ふる者あるにしても、單に北米の顰に倣するの愚人の空論のみ。事態は、其勞働力を俟つ、非常に急なるものあり。由來排日とか、黄禍論とか云ふもの丶如きは、白人共の既に充分根據を定めたる所へ、後ればせに出掛けて行つて、其利益に均霑せんとする爲めに、防衛の手段として、起るものになれば、斯る新開地とも云ふべき土地にあつては、各國人の利益未だ著しく相衝突するに至らず。況して是等の國には、其無盡藏の富源を有しながら、充分之れが利用を爲す能はず。云はゞ寶の持腐れの狀態にあれば、之れが開拓に從事するにより、益々國家の收入を多くし、國富を增進する次第なれば、其來住を歡迎する事理なきあらず。從つて移住し來る外國人の權利自由を尊重し、內外人の間に些の區別を設けざるのみならず、寧ろ外國人を優遇するの觀あり。日本人等も、歐米人と同一待遇を受くるを以て、彼れ等と駢馳する事決して至難にあらず。然らば、我邦人の彼の地に渡航し、先づ採るべきの職業、有望なる事業は何なるか、試みに、農工商に分ちて之れを述べんか。

先づ順序として、其國々の政治狀態を聊か說くの必要あり。前述せる如く、南米諸國は皆共和國にして、其政權を掌握するものは葡萄牙人のブラジルを除きて、他は大抵西班牙人なり。元來共和政體には、多くの欠點を具ふるものなるが、其欠點は南米諸國と雖も免るゝを得ず。固と殖民地より、獨立國になりしものなれば、國家を恰も會社の如く考へ、大統領、大臣等も、會社の重役の觀あり。其財政狀態は如何にと云ふに、多くの國家は、不相當なる國債を有す。其債權者は重に英國人にして、實に南米各國に於ては、英人が其經濟上、財政上の實權を握れるなり。故に南米各國間に、偶々國際問題の惹起するあらんか、忽ち英國人の利害に影響する所以なれば、其忌避に觸るゝを免れず。從つて、多くは干戈を交ふるに至らず。多少强制的の仲裁により、之れが解決を見るを常とす。斯く英人は、自己の意見の何事にても行はしむる有利の地位に立ちて、只管實益の吸收に力め、敢て政權を行はんとはせず。之れ英人の英人たる所ならん。

商工業の概略に就て云へば、商業は今日の處直に有望と斷定するを得ず。獨乙の如き頻りに雜貨類の輸入に力めつゝありと雖も、其消費力は人口の稀薄なる丈

け其丈け少なく、殊に印度人、黒人の如き生活程度の低き人民にありては、其生産力も少なきと共に、消費力も殆んどなし。併し白人、其他の文明國人の移住者増加するに於ては、漸次發達するならん。故に、一時的營利にのみに着眼せず、他日の優先權を占むる爲め、豫め永久的の策を講ずる事可なり。工業は如何、此地は從來比較的石炭の産出乏しきと、勞働力の充分ならざるとにより、未だ盛なりと云ふべからず。されど、利用し得べき水力は隨分あるを以て、他日の發展は期すべきなり。各國も極端なる保護政策を採り、輸入品には重税を課するに反し、内地にては頗る寛大の處置を施こし、種々公の賦課を免ずる等、頻りに企業の勃興を奬勵しつゝあり。資本少き日本人等は、さし當り漆器陶器、家具、玩具等の製造に從事するが如き面白からんか。次ぎには、鑛業なるが、是れは相當盛なれども、重もなる鑛山採堀權は、英人の獲得する處にして、固より新たなる富源は數多ありと雖も、大規模の計畫を要し、資本問題なれば、先以て今日の處、英人等に委ぬるの外なし。

農業は尤も有望にして、且つ日本人に適す。各國、其土地所有權は、自由にして、又借り受くる事も自由なり。地勢上より特に大西洋沿岸の地一帶は、廣野豐千里に亘り、未墾豐穰の地にも乏しからず。就中、アルゼンチンは最たり。此國人口僅かに五六百萬を有するに過ぎずして、其貿易輸出入額十數億を以て數ふ。而も、其輸出の大部分は、農産物なりと云ふに於て如何に其盛なるかを想見するに足る。之れ等の貿易は、重もに英人によりて行はれ居り、歐州と南米との連鎖をなすものは、實に英國なりと謂ふべし。其隣國のブラジルは、從來多く珈琲の耕作に全力を注げる結果、普通耕作は見るべき發達なく、食料品は多くアルゼンチンより供給しつゝあり。故に日本人か農業を起さば最も有望なり。今回、日本移民百名、ブラジルに渡航す。將來日本人發展の素因をなす事疑なし。農業とは、重もに歐州に輸出する小麥の耕作と畜産なり。日本人にとりては此以外米作最も面白からん。彼の地の耕作法は、非常に大仕掛にして、普通我國に見る如きとは其選を異にす。從つて、Extensive culture 粗大的なるを免れずと雖も、土地の肥沃なる、其收獲は實に驚くべき夥多なるものなり。又畜産に從事する實況を見るに、多くは放牧にして、自然に繁殖するなり。是れは最も世話なくして、多くの利益を得らるゝ事業なり。されど

彼の地に渡航せんとするには、各自相當の旅費を携ふるを要す。之れ等の國々は、物價非常に高く、僅かの金は忽ち消費して、路頭に迷ふ事なきを保せず。殊に小麥の耕作に從事するにしても、白人に雇はるゝ事を以外にして、自ら經營するには。少なくとも二三萬圓の資本を要す。灌漑に乏しき地の如きは、新たに井戸を堀るの必要すらあり。其代はり、一度根據をすゆれば、二三萬位の投資は、數年ならずして、回收するを得ん。故に、團體的に渡航し、共同資本にて經營すれば宜敷からん。由來日本人には、矢張り農業最も適すると見へ、北米に於ける成功者の多くは、是れ農業を營めるものにして、堅實なる農業者は、決して排日運動の渦中にあらず。現にテキサス州に於ける其成効の例を擧ぐれば、日本人中に現に多くの白人を傭使しつゝあるもすらありて、一般村人の愛敬を受け居れり。其他の勞働者も、非常に勤勉にして、庸主の滿足を得、成績頗る良好なるが、之れ等に比較し、日本勞働者にして、鐵道工夫となれるもの、若しくは、木挽工場に働くものは、余り面白からず。之れ等が排日思想を惹き起せる原因を見るに、責又彼等にも其一部分はありと云はさるべからず。彼等は歐州移民程に土地に同化力なしと云ふは確に事實なり。彼等勞働者の日常を見るに、外國人と手を携へて散歩するものなきは、殆んど交際せざるの證なり。彼れ等は常に同胞人而巳會合して、飮酒賭博に耽り、中には隨分品性の下劣なる、殆んど見るに堪へざるものすらあり。故に幾年在住するも、其國語に通ずる事なく、從つて彼等と意思の疎通を計る事をなさゞるに基因する事も頗る多し。將來南米等に移住せんとするの我邦人は、宜しく相當品性の修養ある誠實の士にして、語學としては、西班牙の素養ある事尤も肝要なりとす。

之を要するに、南米移民及南米企業は、一定の素養あり、資本あり、又德性を備へたる人にとりては、頗る有望なり。要は、日本に於てもクヅとも見る可き人の渡航せざるに在り。如斯人種の渡航は、將來日本人の彼地に於ける發展上大なる障礙となるもなり云々。

海外消息

二月二十七日巴里より

無念庵

●謹啓　昨今の外交界は頗る平凡と相成りたるやうに相見え申し候

も、列國胸中の暗闘は寸時も止まざるものゝ如く、如何なる些事と雖も、容易に默過せられず、殊に常に萬目の視聴を集中し居る英獨兩帝か伯林に於て會見せられたるを以て、巴理の交際社會は稍々色めき渡り申し候、

●英皇帝の伯林訪問　英王エドワード陛下は英佛關係より獨逸訪問の擧に出てられたり。皇后陛下同伴外務次官其他を引連れて九日倫敦を發せられ十日獨逸着、直に伯林に入り獨帝と握手せられ候。當日は天氣快晴、伯林市民は雲霞の如くブランデンブルゲル門に集りて、茲に熱誠なる歡迎の意を表したり、英帝は獨逸語を以て市長に向ひ之に對する答辭をなされ非常の御滿足にて獨逸宮中の大祝宴に臨まれ候。獨逸皇帝は「獨逸全國民は英帝今日の訪問を以て、英獨兩國の親善なる關係を保證せられたりと信ず、朕も又同樣の確信を抱く者なり」と述べられたるが、之れ單に一場の挨拶として見るべからず、巴理にては意味ありげに云ひ囃やし居り候、其は別項に記載致すべく候

●獨佛協約の成立　モロッコ王國に關し佛獨が常に衝突を起しつゝあるは、決して英國の利益にもあらざるより、英國政府は双方を調停して摩國問題に關する協約を成立せしめ、英國の伯林訪問と同時に之を調印發表せしめたり、其骨子とも云ふべきものは、獨逸をして摩國に於ける佛國の特殊の政治的利權を承認せしめたるにあり、之れ英國の外交が多少獨逸に壓迫を加へたる結果に外ならずと巴理市民は喜び居り候之に於て久しく解けざりし摩國問題も片がつきたる譯に候。倫敦タイムスは英王の伯林訪問を以て、獨逸が世界を支配せんとする野心より生じたる英獨の反感を消散せしむべき效力あるものとし、又今回締結せられたる協約は之を以て眞に英獨關係の改善せられたる證として見るを得べし獨逸が佛國に敵愾心を抱く間は英獨の關係は良好ならざるべければなりと論ぜられ候

●獨逸皇帝と獨逸評論雜誌の戰爭論　事稍舊聞に屬したれど、英獨の外交關係に多大の影響を及ぼしたるものなるを以て、此處に之れを述べん、獨帝は例年一月二日の新年宴會に帝國の高級武官を招待して一場の演説を試みるを例とせるが、今年は演説禁止中の身なるを以て、演説の代はりに雜誌「獨逸評論」の一論文を朗讀せられ朕は之と同意見なりと云はれたり、該論文は「現在の戰爭」と題する前參謀次長シュリーフェン伯の草せられたるものにして、列國は獨墺二國を包圍せりと論ぜるものなるより、巴理の新聞は一時之が評論に紙面を埋めたり、此處に其要を摘記せん

▲將來の戰爭　「獨佛軍備の競爭は延いて列強の武力均等政策となり、今後の戰爭は實に容易ならざるものとなれり、普佛戰爭後佛は復讎の意味に於て獨逸は敵の侵入に對する意味に於て共に、一方はストラス、ブルヒトメッツとを固め、他方は上モーゼル河とマース河とに沿ふて瑞西、白耳義間の南東境に涉亘する要塞を築きたり、最良の國防策は攻擊の態度にあり、獨逸は今や敵の要塞に對して、要塞を築くのみを以て足れりとせず、別に精良なる武器を發明工夫しては之に對抗するの方針を採る

に至れり

▲獨逸にセーヌ、ロアルの沃野を略せんとする野心あることは、今や何人も信じて疑はざる處となり佛國は萬一を慮りて中立地たる瑞典方面にユラの山地を扼し、白耳義と結びてマース、サブルに沿ふ要塞を警戒せしめ、更にアントワープに不拔の堅壘を築きて、以て獨逸に備へしめたり、然のみならず伊太利も又アルプズの東西側に要塞を築きて、事あらば曩に割據したる一小地を奪返さんとし、普佛戰爭後未だ二十年ならざるに、ズイデルゼーより地中海に至るまでの間に蜒々たる萬里の長城を築き上ぐるに至りたり

▲されど侵襲の野心にして是等の障壁に遮ぎられたりとせんか、そが必然の結果として、其鋒先は他の方面に向はずんば止まざるべし、獨逸のパリに向ふ道にして閉塞せられんか、彼は轉じてモスコウに向はんか之露國が其の西境の防禦を忽にせざる所因なり露國は又獨の同盟國たる墺太利方面に向ても同樣に防禦を怠らず、我三國同盟は其西に於て歐州列强に隔絶せらるゝが如くに又東境に於ても斯の如く露國の抑制する處となれり、之に加ふるに北方には丁抹のコーヘンヘーゲンを守りて東海への門戸を扼せるあり英國は一大海軍を以て何時たりとも此海に打て出でシュレスウヰヒに迫らん勢を示し、而して伊太利我同盟國の一てありながら墺國と好からず常に機あらば復讐せんとしつゝあり

▲之れ歐州現時の狀態なり之れ恰も中央に助けなき獨墺ありて、列國之を包圍するに堅固なる要塞と頑强なる砲壘とを以てするに異ならず、政治上の大勢も又然り內なる獨墺兩國と外なる列國との間には甚深なる反感の溝渠の存在するあり、佛國の復讐的觀念は今も猶歐州政局の鍵子たり、加之佛國近來の商工業上の發展は益々獨逸をして之を融和する事を得ざらしむるものあり、露國には先天的に獨逸嫉ひなるスラブ民族の反感とラテン民族に對する同情心とあるのみならず、國債の關係上殊に露佛をして離れ難からしむるものあり、

▲以上列國相互の反感猜忌は敢て急激の爆發を見るに至らずとするも、兎に角列國の其鋒先を中央なる獨墺に向けんとする努力は絶えず連續せらるべければ　何時かは周圍連衡の敵勢がフオゲーゼンの山を超えて、マース、ニエメン、ブーグ、イソンリオの諸流を渡りて、チロルの山路を踏み破り撼天動地の大侵襲を敢てするの時來るや必せり

▲されど此危險は一見極めて大なるが如く見ゆれど、實は然らず英國は商業上の敵なれども又、之と同時に獨逸を以て最も優等なる顧客となすを以て、決して獨逸の貿易を侵さんとはせざるべく、佛國は露國の援助を借らんとするも、露國は容易に肯はざるべく、巨大なる損失を荷ふてまでも佛を助くべきや否やとの疑問は、佛國をして容易に事を擧げざらしむるべし、連衡は完備せりとの聲英國に聞ゆるも、其戰爭狀態に移るまでには、猶多くの時日を要す、暫らくは唯彼等が周圍より絶えず吾人

を威嚇するに止まるべきか

▲然れども近時に至り局面は一轉せり、墺太利は獨逸の助力を得て事をバルカン半島に起し成功を見んとす、然かも我は墺國の援助を期し得べきにあらず墺獨は互に協力一致して敵を片端より擊碎するの擧に出でずして、各自勝手に名告りを上げ、一騎打ちをなすに至りたり、敵の爲めには誠に好都合と云ふべし。即ち墺太利は南するに、獨逸は西に向ふ、而して露國は其間に立ちて、其何れの方面に向ても破壞の力を逞ふするを得べき地位に立てり。四圍の現狀斯の如くなりたるに猶彼等が干戈を取つて起たざるは猶未だ勝敗の數を豫知する事を得ざるに依る、之れ獨逸墺は斯く離れ〳〵となりたりと雖も猶强國たる事を失はざるが故なりと云々

▲右は獨帝が自己の意見と同一なりと稱して、之を演說代はりに朗讀せる論文の大要なり、獨逸官憲は此報列强に傳へられて又々物議を起しはせぬかと危み居たる由に候が爾後間もなく英王の伯林訪問の議せらるゝに至りて全く安堵せりと云ふ。巴里の近郊に退隱せる某老政治家は往訪のタン記者に向て、獨帝は口が排せらると雖も其眼を以て演說する事を得るが故に敢て不自由を感ぜざるべければ、常に其言動に關して神經を惱し居る宰相こそ誠に氣の毒の至りなりと申居られたる由に候

●墺土協約の草案　前便に於て墺土協約成立の見込充分なる事を述べ且つ其內容の要點を揭げ置きたりしが其後某紙の傳ふる處に依れば、協約草案は一月十六日土國大宰相及び墺匈國大使との間に作成せられ、左の九ヶ條より成るとの事に候

一、墺國はノイヴァホ、ハザー州に於て從來保有せる一切の權利を拋棄する事

二、土國は墺國のヘルツェ、ゴヴェナ及びボスニヤの二州合併を承認する事、

三、墺國はボスニヤの回敎徒に信仰の自由を保障し公私一切の權利を賦與する事

四、二州の回敎徒は公然の禮拜式中其宗敎上の主腦として土帝の名を呼ぶを得

五、墺國は本議定書批准後十五日內に合併領土に於いて土國財產に對する賠償金として土貨二百五十萬磅を土國に支拂ふ事

六、本議定書批准後十五日以內に土國關稅を一割一分より一割五分に增率する事、及び土國に於て或數種の專賣を新設する事に同意す

七、墺國は諸外國の郵便局設置なき地點に於て現存する墺國郵便局を撤去する事

八、墺國は土國が列國に賦與せる治外法權撤去の道理ある事を承認し且つ土國を助けて其目的を達せしむる事に努むべき事

九、本議定書批准交換は調印後二ヶ月以內に之を行ふ事

等にして、前便に申上げたるものと大差なき者に有之候。右草案は多少の修正を加へらるべきも大體に於て双方の政府共に之を承認すべしとの

事に候

●土勃兩國仲裁案、土耳古側より提出せる鐵道破害賠償額は到底勃牙利國の拂へ得べきにあらず、兩國共に動員令を下して、露國の國境に不穩の形勢を示したるより露國は種々の調停策を取りたりしが、露國は茲に列國の同意を得し、一躍三得の仲裁案を提供致し候、即ち土耳古の要求額四百八十萬磅が一千八百七十八年の露土戰爭の結果土耳古が支拂ふべき義務を有する償金未拂分と同額なるを以て、露國は土耳古に其償金を取消しやり其の代りに勃牙利をして勃牙利側の提供額三百二十八萬磅だけの露國公債に應ぜしめ、其差額百五十二萬磅は同公債の利子に轉用して之に充つると云ふ三方に都合よき仲裁案を提出せられたり、勃牙利は之に贊同の意を表したるも土耳古は熟議の上回答すべしと答へられたる由に候

▲勃牙利は露と親しんで土國を制せんとする意あるにや、近來しきりに露の歡心を買はんとしてある樣子に候が、勃牙利王フエルジナンド公同ウラジミル大公の葬儀に參列するに當りて、露國より公式に國王の待遇を受くる事となりたるに由りて、英土方面に物議を起し候。土國は土國が之を承認するまでは列國は之を承認せざるべき事を要求し、露國に抗議を申込みたり、英國も又土耳古の要求を是認し暗に露の遣口を批難するものの如く相見え申し候。露國は之に對し國王の待遇をなすも敢て獨立國と見做にあらずと事もなげに辯明せられたる由に候

●土耳古内閣の更迭　土耳古内閣は常に陸海軍大臣の事に際して斃るるの悲運に遭ふを常とす、現内閣は土耳古革命後朝野の希望を得て組織せられたるものにして、大宰相九十の老齡に達して墺土談判の難局に當り、漸く好結果を得るまでに運びたりしに、再び陸相任免の事に關して動搖を來たしたるは惜しむべき事なり、大宰相は土耳古進步期成聯合委員の一員たる陸相アリアイサパシヤを免職したる事に關し代議院の反對を買ふに至り、遂に代議院は激論の末八對百九十八の大多數を以て大宰相不信任案を決議し、宰相は遂に辭職するの止むを得ざるに至りたり、皇帝はヒルミパーシヤに内閣組織を命じ氏は直ちに新内閣を組織致し候

●英國海軍改革　英國は獨逸が强大なる海軍を興さんとすと聞き豫算外の費目を投じてドレットノート型の軍艦數隻を增加せんとすと傳ふる者ありしが、デーリー、メールの報道する處に依ればアスキス氏は本年五隻來年六隻起工の筈にて之に要する費用の爲め豫算外に三、四百萬磅の增加を見るべしと云ふ。猶ベレフオード卿は北海艦司令官の職を去りメイ大將之に代はるべく、而してメイ大將の下に百五十隻の艦艇を留く事となるべく專ら噂せられ居り候



帝都の新聞經營者（四）

黑頭巾

其一

●三助は越中より、下女は房州より、役者は名古屋より、大根は練馬より、軍人は薩長より輩出す。

●而して新聞記者と、辯護士とは、多く水戸より出づ。

●東北は、由來、記者の產地なり。陸實、內藤湖南、鳥谷部春汀、鈴木天眼、長井金風、國分靑崖の如き皆東北に屬す。而して原敬も亦嘗て新聞記者たり。

●然れども、過去の水戸は、實に新聞記者の淵叢たるの觀無くんばあらず。

●朝比奈知泉は水戸の神童、而して政治記者として、明治新聞界の巨擘也。

●彼は、所謂姦黨の首領の子也。姦黨の沒落に、居る可かりしを、寺に投じて小僧となり、危き命を取留めたる者也。

●或は言ふ、知泉と常陸山とは水戸の花也と。實に知泉は、水戸人の爲めに氣を吐きたる者也。

●水戸が多く新聞記者を出すは、知泉率先の功に依ること少しとせず。

●知泉の外、渡邊治、川村淳、川崎紫山、長澤別天あり。

●知泉の盛時、「東京日々」に割據し、石川幹明は、「時事」を經營し、水戸の後進記者、翕然として二將旗の下に集まれり。

●石川は、漢學者を父とし、久米幹文を叔父とす。又た水戸の一名家也。

●吾輩は知泉が「サンデー」に名を署するを見て、先年、櫻痴居士が暮年を「やまと」新聞に寄せたりし悲慘を聯

想す。

◉吾輩は梅花の末路を悲しむ。梅花は萬花の先を爲せども、香失せ色凋みて、猶ほ枝に「シガミ」付く。

◉梅花は水戸の花也。而して、知泉の殘年は、豈に、梅花に似たらずや。

◉此頃は、水戸公園、梅花滿開なるべし。知泉須らく「好文亭」下に立盡して、感慨を逞しくすべし。

◉「仙波湖」上、雲斷えて眞如の月冴ゆるならん。彼、今に於て、筆を焚くの勇あらざるや。

◉吾輩を以て見れば、水戸が新聞記者を輩出せしめたるは、二箇の理由ありて存す。

◉其一は、水戸人、元來、政治に熱中するの民たること是也。

◉而して水戸人は、議論を好み、理想多し。寧ろ新聞記者に適す。

◉其二は、明治維新に於ける水戸人が政治上の失敗、則ち之ならずんばあらず。

◉廿年前、國會開設の前後、水戸中學に於ける政治熱頗る昂騰す。

◉有志の學生、相會して演說會を催ふす。殆んど每日の如し。其の言ふ所は、悉く政談也。

◉紅顏の少年、卓を打つて曰く、「尊王の魁たる水戸人は、今、何の狀ぞ。筆ある者は筆、舌ある者は舌を以て、振つて政壇に出でよ」

◉此の如くにして、政權に緣遠き水戸人の青年は、先輩の蹤を追ふて、新聞記者、辯護士となれる也。

◉百萬石の加賀は、人後に落ちたるを恥ぢて、力を敎育に盡し、一時多數の學士、軍人を輩出せしめたり。

◉水戸人が記者辯護士を輩出せしめたるは、加賀人の奮發と同一の動機に出づ。

◉而して、古より政治に熱して、未だ富まざる水戸の興隆策は、今や水戸人の頭上に落來れり。

◉或は策を建つる者あり、曰く、須らく水戸を以て敎育の一大中心地となすべしと。

◉此の如きは、王陽明の所謂「起向高樓撞曉鐘」者たるを免れずと雖も、亦一策たるを失はず。

◉晩近水戸の青年、各種の方面に發展し、新聞記者漸く少からんとす。

◉現時に於ける、水戸記者の繩張りは、東京にあらずして、寧ろ「大坂毎日」に在り。

◉「大坂毎日」の内閣には、九州派と水戸派とあり。九州派の首領高木利太出てゝ「毎日電報」を經營す。

◉大坂に殘れる者には、醉夢、(渡邊)、虛吼(相島)及び幽芳(菊池)在り。「大坂毎日」の牙營は、水戸記者の手中に歸せる也。

其 二

◉昔の稻妻小僧は、イザ知らず、今の電小僧は、何の『狗鼠』ぞ。

◉稻妻といへば、厚地高天、闇黑に合圖さるゝのとき、魔神の揮ふ大刀の如く、雲を破りて閃く電光を聯想す。

◉然れども、銀座街の眞中を疾走する電車のポールが、電線に軋りて發する小閃光も、亦た稻妻たる也。

◉而して、街柳の蔭より望めば、彼の電線を溢るゝ閃光は、ホロ／＼と花の崩るゝ如くに、好色彩の一刹那を現出すること無きにあらず。

◉此の如き、小さき稻妻の爲めに、新聞の一頁を提供し、或は號外を發するに至る。

◉如何に、一時の人情に投合せんが爲とは、言へ、此の如き經營の態度に對しては、識者は慊焉たらざるを得ざるべし。

◉十年前、四夫、「松平紀義」の「お茶の水」慘殺事件起るや、「時事」は、殆んど其紙面を提供するの概ありき。

◉當時、此の如き、市井の小事を、大題と做すは、「時事」の外、殆んどあらざりし也。

◉其後、「時事」の壘を摩して、遂に其株を奪へるものは、「報知」にして、近年、「國民」の專ら紙面を賑はすの態度も亦頗る人目を惹く。

◉春は、政治季節の眞最中也。而して、犬養毅の逆襲戰が人氣を集注せしまで、旬日に渉りて、電小僧をして紙面を横領せしむ。

◉議會、新聞種を供給せざる乎。將た新聞が政壇に不忠實なるの致すところ乎。

●兎も角、かゝる狗鼠一輩が新聞の大題目となるを見れば、新聞の三面に對して、讀者が、戯作的趣味を要求するに至れるを見る可き也。

●而して、吾輩は、三百議員、自ら進んで、新聞種を供給し、政治期節の新聞らしくせしむる上に、助力するあらんことを望まざるを得ず。

●新聞の味を知れる、代議士は、今の議院には珍らしからず。

●彼等は、犬養の除名には號外を出さず、而して電小僧の就縛には號外の出るを見て、果して多少の感無きを得る乎。

其三

●「時事」を經とし、「報知」を緯とするの方針を以て、經營さるゝものは、「大坂毎日」也。

●「時事」及び「報知」の經營者は、自家の長短處を看んと欲せば、須らく「大坂毎日」を研究すべし。

●子供は、双親の短處を集成すると同じく、「大坂毎日の紙面には、「時事」「報知」の短處が、悉く映射さるゝを見るべし。

●一に曰く、針小棒大主義。二に曰く、好奇心挑發主義。

●針小棒大主義は、小題做大題もの也。ツマラヌ市事を誇大にして、以て流行題目を造り出さんとするもの。

●挑發主義は、最高比較級の形容辭と、二號活字を利用して、人の心目を刺激するもの。

●此二者を適當に使用せんとするは、頗る難事に屬す。

●此兩個の主義、稍發展すれば、必らずや、自ら新聞の品位を下落せしめずんば已まず。

●「大坂毎日」の本山彦一は慶應義塾の出身にして、「時事」に對しては遁る可らざる因緣を有す。

●「時事」の記者、出てゝ「毎日」の幹部を占む。「大阪時事」創刊の前に當て、「大阪毎日」は「時事」の支社たるの觀無くんばあらず。

●其「俗」の一字を金科玉條とするは、三田式の特徴也。

●吾輩と雖も、「俗」の一事、新聞經營の骨子たることを認む。要は俗美か、俗惡かを問ふのみ。

●日露戰役の時、ロイテル以外に、倫敦電報と稱するものあり。「時事」と「大阪毎日」とだけに掲載さる。

●蓋し此二社、連合して、倫敦の一英人に囑して通信せしめしもの。

●戰爭中は、「朝日」「毎日」の競爭殊に激烈にして、「毎日」の誤譯は、屢、「朝日」に摘發さる。

●ひとり、此の倫敦電報は、時々、驚く可き誤譯あるに係らず、「朝日」の鋭鋒を免かれ得たるは、彼に原文を知るの方法無ければ也。

●聞說、本山つねに、記者を戒飾するに、「報知」の編輯法を學ぶべきことを以てす。

●「大阪毎日」は、「報知」に比して寧ろ出藍といふべし。然れども、流石に一點辛辣の味は、「報知」に及ばず、

●而して、本山が別に、「報知」に默解するところは、「紙面外の經營」と敏活なる廣告法とに存せずんばあらざるべし。

其四

●帝都には、時の内閣を謳歌するを標榜すること、倫敦タイムスの如きものあることと無し。

●政府反對を標榜するものには、「萬朝報」あり。

●彼は、何等の主義たるを問はず、時の政府に反對す。

●「萬朝」の立場としては、此の如くならざるを得ず、而して經營の妙處も亦た此に存す。

●つねに、政府の一部の御用を勤むるものには「時事」あり。

●「時事」は外務省の御用紙也。彼は外務省の爲には、徹頭徹尾、謳歌す。

●外務の種は、最も早く、且つ最も多く「時事」に出づ。外務にて作るカンテン版の報告類、往々、逸早く、紙上に現はるゝことあり。

●「時事」は、其新聞の證劵を利用し、少からざる御用費を、つねに外務より得つゝあり。

●彼は、其の發行高の頗る少きに係らず、多數の社員を畜へ、尨大なる組織を維持し得る所以のもの、財源實に此に在り。

●而して、「時事」は他の各省に向つては、必ずしも御

用を勸めず。つねに『魚心あれば水心』の態度を執る。
◉彼が輓近、「天理敎」を題目として內務に肉薄するを見よ。
◉外務も內務も皆時の政府也。而して「時事」は一方に笑ひ、一方に睥む。
◉彼は、政府の親しみつゝ「コワモテ」もすることを期す。而して、多くの場合に於て、政府に對して論議の自由を有す。
◉彼は外務の御用紙たるに止まるが故に、世間よりは、往々、御用紙と視做されず。
◉而して彼自からも亦た、冷然として、「國民」などが、政府の褌を擔つぐを笑ふ。其實、五十步百步也。
◉此の如くにして、「時事」は編輯の頗る蕪雜なるに係らず、未だ人後に落ちず。
◉彼は、依然として間口を擴張し、大新聞の態度を維持しつゝあり。
◉吾輩は、此に於て、「時事」が經營の手段、あなどる可らざるものあるを見る也。

其五

◉新聞經營者にして、趣味に大人と小兒との區別あることを識らずんば亦危ふし。
◉新聞は、趣味を顧客とす。讀者の範圍は、其の新聞が代表する趣味に伴ふ。
◉此點より見れば、新聞の勢力は、則ち趣味の勢力なりと謂ふべし。
◉都新聞は其名の如く、都に賣れる新聞にして、曾て田舍に賣れず。
◉東京を離れて都新聞を見ることあらば、田舍の宿屋に、淺草海苔を味ふの感あるべし。
◉都新聞は、均一制の電車と同じく、東京の專有物也。
◉都新聞の趣味は、下町の趣味也。田舍に下町の趣味無き也。
◉吾輩を以て見れば、今の世に、「小說」を以て新聞を賣らんとするは、一種の「時勢後れ」たるを失はざるべし。

●「小說」を以て賣らんよりは、小說家を聘して三面を書かしむるに若かず。

●小說は如何に巧妙なるものと雖も、大多數の忙がしき俗人に投ずる譯にゆかず。

●女學生上りの細君は、小說を愛讀するあらんとも、忙がしきお亭主は、却て手取早き講談物を擇ぶ。

●講談が漸々發展して、新聞小說を壓迫するに至れるは大勢也。

●此間の消息に通ぜる者は、「萬朝」と「報知」との經營者也と、吾輩は思ふ。

●殊に「萬朝」の如きは、記事に自ら小說あり。其の實事に屬するを以て、小說に比すれば興味更に津々として、一層深刻なる感興を、能く讀者に與ふ。

●此二新聞は、小說を載せざるにあらず。然れども、其の經營の妙は、記事を小說化するの手腕に在り。

●其の面白ろき續き物の記事に至つては、實に讀者をして趣味を感ずるのみならず、又併せて、其の精探を感嘆せしむ。

●此種の經營に在ては、精探は其の生命ならずんばあらず。

●「萬朝」は、終始、如上の方針を一貫して、今日の成功を來たせり。

●然れども精探は莫大の費用を要す。故に精探費を惜むの經營者は、終生、此佳境に達する能はず。

●金は猶ほ擲つを得べし。精探の才は眞に得難し。探りて探られず、探らずして自ら鍵を得る。精探の器也。尠い哉、斯種の器。

其　六

●雜誌に、冒險世界と、探檢世界と在り、少年を顧客とす。

●吾輩は、此種の雜誌の廣告を讀む每に、冒檢、探檢の趣味のみを以て雜誌を經營するの困難なるを想ふ。

●此の二雜誌は、今や盛んに運動世界の領域を侵しつゝあり。野球は勇壯と雖も、冒險にも探檢にもあらず。運動也、遊戲也。

●古來冒險譚は、型の種類少なく、隨つて少數の傑作

のみ行はれて、尋常一様の探檢譚などいふものは、多ければ多きほど鼻につくもの也。

●黑岩の機敏なる、率先して探偵小説を出し、次いで冒險譚を出だし、「巖窟王」の如き、久しく紙面を飾る。

●今に至つては、彼は力を小説的記事に專らにして、又た探偵、冒險を標榜せず。

●然るに、今頃に至つて、探險、冒險を以て、讀者を魅せんとするは、他の後塵を望んで奔る者に非ずして何ぞや。

●吾輩は思ふ、「讀賣」の探檢記の如きも、冬の眞中に、樺太に旅行せずとも、寧ろ南洋に高飛せしめば、或は探檢記として、價値あるものを造り得しならん。

●南洋遺利多し。而して、日本人が歐米人と、生産的探檢の接觸點は、まさに南洋に在るべし。

●雪中、雪國にゆき、天地一面の雪を看て歸る。何等の得る所ぞ。探檢とは「極端なる徒勞」の義に非る也。

●經營者は、徒らに算盤珠を彈くを以て能事と爲す可らず。必らずや、財を善用するの識力無かる可らず。

其七

●「萬朝報」が重寳の二字、「報知」が報導機敏の四字を捕へ得たるは、其の成功の由來也。

●此の二字と、四字とは、實に社會的に、尤も勢力ある趣味たらずんばあらず。

●「萬朝」の紙面は、人をして、直ちに重寳の二字を聯想せしむべし。

●而して「報知」の無線電信は、輓近、報導機關の尤も機敏なるものたるを失はず。

●從來は、船舶の横濱に入るもの、望樓より認めて漸く一二時間前に、之を報ずるに過ぎず。

●「報知」の夕刊は則ち千五百哩の冲にある船舶の消息を傳ふ。此の擧恐らくは、新聞の通信法に一新時期を劃するならん。

●「報知」の無線電信通信法は、恐らくは日本人よりも、米國人に、より多くの感動を與ふるならん。

●此の通信法は、日本船にのみ在りて、米國船にあら

ざる也。

●輓近、亞米利加航路に於て、日本船は、着々改善の途に就き、つねに先鞭を着けて、米國船を凌駕しつゝあり。海上の日本人は、米國人に勝ちつゝあり。

●米國人中の意氣地無き者は、黄禍は米大陸のみならず、太平洋上に蔓延しつゝある如くに感じて、今更に狼狽する者ある也。

●而して「報知」の無線電信は、青天霹靂の感を此輩に起さしめずんばあらざるべし。

●「報知」は、文學青年などに取りては、沒趣味と想ふなるべし。

●「報知」が沒趣味と見ふる處に、大人の趣味を捕へ得て、優勢なるもの存する也。

●而して吾輩は、是等の新聞に對する毎に、一種、「經營の趣味」を感ぜずんばあらざる也。

其八

●日本橋西の交番の側に、一本の梅あり。人に、珍らしきものに思はる。

●彼の梅や、風塵にやつれつゝ、年々、寂しく開く。

●日本橋通りに、店の前の、尺許りの空地に、瘠せたる松を左右に植ゑし家在りしが、市區改正の爲に取拂はれて、其處を忘れたり。

●日本橋の下に繋げる小舟の中にも、盆栽を蓄ふる者あり。

●吾輩は思ふ、新聞の忙がしき紙面の中にも、何卒、これ程の閑天地あれかしと。

●六十日、八十日と打續く夏休みに、休みが左ほど樂しきものにあらず。

●忙がしきが中の鼻唄。鳥渡、立ち掛けの煙草一服こそ、嬉しきものなれ。

●吾輩は、喫煙を已めたれども、忙中の閑味は、今も忘れず。

●如何に忙がしき人も、概ね新聞の閑文字を拾ひ讀みせざるはあらず。

●閑文字面白からざれば、新聞は、忙がしき人に愛せられず。

●文章の力は、輕々、力を用ゐざるが如き處に現はる。新聞の閑文字は、文章家を要する處也。

●「日本」の不問語、「毎日」の焉哉乎也、「國民」の閑話休題、「讀賣」の隣の噂。「二六」の牛頭馬頭、「萬朝」の机の塵等、いづれも特色を帶ぶ。

●牛頭馬頭は一時頗る振ひ、福田和五郎の舞臺と聞きしが、今や彼、經營に專らにして、筆者かはれり。

●「萬朝」は机の塵に力瘤を入るゝと見ゆ。吾輩は頗る此種の筆致を喜ぶ。

●「萬朝」が、近時、三面に設けたる「はなしの種」も亦振ふと謂ふべし。

●兎も角も、此種の閑文字は專任者を置くを要す。而して專任者は、案外に閑ならざること、恰も團扇賣が汗を流すと同趣なるべし。

其九

●蘇峯の「國民」社中には、從來、知名の士、つねに少し。然れども、紙面には生氣あり。

●「國民」社中、朝より晩まで、縱横に活動するものは蘇峯也。

●彼は訪問し、執筆し、且つ經營す。彼は日々、八人藝を演じつゝあり。

●蘇峯は、記者の養成に力を盡す。彼は毎週一回位、茶話會を其宅に開きて、交る〴〵記者を集め、雜談の間に、記者の趣味と才幹とを啓發せんことを力む。

●彼の經營は、無名の士を集めて、有名の働きを爲さしむるにあり。

●故に、彼の社には、大將と精兵とあるを理想とす。將校は無用也、而して、大將は一日も其の營を去る可らず。

●蘇峯は、能く青年の趣味を解し、青年を引くの力を有す。

●然れど、蘇峯は自から用ゆるの人也、故に成名の士は、彼の下に安んぜず。

●蘇峯は折角、養成せる記者にも、其の名を成すの頃には、皆背き去らる。

●彼は、つねに經營を樂みつゝ、而して不斷に、子飼

の弟子に離れつゝあり。

●蘇峯は、「玉三」に於ける、道春か妻と同じく、「子て子にあらぬ」杜鵑の雛を養育しつゝあるもの也。

其十

●名物の老舗に煤けたる家多きは、玩味すべき點ならずんばあらず。

●縄暖簾で賣出したる店は、何處までも縄暖簾ならざる可らず。

●吾輩は、京橋畔に、銀座を壓する、「讀賣」の新築に對して多少の杞憂を抱かざる能はず。

●「讀賣」は暖簾古くして、其の文雅に、古くさく、地味なるところを呼物としたるもの也。

●其建築の、古めかしきところに、其の内容と照應して、一種の妙味あるを覺ふ。

●名物の飲食店が新築して、却て流行の衰を招くは、顧客が、入り悪くなるのみならず、新築費を其商品に算入して、速かに資本を回収せんことを求むれば也。

●若し「讀賣」にして、這般の駈引を免かれざるに於ては、吾輩は、其の前途に對して頗る杞憂を抱く者也。

●「アセリ」氣味に見らるゝこと、暖簾の精彩を減却するの、最悪なる事項也。

●吾輩は、彼の新たらしき時計臺を望んで、彼「讀賣」が、飽迄も、綽然餘裕ある舊舗の態度を執るあらんことを期待す。

●吾輩嘗て、彼社に籍を寄する者、「却望並州是故郷」の感無くんばあらざる也。

テュリンゲン二度の旅

文學博士 姉崎正治

三十四年五月廿五日。(ベルリン)滌暑 吉田君と共に鹿苑散歩。雨來り雷至る。中食して歸りテユリンゲン行きを決す。

春の旅ゆきてゲーテの跡訪はん。

いく年か夢に忍びしイルメナウ
　　あすは行くとて魂は飛びけり。

廿六日。ベルソンよりライプチヒに行く。

廿七日。ライプチヒよりアイゼナハに向ふ。途中ザールの谷山とハ緑美はし。山の上に見ゆるナウンブルヒのポルタ學校(Schule Pforta)はドイセン先生が幼時ニーチエと共に學びし處なり。午後アイゼナハの山に上る。山頂の古城を目當てに驢馬に跨つて行く。二三百年前に、武士が馬にてこの道を上下せし古を忍ぶ。城内には、ルーテルが一年籠居して聖書を翻譯せし室そのまゝにあり。壁に殘れるインキの跡は人々が削りては持ち行く。ルーテル以來幾度新陳代謝せしや。城内の廣間にはこの城にて行はれしといふ音樂競技(Sängerkrieg)の畫あり。その窓よりタンホイゼルが迷ひ込みしといふ淫女窟 Venusberg の山見ゆ。

廿八日。アイゼナハを出てヲーペンスタイン Liebenstein といふ田舎の温泉場にて下車。こゝはテユリンゲンの山の南側に當る。それより徒歩グリコフブルンネン Glückbrunnen の村洞石 Hohle Stein に對し緑樹の影に休らいて田舎の食事をす。それより木影少き山路暑く、アルテンシタインの庭、清き泉の迸る邊に休らいて蘇生の思ひす。倚山を上れば山中の岐路、ルーテルが捕はれてアイゼナハに伴はれし所あり。夕暮前ルーラ Ruhla の村に着き、山の崖に沿ひしホテルに泊す。谷間の町長く夕暮の濛氣の中に家々の燈火閃く。日本ならば蚊遣り火焚く夏の夕暮に似たり。

　　棒たかきルーラの谷に月清し

廿九日。ルーラより汽車清心泉 Reinhardsbrunn の庭に遊ぶ。公爵の離宮にて池のあたり老杉影暗く、森には閑古鳥鳴き、湖上には白鳥浮ぶ。池邊に食事すれば、涼風爽かに、靜かなる山邊に汽車の鈴ひゞく。フリドリヒロダの避暑地に森山の眺めよく、汽車にてゲオルゲンタール Georgenthal に着く。途上

　　春風や蝶を友にの獨り旅。

午後になりてむし暑く、北の方平原を見れば黒雲覆り電光見ゆ。汽車をかへて夕暮前久戀のイルメナウ

Ilmenau に着く。イルムの谷河茂れる山々の間に消し。

ゲーテが古跡の夕暮見んとて山に上る。日は既に西山に沒して、雨後の緑鮮かに、夕暮れの山々淡くかすむ。ゲーテが老後の閑居を營みし小屋、一度は燒けたれど、その後身の小屋古の面影を止む。有爲多辛なる八十年の一生を後に顧みて、茲に晩年の平和を山間の孤屋に味ひし詩聖の跡。

Über allen Gipfeln
Ist Ruh;
In allen Wipfern
Spürest du
Kaum einen Hanch;
Die Vögelein Schueigen
Im Walde.
Warte nur, balde
Ruhst du auch.

山々の峯を亘りて
休みあり
木々の梢に
風死して
ねぐらに休らふ諸鳥の
靜まりはてて聲もなし。
まてしばし
なも亦休らう時ぞ來ん。

思へば我れも亦この晩年の平和を歌ひ得べきや。思ひつゞけて小屋の邊にたゞずめば、西の山端に殘ん光りもうすらぎ、木の下影に夜は來ぬ。

森くらし、詩聖の跡もいざさらば。

町に歸れば長き夏の日もくれはてて、家々の燈火緑陰に漏る。宿は師子屋 Zum Löwen とて、詩聖がその最後の延生日に二孫を伴ひて宿し、そこにてかの山の上の家に閑居の用意整へし處なり。

卅一日。イルメナウの山傳ひ、苔むしたる木の下路をたどる。雲こめてむし暑し。

ほとゝぎす鳴くや木蔭の物思ひ
濃くなりまさる五月雨のそら。

午後はイルムの河の北、燕石 Schwalbenstein の山に上る。こゝはゲーテがそのイフヰゲニエの初稿を終りし地とて、岩にその最後の文、イフヰゲニエの別れの辭を刻す。雷雨來る。

詩人のあと訪はん山路の雨やどり
ムーザ來るらし雷なりわたる。

夕方汽車にてイルメナウを去りてワイマルに着く。

六月一日。シルレルの舊棲に、その最後の病床昔のまゝに殘れるを見、ゲーテの家にてはその寢床、最後の書などの外彼れが集めし岩石の蒐集物理實驗の裝置など興多し。ゲーテが興せし大公の圖書館には當時ワイマルが文學美術の一中心を作りし形見多く、アポロに擬へしゲーテの石像誠に神の如く、彼れが寢衣に用ひし日本の緞子の紋附も我等には興あり。その頃に植ゑつけしといふ公孫樹は天をつくばかりに茂りて、圖書館の一隅を蔽ふ。その邊の窓よりはシタイン夫人の舊棲も見ゆ。この才女がゲーテを刺激し慰撫せし事幾何ぞ。當時彼れがこの窓より夫人の家を望みては如何の思ひを蓄へしか。ゲーテとシルレルとの棺が寺の穴倉の中に相並びて月桂の花環に蔽はるるも見つ、劇場の前二人の相携ふる姿には、昔の盛時を忍びつ。

午後はチーフルトTiefurtの離宮に行く。イルムの河に沿ひて一叢の樹林、その間に靑芝草の圃。是れゲーテがその大公を慰めん爲め屢ば園生の芝居を興行せし處なり。田舍路をつたひ、町の北小山の上にヘルデルが好んで憩ひし地に行く。ワイマルの市街眼下にあり。丘陵起伏の間、イルムの流に沿ひし小都會。山河の奇あるにあらず。天然の雄なるにあらず、又政權歷史の大なるものあるにもあらず、只人この地の名を不滅にし、遠來の旅人に無窮の感を與ふ。大なるものは人なりけり。

夕方よりゲーテが經營せし公園に遊ぶ。その園の田舍家は彼れが花を養ひし所、木蔭の路、川の邊の茶亭、皆彼れが沈思低徊の跡なり。夜晴うして月は木梢に出てぬ。かすみし空に月光淡く、風死し、聲息むて、夢中の風景に似たり。

そのむかし語るや月の影淡し
　樺の若葉に霧かすかにて。
人影のたえし園生に影おぼろ
　古の人のたまや待たまし。
この園にルーナと語りしその人の
　逝きての後も月はてらせり。

二日。博物館など見て後、ワイマルの別れを惜みてラ

イプチヒに去る。夕方の急行車にてベルリンに歸る。きのふはワイマルの森の梢に見し月を、今日はベルリン萬家の屋根の上に見る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

四十一年六月廿四日。汽車がチユリンゲンにかゝり、ナウンブルヒの山々を見て、急にテユリンゲンの山氣が吸ひたくなつて、エルフルトに汽車を乘りかへ、イルメナウに向つた。段々に山を上り森に入り、空氣は淸く涼しく、木々の若緑が美はしい。延び〱た野山の眺め、森の木蔭の百姓家、その下を流れる小川の鴨あひる。平和のテユリンゲン、どこの國に行つて見ても田舍には同じ和樂と平和がある。

イルメナウに着いたのは五時。七年前と同じ宿に車を下りて、部屋を求め、ゲーテの室を得た。行李を下して四壁の畫を見、何となくゲーテを訪問にても來た氣がする。五時の茶を終つて、南の方シヨルテの河畔に沿ふて木の下道を散歩した。日はまだ高いが、木の下の小暗がりに吹く風が冷かに、路傍の草花もやさしく、草原に刈り入れた牧草が香る。この山林もゲーテの經營に成つた跡、詩人としての以外に、ゲーテの恩を感謝する。

田舍の小都會の夜は靜かに、前にもきいた向ひの時計臺が時を告げる音のみ時々音づれる。ゲーテの詩に、時の鐘の四半時を一つ〱數へたとあるのを思ひ出す。

廿五日。朝はゆつくりして正午前から林の間をたどつて山を上る。松や樅の茂みに松かさや松葉の香りが高く、あちらこちらの梢には鳥が音づれる。林樹の間から處々に見はらす山々の茂み、樹影を行けば風が涼しく、日光は木の間に黄金色の光りを注ぎ、山一面に薄い青色のもやがたなびく。あちらに花を摘み、こちらに腰をかけて、山の一番高い處キツケルハーンに着いたのは三時。一杯のビールに渇を醫して休めば風が涼しすぎる。見晴らしの塔から見れば、チユリンゲン

の山々は目の下、木立の波を作る山々のさき、北方の平原は霞んで先きも見えない。

ゲーテの小屋に行く。かの大詩人が八十餘年の一生をうしろに見返つて、暫くこの山中の一つ家に住み、晩年の感慨を詩に詠じた跡。「山々の頂に休みあり、木々の梢にはそよ吹く風もなし」といつてこの靜閑の山中の夕べを迎へ、自分の一生の最後も亦この樣に靜かで平和であらうと沈思した跡。この前には夕方にこゝに來て、ゲーテの詠詩そのまゝの景を見た。今日は日中ではあるが、山中の靜けさは昔に異ならぬ。ゲーテの樣な多事有爲の一生を送り、榮華圓滿の生活をした人でも、その晩年には山中に孤獨の日を送つて無爲寂靜の平和を味つた。誰れも一生の終にはこうあるべきであるが、世の中に最後の時に過去の一生を顧みて、全くの平和寂靜を味ひうる人が幾人あるか。

それから廿七日まで毎日快晴で、空氣は淸く、山は靑い。或る時にはイルムの河畔に下りて牧場の間を逍遙して草花を摘み、或る時は燕石の森を縱橫に散歩して木陰に休む。朝早くに森に行けば、こもつた木の間の處々に日光がさして、霧に似た樣なもやが青白く光る。日の暮れに並木の間を行くと日やけの空が木々の梢の上に澄み亙つて、近い山は緑に遠い山は段々に靑黑くなる。日中の日の照りつけた時でも暑い程でなく、夕暮の涼風がそよ吹いて、頰を拂ふ時には眞に天然の胸から天眞の呼吸を得る心地がする。林も淸く、水も澄んだ平和のイルメナウに過した三日の日は忘れ難い紀念とならう。

廿八日。早朝に汽車でイルメナウを去つた。殘り惜しいが、旅の空のいつまでも優遊を許さない。イルメナウの山々も遠くなる、ブラウエ邊の山を過ぎて路は平野に出る。エルフルトやベブラなどで乘換への待合はせをしては汽車は西に向ふ。一天曇りのない心地よい夏の空に山林の間をすぎる。平野には麥がたけ、山には深碧の木々がのどかに連る。エストフアミレンの山々の間を過ぎてラインの河端近くなつたのは九時前。日が茫漠たる西の空に入りかけて、煙や煤に曇つ

た穴が深紅の色に染まる。その間にケルンの大寺の塔が魏然として聳える。ケルンに着いたのは丁度燈火のつく時。

文相を論ず

向軍治

本誌で大に小松原文相を論じて見たいと云ふので、私にも何か一文との事。實は餘り多忙なので辭退したけれども、是非との御請求、終に餘白を借りる事にした。私が小松原氏に知を辱うしたのは、二十餘年前の書生の時の事で、世間の事情には暗く、當時小松原氏の地位が、天下に何の位置を當して居たか、善く知らなかつた。當時の感想で只今迄殘つて居るのは、唯氏が温厚の君子であると思つた一事丈である。爾來私は政界の事には全く無頓着で、一意專心學校の事許りに力を盡して居たから、小松原氏の門にも伺候せず、氏が靜岡に巨二千石の聞あつた時、一寸訪問した丈で、復久しく謦咳に接するの榮を得なかつた。文相とならるゝに及んで始て事を談じたと云ふ關係であるから、私は氏に關しては多く言ふべき所を知らない。唯文相としての氏の遣口に關しては大に遺憾に思ふ節があるから、此點丈を論じて見たい。棺を蓋うて後定まると云ふ言があるが、棺を蓋はなくても、小松原氏の地方行政官としての手腕に關しては、世已に定論がある。此點に關しては、覆面子が略言ひ盡して居られる。覆面子は氏を内からも外からも知り拔いて、而も慧眼を有つて居る人であるから、其の評言の確實なるは私が保證して置く。文相としての氏は日猶淺い事であるから、今日迄の成績を以て氏を斷ぜんとするは、甚だ早計である。殆ど成績として擧げて言ふべき者は無い。是れ他なし、氏は三年飛ばず鳴かざるのである。其の天を衝き人を驚かすは今後に在る。今が三年の間であると思へば、氏に向つて囑望の余、一言を呈するは、決して無益の事であるまいと思ふ。

小松原氏が多年一日の如くに地方自治の業を完成せんことを期して盡力せらるゝは、實に感心すべき價値がある。此確信は終生氏の腦裡を去らないことであらうと思ふが、此確信を今日の如くに自分の人格の一方面となす迄には、氏は容易ならぬ研究を積んだのである。一度此確信が出來てからは、殆ど寢食を忘れて之が實行に力を盡した。是が氏が靜岡に於て埼玉に於て大に成功したる所以である。併し縣知事としての小松原氏を論ずる者の、必ず觀落すべからざる一事實は、覆面子も言ひ及ぼされぬ樣であるから、此處に特筆大書して置きたいと思ふ。外では無い内助の功である。時の古今を問はず地の東西を論ぜず、凡そ活動的男子ある裏面には、必ず非凡の女子がある。幾ら小松原氏の溫厚を以てしても、夫人の内助否外助なくしては、到底斯の如く人心を收攬し得らるゝものではない。幾ら小松原氏の果斷を以てしても、夫人の鼓舞なくして

は彼の殖産事業の斷行は出來ない。小松原氏の事業の半分は夫人の功であると斷言することを私は憚らない。「お前は學問が無くて困るな」「學問を致しませう」、「お前は藝が無くて困るな」「藝を覺えませう」とは善く世人が小松原夫人を評するに用ふる語であるが、實に評して得て妙なりと謂はざるを得ない。夫人は獨乙から歸られた後久しく獨乙語を忘れぬためとて態々教師を聘して居られた。夫の爲の妻と云ふことを夫人の如く善く呑込んで居る者は現今少からう。私が知事を靜岡に訪問した時に、恰も外出中、夫人は强いて私を見て、良人の歸られる迄とて、滔々二時間、靜岡一圓殖產興業の有樣を眼に視る如く手に執る如くに話して聞かされて、流石饒舌の私も唯「ハイ」と「成程」の外は無かつた。實に絕世の女丈夫よなと感じた事、今に得忘れぬ。故に縣知事としては小松原氏は失敗せんと欲するも得ざるのである。殊ら小松原自身に地方自治に關して手腕ありとするも、此女丈夫の內より助けらるゝなくては、迚も斯く迄に成功するものではない。氏が文部の席を占めて以來、未だ大なる成功あらず、却て世間一面の攻撃を受くることあるは、或は夫人に未だ文部事業の經綸あらざるが一原因となつて居るのではあるまいか。抑も文部事業は夫人の容喙を容さゞるか、若し然らんには文部は小松原氏が驥足を伸ばすに適當なる地位でないのではあるまいか。

　地方治自の事に關しては氏之を獨乙に學びたり、文部の事に關しては氏未だ學ぶ所あらず。氏が縣に知たるや、必ず大に力を殖產興業に盡す。蓋し謂へらく是れ自治の根本なりと。他府縣の長を採りて、其縣の短を補ひ、改良之れ事としたのである。氏の文部の事[illegible]して同じ筆法であらうか。凡そ事は勉むるに成り荒むに敗る。文字の事一見專門の智識を要せざるに似たり。是を以て人之を輕んず。氏或は此過に陷りたるにはあらざるか。然れども氏は誠心誠意の人、根本を窮めざれば止まらざるの人。其の文部事業に於て現今晝夜鋭意研究に從事せる、疑を容れず。近き將來に於て、必ず大に觀るに足るべきの施政あらんか。然れども漢の高祖も策を帷幄の中に運らすの將を要したり。氏に果して蕭何あるか。豎子に誤られたる英雄、古來少くない。私は氏の爲に之を危む。

　世人或は氏を以て舊弊家頑固黨となす、大なる誤解である。氏は獨乙から歸るや、基督敎に熱中し、遂に洗禮を受けた人である。如何に周圍の感化に動かされ易い人であるかは、此一事でも分る。當時我國に於ては始て私の先生なるドクトル、スピンネル氏が、合理的にして而も敬虔的なる基督敎を、熱烈にして而も冷靜なる頭腦を以て說いた。朝野之に動かされたのである。小松原氏は決して化すべからざる人ではない。唯之を動かす丈の人と力とが必要である。哀い哉今其人がなく、其力がない。氏に接近する群小輩は皆氏を迷はすに過ぎない。又氏の周圍に頑迷固陋の氣が纒うて居る。氏は因緣上之を脫することが出來ない。然れども氏は渾厚の中に圭角を備へた人である。說くに理を以てすれば、其の圭角に導火線を通ずること、決して困難ではない。頑迷固陋の生命も亦決して永久に持續するものではない。氏を此處より救ふ人あらば、國に貢

の一身の爲になるのみでない、實に天下國家の爲である。不幸にして此導火線を點ずる決死の士がない。無いのではない、未だ現はれざるのである。

氏が就職後間もなく假名遣復舊を企てたるは、實に千慮の一失である。蕭何なかりし高祖も亦斯の如くなりしなり。斷は即ち賞すべし、其事の誤れるを如何せん。前内閣の爲したる所、必ずしも時弊に適したる者ならざりしならん。然れども世界進歩の發達は、大に言語文字の改良を促して居る。前内閣が未だ研究を盡さゞりし事は事實であるが、方針に於ては動かすべからざる所があるのである。氏は之を看破し能はざる程鈍ではない。其の跡を追うて、短を棄て長を採る方が、順路であつて、事に害がない。遽に異を立てる必用はないのである。爲にする所ありての所爲なりとの評、中らずと雖ども遠からざるべし。前文部の施政攻擊して可なる者、小學教員の帳簿攻、中學教員の資格攻、私立學校の壓倒策、學校系統問題等枚擧に暇ない程である。是等は文相之を知らざるに非ず。大に爲すあらんとして今猶に研究中である。文字の事元來研究を値する大問題。然るに氏が輕々しく之を斷じたるは、要するに文字の事が一見俗人に分り易き故である。

氏は勤儉主義の人である。地方自治に一生懸命な人としては當然の事である。然れども今の世を故なくして浮華に流れたりと觀察するが、根本的誤謬である。勤儉にも積極的消極的との別あることを知られねばならぬ。氏の地方施政は皆積極的勤儉であつた。然るに文相としての口吻は消極的勤儉主義である。戒飭の訓令を發した前議を察するに、矢張消極的勤儉主義から割出した者で、女子に對する考が女大學的である。何故に女子敎育の目下の急務なることを言はざる。男生の墮落する原因は、男生にのみ伏在するのではない。下等の思想の玩具となつて居る女子を根本的に改良して、自ら品位を貴び、自尊自重する樣にならしめねば、男生の腐敗は防げない。女生が滔々として玩具となることを甘んずると云ふ有樣である間は、男生は墮落せざらんと欲するも得ず。根本的の治療の必用なるもの、豈獨り地方自治のみならんや。未だ氏に此點に關する大經綸ありと聞かず、以て憾むべしと爲す。然りと雖ども小松原氏出てゝ以來、伴食大臣の名漸く他に轉ぜんとするの傾あり、嗚呼小松原氏も亦人傑なる哉。

寄柳有美氏來簡

△△△△△君貴下

貴下は機敏也。予が秋田魁新報主催の實業視察團に加り去る再昨十八日京都より品川停車場に下車するや直をに囚えて廿一日迄に四月號の爲に一文を草すべき囑せらる。予は當時之を拜諾せしも着京後日々夜々一行の案内者となりて江戸見物に東奔西走し今に至るも遂に能はず。依て五月號には必ず『天の羽衣論』なる一文を稿すべきを玆に誓ひて約に反ける不德を拜謝す。

三月二十一日午後三時

本郷にて　有美生

現代人物評論（十五）

犬養木堂論

△犬養毅氏

三宅雄二郎

犬養氏の樣な場合は珍しくない、史家レッキーが、成功と題した所にいふには、才氣煥發して氣力の勝れたものが、一生の競爭に於て能力の負に劣れるものに負けることがある、實に僅の事よりして困難を惹起すのである、談話はきび〱して、愉快で人をして樂んで聽かしむるも、變に角が立つて、即ちポインテッド・サアカズムで毒を殘して敵を作る、して樣々の誤解を招き、折角善い考でも惡く思はれてしまう、實に適當な所に適當な人に向つて適當な事をいふ許りて濟むのでない、見えぬ所、氣付かぬ所に色々な事がある、と。

此類の事は大なり小なり屢次見當る所であるが、犬養氏はその重なるものゝ一つに居る。一種得難き人物であるは人多く之を認むる、事を見るに鋭敏で、決斷に早く、して少しも鄙吝がましい所がない、僅に人を引付ける力がある、が引付けると共に跳ね付け、ひどく恨を買ふことがある、差引どちらが多いかわからぬ。それは殆んど無意識でするのであろう、己れ自らは洒落の積りであるかも知れぬ、が言はなくて宜い事を言つて人を腹立たせる病がある、以前に比べれば幾分違つたとも云はれるが、未だに時とするとその病が大

に發作する、それて何れ丈の誤解を招いて居るか知れぬ。政治家としての能力が或る程度まて揃ふて居ながら或る部分の欠けて居る爲に凡てを打毀す事が稀てない、事によるとそれて奇功を奏する事もあるが、損する方が多からう。如何にも見た所から策士らしい、言語擧動皆左樣てある、偶ま主義といふが如きを口にすれば策の爲としか解せられぬ、犬養が主義を言ひしとて笑はれる程てある。が此邊の事は早くより世に知れて居ながら今ても十分に知れて居らぬ。尾崎氏と共に運動して居た頃既に人の怪んだのてある、尾崎氏は立憲政治と言つても、實は如何樣にてもなるのてあるといふが、犬養氏は立憲政治として有るまじき事として執つて動かぬ。尾崎氏こそ主義を守り相てあつて、實は左樣てなく、犬養氏は人一倍融通をきかす樣てあつて、案外固く守る所がある、是れ内實と外觀との違ふ所てあつて、犬養氏の爾か見られるのは損てあるか得てあるか、兎に角策士と見られて居ながら自ら變通するを欲せざる所あるのは、周圍の人に於て往々意外に感ずる所てある。衝突も左る邊よりして起る事もある、元と何等かの間違よりして策の爲にのみ行動する人と見られるに至つたのてある。犬養氏の何ものてあるかは猶ほ疑問たるを免れぬ、が容貌より言へば何となく故副島伯に似て居る、そして性格及び嗜好も似て居るらしい、漢學癖があつて而も絶えて腐儒の跡形が無い、期する所は王者の佐にあるとても言ふべきてあらう、列國の關係を考ふるにも春秋戰國の如くする、それて何れ丈か徹底して居る所がある、言はゞ何程か大體に於て得て居るのてあらう。伯も策を好んだ、策士と稱して差支ない事もあつた、でも曾て策士などいはれた事がない、何時ても君子人と思はれた、是れ正に犬養氏と違ふ所てあるが、面相及び身體の輪廓に於て略ぼ同く、そして何處となく伯の悠揚迫らざる所あるのはそれだけ伯の方が優つて居たのか知れぬ。併し畢竟するに同じ型の人物てある。天禀及び抱負が尋常てない。歐米の政治家よりも支那の賢宰相にあやかつて居る。從つて普通の政客より窺ひ難く、企て及び難きところ

無しとせぬ。が伯は志を得たとは言へぬが、兎に角相應の位置に進むを得た。犬養氏は到底伯の如くなり得ぬ様である。所謂立身出世といふ事に心を煩はす程の小器でも無からうが、想ふ程活動の出來ぬのは或る邊に癈疾が有るからである、それがどうも治らぬ、口だけなら或は治るであらう、が何處かに善い處を打毀してしまう苦がい分子が伏在して居る、普通に毛嫌といふよりも一層念の入つたものである、之を取除けば蒼海翁の如く見ゆることとなるであらうか。犬養氏と副島伯と大なる差がある様であつて、實は甚だ近いのである、大なる差があると見ゆるのは僅の所で如何にしても一致せぬからである、即ち毫厘の差千里を致す所である。犬養氏は老成して能く圓熟するか、或は圓熟して折角の長所をも失ひはせぬか、又は圓熟せずして却て益々圭角を現し圭角だらけになるか。兎角の評はあるが、何に致せ今の政界で屈指すべき人物である、尚ほ將來の行動に注意する價値がある。

△渭南の獒犬養毅

茜陵隱士

犬養の腦髓を人相學者に見せると、各腦が皆分離して統一を缺いて居る。智腦も發達し、情腦も發達し、又識腦も發達して居るが、其發達は極めて不均衡になつて居る。實際に徴して見ると、犬養の人となりは頭腦明晰で、總ての事物を腦裏に映寫させるのが非常に敏速である。觀察も極めて精透だ。寧ろ精透過ぎて入らんことまでも見える。それで今まで政黨員に對する仕打々見ても、一度あの奴は惡いと犬養の腦髓に映寫するが最後、其人は飽くまでも惡く見える。之を迫害する。之を攻擊する。終に居堪らなくなつて脫黨しても、尚之を追及し、追擊する。だから始めになかなかエライ人だと犬養に心服して居た人も、其心服して居た反動として益々腹が立つ。故に吾輩は進歩黨に犬養の居るのは、恰かも渭南の酒屋の獒の如きものだと思つて居る。酒の値も安い、酒も宜しい、又別嬪も居る。

けれど其酒店は一向に賣れずして隣りの破れ酒屋が繁昌したのは全く其よい方の酒屋に獒が居たからだといふ。進歩黨が續々名士を失つたのも犬養といふ獒が居たからだと我輩は信ずる。一度進歩黨を去て再び進歩黨に復歸した代議士はない。政黨は豐臣秀吉の部下に對した態度を學ぶにあらざれば大を致すことが出來ぬ。秀吉は部下のものゝ去らんとするとき、向ふに行て見て都合がわるいなら、又歸て來いといふ。そして歸て來ると少しもわるい顏をせずに元の通りに之を使つた。德川家康も亦さうてあつた。今の政友會も無能の者が多いが、全體の態度は其れを學んで居る。夫れ故に今日の大を致したのだ。然るに犬養の仕打は全く其反對である。進歩黨の振はなかつたのも半ば犬養の罪である。

一體犬養はなかなか情もある人て、浪人ものなどには錢も呉れるし新聞などにも便宜を與へる。其點などは缺點がない。又學問もあるから話も上手、主張も立て居る、惜しい哉、公共の發達を口にする犬養は、其素行上は極めて貴族的で且つ偏頗である。犬養の本來からいへば子供達は平民的に育て相なものと思はれる。又信じられる。處が男の子も女の子も皆學習院に入れて車て送り迎へをするといふ風だ。故に彼の言ふことゝ行ふこととゝは常に不等邊三角形を描いて居る。其れから彼は其妻君が藝者をして居た時に姉さん藝者てあつた人を妾とした。而かも二人を同棲させてる。彼は之れて堯の二女を妻にした舜を擬したのであるが、然し姉妹藝者が一人の男に關係つけぬといふ狹斜の義理を破らせ、而かも同棲させて、世間に有勝ちな家庭の風波も起させぬ手腕は或は舜を凌ぐかも知れぬ。

夫れから諸種の政治問題について——例へば對清政策にしろ、對米政策にしろ、相當の見識と意見を抱持して居る。然し餘りに先きが見え過ぎる。政府の遣り方はこういふ風ていかん、輿論はこういふ風ていかんと、總て傍の事に疑を存する。國家の運命に關する重大事件たる日清、日露の兩戰爭に當り、戰爭前に大隈

をして明かに意見を世間に發表させ切らせなかつたのも其れが爲めてある。苟も大政治家てあつたらば、かゝる場合に當て其意見を明かにして國民の嚮ふ所を知らしむべきてある。それをせざるは實に遺憾てある、又恥づべきてある。然し犬養にはそれが出來ないのである。あの人はあんなに頭腦もよく、才もあるのに政治家として實に惜しい人て、一言にして渭南の鷄といつて置いた方がよからう。

△木堂論

福本日南

備前の國に人も多いが、近世の人て私のよく知つた人は新太郎少將光政てある。私は此人を以て近世の一英物と思ふ。彼は名家に生れて而かも大藩の大守てあつた。而して虚聲浮聞を喜ばなかつた。封建の制として、家を繼いて藩主となると必らず幕府は之に英稱を加へる。彼は大守となつた時に、早く巳に少將の地位に上つて居つた。幕府は彼を何んとかの守にせんとした。光政之を辭していふに、ヤレ肥前の守だの備前の守だのといふやうな、神主の作るやうな稱號は御免を蒙る。自分は新太郎少將て足れりといふので、久しく之を受けなかつた。當時の武鑑を繙くと、此大藩の大守が久しく新太郎光政て載つて居つた。光政以後に此人に類するものを備前に於て求めて、犬養木堂に逢著した。

彼の世に在る、孤松の巖頭に聳えたるの概がある。彼が今の世の滔々たる俗政治家に異るもの玆にある。今の政治家といはるゝ政治家、何れも努めてデモクラツトの裝ひをなす。然しながら眞にデモクラシーに沈醉してデモクラシーの妙味を玩味して居るもの幾らあるか。口には貴族制度を排斥して、明治維新によつて折角一度封建政治を廢改して、四民平等の制度に改めながら又々貴族制度を布いて、ヤレ、デユークだ、マルキーだ、コントだ、ヴイコンドだ、バロンだといふやうな公卿の出來損ひ、大臣の拗れたやうなものを再現する。實に馬鹿々々しい、忌々しいといふやうなと

をいふ。けれども、其腹中を探つて見ると、楊枝を削つてもよい、カルタを張つてよいから、何うかバロンの一つにも有附たいと考へてゐないもの幾らあるか。尾崎行雄は稍々事を解する男であるが、彼と嘗て話をした時に、憲政政治を日本に植立てんが爲めに、吾々民黨を率ゐて藩閥政府と戰ふこと多年なりしが、其大事な味方と頼む奴原が、中心では小役人でもよい、鍋取公卿でもよい、何かそんなものゝ一つに有附たいと考へて居ないものは殆んどない。此心術のさもしい、下等な奴を率ゐて戰ふんであるもの、なか／＼敵城が落ちそうでないと歎息したとがある。一般の氣風、一黨の狀態、大抵斯くの通りである。其中に立て、彼木堂は眞のデモクラットの概がある。且つ當年のデモクラットと稱するデモクラット、其初め袖を投じて起て憲政の爲めに戰ふとして、政治社會に乘込んだ時までは、みんなが、みんな、今日のやうなさもしい心でもなかつたろう。去りながら、多年の戰闘で志を得ないので、今日の所謂各黨各派の領袖と云はるゝ連中を初として、其以下の政治的戰士は大概疲れて了つた。其の疲れた結果は、小役人でもよい、鍋取公卿でもよい、今一層陋劣な奴になると、百でも二百でもよい、現なまを得て、其れて一時の口腹を滿せば結構だといふやうになつて居るのである。其中に於て依然として當年の意氣を保て、倘ほ憲政の爲めに奮闘せんといふものゝ一人は、僅に木堂其者なりと思ふ。

匹儔を古人に求むれば、木堂は漢の李廣の類ならん。李廣は實に前漢一代の名將であつた。然しながら彼は數奇の將で、一代志を得なかつたのである。木堂稍々之に近きものあり。去りながら、彼がこの數奇に陷て悔いず。逆境に處して撓まず、當初の目的を一貫せんと努むる其意氣實に多とするに足るのである。

俗論に聞けば、彼は偏狭といふ。此惡評の由て來る處を察すれば、彼の頭腦の餘りに明晰なるより來たのである。彼は迎合を試むる氣はない、世に阿る氣がない、而して之は爲すべからず、若しくは成るべからずと思惟する所に向ては決して同意しない。此點が俗

政治家から偏狹の批評を受けたる根源である。自分の見る所を以てすれば、二十餘年間に亘る彼が政治的生涯の間に、彼は非常の進境がある。世人は彼を策士といふ。自分は是迄批評家の地位に居て、政治社會に投入しなかつたので、木堂のじつと以前の事を多く知らん。思ふに其當初に於ては彼亦隨分權謀術數を試みた事もあるであらうと思ふ。それは人の政治的進路を踏む上に於て十中八九まで一度は經過する道である。申さば政治學校の初級二級に於ては必ず踏んで行く學科である。(餘り結構な學科ではないけれども)が、今日の木堂は最う此策士の皮を振り切つた、今日の木堂は寧ろ餘りに無策である。自分が彼奴を喜ぶ所は其の無策を以て戰はんとする所にある。助けてやろうと思ふ所も彼が無策を以て戰はんとする所にある。今日の木堂は所信の一點張で、所信によつて萬端に當らんとするの庶幾きを認める。是彼が進歩の一である。

其の二は、彼が稍ゝ大人——政治上の言葉を以ていへば闘士(オンムテヌ)の域に入つて來たのを見る。何を以て之をいふかなら、彼は迷惑な誣言を背負ひ切れんほど背負つて居る。けれども其れを辯じやうとしないのである。二三の例を擧ぐれば、彼は自家に權力を集中せんが爲めに同黨中の英物と云ふ英物を排斥し來れりと誣言せられて居る。尾崎を進歩黨から追出したのも木堂也と云ふ。然れども其實尾崎を追出したのは彼でないといふ事は尾崎と共に當時進歩黨から除名せられた藏原惟郭がよく知つて居て屢ゝいふ事である。又彼は島田三郎を追出したといふ。然れども當時島田の强敵であつたのは寧ろ鳩山和夫であつて、若し何人が島田を追出す主唱者であつたかと言へば、鳩山和夫であるといふのが之に近いのである。又彼は中村彌六を馘つたといはれて居る。之は彼が馘つたかも知れん。併しながら中村を馘らねばならんといふ場合に至つたのは、中村が政治的叛罪に非ずして、道義的叛罪であつたからである。之は木堂でなくとも、黨の紀綱を維持する上に於て、何人が局に當つても玆に出でざるを得ない。斯の如き人まで包容するが大度量といふなら、人間社會に、政治社會に紀綱と云ふものを取り除けて掛らねばならぬ。藪

に此等は論外である。それから平岡浩太郎を進歩黨から除名しやうとしたのも彼木堂であると云ふ。それで平岡は此風聞を聞いて、終世木堂を仇として居た。去りながら平岡除名を主張した連中は、木堂に非ずして大石正巳等であつた。之に就て可笑しい話がある。大石が平岡除名を主張した時には、三浦將軍も其席に居つて、其事情は極めてよく將軍が知つて居る。除名問題の起つた後、一年にして一日將軍等は大隈伯の邸に會して居たことがある。其時に確か神鞭知常であつたと思ふ。同席に居た木堂に向つて、君も餘り非道いぢやないか、あの無邪氣な平岡までを除名しやうとしたのは殘酷であると大石等がいつて居るといふことを言ひ出した。すると三浦將軍が傍らから、それは間違つて居る。平岡除名を主張したのは大石であつて其時には此木堂は居なかつたのである。それを木堂に被せるのは亂暴であると云ふことを言出したので、木堂は初めて平岡除名問題までを自分が背負つて居たかといふことを知つた位である。併しながら彼は一々之を辯じやうとしない。此點に於て彼は鋼鐵の冑を着て居る。如何なる讒誣、如何なる中傷も彼は笑つて濟して居る。之は己れは口が惡いから又製造したのであるかと言つて笑つて居る。此點に於て自分は確かに彼の進境を認める、即ち彼が稍々大人の域に入つて來たのを認める。

彼は天成の批評家である。それ丈けに彼は頗る物徂徠に私淑するものである。彼の話によく出る、何ぞといふと物徂徠の事を引き出す。彼は剛岸の天性よく物徂徠に似たるものがある。物徂徠は嘗ていつた、人間の樂しみとして何が一等樂みであるかといへば、嚙炒豆罵天下之英雄、之以上樂しいことがないといつて居る。此點に於て木堂は宛然現代の物徂徠である。而して其批評はよく寸鐵人を殺すの概がある。凡そ批評と云ふものは其人の病、申さば其人の胸膈に適中した批評にして初めて人を殺すの効がある。今新聞などによく出る批評、千萬言を費すも其の丸は多く頭の上を越す。頭の上を越す丸は本人に取つて少しも怖くない。たゞ胸膈に中つて來る丸が一番怖いのである。其の丸に中

てられると其男は氣死するのである。木堂動もすれば此丸を投げ出す、之が木堂に敵の多い所以ならんと思ふ。

夫れから彼が稍々もすれば黨內にあつても、小策士の爲めに忌害せられるのは、小策士の爲めに欺されない點にある。此點になると大石以下の連中は、ともすれば策士に乘せられるのである。小策士の方からいへば欺し易い、欺き易いが、木堂にあつては小策士の巧んで來る位の事は、疾くの昔に看破して居る。そして一言にして排斥する。故に小策士にあつて之を見れば木堂さへ居なければ外のものを彼等の掌上に玩弄し得る。彼が居る爲めに勝手な振舞をするとが出來ない。之が小策士に忌害せらるゝ所以である。小策士派の人々に言はすれば、彼は頑固である。彼は東洋的政治家である。文明の政治家でないといふ。近世政治家でないといふ。殊に知らず、彼は其實東洋的政治家でないのである。亞細亞的、東洋的政治家の六韜三略といふべきものゝ一つは、諸葛孔明が入門遁甲の術である。他語を以て言へば、所謂火遁の術である。もう一ついへば蟒蛇吐霧といふとがある。本當に蟒蛇が霧を吐くか吐かぬかは知らないが、兎も角口からぱつと霧を吐き出して、其の霧の中に隱れて姿を見せないのが蟒蛇の蟒蛇たる所以である。現在位の文明の程度の日本では、此蟒蛇吐霧のは政治家の秘訣、流行ろうと思ふ、用ゐられやうと思ふ政治家の秘訣である。自分の意に反する說でも至極御尤である、如何にも贊成である。それも宜かろう、これも宜かろうなどといつて對客を懷柔する。する其と對客は、あれは大人だ、あれは豪傑だと言ふて感服する。之が即ち火遁の術である。大石などの大政治家らしく今日迄に築立て來りたるものは、只此一つの火遁の術あるのみである。それは東洋一流の政策ともいはふが、磨き上げたる文明の政治社會では、最早紙屑籠に投られて、今頃は餘り用ゐられない遺產である。木堂は此術を用ひぬ。非は非とし、是は是として、直言明示して廻避する所がない。此點からいふと佛國近來の政治家中英物として知られた、

ジユール、フエリーに似て居る所がある。千八百七十年の普佛戰爭によつて、佛蘭西が大敗北を取つた後、佛國が强大國たり、一等國たる地位は餘程危くなつた。此時に當つて、ジユール、フエリーは所謂東京（トンキン）政略を樹て、、安南、東京を占領さした。其遣り口のブツキラボーな事は伊藤公の韓國政略の類でなかつた。之が爲めに佛國は戰敗國の不名譽から脱出して、依然として歐洲の强大國たり、一等國たる名譽を回復した。が、其東京政略を劃するに當つて、佛國政治社會の彼に對する批難攻擊は實に盛なものであつた。彼はナポレオン三世の故智を襲ふて、再び共和政體を危くするもの也といふ攻擊を一身に集めた。それで不人望政治家といへば、何人も直ちにジユール、フエリーと解する程であつた。去りながらフエリーは自信する所がある。彼は之を以て佛國を救ひ得べしと得心して、それ故に總ての批難攻擊を顧みず、自家の自信によつて邁進した。其當時の事であつたが、彼は一夜ソワレー（晩餐）に招かれて其歸るさ、巴里市中の伊太利大街（ブールヴアル、イタリアン）に馬車を軋らした。すると途上に集れる群衆は、叛逆人だ、謀反人だと罵つて、往々馬車を目掛て砂礫を投ずるものある程であつた。大概のものならば馬車に捨て鞭を與れて群衆を驅け拔けて逃げる處であるが、彼はこの有樣を見るや否や、馬車を止め、馬車の戶を排して大道に降り立つた。群集の中に分け入り來て、何者か自分を叛逆人と云ふ、謀反人と叫ぶ。自分は此親愛する祖國を敗餘から救ひ出さうとして東京政略を立てたのである。我が共和國の基礎を再び盤石に築き上げんか爲めに計劃した擧である。此擧に就ては確固たる自信がある。自分を叛逆人、謀反人と罵るものは、悉く我前に集まれ、吾自信のある所を一々話して聽かせよう。と靜平に叫んだ。之を聞いて群集は意外に打れた。彼は遁げんとはせずして進み出た。彼は避けんとはせずして、此機會に自信のある所を發揮せんとした。其の勇氣に感服して、曩の惡罵の聲は、忽ち感嘆の聲となつた。フエリーの晩年には、佛蘭西の救主といふまでの洪聲を一身に集めて世を去つた。木堂にフエリー程の

政治的斤量ありや否やは我知らず、只彼が自信する所によつて直前邁進せんとする其意氣は頗るフェリーに髣髴たるものがある。思ふに彼にも缺點は多からう、失德も多かろう。去りながら憲政の爲めに奮闘して、折角此國を憲政に入れた以上は、憲政の實は一度は擧けなければ止まないといふ概丈けは、慥に彼に認むる事が出來る。彼が孤松の如く、巖頭に立つて風波の中に揉まれながら、尚ほ其乾然たる態を維持する所に自分は同情がある。それて後れ馳に政治社會に飛込んで來た自分の如きも、及はずながらてん畜生を助けて一番奮闘して見やうと思ふ所てある。(完)

△木堂論

冷眼子

先づ長所からいはうならば、頭腦が極めて明晰て且つ執着力に富み、勇氣も餘程備へて居る。又決斷力もある。器用でもある。だから何事でも人並以上に出來る。藝からいつてもいろ〳〵な事をやる。碁も素人碁としては強く、書も上手、文も旨い。刀劍の鑑定などに至ては確かに素人藝以上てある。なか〳〵趣味に富んて、田園を見ても詩を作つても樂しめる。觀察力は非常に鋭く、直ちに急所を見拔く所はなか〳〵エライもので、眼光紙背に透るといふべきてある。

長所も人に勝れて居ると共に短所も亦人に勝れて居る。就中一番ひどいのは愛憎好惡の念の極めて激しい事て、物をヒョット見ると、直ぐもう好きとか嫌ひとか極めて了ふ。之れが實に困る。殊に政治家として多數の人を遇するには非常に厄介な性質だ。狹量、偏頗皆之より生ずる。もと根底なく理由なく起る愛憎故、先きに憎てんも、始終頭を下げて來るやうな事があれば又可愛がりもする。其弊や流れて小人を接近させるといふ事になる。自分が憎まれたと知りつゝ頭を低くして來る者に大人物がないに極まつて居る。又同輩若くは先輩と調和することが出來ない。今度の事件を見ても、少しても頭の高いものは皆彼と合はない。大石、

箕浦、肥塚、武富、角田、皆敵となつた。味方となつたものは皆彼より頭の低いものばかりだ。大政黨の首領としては非常の缺點を持てゐる、殆んど不適當といつてもよい程の缺點を持てゐる。世の中では犬養黨の比較的多かつたのを以て犬養の勢力に歸して居るやうであるが、其れは大間違である。何時の世でも現狀を維持せんとする保守派は多いものである。改革派はわるい改革派なら固より、よい改革派でも少いものである。犬養が改革派であつたら今の改革派よりもつと少かつたのは疑を容れない。それに今度改革派はあのやうな失策をやりだした結果、多少の同情も加つて左なきだに多かるべき現狀維持派を多からしめたのである。之を犬養に味方あり、働ある爲めと見るのは大いなる誤りである。

彼は今日平和主義を唱へ、軍備縮少を叫んで居るが、其性質は寧ろ反對で、何でもドシ／＼やれ、軍備なども擴張せよといふ風の人である。世の中では政治家を論ずるに一貫した主義の有無を問ふ人があるが、政治家には一貫した主義のあるべきものでない、時と勢との宜しきに從て經綸せざるべからざるもので、一定の主義に固執すべきものでない、固執せよといふは迂儒の見解である。聖人は物に凝滯せずといふが、聖人のみでなく、政治家も亦物に凝滯してはならぬ、主義は貴ぶべきものに相違ないが變通の道は缺くべからざるものである。故に吾輩は彼に主義ありや否やは敢て之を論ぜぬのである。

△犬養木堂

田中穂積

吾輩が犬養君に就いて感服して居るのは、その識見の卓越せる點である、而して其卓越せる識見の基礎は經濟思想から來て居る、今の政治家で經濟思想のあるものとては殆ど無い、然るに今日議院で論ずる問題の大部分は何であるか、經濟財政に關せぬものは一つとして無いではないか、豫算案は固より言はず、その他

航海補助法案にせよ、米穀輸入關稅の問題にせよ、皆經濟、財政に關した問題である、外交問題といつても今日の外交は實利の爭であつて、十七八世紀の外交の如き宗教若くは王位簒奪の如き空權虛名の爭ではない、故に政治家として經濟財政の智識なきものは殆んど二十世紀の政治家たる資格無しと云はなければならぬ、乍併今の新議員には此資格を備へて居るものが幾人あるか、昨年の總選擧で新議員が殖えて新智識に富んだものも比較的多くなつたが未だ經濟財政上の智識を備へて居るものとては頗る少ない、況んや政界の老將耆宿、即ち一黨の領袖など〻仰がれて居る人々に至ては、當年の所謂燕趙悲歌の徒、慷慨悲憤の士であつて、緻富な經濟財政上の問題などは丸切り判斷が出來ぬ、然るに獨り之を犬養君に於て見るのは誠に異數である、これが今日でも、君の議論が依然として世間から傾聽されずには居られぬ所以である、敢て慷慨悲憤するでもなし、大聲叱呼するでもないが、掩ふ可からざる事實を捕へ爭ひ難き道理により、周密なる自家の意見を築き上げるのであるから、識者は何んとしても之れを傾聽せざるを得ないのであつて、其卓越せる識見は即ち經濟問題の思索から訓練されたらしい。

それには君の閱歷を見れば判かる、君は明治七年頃に東京へ來て藤田の家に食客になり、慶應義塾に入り、則ち新聞などを書いて居つたが、慶應を出ると、報知新聞記者となり明治十三年には管了法と共に東海經濟誌と云ふを起して當時經濟學者の若手で有名な田口卯吉君が明治十二年に經濟雜誌を發行して頻りに自由貿易論を鼓吹するのに對して犬養君は保護貿易論を唱へ堂々と論陣を張り筆戰を鬪はした、當時君の經濟意見は勿論淺薄で幼稚なものであつたに違いないが、滔々たる政客皆乾燥無味にして難解緻密なる經濟問題などに對しては一瞥を與へるものもなく、徒らに天下國家を論して自から得意がつて居つた時代に獨り犬養君が自由貿易と保護貿易との得失を眞摯に論じたのは、當時の政客中儘に異彩を放つて居つた、而してその後役人となつたが、大隈伯の桂冠と共に野に下つて、伯の

幕下に働いて改進黨を組織し爾來三十年今日に至るまて苦節を守つて一貫して居る、

日本經濟會なるものは今でもある、紳士紳商の組織せる經濟會であるが、之を創めて作つたのは誰かといふに犬養君である、矢張り田口卯吉君と頡頏し、その東京經濟協會に對抗せんが爲めに明治十八年頃立てたのであるが此等の事實に徵して見て如何に學問の價値を尊重する文明的な頭腦であるか其一斑は知る事が出來るであろうと思ふ

即ち此研究的な緻密な頭で以て、政治上一切の議論をやるから、自ら其識見が他に卓越して居るのは少しも怪むに足らぬ、兎に角要領を誤らぬ、試に支那通を以て任じて居る竹越三叉君の支那論と君の支那論とを比較し見ても直ちに判かる。マコーレーを以て任じ歷史家を以て任ずる竹越三叉君の議論は、犬養君の議論と比較すれば到底同日の談でない、三叉君の議論は淺膚妄斷誠に見劣りがする。

次に犬養君に就て感服する所は操守の堅い點である。明治十四年に政府に入つたけれども、大隈伯と共に袂を連ねて野に下つた、爾來卅年一日の如く自黨の爲に盡して變りはせぬ、進步黨には領袖株も多い、が犬養君に比すれば皆後から入つた人々である、大石君の如きは後藤伯の大同團結の先驅となつた人で、それから進步黨に飛び入りしたのである、犬養君のみは終始一貫、今日の改革非革改二派の爭の生ずるに及んでも、憲政本黨の主義本領を沒却する樣なことは出來ぬと主張して、自己の首を刎ねられても動かぬ所は頗る稱すべきである、往年隈板內閣の出來た時にも、自分よりは後進者である連中が、皆高官顯位に就いたのに、自分一人は大臣の椅子を覘はずに、後に殘つて一向ら全黨の一致團結を計り、大隈伯をして後顧の憂なからしむるに努めたのは、如何にも敬服すべき態度と云はねばならぬ。

勿論その后文部大臣となるはなつた、がそれは尾崎君が共和演說で失敗した、その後釜へ均勢上改進黨の人が座らざるを得ないと云ふことで出懸けたに過ぎぬ

のである。

第三に犬養君は又奇略縦横善謀多算の士である、近き一例は此度の憲政本黨の騒ぎでも判かる、改革派の人々は犬養を除名してまんまとしてやつた、犬養を葬り了つたと意ひの外、豈計らんや旗幟分明、二つに色別をされて見ると三十名からの有力の士が犬養君に味方し順逆全く地を換へたと云ふ始末である。

その識見、その操守、その奇略、何れの點から見ても君は立派な政治家の要素を具へて居る。

乍併茲に誠に惜むべきは、局量偏狭人を容るゝことが出來ぬ點である、自分と同じ地位なり力なりある人と兩立することが出來ぬ事である。中村、鳩山二君は兎に角として、尾崎、島田、河野、の諸君と並び立てず、遂に諸君をして憲政本黨を去らしめたのも之に因るのである、犬養君の天稟は己に述べた如く、縦横の奇略を持つてその鋭鋒の觸るゝ所盡く倒るゝといふ有様であるから氏と楯ついた人々は皆な逃出して仕舞ふ故に君は畢竟政界の裨將たる資格はあるが決して統領の器ではない、此狭量といふ弱點さへ無いならば立派な政治家であろうに惜い事である、といつて最早や年齢五十五六、今更それを矯める事もなるまい、此狭量は啻に犬養君自身に禍したのみならず、友人を傷け大隈伯に累を及ぼし憲政本黨に禍した罪も決して輕ろくない。

宏量といふ事は、天下の廣居に立つて一代の人心を指導する政治家としては一番必要な資格である、操守は別であるが、識見や奇略は少々不足でも清濁併せ呑む雅量があるなら政治家として優に政界に濶歩し得る、輿論政治の行はるゝ時代に東つては、民意を代表して進めばよいのであるから、必ずしも卓絶せる識見なくとも縦横の奇略なくとも正直に着實に民意のある所に従つて正々堂々と進んで行けば大過なきに庶きを得る道理である、故に何としても今日の政治家に最も大切なる資格は人を容るゝの度量である、然るに犬養君には、此大切な清濁並せ呑むの宏量なく、従つて多數の意思を代表し多數と共に行動する資格がない、惜

しい事であるが犬養君の政界に於ける前途は知る可してある（談話筆記）

△犬養毅君

某氏

○**犬養君の經歴**の大體をお話すれば、明治八九年頃に慶應義塾に入り、十年の西南役には從軍記者となり、其れが濟んでから、一回一圓位で新聞に論説などを書いて居た。明治十三年八月には私と一所に東海經濟新報（今の東洋經濟新報の前身）を發刊した。それから二十四歳かの時に尾崎君（當時廿二歳）と共に統計院權少書記官に任ぜられ、十四年の政變に大隈伯と一所に官を退いて野に下つた。尾崎君も無論一所てあつた。そして「報知」の記者になつた。當時「報知」には矢野、藤田、箕浦、尾崎の諸君も居た。それから後、明治十七年頃に「朝野新聞」に入つたが、十九年「朝野新聞」が潰れたので、「民報」をやり、又一方には改進黨を作つて入つて居た。それから國會が開設せられて代議士となつたといふのが犬養君の歴史の大體てある。其後のことは、皆世の人の知る通りてある。

○**犬養君は策士**かといふに、私はさうぢやないと思ふ。何故策士ぢやないかといふと、家柄が漢學者て少年の時に漢學佛學をやり、長じて福澤先生の薫陶を受けて居る。又どちらかといへば意思の強固な人だ。相談して物を決めるといふと、何處までも其決めた所に行かうといふのが犬養君の長所と思ふ。故に私は犬養君を策士と認めぬのである。然しなか〱略はある人てある。

○**犬養君は偏狹**てあるとよく人がいふ。犬養君はグニャ〱してない、又今日は逆境に居る故、左樣に見えるのでないかと思ふ。若し順境に置けば決して偏狹ぢやないと思ふ。

○**犬養君の性格**をいふなら、極めて友誼に厚く、信義を重んじ、且つ親切な人だ。殊に人の世話をよくする人だ。只好き嫌ひのある人てあるから、人をよく

世話をする代りに、彼奴をやつつけれとなると随分手きびしくやる。敵に取つては随分うるさい人だが味方にとつては非常に頼みになる人だ。

○犬養君の悪口　は寸鐵人を刺すの概がある。急所に切り込む而かも切り込み方がひどい。私などの如き同輩は彼の悪口を何とも思はず、のみならず人の意表に出づることをいふから味ふて見ると却て面白く感ずる位であるが、彼よりも年下のもの、若くは位置の低い人になるとピンと應へる。悪感を抱く、怨に思ふといふ事になる。先づ此れ位て御免を蒙りませう。

△犬養木堂

伯爵　大隈重信

犬養といふ人は人間は極く正直な人だ。時としては馬鹿正直だと思はるゝ事さへある。又眞實な人で、友誼に極めて厚い。只口は非常にわるく、何か腑に觸れると、辛辣な毒言が直ちに口を衝いて出る。「そんな虫のやうな奴が」とか何とか罵る。それがなか〳〵手づよいんだから堪らない。又人を攻撃することは何分手きびしい。少しの容赦もない。一度敵となれば城を拔き、壕を埋め、人を鏖にせねば承知せぬといふ風だ。恰度織田右府の兵を用ふるに似て居る。秀吉は降つたものは總て許したが、信長は許さなかつた。犬養も許さない。何でも止めを刺して了はねば止めない。

吾輩は彼が策士かどうかは知らん。策士といふよりも、直覺的に獨斷的に猛進する方だと思ふ。人に勝れた才を持て居るが随分缺點もある。人によつては長所も短所も分らぬ人が在るが、犬養のは長所も短所も際だつてよく分る。

體からいつても犬養は極く痩せた人で、一見して神經過敏な、貧血性な、膽液質な人と分る。大石は多血質て、神經は鋭敏てない。其の代り寛大にして長者の風もあるが、又雜駁粗雜になつて遣りしくじる事もある。大石の血を一升か、二升取つて犬養の枯痩した體に注射をするといゝ加減になるだらう。犬養があれて

少し寛大になると、鬼に金棒だが、もう五十幾づになるからこれから體を大きくする事も六つかしからうと思ふ。

△犬養毅論

靜觀居主人

私は犬養をなか〱エライ政治家と思ふが、然し何處か大きな缺點があるものと思はれる。事實の上からいつた所で、あの人はどうも同類喰をする。そして友達をみんな追ひやる傾がある。進歩黨からは第一に島田が出る、尾崎が出る鳩山が出る、それから柴四郎が出る。最近に至ては大石ととう〱大喧嘩をやる。箕浦とも具合がよくない。武富ともわるい。進歩黨の有力な人とはみんなわるい。進歩黨を脱しはしなかつたが平岡浩太郎ともわるく、又神鞭ともよくはなかつたと思つてる。世間の人はそれは犬養が口がわるいからだといつて居る。あんまりひどい惡口をいふからだといつて居る。惡口をいふのもわるいに相違なからう。然し惡口丈けてさうなるものではないと私は思ふ。惡口はつまり惡口に過ぎない。私はその外に何か犬養に大きな缺點があるだらうと思つてゐる。然し私は其缺點の何たるかは知らぬ。

彼に取るべきは其意地の強い所だらう。あの意地がなかつたら犬養は丸てゼロだ。但し其意地を人を相手として出さずして、政治上の主義を相手として出したらよからうと思ふが、どうも人を相手として出してるてないかと思ふ。

彼は策士としてエライかどうかといへば固よりエライ。併しそれは私は當り前だと思ふ。政治家は總て策略のあるものだ。策略なくして政治家となれるものではない。又彼を主義の人てあるかどうかといへば、それは主義の人だらう。其主義は藩閥を相手にして戰ふといふ事であらう。しかし又その主張の上からいへば一時無意味な積極主義などを唱へたこともあるから此邊は餘り一貫して居るとはいへぬ。又藩閥を相手として

戰つたといふ事にも聊か怪しい處がある、松隈內閣に入つた人だ。丸で藩閥の片破れと仕事をせぬといふ性質の人でもないと思ふ。元老は嫌ひだかといへば大隈も矢張り一元老だ。いはゞ在野の一元老だ。此頃はさうでなからうが、つひ先頃まで大隈にくつついてゐたてはないか。又惡口をいつたか、惡口屋を許するのだから、ちつとはよからう。然しまァこれで止めて置かう。

△犬養氏の短所

松井柏軒生

犬養毅氏は今毀譽の炎々烈々たる焦點に立て居る、茲て之を評しては、其の好不好に偏する嫌疑を免がれぬ、殊に氏と反對の側に立つものに於て然りだ、併し之を評するとなれば、一切の感情を捨つると同時に、瑕瑜倶に、蔽はずてなければならぬ

犬養氏の全幅を評するとは、中々趣味もあり、爲めになるとてもあらうが、余は不幸にして未だ氏の全幅を知らぬ、但だ僅かに今まで聞得た處を資料として、氏の短所丈け擧げて見やう、氏の氣質は其の容貌が能く之を語つて居るやうだ、氏の瘠せて長い、而して眼底に光りのある、色の蒼黒い、恰かも鬼氣人を襲ふと言たやうな顏付は、俗にいふ苦味澁味のあるので、人に由ては之が惚れる程氣に入るであらう、痛快、爽快などいふ氣持のする顏付きてあるが、併し一點でも春風駘蕩の趣がない、莞爾かに華かな處がない、婦人で言はゞまあヒスチリーに罹り易い性質だ、人には寸尺の延びた間の拔けて、何處となく雲煙漂渺の趣を具へてるのがある、伊藤公、曾禰子、近くば大石正巳氏などがそれて、大隈伯も一二分は具へて居る、才槌頭の桂侯は近頃隨分澁味苦味が出て來たが、併し雲煙漂渺の處が大分にある、之が此の人々の衆に長たり、或は將に將たる處て、總て寸尺の延びた間の拔けた處のある人間てなくては群雄の上に立て衆心を收攬することが出來ぬやうだ、察々の明に過ぎると、人の缺點が見

へ透き過ぎる、見拔かれたものは氣が措けて近づき得ぬ、激しくても、エラクても、間の拔けた寸尺の延びた處のある人には、能く人の缺點が見へぬ、見へても見ぬ振りをすれば、全く見へぬのだと思はれる、犬養氏には少しも此の特色がない、察々の明に過ぎて近寄れぬといふ點があるやうだ、其の苦味澁味や萬事の切味を爽快痛快として惚れる程氣に入る人があつても、又癡がつたり憎んだりする人もあろう、特に何事かで氏に當てられたものなどは然りてあろう、則ち氏は多くの敵を作るべき性質だ、况んや其の人を惡罵して骨を刺すやうな處は、何の係り合ひもない第三者に取てこそ痛快に聞へるが、罵られた當人や、當人の朋友から見たら餘り宜い氣持がせぬてあろうから、彌よ敵にせずと宜い人までを敵に廻すやうなとも多かろう

世にはグウタラベイて婦人か男子か分らぬやうな性質のものが多い、是は婦人的男性とも稱すべきであるが、併し婦人的男性は此のグウタラベイ種のみに限らぬ、ヒステリー性な人などは、何程激しくても、何程目先きが利いても、尙ほ婦人的と言て宜い、犬養氏が政治は畢竟利害の問題て、正邪の理合を容れるべきてない（國家は正義の支持者として時に利害以外正義を主張せねばならぬともあるが、其れは司法上のとが重もて、政事家の携はるべき政治問題は殆んど利害問題が主てある）と位ゐ最早悟り得そうなものだのに、利害を視ては宜くない、只主義綱領に由るべしなどいふのは、婦人の一旦頭に入れたとは、容易に之を改めぬ、恰かも頑迷なやうに見へると同一質ではあるまいか、殊に進歩黨の歴史など眞面目にいへば、寧ろ愧づべき歴史てあるのに、イヤ名譽ある歴史だなどゝ、力瘤を入れて慷慨するのは、婦人か前世紀の古系圖を鼻に掛けて獨り悦ぶのと同じては有るまいか、若し之が或る政略から出たといふならば格別、犬養氏が眞面目ていふとならば、余は實に斯く許せざるを得ぬ

察々の明て、目に見へ次第直ぐに言立てゝ少しても腹に入て置くともない、又言出した其の結果を熟慮せぬのは婦人根性である、犬養氏が島田氏や尾崎氏に對

したる仕打は、正さしく之ではあるまいか、氏は或る人が評したやうに、正面の敵である所の藩閥とは未だ激しく戰つたことがないやうだ、所謂民黨を聯合させて堂々と藩閥攻撃を遣つたやうなことは未だ無い、彼の憲政黨の看版爭ひにも、進歩黨を提げて自由黨とも戰はなかつたやうだ、イヤ戰つても猛烈に壓戰的に戰はなんだ、彼の星亨をして獨り傍若無人に足腰を延はさせた、然るに此の頃改革派に除名されてからの戰さ振りといふものは、流石に峻烈痛快で、自から陣頭に立て、同志を率ひて健闘するさまは、實に天晴なる武者振である、併しながら謂はゞ同志打といふ時、殊に三十人か四十人の小勢で戰ふ時丈け斯うなので、此れ以上には闘志もない、戰略も無いかのやうに見られる、女中下女を指麾して坐敷の掃除は巧く遣るが、廣い野原に押出して高きを削り低きを埋めて、一場の耕地を仕立てるやうな腕はない、矢張何處までも婦人的で、而して小勢の小戰闘に勇なばかり、將に將として三軍を帥べき器量でないやうだ

氏はまた器用な人で、其の文字など見ると立派なもので、大抵の書家は及ばぬ、圍碁でも段近いとか、又刀劍や古器の眼識もある、一個人としては實に申分がないと聞く、此の諸事に器用なことも、また利發な婦人の通有性で、歌も詠む、茶にも湯にも巧い、琴曲三絃にも奥の手の免許を得て居るといふ具合ではあるまいか、俗に萬能足一心足らぬといふことがある、政事家として三十年來政黨界に居りながら、年々に敵を作つて、益々其の勢力を縮めるのは、即ち古い主義政綱論など振り廻はすばかり、一寸でも時勢の潮流に棹して乾坤一擲の雄圖を試みやうともし得ないのは、矢張一心足らずと評しても宜しくは有るまいか、而して是れも亦婦人的通弊ではあるまいか。

斯う言ひこなすと、恐ろしい惡口のやうであるが、併し氏をして斯くならしめた境遇や經路を尋ねたならば、而して別に其の長所と美點とを舉げたならば、更に大に同情すべき處もあるであろう、イヤ有る、余も少しは之を瞭解して居る、何時か機會が有たら更に氏の

全幅を評する時に之を述べて見やうが、今は只其の短所丈け擧げたので、勢ひ極點な惡口にまで及んだのである、但だ是れ位ゐの惡口でも、氏の平生の惡罵の十分一にも及ばぬのは我れながら智慧が無さ過ぎる、要するに氏は偏裨の將で、三五十人の頭領たるに過ぎぬ、偏裨の一將としては精鋭無比ではあるが、將に將たる人物ではない、黨首たるべき人物ではない、政事家としては、寧ろ婦人的政事家で、餘り値はない、偏裨の一將以上の價は斷じて無い、進歩黨の非改革派を過まるものは必ず氏であらう。

△犬養毅の品性

城北翁

犬養程自己本位で胸中名利心の燃ゆるが如き男は無い、犬養を單に度量偏狹だとかいふが、その偏狹は自己本位といふ事から來て居る、何も偏狹だ寛大だといつて特種なものではない、詮ずる處自己本位の度が何れ程強いか弱いかによる、それが強ければ自ら人の利害を顧慮するの度が不足になつて來るから偏狹に傾くし、それが弱ければ自ら人の利害を顧慮するの度が豊かになるから寛大となるのだ、度量偏狹の人といふことは即自己本位の人といふ事である、

彼の憲政黨内閣の出來た時は尾崎は才識共に衆に推され文部大臣に擬せられたに拘らず、犬養は甚だ之を喜ばない、何とかして己れ其任に就かんとを欲して、幾度か人を尾崎氏に介して奪つて代るべきの謀略を案じたが、楠本が一黨の團結を計り、内を鞏固にするの要があるとの意見を語り、遂に事なきを得、尾崎も之に應ぜず文部大臣の椅子にも凭る事となつたが、その時の犬養の態度心事といつたらない、ところが間もなく尾崎は蹉跌して退かざるを得ぬ事となつたものだから、此處に新に運動を始めて到頭代つてその椅子を占めた、その得意や想ふべしである、彼は大禮服を新調して直に寫眞師に馳せ、その姿を撮影したといふ事だが、それのみかは、彼は當時自己の選擧區、即ち岡山

地方に戻りて揚言していふ、昔は、吉備大臣あり今は犬養毅あり、吉備大臣以來此地方にて大臣を出すことを予を以て嚆矢とすると、地方の人は啞然として、これですつかり存外犬養なるもの丶小人物なることに驚いたといふ話、今でも一笑話柄として傳へられて居る、彼れの胸底を暴露し盡して實に餘蘊なきものである。

豈圖らんや彼が運動して文部の椅子に就いたとが、抑憲政黨内閣瓦解の基をなして居るとは、黨内の一致は之より破れて再び自由進歩の兩黨、憲政、憲政本黨の兩黨と姿を變て反目嫉視の態度に立至つて仕舞つた。

それ已に自己本位である、名利に渴いて居るのである、從つて聲望己れと相若くか或は凌駕するものがあるとなると、極力之を陷落さうと掛る、初め大隈伯に重んぜられたのもは矢野文雄である、その負傷當時に於ては實に伯に親近せられて帷幄に參したのであるが、それを見る犬養の心は甚だ穩でない、百方構說して遂に兩者の間を沮隔し、矢野を遠けてしまつた、次いて島田三郎が伯の股肱となり翼贊するところ少なからず、從つて全黨の勢力を身に集めて位望自ら重きをなすに至つたが、これ又犬養に喜ばるゝを得ない、同じく毒手を振つて彼を疎外し了つた、續いて尾崎行雄、中野武營、中村彌六、柴四郎、伯に威重せられて一黨の牛耳を執つた程のものは皆犬養の毒牙に觸れて去らざるを得なかつた、大東義徹、楠本正隆、大竹貫一等以下十五名を率ゐて脫黨したのも彼の爲である、近くは鳩山和夫の去つたのも彼の爲である、又神鞭知常、平岡浩太郞等が去つたのも彼が爲である、彼に近づくものとてはその書を褒めて揮毫でも求めるとか、或は圍碁の技倆を賞してお相手になるとか、何でも下手に出るものばかりであつて、少しく才あり力あり彼を凌駕する勢のあるものは駄目である、親しめぬのである。

昨今新聞紙で見ると、大隈伯が犬養の狹量を指斥して居る樣だが、三十年彼と交つた伯にして、今に初めてそれを悟つたとすれば、伯は實に常識外れだ、驚かざるを得ぬ、が事實は左樣でない伯も亦犬養と類型の人物である、自己本位で一身の利害窮達を先にして極

めて同情の乏い冷酷な性質を有して居る事等は正に相同いのである、見よ伯の政界に馳聘する幾十年、その間伯に追隨するもの亦幾千人といふ事を知らぬ、而かも入り代り立ち代り、●一人として譜代恩顧の臣として殘り、能く大將の馬前に立つて忠勤を抽じ、一意防禦の難衝に當るものとては無いではないか、それが能く之を證する、犬養は伯の性向を知つて伯を掌上に飜弄し、三十年能くその私を爲して來たのである、伯は之を知らず唯時の利害によつて多年心契の友を棄つること弊履の如きの冷酷を敢てして來たのである、昨今犬養を評して兎角善き様に言はぬのは、即ち時の犬養を非とする潮流に從ひ、敢て玆に至れるもの偶まその冷酷友情なきの本質を呈露したものである。

鎭頼義經が何が故に頼朝を離れたかと尋ぬれば其處は只だ一梶原景時の有ることに想ひ到らねばならぬ、福島正則、加藤清正等が何が故に大阪方を離れたかを尋ぬれば、其處には一石田三成の有ることに想ひ到らねばならぬ、此道理を推せば、大隈伯の下より矢野去り島田去り、尾崎去り、中村去り、大東、河野、楠本、柴、鳩山などいふ面々の去つたのは、去るに必ず所以があらねばならず、而かもその所以が只一人に懸つて存することの明瞭でなくてはならぬ、進歩黨の黨勢不振は實に犬養の爲である、而して正に犬養の負ふべき責任である。

△毅の一字

黑頭巾

其一

●犬養の生命は毅の一字にあり。彼は、其の名を訓じて、毅(ツヨシ)といふ。

●實に、彼の人格、運命、籠もつて毅(ツヨシ)の一字に存せずんばあらず。

●彼は痩軀骨立、宛として肺病患者の如し。而して其の辯論を聞けば、「ダンピラ」を揮廻はすの概あり。

●彼は、三十年來、政權に近づかざるの政事家也。而して其の態度を見れば、本城を堅守して、嘗て弱音を

吐かず。

●吾輩嘗て一たび彼を垂死病中に訪ふ。彼、靜脈が蛇の如く蜿蜒する枯腕を揮つて、犬養毅の三字を書して贈る。

●墨痕淋漓、聊かも氣息奄々の窮態を見ず。而して毅の一字、尤も振ふ。

●蓋し毅の一字は、彼が滿腹の精神の磅礴する處ならずんばあらず。

●彼は、窮死すと雖も、毅の一字を捨てざるべし。犬養は、飽までも「つよき」男也。

●吾輩は想像するに、犬養の幼時は、蓋し近隣に持餘まされたる餓鬼大將たりしや疑無し。

●「お山の大將」の旗を揚げて、閭里の羣兒に雄視したる者は恐らくは彼也。

●而して彼は、尋常一樣の「餓鬼大將」たるに留まらず、恐らくは、世間稀覯の「腕白の雄」なりしならん。

●彼の「腕白物語」は、彼の郷里には、今なほ存するものあらん。

●「三ッ兒」の魂、百までとは彼の事也。一寸蛇の精神、今に至つて呑牛を忘れざる也。

●彼は、自から標榜して「毅」といふ、換言すれば、「負けじ魂」也。「痩我慢」也。

●「負けじ魂」「痩我慢」も彼程になれば、一代の材たるを失はず。

●吾輩は、ヒョロ〳〵として浮腰の政事家多き世の中に、徹頭徹尾、「勝氣」を以て終始する、犬養の如き者あるを喜ぶ。

●毅を以て名づくるの人、

井上毅　松岡康毅

或はいふ、

三島毅　寺内正毅

而して彼は、

犬養毅也。

●「つよし」を以て標榜する、犬養毅は、確かに明治政壇の名物男たるを失はず。

其二

●彼は何事も、人に負けることを嫌ふ。人と論じて、知らずといふを恥づ。

●彼は、書、文章、詩より、圍碁の末枝に至るまで、嘗て、一指を染むるの藝術は、兎も角も、「素人の雄」たるに愧ぢず。

●彼が辯論の、飽くまで鋭利にして、一歩も敵に讓ら

ざるは、又た彼が「負けじ魂」を發揮するの一也。

●畢竟、彼は、『本領』の爲に死するの人也。何物を以ても奪ふ可らざるは、彼の本領也。

●彼は、進歩黨の領袖として、世に立ち官僚政治の打破を唱ふ。

●犬養をして、此綱領を棄てしめんとするは、彼の首を奪ふよりも難事たらずんばあらず。

●彼の熱烈なる愛黨心は、則ち彼の人格の表現なり。

●若し彼にして、夙に、伊藤公等に羅致せられしならば、彼は頑强なる官僚政事家たりしならん。

●然れども、彼は、其初め官僚政治の全盛を惡みて、政黨政治を唱へたる者也。

●昔し、張儀、窮するのとき、舌を吐きて、其の妻に問ふて曰く、見よ、吾舌猶有りや、妻曰く、有り、儀曰く、可也と

●吾輩は、除名決議の時、犬養が、其の妻に問ひしや否を知らず。然れども、彼が息の根の存する間は、ヤミ／＼と、兜を脱ぐ者に非る也。

●彼や、必らず、虎髯を、ふるはしつゝ、三寸不爛の舌を皷して、死に至るまで對抗せずんばあらざる可き也。

其三

●彼は、往々にして、策士を以て目せらる。是れ世人が、犬養に對する誤解也。

●彼は「負けぬ氣」の塊也、彼は智者たるを失はず。然れども、彼は策士に非る也。

●或は、彼を以て陰險にして測る可らざる男と見做す者あり。是亦た見當違ひ也。

●此の如きは、犬養の機鋒に中てられたる弱氣者の評判のみ。

●犬養が、屢、如此惡評を蒙るは、彼が弱物をヒヤカせる惡戲の過ぎたるが爲也。畢竟、彼、自ら招くの失ならずんばあらず。

●犬養は機鋒鋭適、何人か能く之に當り得る者あらん。弱者は、彼を恐怖して、大策士と爲す。

●吾輩を以て見れば、犬養は『勝氣』に『稚氣』を交ふ。一本調子にて、寧ろ愛す可き男也。

●彼の智勇辯力は、進歩黨ありて以來、伯大隈の外、能く之に敵する者あらず。

●若し、毒舌の病を、彼より除き去るを得ば、彼は在野の一大勢力たる可き也。

●彼は、其の貧乏にも、逆境にも、平然として、つね

に、「負けじ魂」を發揮しつゝ、毒舌を逞しくするが故に、人に恐れて嫌はる。

●其の實、彼は人を傷くるに意あるに非ず。何と無く、人を抑ふるが好きなるが故に、其の腕と舌とを以て、つねに敵手に向つて『高飛車』に出づ。

●彼と大隈とは、共に「腕白の雄」也。然れども、其の人格は、其の碁の如く異也。

●大隈の碁は、低くコスミて「地」を取らんとす。其の博辯宏辭の態度に似ず。

●犬養は、大桂馬に飛んで、敵に高壓を加へつゝ、中原に向ふ。

●されば、伯大隈は、幾箇と愛嬌と、退嬰の處ありて、猶自から、人に好き處あり。彼に、「實利」の觀念あればは也。

●犬養は、高壓を以て快心する男也。高壓一點張にして、則ち人にコワモテす。

●所謂「豪傑」の分子は、大隈よりも、犬養に多く存す。規模は則ち小なるを免れず。

其四

●犬養にして、尾崎以前に、伯大隈を捨てゝ、官僚派に降らしめば、彼や富貴自在の人たるを失はず。

●尾崎、鳩山の前後、政友會に投ずるや、一人の相隨ふ者ある無し。

●彼等が、新生面を展開するを得ざる所以のもの、亦一は此に存せずんばあらず。

●犬養は則ち然らず。而して彼の智にして、十年前、進歩黨の前途を豫見するに難からず。

●而して彼が、窮に處して、伯大隈を見捨てざる處に、彼の價値は存す。

●吾輩を以て見れば、寧ろ進歩黨の命脈を維持するものは、一に犬養ならずんばあらず。

●犬養は進歩黨の活歴史也。犬養ある間は、進歩黨は滅びず。

●吾輩は此點に於ては、犬養を多として、彼の健康を祈らずんばあらざる也。

其五

●伯大隈は、財に淡ならざるの人也。故に、黨の領袖と稱する者、野に處して、自ら經營するの才ある者にあらずんば長く進歩黨に留り難し。

●尾崎の去るは、多少の事情ありと雖も、其第一因は、彼が自ら支ふる能はざるに、伯が之を救濟せざるに歸らずんばあらず。

●伯大隈の生活は居然王公の富に處し、其の宏大贅澤なる優に在野の大政事家たるの態度を失はず。

●伯の生活は、一種の不思議として人に見らる。伯が此上にも、財を散じて、大に其の門下を賑はさんこと、流石の伯にも困難の事たるべし。

●伯は、其の門下を、強ちに見殺しにする譯にもあらざるべし。實は力足らざる也。

●公伊藤は政友會を創立するも、間も無く辭し去る。侯西園寺は、資財に豊ならざるを以て却て、蕩盡の難を免かれつゝあり。

●故の品川子の如き、國民協會の故を以て、世田ヶ谷の別莊を七重に賣ると雖も尚ほ足らず。

●品川や、板垣の如き、涙脆ろき人は、有りたけの力を蕩盡せずんば濟まず。

●伯大隈は殆んど三十年、政黨に終始して依然として其の富を失はず。彼の人格は、此の一事に現はるといふを妨げず。

●吾輩の知る處を以てすれば、伯大隈は、進歩黨を經營するに當りて、「自家の財産」と「黨の財政」との區別を、極めて嚴格にせり。

●大隈は進歩黨の爲めに憂ふれども、彼の財は黨と沒交渉也。

●這般の實情に通じ、尤も善く大隈の性格を呑込める者は、犬養也。

●彼は嘗て、財の故を以て、厄介を大隈に及ぼさず。自家の事は自家經營して以て黨の爲に盡せり。

●或は、犬養を以て、大隈の「賽錢箱」と做す者あるは、犬養の爲に氣の毒といはざる可らず。

●吾輩を以て見れば、彼犬養は若干の缺點あるに係らず、進歩黨に盡すの熱心に至つては、則ち群を拔く。

●彼が不人望の人たるに係らず、尚ほ本領派の衆心を繋ぐ所以のもの、職として此點に起因せずんばあらざる也。

其六

●大石が犬養を除名したるは、晩近、藪蛇事件の最も大仕掛にして、且つ滑稽なるもの也。

●進歩黨は、荊棘繁茂し、蔓草の纏絡せる、荒れに荒れたる大藪の觀無くんばあらず。

●淺果敢にも、此の大藪を、突ついて蟠れる蛇を驚かしたる者は、彼大石也。

●蛇も蛇、抑も大なる蟒蛇也。而して之を驅出したる大石は怖れて自失せり。

●彼の蟒蛇は、吾威力を示すは、此時に在りと言はぬ計りに、矯々として、睥め回はりつゝあり。

●深山大澤すべて靈物の窟宅するあり。古より修行者は、凄き森の中の古祠などに、一夜の宿をかりて、往々、妖怪を見る。

●彼の靈怪は、世の所謂『ぬし』なるもの也。六シかしく言へば山神河伯に外ならざる也。

●彼、犬養は進歩黨の「ぬし」なるもの也。大石が輕卒にも之を驅り立てゝ、却て其の怒に觸れたること、豈可笑しからずや。

●實を言へば、大石は犬養なるものゝ本性を誤解したりし也。彼、恐らくは、此の『ぬし』の神體を看破するの明無かりし也。

●犬養を以て、鳩山、尾崎に擬したるこそ。大石等一輩の不明を、暴露するものならずんばあらず。

●衰へたる、犬養を侮るとも、何程の事ある可らずとは、三年來、大石一派の早合點したりしところならずんばあらず。

●其實は、大石等以謂らく、犬養は其の家庭に疲れ切つて、精力耗盡せりと。

●大石の參謀は、大石に告げていふ、犬養は、黑染の衣を着て、高野山に奔るの外、立命の地ある可らず。

●去年の秋の初、犬養、垂死病中、流石の勝氣も弱はつて、夢現に、怪影を見る。

●殘燈焔無く、夜沈々。障子に映ずるの雲鬢、相對して二蛇を闘はしむ。

●犬養、魂消するもの幾たび、喉塞かつて聲を出す能はず。

●病愈ゆるの後、覇心猶存し、强て政壇に留まると雖も、復た昔日の氣力あらずとは、大石の聞く所也。

●大石は、唯だ犬養の衰を知る。而して、風雲の猶ほ病虎に屬するを知らざりしこそ、不覺なれ。

其七

●大石に對する犬養の逆襲戰は輓近、最も痛快なるものゝ一たるを失はず。

●兎も角も、壓迫されたる孤立者の奮闘を喝采するは人情也。

●犬養の逆襲戰は、此意味に於て、一時の人氣を集注せしものならずんばあらず。

●『鈴久』の名が、「成金」を代表する如くに、やがて『犬養』の名は、『逆襲』を意味する流行語となるに到らん。

●犬養の名は、其の政事的生命と共に、此逆襲戰に依

て一新されたるの感無くんばあらず。
●兎も角も、犬養は、之に因て、男振を上げたる也。
●此の逆襲戰に依て、進歩黨に於ける犬養の地盤の、尤も優勢なることは、證明せられたり。
●犬養は衰へたりと見へしも、猶ほ能く衆心を領略するを見れば、彼は智者也。
●大石は黨首の器を以て推さる。然れども、彼の智や、到底犬養の敵にあらず。
●然れども、見事なる逆襲戰の刹那に於ける、犬養の態度に對しては、吾輩頗る慊焉たるもの無くんばあらざる也。

其八

●吾輩を以て見れば、犬養は智者也。大膽にして機慧なる政事家には非ず。
●大石は、稍茫漠として圭角を沒す、首領らしき所あり、然れども、彼や頗る氣の小さき人也。
●犬養は大石に比すれば、度胸あり、是れ彼が逆襲戰に成功せし所以ならずんばあらず。
●然れども、彼や、猶ほ理非の委曲を口舌の間に爭ひ、彼の黨與は、日を渉りて、反對黨と折衝しつゝあり。
●之を星亭が、一擧手一投足の間に、本部を、奪ひたる、傍若無人の行動に比すれば、頗る精采を缺く。
●閑說、星亭も、犬養も、政客中稀に見るの讀書家也。
●星亭には、英雄、元來不讀書の趣あり。氣魄、人を壓倒す。
●而して、犬養には、讀書生らしき面影あり。星の如き、水際立つたる蠻勇を振舞ひ得ず。
●吾輩をして言はしめば、犬養は畢竟「戰國策」中の人物たるを免かれざる者也。
●其の博辯を弄する、其の名分に拘泥する、皆、犬養の弱處ならずんばあらず。
●彼の素養は、漢學に在り。彼の機略術數は、漢學生の雄なるものたる也。
●好んで術數を弄するは、漢學的政事家の趣味也。
●漢學出身の政事家と言へば、吾輩をして、直ちに、權謀の二字を聯想せしむ。
●這般の政客、上院に谷隈山あり、下院には則ち、犬養木堂在り。
●勿論、犬隈の智、谷の匹敵に非ず。然れども術數を喜ぶ底の、漢學型政客たるに於ては則一也。
●人或は、星亭を呼んで東洋流の豪傑と言ふ。一理あるに似たり。

●吾輩を以て見れば、星は些の漢學趣味を帶びず。漢學趣味を以て東洋流を代表せしむるものとせば、犬養こそ東洋流の政事家のモデルたるべきものなるべし。

其九

●犬養は趣味の人たるを失はず。彼、本來讀書生也。

●彼の庭園は、青苔遠く擴がり、森は欝として、秀翠大に喜ぶべし。

●彼の庭は、大隈のそれの如く、善美を盡くせるに非ずと雖、神韻則ち優れり。

●庭の中心となるべきは、千年の樅の大木也。老幹直立、天の逆鋒の如く、巍々然として、天の一角を占領するの概無くんばあらず。

●而して其の葉、猶ほ茂り、月夕、風露掬すべし。

●犬養は、苦戰惡戰の政爭より歸り來て、其の毒舌を斂め、襟を開き、此の老木に對して茗を啜る。

●吾輩は、此の老木を以て、帝都第一流の古木と爲す、王公の邸宅、亦此の好樹無き也。

●吾輩は、犬養が日夕眷戀焦戀し、手を盡して以て此の好樹を得たるを聞き、彼の「負けじ魂」と、彼の趣味と、兩ながら此の老木に繋かるものあるを想ふ也。

●聞說、此の好樹は、むかし高田の馬場にあり。犬養之に垂涎し、日夕、來り見ること、四五年の久しきに及んで、遂にアラユル競爭者に打勝ちたる也。

●彼は、此の老木に對して、つねに、其の眞面目を涵養しつゝあり。

●此の老木こそは、彼、『木堂』の好箇の表章ならずんばあらざる也。

此日、春雨霽れて、青天和風、テニスの情頻りに催ふす　　黑頭巾

犬養木堂論

一　知人

●犬養を論ずるには、彼と共に大石、尾崎の二人を對照して見た方が興味があると思ふ。若し此三役者の外に今一人を加ふるならば、島田三郎——芝居でいへば淺黃の幕の外で一寸狂言の筋を運ぶ丈けの役割しか勤めぬ男であるが、島田三郎——をも併せ見た方が興味があると思ふ。色を研究するにも、研究する一つの色のみを見るより、他の色を以て之に對照した方がよく

分るものである。然し今は時間がないので委しいことは到底話せぬから、何れ機を見て此等の人の事も話して見やうと思ふ。

○今より二十年前、尾崎が倫敦から歸つた當時「朝野新聞」に島田の人物を論じて「大將としては無下の惡大將にして兵卒としては無上の好兵卒也」といつた事があるが之が當つて居るだらうと思ふ。世の中では島田を以て淸廉潔白、一毫も主義を枉げざる君子人と思つて居る向もあるが、島田はさう融通の利かぬ男ではない、決して賣らぬといふ男ではない。高く買ふ者があれば賣りたいと思うた事もある。けれども誰も高く買ふものがないものだから、安く賣るよりも賣らぬ方が得だといふ、算盤上から今日のやうにして居るのである。島田には人と一所に事をすることが出來なければ自分一人でやらうといふ氣がある。犬養は偏狹だとか何とかいふけれども、彼は一人では物事をやらんのである。少數であつても仲間と共にやらうといふ氣があるのだ。

○犬養を策士であると世人はいふ。之が彼に對する第一等の間違つた批評である。彼は決して策を好む男でない。大石や尾崎は好んで策を弄する。犬養も策のない男ではないが策は好まぬのである。之を作詩に譬へて見ると、大石や尾崎は趣向さへよければ詩を作るといふ男である。履落しなどは一向に構はぬ、甚しきは韻も平仄も頓着しないといふ流義である。然るに犬養は韻も平仄も履まねばならぬ。履落しも決して許さぬといふ流義である。故に彼は漫りに策を講くことをせぬのである。尤も今度の新政黨問題について大石が韻も平仄も全く構はずにやつたといふのは誣言である。それは末派の事で大石自身は履落し位はよからうといふのであつたが、犬養はそれも可かんといふので、とう／＼今度のやうな喧嘩になつたのである。

○犬養は局量偏狹で、大石は度胸が濶大であるといふ。これは吾輩はよく知らん。然し之を建築に譬へて見るならば大石の家は、間口が十間で奥行が五間。犬養の家は、間口が五間で奥行が十間。坪數が大抵似た

ものぢやないかと思ふ。門前を素通りする肴屋や八百屋は間口と門構のみを見て、大石の方が犬養よりも大きいといふだらうが、御出入をする肴屋や八百屋から見れば二者の間には甲乙を附ける譯に行くまいと思はれる。

○主義を守るといふ上からいへば犬養の方は無論大石の上にあらう。然し大石といふ人は主義を變ずるといふよりは初めから餘り主義などに拘泥せぬやうに出來た人である。主義を抛ち、主義を變ずる人だといふのは酷である。性質がさういふ風に出來た人である。

○犬養は今日の如く、野にばかり居て、常に世の流れに逆うて行くといふ考の人ではない。當局者になつて大いに經綸も行ひたいといふ希望を持て居る。自己の經綸を行ふに都合がよければ大抵の人と折合つて行くことも出來ぬ人ではない。けれども今日の如き時代に當ては、彼のやる所はわざと時流に逆ふやうにも見えるであらう。が、彼も此點に於ては餘程考ふる所があり、追々流に從ひつゝ、流を導くやうな方法を考へて居るだらうと思ふ。

○尾崎などは其進退を一に主義によつて、理窟によつて決したものゝ如くいふものもあるが、それも局外者の觀察で必ずしも主義のみ、理窟のみで進退したのではない、若し操守の堅い事からいつたならば、犬養は確かに第一等であらうと思ふ。

○犬養の個人の性格についていへば、なか〳〵友誼に厚い、親切な、信義を重ずる人である。自分の仲間若くは部下のものなどに對しては、非常に身を入れて世話をする、之れが彼の美點でもあり、又弱點でもあらうと思ふ。



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一 金七圓五拾錢也　同 徑三寸丸 同 目方正味二十五匁付
一 金拾圓九拾錢也　同 徑三寸五分丸 同 目方正味四十匁付
一 金拾參圓貳拾錢也　同 徑四寸丸 同 目方正味九十匁付
一 金拾六圓五拾錢也　同 徑四寸五分丸 同 目方正味五十五匁付
一 金貳拾壹圓八拾錢也　同 徑五寸丸 同 目方九十匁付

三ッ組ノ部

一 金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸盃三ッ組無地盃 上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一 金拾七圓貳拾錢也　同 徑三寸丸 同 目方正味五十五匁付
一 金貳拾壹圓八拾錢也　同 徑三寸五分丸 同 目方正味八十匁付
一 金參拾壹圓也　同 徑四寸丸 同 目方正味百卅匁付
一 金四拾圓八拾錢也　同 徑四寸五分丸 同 目方正味百八十匁付
一 金五拾壹圓九拾錢也　同 徑五寸丸 同 目方正味二百卅匁付

（定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢）
（文字彫刻　一字　金拾錢）
（大字彫刻　一字　金七拾錢）

其他御好に依り彫刻類迅速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

商 玉寶堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地
（電話下谷特九六五 一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新着案内

Nevill, R. and C. E. Jerningham,—Piccadilly to Pall Mall. (Postage, 12 sen)........ 6.85

Knight, W. S. M.—The Business Encyclopaedia and Legal Adviser. 7Vols. (Postage, 84 sen)........ 33.50

Lankester R.—From an Easy Chair. (Postage, 12 sen)........ 1.15

Shaw, B.—The Sanity of Art. (Postage, 18 sen)........ .55

Wilde, O.—The Picture of Dorian Gray. (Postage, 18 sen)........ .80

Mabie, H. C.—How does the Death of Christ Save Use? (Postage, 12 sen)........ 1.35

Williams, G. H.—Careers for Our Sons. (Postage, 18 sen)........ 2.65

Bazin, R.—Autumn Glory. (Postage, 12 sen)........ 1.75

———The Coming Harvest. (Postage, 12 sen)........ 2.50

Sharp, Wm.—The Essays of Sainte-Beauve. 3 Vols. (Postage 18 sen)........ 4.50

Davidson, T.—A History of Education. (Postage, 12 sen)........ 2.75

Herrick, R.—Together. (Postage, 18 sen)........ 3.00

Higginson, E.—Alaska. The Great Country. (Postage, 18 sen)........ 4.85

Russell, C. E.—The Uprising of the Many. (Postage, 18 sen)........ 2.75

Lodge, O.—Man and the Universe. (Postage, 18 sen)........ 3.25

Hope, L.—Songs from the Garden of Kama. (Postage, 18 sen)........ 6.85

Macmillan, H.—The Spring of the Day. (Postage, 12 sen)........ 2.00

Brooke, S. A.—At Study of Clough, Arnold, Rosseti and Morris. (Postage, 18 sen)........ 3.25

Mathews, B. C.—Our Irrational Distribution of Wealth. (Postage, 12 sen)........ 2.75

Ross, E. A.—Sin and Society. (Postage, 12 sen)........ 2.25

Shairp, J. C.—Aspects of Poetry, (Postage. 12 sen)........ 3.00

Wilde, O.—The Ballad of Reading Gaol. (Postage, 12 sen)........ 1.35

Macmillan, H.—The Clock of Nature. (Postage, 18 sen)........ 2.00

Harrionson, F.—Realities and Ideals. (Postage, 18 sen)........ 3.75

Bourget, P.—The Weight of the Name. (Postage, 12 sen)........ 3.00

京都支店 郵便振替貯金口座 大阪一七三番

東京●大阪●京都

丸善株式會社

東京本社 貯金口座東京五番

大阪支店 郵便振替貯金口座 大阪七四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

春の句

漱石

蛙子や堰の扉の水ぐさり
雉子鳴くや二岐道の右熱海
薪能風に薪の火の子かな
陶器の土掘る崖や蕗の薹
囀りや今日も晴なる朝櫻
嫁ぐ姉の帶織る妹や桃の宿
木鋏の屆かぬ枝や蜂花に

○　近藤元

かつて我れ泣きしことども今にしてよろこばしきにやゝおどろきぬ
泣かざるをあきたらず思ふ君に我れあきたらずして今日もありへぬ
狂人の群にまじりて日を夜をさわぎてあらばあるはたらはん
ゆくばかり白晝になかばこの心たると思へどそれもなしえず
このまゝにいく日を經なば死ぬ身ぞといとかすかにもうたがはれぬる
今日もまた日毎ににぶる神經を感じつゝなほ我れは生くなり
日をあほぎふとうつむけば色あせて青き月てる胸の國見ゆ

○　太田生麥

野に立ちてわがふむ草と草ふめる淋しきわれを思ひてありぬ

われは今限りもあらぬ大海のその一點をまもり居るかな

死にし子は果ての一語に何言へるそれ聞かざりし心殘りよ

けふよりも明日は明後日は働かむかく云ひながら日をおくりゆく

おもひ給へ永くわかれてふと遇ひし君とわれなり何てゝちする

かざりなきことば用ゐておもふこと云はむとすれど心果さず

心より語り出しゝことにのみわれとは知らず涙ながるゝ

昔より數多ありける例（ためし）ともおもひて入りし道悔ゆるかな

美しき人をおもふにつけてたゞわがこの頃のおぞましさ泣く

○　關本梁村

春の日はいとやわらかしわが胸と海と空とに靜やかにてる

やはらかに君の手をとりさて言ふよ少女と云ふにためらへるかと

海を見て歌おもひつゝ君はあり波にむかひて我泣きてあり

泣きぬれし眼つぶらに見はりつゝ春の雨ふる午後の海見る

なにとなふ忌みたるものも自ら笑みてむかふるようになりぬる

戀をする性にもあらず戀をうくる性にもあらで老いて死ぬべし

歸るべくまたゆくべきにところなしかかる悲しき身と生れては

わか如くつたなき性をもつものにむかひてものを求めたまふか

わかき日は歸り來らずされど尙おとろへざりとほこりがに云ふ

○　梶原重雄

もろ／＼のなげきは價あげつろふされど死のみは眼を伏せてきく

あゝ墓の土またいよゝ乾かむとかなしう白き日をあふぎ見る

夕暮はさびしかりけりともすれば亂れし髪のかげ壁に見る

二人居れば逢魔か時も事はなし破魔の符よりも君貴かり

○　山村龍子

空瓶の如ころがれる値なき我れと知りつゝなほ生きてあり

見をなはせ此潮の如わが胸にうれしきことはみち〱て來ぬ

夢ほどの値すらなき事どもに誇りし若き日のはづかしき

何となく淋しさ覺ゆ友禪の帶をじゆばんに縫ひ更ふる宵

夜は明けぬ今萬物はおそろしき世を逃れ來てやすらへるさま

○　野の花

ゆるやかに海のなぎたりその底のわにふかさめもことなくてあらむ

神むしろいのらんとしていのり得ぬそのかよわさをとり賜ひけむ

地のものは土にかへると神むかし教へたまへといたましきかな

○　町田義雄

甘きもの好む性なり辛きこと苦きことをば強ひざれな君

我れ確かに降りゆくを知るあゝされど降りずば終にゆかれずと知る

何ものにあきしともなくあくびのみ多き今日なり怠りの日よ

○　梶御夢

反感を抱きてきみにむかふとき君はすゞしき眸もていましむ

否と云ひて諾とはいはぬ一瞬は速わがこゝろ冷えにけるかな

公園の白熱燈を脊に浴びて椅子(べんち)に一人ものを思ふよ

○　植松桂郎

大いなる喜びもとめ大いなる悲しみねがひ明日を待つかな

いつはりをいつはりと知り喜びを喜びて居るあさはか人よ

春の雪濃青の海の一群の白鳥にこそしづにふれ

かし

○　鎌田雅美

君といへばうなじかしげて唇に後れ毛かむそのみ描きゐぬ

優しさそのみひたくりぬある時は嚙みぬ泣きぬ童のやうに

○　大平遊民

雁わたる青菅原の上つ毛は縹色なしくれにけるかな

わが子等は林の若木雄々しくものびてゆくかな照る日の前に

何なりや汝が求むるは神なりやいな〳〵あらずひとりの少女

○　鈴木鳴象

我れに戀教へし人は我れにまた墓の石をば買へと云ふなる

風雨正に來らむとする時に似て靜に凪ぎぬ我が胸の海

○　法月紫星

すぎし日にかたく誓しおろかさや二人はいそぎ異道を行く

○　小木鳥城

淋しさや幾人（いくたり）あへどことごとく知らぬ顔なり木枯の町

いさかひに負けしにあらず安らけき常の心のかへり來しなり

○　芝野花

顧みてつゞく人なきさびしさに涙は落ちぬ冬枯の道

さびれ行く大路の柳蒼茫と暮れなんとして雪ふり出でぬ

生死のさかひに立ちてふと君を忘れしことの口惜しきかな

○　河邊紅衣

雪つみて朝寥廓の天地に星ひとつありやすらけきさま

○　土岐越水

火と水の海にはさまるちさき路みちのあなたにあゝ君は呼ぶ

油つき灯の消ゆるまで消えてより夜の明くるまで泣くも足らはず

○　佐々木朝風

東の國の聖にことゝはむわが此思ひ消すべから
むか
○　曾川龍外
わが魂は何處わかねど行く處あるがやうにもう
つら行くかな
○　高木碧汀
庭ひなき深みに落つるこゝちして君の手を取る
夢を見しかな
○　高鹽背山
われと我れとらはれ人の如くにも今日の一日を
たれこめてをり
君もなく我れも又なくあひ泣くに世のかゝはり
の有りや心に
○　梅田米三郎
春の畫窓にひぢつき紫の遠山みつつうつつなに
ゐぬ
したゝれる血の香を追ふて獵に走る獵犬の如み
心を追ふ
君ゆゑに生くる子なれば君ゆゑに老いてゆくを
も悲しまであり
大空の青さをみつゝ大海の廣さにすめりむゆく
かな
○　岡田幽溪
ものいはてたゞ笑む人と降り居て心足りけり朝
の川舟
○　上崎清太郎
我れ君を七種かをる香料の一つがほどにおもひ
ぬ君を
夜晝はいともたやすく明けくれぬ我れ朝夕に君
をおもへば
○　石井翠泉
春の月河原にまろぶ小石とも心は君が胸にねむ
りぬ
○　大庭清子
一人ゐの寂になれてはむしろ世を此まゝすねて
あらむと思ふ
○　長岡星
君は遠き人となりきとそゞろ戸に倚れば泪のな
がれぬるかな
君も今我が思ふごと月影を仰ぎて二人在りける
日など
○　指田白縦

青白き夜霧の中を小走りに人は行くかなまぼろしのごと

あゝ今日も事なく經しと君は云ふてのたそがれのうら悲しさよ

○ 尾崎渡水

吾が胸の小琴のなるをうかがへば君たゞ一人ひきて在しぬ

應募和歌は東京市小石川區原町百卅三、尾上柴舟宛の事

應募者にして往々歌稿を本社に送らるる人あれども、右は甚だ困入候につき、爾後是非共選者宛にて御寄稿願上候。



木蓮

木蓮や金燒けて居る御打敷　不可知
木蓮や鷄飼ふて居る淨土寺　同
間の抜けし晝の木魚や木蓮花　同
立てかけし葬儀の幢や木蓮花　同
木蓮や御坐談に眼泣きはらす　同
木蓮に高張立つや夜説教　同
木蓮花山門に雨靜かなり　横濱　青雲
木蓮や寺を學校の分教場　さく女
法事すむ隣の寺や木蓮花　京都　青雲
閉門の家の小庭や木蓮花　翁堂
木蓮や墓參と見えし春日傘　緑
木蓮花會葬人の散じけり　幽溪
木蓮や貧乏寺の崩れ塀　儺川
木蓮を縁に駄菓子の箱の上　青石

寄附の札枝に古りたり木蓮花　限川
試作場の白木蓮や蜂屋置く　波弦
僧と談ず鶏買ひ人や木蓮花　何子丸
それと知るかの君の墓や木蓮花　夢筆
木蓮の靄々として花荷かな　五尺郎
木蓮を活けて禪師の對坐かな　萩里
律院の白木蓮の尊とかり　狐伴
木蓮の花に垣ある小家かな　碌子
木蓮の花まばらなり坐禪石　石頭眠
木蓮花小坊主庭を掃いて居る　露々樓
木蓮や椽下高き山の寺　魔氣多
木蓮の堂より高き五尺かな　梧樓生
木蓮や町の埃の來ぬ住居　ゆふくれ
町醫者の庭狹けれど木蓮花　賢子
木蓮に尼になる子を惜みけり　耳山
木蓮に寫經の眼休めけり　流蔭
木蓮や耳環きらめく支那婦人　仙山
木像に箔置く庭や花木蓮　水竹
木蓮や僧居らぬ寺の樋漏る水　胥山
木蓮の花愛でおはす尊者かな　三碧
木蓮に戸閉めて庵主他出かな　如是

京は古き御寺御寺や木蓮花　火箭
木蓮の花ひら的の吹矢かな　孤梢
木蓮や木立の中の墓所　彼岸堂
堂前の親子地藏や木蓮花　舌寸
木蓮の花心や天に冲しけり　蕪汁
木蓮に晴るゝ此の日や師の法事　痩脚
塔も無し山門も無し木蓮花　馬廼顔
花木蓮床屋の瓶に參差かな　かしまろ
柑橘の覆とく庭や木蓮花　琴星
花木蓮普茶に寺から招かれぬ　蛙聲
打敷の濃き紫や白木蓮　人生
演壇の花瓶に高し木蓮花　蓬雨
木蓮に初雷の雲頭上かな　抱虎兒
お寺にはあるべきものに木蓮花　枕流
風なきに散る重たさよ木蓮花　痩佛
廢寺見に折り／＼僧や木蓮花　茅散史
紫は白きに如かず木蓮花　刀川
白木蓮鐘樓の鐘の錆古るし　方外
木蓮花落書多き寺門かな　小々
木蓮の花淋しとや烏も來ず　雨圃
羅漢寺の梅は散りたり木蓮花　枕橋

木蓮花寺の石段登り倦む　木犀
木蓮や大學林の運動場　春溪
木蓮に甘茶の壇を築きけり　壺人
木蓮や椽に干したる緋の衣　蓑人
山院の一夜の雨や木蓮花　不言
木蓮の雨あたゝかく暮れにけり　總子
唐人の青き上衣や木蓮花　漁翁
石塔に彫りし梵字や木蓮花　青城
庫裡といふも唯名ばかりや木蓮花　桃紅
訛ある鄙歌や六つむくれんげ　驟雨
木蓮や庭をつぶして建つる堂　泡子
傘に音無き雨や木蓮花　黄龍坊
インコ飼ふ籠によき日や木蓮花　枯葉
香煙紫に木蓮白き佛間かな　同
木蓮や鐘つき男書を閲　麥門冬
雨に布く白木蓮や卵塔場　同
木蓮や垣をへだてゝ白と赤　掬冷
金時の繪凧からむや木蓮花　同
木蓮に文鳥の籠つるしけり　狠子
信樂に古る陶畫師や木蓮花　同
木蓮に糞して通る鳥かな　鶯溪

木蓮や芭蕉に隣る庭の隅　同
木蓮花愚僧の庵に咲き候　啄生
老僧の木蓮いけておはしけり　同
山門の朱塗工事や白木蓮　照楓
散りさかる白木蓮や暈の月　同
額堂を出て木蓮を仰ぎけり　成功
百度踏んで木蓮に倚る疲れかな　同
經藏へ續く廊下や木蓮花　起堂
木蓮に根府川石の碑や高し　同
閑庭や木蓮一株一奇石　其蜩
木蓮や尼が机上の和名抄　同
墨にじむ開忌の札や木蓮花　月耕
木蓮や日南に刻む石佛　同
木蓮や貸間尋ぬる場末寺　鬼洗
木蓮や降るともなき雨に倦む　同
木蓮を淋しと寺に寄進かな　尺水
木蓮や庫裡に岐るゝ石疊　同
木蓮に蘭に先生の詩句の癖　梁村
木蓮に絹絲のよな雨のふる　同
裏門を寺に入る灯や白木蓮　木人
現住は御留守勝なり木蓮花　同

ここな寺娘あまたや木蓮花　同
木蓮や三日をつゞく寺施米　風水
錢取つて見する寺寶や木蓮花　同
僧に客碁ならずば書畫木蓮花　同
木蓮や役場に貸して庫裏古りぬ　太郎
木蓮は散つて芽枝や月淋し　同
木蓮や詩淫書淫は戒の外　同
塔頭も住まぬ大破や木蓮花　象外
石碑摺りに入來る寺や木蓮花　同
銅蓮の水の濁りや木蓮花　同
木蓮寺泉石の奇もなかりけり　同
木蓮の我が木戸桃の隣木戸　茶青
木蓮花落つれば落つる椿かな　同
木蓮や垣に糞する犬叱す　同
籾殼を積む里の家や木蓮花　同
餌を當てゝ馬の毛刈るや木蓮花　同
院々の木蓮や奈良は佛の地　丹羽郎
石磴を僧の足駄や木蓮花　同
堂守のあくび日和や木蓮花　同
聾居士の閑に處しけり木蓮花　同
舊に慣るゝ鄙の節句や木蓮花　同

木蓮や腰衣して若き尼　へき
木蓮や女長者の鐘供養　同
燒けて後建たぬ小寺や木蓮花　同
木蓮や百戸の島の一貧寺　同
木蓮や寺とも見ゆる丘の庵　同
舊記にはありて無き碑や木蓮花　同
木蓮に太子祭りの茶飯かな　同

本號應募者百二十四名、句數總て二千百五十四句。

募集課題
竹の子飯　四月十日締切
初夏　五月十日締切

定め
應募句は加賀國金澤市櫻畠九番丁大谷正信宛の事
句數一人十句以上三十句以下の事
締切當日までに當方へ屆くやう郵送の事

○へき、桃紅、燒花、青磁園、雨龍起、香哉、沐雨、夢駒、浪人、千岳、李雨、十一氏に白す。「雀の子」への御投稿は原稿發送後到達したる爲め乍遺憾沒書としたり。



噂の種

醉興子

◯木堂の親友が、木堂を諌めて、「何時もいふ事だが、君の口のわるいのは困つたものだ。今度の一件だつて、多くは感情の行違から出たので、感情の行違は多くは君が口がわるいから起つた事だ。ちと謹み給へよ」といつた、木堂謹聴して居つたが、「さうかな、僕も大いに謹まう、君の意見を感謝する」といつた其尻から、俄かに語氣一轉、「それはさうと、君、肥塚の此頃の耄ぼれ様はどうだ」とやつつけた相だ。

◯「君も酷いね、箕浦を箍が外れたやうな男だといつた相ぢやないか」と木堂を詰じると、「いや、僕はそんな事といつた覺えがないな。箕浦は初めから箍のない男だもの」と平然として答へた相だ。

◯「木堂は貧乏だ〱といふが、今でも一ケ月二千圓位の生活をして居るんだ。三菱からはもとより貰ふんだらうし、又其外でも決して金に清潔な男でないよ。現に郵船會社の問題の時などは大津淳一郎と二人で何萬圓とかとつて、そして大津にはポッチリしかやらぬので、大津は今でも怨んで居るといふ話だからね」と話した人があつたので、他の或人に其事を訊いて見ると「それは大違ひだ。昔、ガンベッタが盛名を馳せた時、惡言を放つ者があつて、ガンベッタは實に贅澤な奴だ。クックは態々希臘から雇つて來てゐるんだ。彼奴は國家の財を以て一身の榮耀を貪つてるんだ、といはれたが、其實希臘人のクックといふは、全くの無宿者で、伊太利のクックよりももつと安く雇はれてゐたのだ相だ、木堂亦此類の誣言に中てられたものだらう」といつて居た。

◎本堂と學堂とは慶應の同じ級に居つたが、學問といひ、人物といひ、嶄然として儕輩を拔んでて居たので同塾の二秀才として、下級からは素より、上級のものからも尊敬されてゐた相だ。

◎ある政治家が、多勢の仲間の前で「君等が田中宮相の結婚について、ワイ〳〵言ひ罵しるのは不義の金と妙齡の美人と、兩手に摑まうとするから、それを妬くんだらう。けれどもそれもいゝぢやないか。宮相今や六十七才、廿一才の美人を妻にすれば、五年にして、ヨイ〳〵となり、十年にして死ぬ、さうすれば孝子婦人交際場裡に出しやばつて來て、贅澤もしやう、役者買もしやう。そして財産の半分位を費つて了ふ。社會の貧富玆に於て平均して來る。天の配劑も亦妙なる哉ぢやないか」とやつた。處がそれを聞いて居た某侯は「〇〇君は未だ其一を知て其二を知らざる者だ。田中は每年一人づゝの女子をヨイ〳〵にして居るんだよ」とやつたので一座洪笑湧くが如してあつた相だ。

◎三浦將軍の惡口のうまい事は有名なものだが、谷將軍が西洋館を新築したのを評し「破れ障子の破ら屋らしい處に居れば、谷も谷らしいが、今度の新らしい家に行て見ると、谷と向合つて居ても、何だか谷と二人連れで餘所にお客に來たやうで、一向谷の家へ來た感じがしない」といつた相だ。

新刊批評

▲演劇新潮　小山内薰著　博文館發行

明治三十七年より全四十年に至るまで諸種の雜誌に掲げたる演劇に關する著者の研究を集めたるものにして、前半は多く西洋の演劇に對する研究、後半は日本演劇の感想錄也。何れも氣が利きて、且つ新らしき處あり。老朽株の古實調べや通比べなどに比して劇壇を益すること多大なるべし。處々に挾めるエハガキは極めて面白し。(定價五十五錢)

▲失樂園（第四卷）　內村達三郎譯註　建文館發賣

始祖夫婦純愛の卷と小題を附して失樂園第四卷に丁寧懇切なる譯註を施したるもの也。譯註者はもと篤學の士、充分なる信認を以て讀むを得べし。(定價五十錢)

▲小理小情　沼波瓊音著　國民書院發行

著者の短文十數篇を集めたるもの也。自序にもあるが如く、不用意にして、投げて書いて居る處に一種の面白味あり。（定價三十五錢）

▲傍若無人論　野依秀一著　三田商業研究會發行

「實業之世界」に一種の怪腕を揮ひつゝある著者の氣焔を集めたるもの也。重厚の氣に乏しく、文章も多少鬼面人嚇かす底の所あれども、又なか〳〵氣が利きて小氣味よき箇所も少からず。一部の人には喜ばるべき價値あり。（定價金二十錢）

▲快氣焔　野依秀一著　三田商業研究會發行

「名士と記者の快氣焔」を集めたるもの也。面白き讀物也（定價二十錢）

▲古詩新釋　岩垂憲德著　建文館發行

晋、唐、宋、明の有名なる古詩十一篇に丁寧なる註釋を施したるもの漢詩の余りに輕視せらるゝ今日、學生諸士の一讀を望む。（定價三十錢）

▲トモエ集　長谷川康譯註　建文館發行

ホーソンの「泉の幻影」、マコーレーの「バイロン卿」、「マスク、オーレルの「英國の坊つちやん」の三篇の譯註を施したるもの也。（定價三十五錢）

▲日本史蹟　熊田葦城著　昭文堂發行

歷史の知識は地理の知識と結合せしめなければ確實なる記憶とならぬものだが、此篇は此處に注目したものであろう、名だゝる史蹟を拾ひ上げて一々それに應ずる史實を錄述したもの、必ずしも詳密とは許せぬが筆には一脈の情趣が籠つて居て、雅俗孰れにも偏せざる處に何人をも引き付ける力がある、家庭に薦めて子弟の讀物とすべき好書である、それに鮮明なる寫眞版が極めて多く挿入されてあるのは、更にその趣味を豐富ならしむるものである。（定價金二圓）

▲花の御殿　上田萬年選　隆文館發行

三島霜川氏の作で頗るさらさらと趣ある筆に書きなされたもの、單なる御伽噺と違ひ、一種の教訓を寓したものだから、かち〳〵山や桃太郎に倦んだ小供達には相應しい讀物であろう。（金四拾錢）

▲眞田幸村　竹香生著　隆文館發行

誰も知る眞田幸村、彼れの一生をその生ひ立ちよりその周圍と細心なる注意を拂ひて一篇の小説に作り上げたもの、行文も頗る流麗で時代の面影も現はれて居る。（定價壹圓）

▲經國策　タフト原著　實業の日本社發行

此篇によつて新米國大統領タフト氏が、日米若くは清米の關係を如何

に考ふるか、米國に於ける共和民主兩黨の政策は如何、その人種問題、その勞力と資本との問題、此の等重要なるものを盡く識得する事が出來る、そしてタフト氏の性格の偉大なる事も分る。（定價金四拾錢）

▲武士道後話

岡　三　慶　著
實業之日本社發行

一括して武士道と稱せらるゝもの、その實業的方面に現るゝ諸德を列記してそれに應ずる古來の模範的人物の言行を交え、丁寧に訓誨するところあるもの、毎章の終に一々用語の說明がある等、何處迄も童蒙に親切なるものである。（正價金八十錢）

▲偉人クロムウエル

ルーズヴェルト原著
實業之日本社發行

マコー、レー、カーライル共に偉人クロンウエルを評して居り、盛に人に讀まれて居るが、而かも毀譽褒貶容易に定まらず、その心事その眞骨頭は兎角に揣摩臆測の府となつて居る、此偉人を更に現代の偉人と目さるゝるル氏の評騭したものだ、彼には彼の見方があつて面白い。（正價金一圓）

▲經濟學提要

凡澤久五郎譯述
實業之日本社

リチヤード、テー、エリー、及びジョーヂ、レー、ウヰツクワー兩博士の原著譯述である、全體を總敍、經濟小史、經濟原論、財政論の四に分ちて詳に論述したもので、著者が既に基督教的社會主義者との一部よりの稱呼を得て居るが如く、自余はさてしもあれその社會主義の事に於て仔細に理路を進むる所確に漫議を許さゞるものがある、譯文頗る平明にして流暢、斯界に於ける好著たるを信ずる。（定價金壹圓）

▲田鶴子

篠原嶺葉著
如山堂書店發行

正しき戀を邪寛する戀、その間に幾多の波瀾が湧き出て、兎角に好事實多きを喞たしむるが、遂には邪は衰へ正は榮へるといふ目出度き結末を見るので、脚色は左迄にいふべきものでない、寧ろ巧んだ跡の見え透くものであるが、行文は仲々硯友社張りの達者なもので清麗の二字を許すことが出來る。（定價金九拾錢）

▲袖珍類題芭蕉句集

文鍾堂出版

雞肋捨て難きの惑なき能はずとて、少しは著者自らの疑あるものを迄収めてあるが、それ等は一々疑の符號が附けてある、其他は諸書を涉獵してその考證明確なるもののみを集めたものである。（定價金二十錢）

▲新自助論

波多野烏峯著
實業之日本社

吾人の模範とすべき自助的成功者、それも四人のみに偏せず、偏く邦人をも例證して以て成功の福音を說いたもの、青年に與へて好個の亢奮劑たるを失はぬ。（定價金五十錢）

▲橋本左內

西村文則著
昭文堂發行

越前の英傑橋本左內の識見幷に性格をば、その父母を敍しその朋友を敍し、或は論策に或は詩文に、或は書翰によつて周到に現出せしめたもの彼を知るに於て頗る遺憾なきものである。（正價金六拾五錢）

▲歐羅巴（前編）

小田内通敏著
三省堂出版

本書はその題目に冠するに更に趣味乃地理の五字を以てするが、今之

を繙き見ると、實にその名に伴ふて餘りある内容を有して居る、地理の書その精細なるものをのみ求めるなら、蓋し汗牛充棟の字面を用ふるも大して誇稱でもなかろうと思ふ、が趣味を以て讀まるべきものとてはない、從つてその知識が空疎に失し易く、而してその空疎は直に記憶の薄弱を招致するが、此篇は千百里外の事物光景をヒシと吾人に手近な事物光景と聯想の付く樣に苦心し説明してあるので、知識が直に身になる、地理を活かして吾人の腦に沁み込ますには、後來の著述者に常に此種の用意が必要であると思ふ、數多き挿圖挿畫は更にそれに一層の助を與へる、今より後篇の出づる日の早からん事を欲する。(正價八十五錢)

▲國民百科辭典　富山房發行

大辭書編纂の流行は此一二年來我國に於ける顯著の現象である、教育字書とか家庭百科字典とか歐學字典とか醫學字典とか、色々樣々各方面に度て日に月にを見つゝあるのだが、何人の日用にも便じて普通の知識を普及せしむるには、それに相應する設備がなくてはならぬ、概括した國民教育といふ上からには寧ろ此種の字典が最も効益あり最も歡迎せらるべきものであろう、此書泰西のミニエチユア、サイクロペヂアの體裁に倣ひ廣く各科を網羅してそれそれの專門大家九十餘氏の協力に成れるもの、全紙數號版千六百七十二頁而かも天地左右の空白を極小部分に縮めてあるから内容の豐富さは普通の書册の頁からの聯想意外であるであろう特に精巧鮮麗なる插畫挿圖の多く、更に全紙大の彩色版の處々に挿まれてあることは多大の稱揚な値する、(定價三圓七十錢)

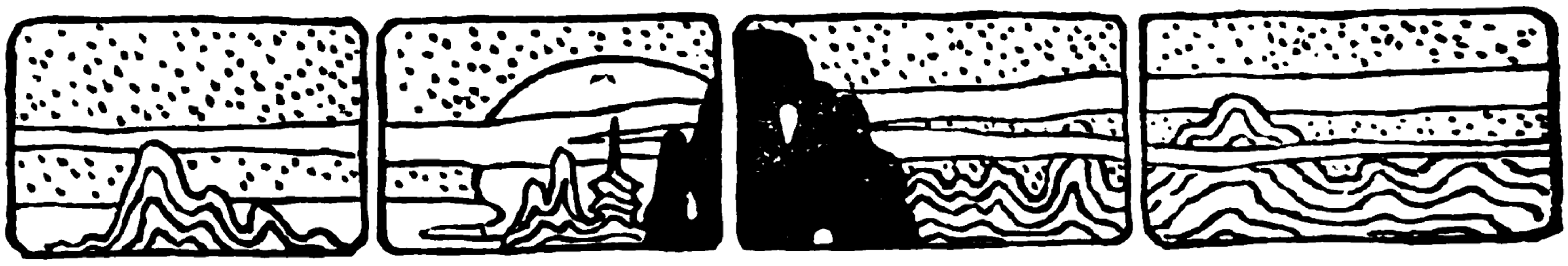
▲家庭の幸福△　羽生白玄譯　東京堂發行

原著はトルストイものである、譯筆流暢遺憾なしとまでは言へぬ、否遺憾は頗るある、まづ十分譯語を盡し得ず、適切な語があるのに、バタ臭く持つて廻つた所も時にはある、がそれあるにも拘らず一種嫌でなき味が潜んで居つて、矢張卷を捨てざらしむる處のあるのは、譯者は文に得ずして情に於て得た所があり、それが一道の生氣を付與し置くことが然らしめるものと思ふ、一讀を値する　定價三十五錢

▲惑星　小川未明著　春陽堂發行

昨年春以來の小品九種を集めて此一卷の書を成したもの、著者の作品に就いての意見は綠髮その他の序者に對しても數多度吾人の意見を述べて置いたが、之を見るも當時と格別異なつた感じは起らぬ、只言ふべきは氏が同一趣味を守つて幾年移らず、而して世間が同一冷眼を酬えて同じく幾年移らぬことである、未明氏の趣味の神秘にあることは人皆之を言ふが神秘必ずしも不自然とはいへまい、此活人生に即して而かも窺はるべき一種の神秘はある、未明氏のそれは幽玄なる理數を潜めた深奥なる神秘觀に入つて居るとはいへぬ、妨げなる處は離れぬが、而かも鏡花趣味のそれにはあらで、彼よりは吾人の情感に於て迎へられ易きものである、只それが多數の趣味にさらぬ故に從つて多數に點頭かれるとは人一倍の努力工夫を要する、予は未明氏の勇氣を愛すると同時に時宜に惑はされず、百錬の功を他日に期して依然精進せんことである、それを捨つるは未明氏の自殺を意味するからである、此著相變らず初の數篇を讀んだ丈の評であることは著者に對して濟まぬ處であるが、之によつて昔ながらの感を起したから自余は直に類推に付しても餘り考は變るまいと思ふ、變つたら更に何處かで發表しやう。(定價金五十五錢)

春期大附録



母

德田秋聲

八疊の靜な部屋から、健吉がまだ起きて來ぬまに、人々はひそ〳〵と、茶の室で色々な事を語合ふてゐた。

「東京はもう、そろ〳〵櫻が咲く時分ださうなね。」

「そんなら、行くともうお花見だわね。お祖母さんも、咲子さんも、今年は向島や上野の花が見られるのね。」大きい花簪を挿した、健吉の姪が愛くるしい目をしながら、可羨しさうに言つた。

「お祖母さんも、長いあひだ苦勞なすつたんだもの、是からは樂をなさらなけア…。」と大い姉は長煙管に莨を詰めて、母親に渡した。もう四十を越してゐる。

「樂が出來るとやら出來ぬとやら…。」と母親は氣のない吸方をして、思の深さうな顏を

俛いてゐた。

「それも嫁さん次第や。」と小い方の姉に附加へるやうに言つた。此も四十近く、大い姉とは腹違である。つまり健吉と同じ母親の實の娘である。

「イも、氣はずッと樂ですよ。當分食物が口に適はんかも知れんけれど、其代り天氣は好いし、見る處は澤山あるし、マア病氣さへなさらなければ、……それも醫者の自由の利く處ですから、少しも心配いりませんよ。」

「病氣の時は、衆て此方から行くんですね。」と小い姉は氣遣はしさうに言つた。

「まだ五年や六年は、そんな事もあるまいと思ふがね。其内には、此方かつて少しは樂にならうかね。そして、男は東京へ一人二人遊すやうにしなけアならん。」

「男と云へば、もう皆なステーションへ行つたやらうか。」

此樣話が交されてゐるうちに、健吉は眼鏡を袖口で拭き〳〵出て來た。立つ方も送る方も、人々の心は急にそわ〳〵して來た。

此處は實の姉の家である。健吉は幾年振かで歸省して、長年顧みなかつた母親を、今度東京へ引取らうと云ふのである。母親はもう六十五六になつた。此近年の生活は寂しい代りに極單純であつたので、體には肉を持つて來た。けれど、慈母のテンダーネスと云ふやうなものは、もう疾の昔に冷めて、愛情の閃光らしい、笑すら顏に上るとか稀である。若い折のとは知らぬが、何處か臆病らしい優しいうちに

も、冷味のあるやうな目でチラリと人の顔を見るのが癖で、胸に色々の愁を營んでゐるとが、其て解るやうにも思はれる。離れてゐると、其の不幸な生涯が頭腦に浮んで、樣々に幼時の記憶が喚起され、優しい母親の心持が、しみ〲想出されるのであるが、歸つて見ると、差向になつてゐても、母子の胸と胸とに何物も通つて來ない。母親にも飽足りないやうな心持があつたが、健吉にも其があつた。

六七年前、一度歸省した時にも、一緒に墓參をした限り、健吉は一人で外へ出てばかりゐた。而して此處の空氣にも飽いて來ると、急に明日歸ると云つて、行李の始末を爲始めた。母親も、「餘り詰らない！」と、唯だ一言言つた限であつたが、送つて出た時の目のうちには、深い絶望の色があつた。健吉も、二三日は好い心持が爲なかつた。後で其時の感じを書いて寄越した母親の手紙を、健吉は讀むに堪えなかつた。

健吉は、莨を一本喫して、其から今日の天氣工合など候ふた。空は相變らず、照るかと思ふと、又鳶色の幕を垂れたやうに、曇つて來る。健吉は子供の時から此が厭であつた。何處かの庭で、サク〲と庭の氷を搦つてゐる音がする。もう三月の中旬で、長いあひだ凍てゐた氷の下から、柔かい黒土を見出す時の心持は、今でも想出せる。此らは廢れた屋敷町で、今朝は殊に靜である。それでも、空には風があると見えて、紙鳶の唸が急しく聞える。健吉は懐かしい夢の迹のやうな、自分の少年時代など、想出してゐた。

健吉が茶の室で、義兄と話を交へたか、顔を洗つたりしてゐるうちに、姉はざツと座敷を掃いた。床

には鞄や紙包、茶の室の方にも、行李が三つばかり轉してあつた。それから尾頭附の膳や、銚子などが運ばれて、人々は口數少なに膳に向つた。

「電報は？」と義兄が訊くと、

「ステーションで打ちませう。」と健吉が答へる。

「お祖母さん、それで寒いやうなことは有ませんか。體が温まるさかえ、一ト口飲んでお立ちなさい。」

「咲さん、貴方汽車の乘降に氣をつけてあげてね。」

と云ふやうな事が、ポツ／＼と言出される。

咲子は今茲十六になつたのであるが、脊が矮いので、年下の姪よりも、ずツと少く見える。亡つた一番末の妹の子で、二つの時から、祖母の手許に引取られて、漸く女になつた。目の凊しいのと、髪のたツぷりしたのが取柄で、顔も樣子も調つてゐない。父は今でも遂ひ三里先の里に住つてゐる。母親が死んでから、父が繼母を迎へやうとした時、母は可哀さうだと言つて引取つて來た。苦しいなかを、孤兒の孫を見苦しくないやうにと、身裝など作らせる爲めには、自分の所有物を犧牲にして惜しまなかつた。一つは寂しかつた故でもあるが、二人の娘や、東京の健吉にまで氣拙い思をさせても、咲子を親の手許へ還すに忍びなかつた。父親は其後後添に三人まで子供が産れて、今では幾ど咲子と交通もしない位である。嫁に行く折には、相當の心配もしやうと云ふやうな約束もあるが、後妻が氣に喰ぬと云つて、母は相手にもしないでゐる。でも、年に一二度は手織物の仕送ぐらゐは續けて來た。健吉が今日まで母を

東京に迎へなかつたのは、一つは咲子がゐるからで、母親の健吉を嫌がるのも、咲子が可愛いからなのだ。

一同がまだ箸を執つてゐる間に、咲子はコツ〳〵ともう飯を濟して、部屋の隅で、自分の持の手提の中を弄りなどしてゐた。其處へ姪の勝子も行つて、互に別を惜んでゐるうちに燥いだやうな笑聲も起つた。此限もう會へないかも知れぬとか、東京へ行つたら、月に二三度は必然便をしてくれとか言はれる、咲子には矜もあつたが、又勝子の知らぬ不安もあつた。

其間に、義兄はステーションで待合すと言つて、一ト足先へ出た。腕車が來ると、旋て健吉は支度も出來て、荷物がドカ〳〵と玄關先へ運ばれる。家中バタ〳〵になつて、女連の顏は皆な沈んでゐる。母親は、汽車に乘つけぬからと云つて、紫雪など侑められてゐたが、家が空くと云ふので、見送をしないに決めた姉は、二人とも聲を曇らせてゐた。

健吉が元氣よく腕車に飛乘つて、荷物の指圖などしてゐると、一同は母親の腕車を取捲いて、名殘を惜んでゐた。

「これで、まア御祖母さんも幸せと云ふものです。」と大きい方の姉が安心さうに言ふと、母親は寂しさうな顏を背向けた。「長々お世話になつたね。皆な小供達を大事にね。」

咲子も一同に挨拶して、捷こく腕車に乘つた。

外はまだ肌にイラ〳〵するやうな春寒の風である。腕車は石高な道をゴロ〳〵と挽出された。近所の

子供が、二三人其處に立つて見てゐる。血や息の通つてゐるやうな、此土地から、引離されて行く、母親は、時々振顧つては見てゐたが、咲子は頰を撫でる朝風に、若い血を躍らせて、リボンをひら〳〵させながら行つた。

母親のお北は、長いあひだ、東京に行つて暮すのを樂みにしてゐた。

お北の森本へ緣づいたのは、其の廿幾度かの頃であつた。丁度前妻が死つた後で、子供が三人あつた。よのなかは未だ封建時代である。お北が此の多勢の子供のなかへ入つて來てから、間もなく長男は元服した。而して、硬い白小倉の袴など穿いて、お小姓に召出された。長男も次男も妹も、美しかつた其母親に似てゐた。長男の頭拔けて丈が高く、手足の伸々したのは、父親から享けた骨格である。氣のサバサバした長男と頭腦のねッちりした次男とは、刄物に手をかけて、能く喧嘩した。繼母はヒヤ〳〵するやうなことが、幾度もあつた。

大な銀杏や、古い池のある其屋敷を引拂つて、此一家が、貧しい町へ引息したのは、もうカラリと世の中の變つた頃である。其をりお北は二番目の實子、四ッになる健吉に乳を呑してゐた。自分は痢病の病揚であつた。宅はだゞッ廣い臺所に大な圍爐裏があつて、部屋が五ッ間ばかり、庭には梅、茱萸、巴旦杏の大きな木どもがあつた。健吉は十四の歲まで、此の暗い家で育つた。臺所の橫の、長い物置へ入つて、長持のなかゝら、刀など出して來たこともある。大な茶釜が圍爐裏の上にかゝつて、其處に焚木を燻

べながら、屋根を打つ霰の音に怯えてゐたこともある。父が獲つて來た鴨を料理ると云つて、盥に水を張つて毛を毟つてゐる、母親を番してゐた事もある。

健吉は、產れるから弱かつた。體も小かつた。發育は遲くて、毛が薄かつた。時々熱病にかゝるのか、母親には大なる苦勞であつた。心細さうに、ジカ〱泣く子を胸に抱締めて、私と寢所へ入れることが度度あつた。徹夜一ト目も合さず、看護することも數次であつた。

冬の夜、炬燵に當つて、武者繪を見てゐると、長男の繁穗は、末の子の健吉を捉へて「お前の顏は、そこにゐる其の辨慶と云ふ坊主に似とるぜ。其の坊主は乞食坊主や。」

母親は、傍で苧を紡ぎながら、笑つてゐる。健吉は、可怕さうに本を閉ぢた。

「健、お前は何處から產れて來たのぢや。」

健吉は默つて、白い大い其顏を見てゐる。

「お前は木の股から產れて來たのだぜ。それを、山へ行くとき御父さんが、可哀さうだと云つて、獵袋へ入れて、家へ連れて來たのぢや。お前は家のもんぢやないのぢや。」と意地惡さうに言つた。

「さうでないね。」と母親は傍から言をかける。

健吉の頭腦には、其頃から深い子供の悲哀があつた。母親は、それを染込さぬやう〱と、陰日向になつて、出來るだけ大樣に育てた。

學校へ行くやうになつてから、健吉は毎朝姉と一緒に行つた。魂情の强い健吉の實の姉は、弟を送込

んでおいて、一町程手前の女子小學校へ引返した。健吉は長いあひだ學校に昵まなかつた。姉が出かけた後でも、籠の小禽を弄りなどして、晷を移すので、母親は心配さうな顔して、色々に言聞した。一度健吉は、目の色まで變つた母親の小脇に引ッ抱かれて、突然深い井戸の縁まで連れて行かれ、肝を冷して恐怖の聲を放つたとすらあつた。

學校に昵んで來る頃から、健吉は能く夜の未明に目を覺した。床のなかにマジ〳〵して、板戸の白んで來るのを、待遠しがつてゐたが、旋て獨り自身に起出して、寢息の靜かな兄弟の寢室から茶の間へ出た。而して寒い臺所で、石の大な竈の前に蹲坐んで、火を焚はじめた。母親は、飯の吹出す時分に起出して來て、黄粉の握飯など拵へてくれた。健吉は、それから眞先に飯を濟して、學校へ出た。學校は、まだ人ッ子一人居ない。健吉は、小遣部屋の爐傍で、何時までも暖つてゐた。

其頃父親は、養雞など試みてゐた。公債が、段々あちこちへ散離つて、家計が次第に不如意になり、兄は役所へ通ひはじめ、次兄は叔父の宅へ養子にやられた。大い姉ももう縁についてゐた。不自由がちに育てられた健吉は、近所の友達の身のうへを例に引いて、時々母親を窘しめた。

「お前は取らずと云ふて、三男坊やさかえ、あの人達の眞似せうと思ふのは無理や。」と言つて窘めた。

それでも、健吉は能く、内證で小錢を貰つて使つた。大事に簞笥の底に收つてある錢を出して、私と所好な芝居などへ遣つてくれた。

繁穗が役所通ひを爲ながら、法律を勉强するやうになつてから、森本の家族は、川沿の比較的綺麗な

家へ引移つた。其頃から健吉の學事や、方針に就いて、色々の評議が始まつた。繼母と氣の適つた兄は、何處までも學校生活を遣遂させると主張してゐたが、其頃から實世間的に傾いた次兄は餘り悦ばなかつた。母親とも氣風が適はなかつた。

長兄が家を出て、餘所へ轉勤するやうになつてから、父親も間もなく死んだ。健吉と母親とは、始終額を鳩めて、空想の多い前途の事など語合ふた。

健吉は、不安な生活の中から、遣瀬ない思をして、もう學校へ出てゐる氣も爲なかつた。初めて漂浪の旅へ上らうとした時母親は一人の男の子の健康を危んで、極力それを拒んだ。

裏へ出て、毛蟲の多い梅の木の青葉蔭に、母親が洗濯をしてゐると、青簾を卸した書齋の机の前で、深い想に耽つてゐた健吉は、疲れたやうな呼吸を吹きながら、緣側にあつた古い學校靴を引かけて、出て來た。健吉は青々した荒庭を眺めて、「今年はもう夏になつた。」と深い溜息を吐いた。

「今月の末に、旅費出來るかね。そして、着物も此樣ものを着て行く譯にや行かん。」

母親は苦勞性の目を擧げた。「んぢや、如何しても行かんならんかね。」

健吉は、「こんな土地で何をして暮さうと思つて‥‥。」と呟きながら、破土塀の際の、木蔭へ跪坐み込んだ。

「學校も愈よ罷めにやならんかね。」

「學校ばかりが勉強する處ぢやないからな。」

母親は、「他に學問さしておかんと、己が死んだら、お前の養ひ人がない。」と言つた、老いた父親の詞を想出してゐた。而して、其樣弱い體で、旅で患ふたら如何する、今少し年も取り、體も堅つてから、其時順よく東京へ遊學したら可からう、と云ふ事を幾度も說いた。

けど、健吉の頭腦には、然云ふ餘裕はなかつた。不安の思に折々心は暗くなりながらも、何事も易々出來るやうな氣がした。

焦した惱ましい月日が、其後幾月も續いた。

健吉が、二度目の漂浪の旅に上つた時、母親の身の周には、古い長持と、蝕んだ箪笥と、曇つた鏡と、其他には幾んど何物もなかつた。

母親は、古い錦繪や、少しばかりあつた古錢や、二三本の脇差など賣つて、其時も健吉のために旅費を拵へた。

四月の初めて、梅がもう散かけてゐたが、其日は寒じが强かつた。夜明頃から、チラ／＼雪が降つて門を出る頃には、一二寸積つてゐた。健吉は、其中を、母と妹とに送られて出て行つた。

二三年經つてから、健吉の手元から、をり／＼爲替が來るやうになつた。

長い苦しい、生活が其終を告げやうとした時、間もなく母親は末の娘に訣れて、其子の咲子を、繼母

の手から引取らねばならなかつた。
健吉と母親との距離が、妙に遠くなつたのも其頃である。母親は、優しい祖母の心持を知らぬ我子から。再三長い手紙を受取つた。錢勘定をするとすら賤んで育てた健吉の、心の底の見え透くやうな手紙を受取る度に、母親の心は曇つた。
孫娘は、素直に育つた。苦しい世帶の内裏や、冷かな周圍の環視……と云ふやうなものを娘は少しも感じずに過した。
母親は、むかし在つた自分のやうに咲子を育てやうとした。而して宛然の自分を、此子の胸に吹込まくとした。

東京に着いた晩、母親は長々と、初對面の嫁に挨拶した。其辭は、思つたよりハキハキして、何處か毅然した處があるやうにも思へた。一人々々、子供を可懐さうに眺めて、體の大いのに惘れてゐた。
其晩は、長い間放拋つてあつた、湯殿へ水を汲込み、嫁の加奈子が案内して、脊中など流しませうと言つたが、母親は遠慮した。一體が、人に世話焼すのが大嫌で、自分の事は、昔から自分で爲通して來た。けれど、寒國人の習ひと見えて、几帳面な處はなかつた。久しい貧苦の壓迫を受けてゐた所爲もあらう。
「え……でも少し……。」と嫁は世辭笑をしながら立つてゐた。

「いゝえね、咲に、後で少し擦つてもらひますさかえ。」と體をモヂ〱させた。

こそ〱と湯殿から上つて來ると、忙しい臺所を通りすがりに、手輕な竈などを、ヂロリと見て行つた。

「東京のお流は世話がなうて可いとこと。」と呟いた。

而して、「さう御馳走せんことや。長く居るものに其樣心配は要らざらん費や。」と窘めるやうに言つた。

嫁は、「え、でも貴母…其代り、長いあひだには、何を差上るか知れませんよ。」

母親は、奥の四疊半へ入つて、咲子に着物を着せ初めた。髮にも櫛を入れてやつた。

「阿母さん、あのそこに白粉がございますよ。」と加奈子は長火鉢に、七輪の火を移しながら、奥へ聲かけた。「どれ、小母さんが今着けてあげませう。」

加奈子は、奥へ入つて來ると、鏡臺の側にあつた御園白粉を掌で釋いて、不思議さうに見てゐる咲子の顏へ塗つてやつた。

加奈子は、咲子の被布の衿の處を見て、「ほんとに此のお被布よく出來てますよ。お祖母さんがお仕立なすつて？」

咲子はニヤリと笑つて、俛いた。

「何が何やら目の薄い老人の仕事てね。」と母親は黒繻子の狹い帶を締めながら、「毎度また綺麗な片を頂

さまして……。」

「いゝえ、一向行屆きませんて。」

母親は、咲子と二人て、暫く其處に坐つた。まだ汽車に搖られてゐるやうな心持て、頭腦にも落着がなかつた。子供の多い家の中は、見てゐても局促しいやうて、庭も鼻が閊えさうに思へた。

飯の時、ごた〳〵した中て、酒を强ひられて、猪口に二三杯飲んだ。話は立つ時のよや、汽車のなか、田舍の娘達や健吉の子供達の事て持切つてゐた。咲子は小くなつて、祖母の側に直り喰ついてゐたが、そり〳〵何か言かけられては、笑顏を見せてゐた。

健吉は、持つて來た土産の粗末な翫具などを出して、子供を悦してゐた。加奈子も如何かすると其方へ氣を褫られて無心に眺めてゐながら、「家は子供がをりますから、煩さございますよ。」とちよい〳〵、老母の顏を見遣つた。

祖母は淋しい顏に、時々ニヤ〳〵笑つて、氣乘のしない愛相を言つてゐたが、子供は祖母と咲子との顏を眺めては、含羞んだやうに俛いた。

「貴方、此方は誰方だか知つてますか。」と加奈子が延に聲をかける。

子供は氣疎い顏をして、二人の顏を見比べた。

部屋には始終陽氣な笑聲が起つて、子供は我家を誇顏に騷まはつてゐたが、健吉は髯を引張りながら、ニコ〳〵して見てゐた。

子供が鎭まる時分には、老母の顏には疲勞の色が見えた。今まで緩んでゐた、健吉夫婦の顏にも、今迄のやうな、打明けた樣子が見えなくなつて、眞面目な内輪話が始まつてゐた。

其晩は、其て早くから皆な寢所に就いた。部屋數が少ないので、母親と咲子とは、當分座敷に床を延べることにした。

「私はこれを抱いて寢るさかえ、何處の隅でも可いぞね。」母親は氣兼深さうに言つた。

「阿母さんは、あんな大きな者に、横の物を縱にするども爲せやしないんだ。」と言つて、健吉は笑つてゐた。

加奈子は二人を寢してから、枕頭へ有明の豆ランプを置いて行き、「オヽ、貴方お祖母さんの懷子ですね。明日から、お祖母さんには、家の延を懷いてもらひますからね……可うござんすか。」と咲子の顏を覗込むやうにして、此も笑つた。

子供が皆な寢て了ふと、屋内が閑りとして來る。寢つきの惡い母親は、何時までも茶の室でヒソ〳〵話してゐる、健吉夫婦の聲が耳に着いた。

二度目に厠へ起つたとき、靜と障子を閉めて入つて來ると、咲子は慧しさうな、冴々した目をパッチリと開いて、つい其處の壁にかゝつた、暗い油繪を瞶めてゐた。而して祖母と顏を見合すと、ニヤリと笑つて、其まゝ目を瞑つた。

老母は、自分の力では、此子を庇護ひきれぬやうな氣がしてゐた。

朝、老母が目をさまして見ると、咲子はまだスヤ〳〵と眠つてゐた。老母は私と枕を直してやりなどして、暫く其の豊かな顔を眺めてゐた。

末の娘が、良人に逝かれて了つて、咲子をつれて實家へ歸つてから、老母は自分の手一つに此子を育て、來た。朝晩抱かゝえたり、負つたり、襁褓を取つたりしてやつた。娘が再縁につくとき、老母は孫娘を自分の手許に留めた。而して自分の食物を約めても、此子には綺麗に着飾らせ、少し物心がつくやうになると、愈よ手放すのが厭になつて來た。姉娘が折々口へ出してそれを非難しやうとすると、老母は咲子に悟らせまいと、厭な目顔をして、それを抑えた。再縁についた娘は、其處で又子が産れなどして、咲子とのなかも次第に薄くなつた。咲子も母親のやうな氣がしないので、偶に遊びに來ても、餘所〳〵しい風をして、祖母の膝にばかり取ついてゐた。

「此子は變な子になつたわね。」と娘も冷かに言つてゐた。

「お前に親らしい情愛がないもん、此子も何と思ふものかね。」と老母は娘の態度が不服であつた。「添介や其子は可愛うても、此子は何ともないやろ。今に東京の伯父さん處へ連れて行つて、面倒見てもらふさかえ、お前の御厄介にやならんとこと。」

娘は唯笑つて取合はなかつた。

けれど老母は、健吉に對しても、同じやうに自信がなかつた。それで、誰に訴へやうもなく、クック

と自分だけて、色々の事を思煩ひながら、育てゝ來た。

母親は、勝手の方の氣勢を候ひながら、モソ〳〵と起きかねてゐた。朝はまだ靜てある。四方は漸く白んで來たばかりて、有明の灯影が赤かつた。

するうち女達や子供が起きはじめて、バタ〳〵騷ぎ出したが、健吉の部屋はまだ暗かつた。咲子は亂母にキチンと帶を締めてもらつて、茶の間へ出ると、嫣然と笑つた。

「もつとお寢つて在しやれば可いのに。」と加奈子は夜具の始末をしてゐる、母親に愛相らしく聲かけた。

朝飯のとき、母親は咲子と並んで餉臺に向つたが、健吉はまだ起きて出なかつた。加奈子は可也大柄の、血色の優れない二十七八の女であつたが、眉目のあたりが何處か明い女で、話の調子も高く、愛相も好い方てあるが、如何かすると、ちよい〳〵下目に人の顏を候ふ癖がある。乳呑兒を抱きながら、氣忙しさうに茶漬を食べてゐたが、「お祖母さんは、何にも召食らないよ。東京の物は不味いてせう。」

母親は、咽喉に閊へるやうな風て「いゝえね、私は此の海苔がお旨くて‥‥。」

飯が濟んで、延が幼稚園へ出て行くとき、女中について咲子も一緒に、外を見に行つた。

二人は茶を呑みながら、シンミリした話に晷を移した。母親は氣兼さうに、咲子のとをシミ〳〵と賴んだ。

「あれの母親が、些と了簡の違ふた女やもんやさかえ、貴方には飛んだ筋違ひの御厄介さまて‥‥。」

「いゝえ。其代り、私は物を知りませんから、色々また敎へて戴きませんと‥‥。」と加奈子は目眩さう

な目を伏せて、「家も子供が多ございますし、迚もそれは充分と云ふ譯にはまゐりませんてせうけれど、咲さんにも小い方でも、少づゝは觀て頂いたり何かしまして……。」

少時經つと、母親は、「何か爲て可いやうなことがあるなら、私が爲ませうかね。老人のとて、氣の利いた事も出來まいけれど……。」

「いゝえ、差當つて別に爲て頂くやうなこともございませんてすから……。」

「老人が、何にもすることの無いと云ふのも、體窟なもんてね。」と手持無沙汰の母親は、又煙管を取上げた。

「ては、阿母さんはおまめな方で在しやるんてせう。私なぞもう、些とも介意つてゐる隙がないもんてございますから、」

「子持は皆な然やとこと。」

「それに、お産をする度に、體が滅切弱つてまゐりましてね、此頃はもう、自分で可笑いくらゐ無精になりましてすよ。」

「然かね。でもお見かけした處は、丈夫さうに見えるがね。」と母親は嫁の顏を見あげた。

「これて然てないんてございますよ。それは元は丈夫な方てございましたけれど、今ぢやもう、から意氣地がございません。齒が不殘腐つて了ひますし、腦の方も何だか慿う、始終痛むのてございますよ。目も近頃餘程弱くなりましたわ。」と加奈子は目蓋の重さうな目を、慿う瞬くやうにして見せた。

母親には、素から渇した目としか思へぬのであるが、加奈子の胸には、長い間の苦しい生活が、直に胸に浮んで來た。天氣の加減て、如何かすると、普通の頭痛とは又違ふ劇しい腦の痛を感ずるのが、久しい前からの病である。怒りつぽい健吉に、力任せに打れた、其結果だと云ふとは、自分には能く解つてゐる。時々、自分は腦病で死ぬてあらうと、然う思つてゐた。

「何故醫者に診て貰はないんだ。」

硬い枕を横へ投出して、蒲團に突伏してゐる妻を見る毎に、健吉は斯う言つて叱つた。けれど、其時には何時も其時の事情があつた。咽喉が少し痛いと云つて、もう大騷して、病院へ駈つけるとの出來る男のやうには行かなかつた。健吉の頭腦にも、其事情の全景は直に浮んで來る。それて其まゝ默つて了ふ。

「御兩親は、歯がお丈夫てないと見えますね。」母親は、金を埋かけたやうな、[illegible]の不規則な齒に目をつけた。

加奈子は「いゝえ、父も母も、つい歯が痛いと云ふ事を存じませんの。」と乳房に飽いた子供を膝のうへに立たして、柔かい其頰に頰擦した。

それから加奈子は、健吉と夫婦になつてから、七八年間の家庭の印象を話した。健吉の住んてゐる其時分の家のと、長い間の書生生活を續けて來た健吉の薄い蒲團が、油で煮締めたやうになつてゐた事、其時分から體の弱かつたと、子供がチブスで死かゝつた時の事なども出た。然した加奈子の頭腦には、其間の、苦しかつた生活の全景が、長いパノラマのやうに浮んで來て、話しても迚も話し切れず、又話すだ

け、局外の人には無駄であるやうな氣がした。

「それでも其時分は、隨分家の事は氣にかけてくれた方でしたよ。其か如何でせう、此二三年と云ふもの、薩張介意つてくれなくなりましてすよ。子供の着物が破けやうが、蒲團が汚れやうが、一向頓着してくれませんの。然う言つて此方から頼むと、唯ウン〳〵と言つた限で、大變に氣が長くなりましてすよ。ですから、家も御覽のとほり、もう何にもございませんで、阿母さんを折角お連申しましても、寔にお可恥しいくらゐですの。」と分疎らしく言つた。

「でもまア、お蔭で恁うやつてゐれば、先結構やと思はにやならん。」母親は目をショボ〳〵させた。「それに、東京はお金が費らうからね、咲まで御難題を願ふては、寔に濟まんと思ひますけど……。」

健吉が起きる時分には、もう椽に一杯日がさしてゐた。砲兵工廠の作事の物音などが、緩く暖かな空氣に響いて、庭の木の葉がツヤ〳〵してゐた。

加奈子が乳呑兒を母親に預けて、寢室の掃除に取かゝつてゐるあひだ、二番の千枝子は、翫具の世帶道具を、椽側へ取出して、日向ぼつこを爲ながら、獨で遊んでゐた。そこへ咲子も歸つて來て、千枝子の背後へ坐つて、可愛らしい鏡臺などを、手に取つて眺めてゐた。

「お祖母さん、これ御覽なさい。」とニヤリと笑つて、其處にあつた紙風琴を取あげて、フウ〳〵鳴した。

「可厭アよ。」千枝子が赤い頰をして、鼻をぐつ〳〵させた。

咲子は默つて紙風琴を下において、両手を脇明へ突込んだ。祖母も默つて淋しさうに笑つた。

咲子は千枝子に何か話しかけながら、派手な其被布の裾に、手を觸れなどして見てゐたが、「お祖母さん、東京の女學生は、眞實に風が好うございますね。其處らを澤山歩いてゐてよ。お祖母さんも、ちつと出て見ないんですか。」と低聲に言つた。

祖母は默つてゐた。膝のうへの子供は、力強い脚をバタ〱させて「バッ〱〱」と叫んでゐた。祖母は、押轉されさうにしては、漸と子供を持かへてゐた。

春が暮れて了ふと、明い此家も、青葉の影が裏へさすやうに爲つた。幽暗い欄間にかゝつた、油繪の女の顏も、見馴れて來ると、何處か人間らしく思へて來た。五分通しか解らなかつた、嫁の語も耳に聽慣れ、氣心も少しは知れて來た。込入つた生活も、ほゞ其内面が窺へるやうに思へた。

其頃から、此處の家庭の空氣が、何となく沈んで來た事が、老母の胸にも感ぜられた。

健吉は、花の頃は能く出歩いたが、其が習慣になつたらしく、如何かすると、食慾がなくて困るとか、頭腦が懈くて不可いとか云つては外へ出た。而して、晩方氣忙しさうに家へ歸つて來ると、急いで飯を食つて、書齋のランプに灯を點けさした。せッせと何か書いてゐる日が、其から二三日は續く。其間も、疲れた體を、折々横になつては、眉根に皺を寄せて、何か考込んでゐた。目を瞑つて、頭腦へ手をかけ

て、身動ぎもしないこともある。母親は私と搔捲を持つて行つて、着せなどしてやつた。

夜おそく迄、煙管を叩く音が、靜な家内に響くとか、數次であつた。一時頃まで加奈子と何か食べながら、話込んでゐるともある。偶には床へ入つてから、本の頁を捲る音が、寢そびれてゐる靜な母親の耳へ聞えて來た。母親はうつら〳〵それを聞きながら、健吉が生立當時の古い記憶などを辿つてゐた。

健吉自身は、寧ろ母親には、餘り親しい口を聞かなかつた。手づから母親に用を足して貰つたり、シミ〴〵と話を爲かけられるのが、如何にも厭はしさうな樣子も見えた。如何かすると、突然突慳貪な言をかけて、側にゐる加奈子をハラ〳〵させるとすらあつた。母親は、「然うか〳〵。」と言つて、奥へ引込んで了ふ。

十時過ぎた頃、或朝健吉が、眠を貪つた、肉のだらけたやうな顏をして起きて來ると、茶の室は、もう飯具や新聞や、茶道具や、襁褓や紐などが一杯に散かつて、人々の顏には、何處か倦怠の色が見えた。生暖いやうな風が、砂を吹立てゝゐる日で、日の光も曇然としてゐた。もう月の末で、加奈子の目のうちには、何となく落着がなかつた。氣がイラついてゐるらしく、取着いて鼻聲で何か強請んでゐる子供を、心から煩さうに叱つてゐた。

健吉は、そのトゲ〳〵した聲がピン〳〵頭腦に響いた。それて額を顰めて、新聞を讀んでゐると、母親は、臺所へ起つて、戸棚の前に立つて、食事の支度に取かゝつてゐた。

「この牛肉を上げやうかね。」と母親は、嫁の方を振顧つた。

健吉はヂロリと加奈子の顏を見て、些と舌鼓をした。加奈子は、氣懈さうな體を起して、「私が爲ますから、恐入りますが……」と言つて抱いてゐた子供を老母に渡した。老母は子供を懷いて、縁側の方へ出て行つた。

健吉は食事をしながら、今月の經濟など聞出した。

「一體家は、何のくらゐの經濟なんだ、少しも見當がつかないぢやないか。」と聲が尖つてゐる。

加奈子は少し怯ついたやうな聲で「それは勘定して見れば解りますわ。ですけれど、此月なぞ、何しろ暮からの滯りが順々に殘つて來てゐるんですから……」と其から明細な說明を爲はじめ、最近に入つた金の出道をも詳しく報告した。

「おや、あれは少しも拂の方へ廻らないんだね。」と健吉は壓つけるやうに言ふ。

「え、然です。」と加奈子は困つたやうな顏をして「此頃のお鳥目は、眞實使出がないんですから……。」

「遣切れないな。それぢや、迚も此世帶の張つて行けやうがないぢやないか。己の腕にだつて限があるもの、終に憊ばつて了はなけやならん。」

「私も隨分氣をつけてゐる心算なんですがね。」

「何處かに拙い處があるんだらう。」健吉は首を傾げた。

「でも要るだけの物は、それは如何したつて要るんですからね。」

「左に右生活方法を一變しなけアならん。」と健吉は言出した。

「それとも、何なら、阿母さんに為て頂ければ、私は何様に助かるか知れやしませんわ。もう眞實に然して下さい。阿母さんならば、必然お上手でせう。」

「よし、それぢやもうお前に頼みやしない。」

健吉はプイと書齋へ引込んで了つた。何だか賤しいやうな淺猿しいやうな氣がした。是迄にも些いちよい恪云ふやうな紛紜を母親の耳へ入れた。荷厄介が、自分には餘り多過ぎるとか、職業の性質から言つても、恪した過度な努力には、迚も堪得ないとか云ふやうな事まで口に出して零した。

健吉は、机の前に座つて見たが、心に落着がなかつた。

少時たつてから奥へ着物を着替に入ると、加奈子は隅の方にペッタリと坐つて、ドット考へ込んでゐた。

加奈子はチラリと健吉の顔色を見ると、急に低聲て「ね、今日は宅にゐて下さいよ。もう二十六日ですよ。」

健吉は何やら言つてゐたが、間もなく洋服に着替へて、思切つて出て行つた。

健吉は晩方歸つて來た。

友人の家を一二軒訪ねて見たが、出て來た後の宅が不安でならなかつた。最後に神田の友人を訪ねて、其處で一緒に酒を飲んだ。何と云ふとなし、彼方此方可也の道を歩いたので、體には劇しい疲勞を感じ

てゐたが、頭腦は興奮してゐた。ランプの點く時分になると、急に氣忙しいやうな思がして、フラ〳〵と其處を出た。今朝家を出た時よりも、頭腦が一層散漫になつたやうで、もう自分の弱い意志や力で、如何するとも出來ないやうに思へた。

少し氣を取鎭めやうと思つて、電車から降りると、直にコーヒ店へ入つたが、渇いた咽喉に、コーヒを半分ほど飮んで、其處を出た時は、醉が悉皆醒めて、頭腦の底がシーンとして居た。

家の前まで來て、門を開けやうとすると、家は闃りとしてゐる、コツ〳〵と石疊を蹈んで、玄關の靴脫に靴を脫棄ると、茶の室から灯の影がさして、母親と咲子とが出迎へた。

健吉は默つて上へ上つて、茶の室から奥の室を覗いて見たが、そこにも子供の影一つ見へなかつた。

「誰もゐないんですか。」と言ふと、居住ふ處もないやうに、もぞくさしてゐた母親が「お前が出ると間もなく、あの人も子供達をつれて、芝の方へ行くとか言ふて出て行つたきり、日が暮れても歸つて見なんとてと。」と言つて其處へ坐つた。咲子も其下の方へ坐つた。

健吉が洋服を脫棄てると、母親は奥の室の押入を彼方此方搜して、不斷着と帶とを持つて來て、後から肩へかけてやつた。

「そんな事は咲にお爲せなさい。」と健吉は忌々しさうに、低聲で言つた。

「御飯は未だ食らんかね。」

「もう遣りました。」と言つて、健吉は浮かぬ顏をして、火鉢の處に坐つた。

然して三人とも口を利かずに、時を移した。留守のまに、母嫁のあひだに、何か不穏な事でもあつたやうな感じもしたが、健吉は口へ出して其を聞かうともしなかつた。

「芝は此處から餘程ありますかね。」母親は煙管を取あげて、莨を吸はじめた。

健吉はちよツと其顔を見たきり、此も傍を向いて、煙を吐いてゐた。

「それでも、子供達がもう眠くなつたらうに、あの人も早く歸つて見れば可い。」

「何故また、阿母さんは出してやつたんです。」

母親は少し經つてから「あの人も、何やら氣が面白ないさうで…氣の適ふ處へ遊びにでも行つて來たら、些とは氣が灑洒して可からうと思ふて…。」

「阿母さんに何か言ひましたか。」

「私には何にも…。」

「怒つてゐましたか。」

「然てもないぞね。出るときはもう、機嫌ようね。お菜の事まで、丁と私に言渡してね。」と母親は例の苦勞性の顏に、いくらか表情が出て來た。而して健吉と差向で、少し落着いた話をしやうとした。

「私達が恁して來てから、家もどうやら面白ないやうな樣子やが…何時でも恁てもあるまいがね。」と母親は此の家が、思つたよりも苦しいと云ふとから、手薄な簞笥の底から見え透くやうだと云ふと、健吉の弱い體では、是が何時までも續けられるものではないと云ふやうな事を言出した。兄達は二人とも

近頃裕福であるが、其かと言つて、あの人達にかゝつて行くのも本意ではないし、寧そ月々少宛の小遣ひでも送つて貰ふとにても爲やうか、如何したものであらう……と然云ふやうな相談をも持出した。

健吉は頭まから打消して了つた。

「そんな事をするよりか、阿母はんも、默つて見てゐないで、家の經濟のとくらゐ、世話を燒いてもらつたら如何です。」

「私かね。」と母親は聲に少し力が入つた。「厭々。私はもう、然いふとは大嫌ひ。此の年して、嫁の世帶の世話やく位なら、東京くんだりまで、出ては來はせんわね。今更然は苦勞せんでも、五十年も厭ほど爲せられて來たもん。」

母親は、家事には少しも頓着しない良人を相手に、他の子と、自分の子と、六人の子供の世話をして、今日まで過して來た事を言出した。

「そんな勝手な……。」と言つて健吉は笑ひ出した。

「けど、然うおやないかね。」と母親も笑つて、「六十にも七十にも爲つて、人の家の世帶に口出して、嫁さんに彼此言はれるやうな事は、私は爲ともない。」

「阿母さんは、其樣なとを考へてるから、駄目です。」

「駄目か何か知らんけど、私には、然い氣は少ともないぞね。」

「それなら其で、母親は母親らしい權威を持つて「澄してゐれば、それも可いかも知らんけれど……。」

「けども人の世話になつて、澄してゐるともないわね。誰も私が貰つた嫁なら知らんこと……。」

「嫁に構はないでせう。」健吉は足を踏伸して空を仰いだ。頭腦の底が何だかスイ〳〵するやうで、頼ないやうな氣がした。

「咲。お前そこから酒を持つておいで。」と健吉は咲子に命じた。

先刻から祖母の傍に、座つた限、もんぞりともしなかつた咲子は「ハイ。」と言つて起つた。

母親も其後から起つて、酒の支度に取かゝつた。而して、慈した場合に、加奈子が毎時爲るやうに、小皿に下物を少し取分けて、猪口と一緒に載せて出した。

酒がつくと、健吉は手酌で飲はじめた。

「阿母さんも、少しやつたら可いでせう。」

健吉は、母親が、少しは酒の行ける口だと云ふ事を思出した。森本の家よりも、迥に家格の其實家に榮華に育つた若いをりなども想遣られた。弟が十六の時肺病で亡つてから、養子が入つて來て、家を蹂躙してから、母親の生涯が不幸に陷つたと云ふ、昔し母親の口から聞された話なども想出された。

健吉は猪口を干して、母親の前に差出した。

母親は、自分でついで、一口飲むと、それを下において、鼠不入の奧に仕舞つてある猪口を更に一つ出して、それを健吉に差した。

健吉は、如何した腹の加減か、今夜は不思議にグイ〳〵酒が行けた。

「一體なら、阿母さんは、僕が家を有つた當座、出て來て世話をやかなけアならない筈ぢやないですか」
「然やらうか。」母親は、重ねて酒を口につけず、氣のない返辭をした。
健吉は、冷いやうな、爛んだやうな其顏を眺めて、「世間の母子なら、然ぢやありませんか。」
「でも、來ては邪魔やらうと思ふて‥‥憖い田舍もので。何にも知らもんやさかえ。」
「それが不親切と云ふものです。」健吉は疊みかけるやうに言つた。
「でも、別に、來て世話やく事もなからうがね、それに、咲と云ふものが手に着くもんやさかえ‥‥。」
「咲は、まア爲方がないです。」と健吉は少し熱したやうな目を耀かした。
「しかし咲にした處で、阿母さんの育て方は、餘り大樣すぎますよ。十五にも六にも爲つたものを、自分の着物の始末一つ爲せないと云ふやうな遣方は、本人に取つて、決して悦ばしいとぢやありませんよ」
「然やらうか。」と母親は切ないやうな目色をした。「それて、丁度好いやうに爲ると思ふけれどね‥‥。」
「それは、阿母さんのゐるうちは、其でも好いでせう。けど、人中へ出て、まごつきますよ。阿母さんは、世間と云ふものを、何時までも知らさずに、夢のやうな自分の懐に圍つておけるやうに思つてゐるんでせう。けれど、然して育てた子は、家の飾物には適してゐるか知らんが、一箇の女として、迚も世の中に立つちや行けませんよ。」
「然いとは、私に解りやうはないけれど‥‥、咲も親なし兒でね、外に賴る處はなし‥‥。」と母親は俛いてゐる咲子の頭髪に、哀れげな目を注いてゐながら、「大體東京と田舍とては、子供の躾方も、大分違

ふやうやけれど、私は又私の考てね‥‥。」

咲子は赧い顏をあけて、目で何やら祖母に注意するらしかつたが、些と伯父の方を見ると、其まゝ目を伏せる。

「恁なるのが可厭さに、私も咲は連れて來たうはなかつたのや。此方から、是非出て來ねばなりませんと言ふて賴んで來た私ぢやないもんやさかえね。」

咲子は又ヂロリと祖母の顏を見あげた。

母親は、落着いた調子で、「阿母さんも、こんな煩い東京なぞへ來て、厭なと聞くより、廣々とした田舍の方が、餘程住みいゝわね。眞實に‥‥。」と言つて、何とはなし笑つた。

「田舍の方だつて、姉や姉婿もゐるし、孫も澤山ゐるでせう。あの人達が、悉く、阿母さんに溫かい感情を持つてゐるとは言へないでせうからな。」と健吉も薄笑した。

「あの人達は、あの人達、阿母さんは阿母さん、何も氣兼するとも、遠慮するとも要らんがいね。氣兼や遠慮は、若いうち散々爲て來たもん、今はもう、月々、食べるだけさへ送つてもらへれば、それで阿母さんは、何の屈托も思ふともないぞね。」

「それぢや、何しに來たんだか解りやしない。」健吉は又笑つた。

「けど、東京も一度は見ておかにやならんと思ふさかえね。此方の孫達にも逢ひたいし‥‥。」

健吉は溜息を吐いた。咲子も伯父の方へ顏をあげて、ニッと笑つて見せた。

「それぢや、又歸りますかね。」

健吉は其處へゴロリと横になつた。臭い酒の息を吹いてゐた。而して咲子の方を向いて、

「咲、お前は如何だ。」

咲子はニヤ／＼と唯笑つてゐた。

「お前も歸るか。」

「いゝえ。」咲子は低聲で應へて、マジ／＼伯父の顏を眺めてゐた。底の透徹るやうな其の目のうちは、色々の意味が讀まれるやうに思へた。

其晩加奈子と健吉の間に、劇しい諍が初つた。

加奈子が歸つて來たのは、九時少し過ぎた頃で、母親と咲子と健吉とは、まだ茶の室に坐つてゐた。女中に乳呑兒を負はせて、自分は二人の子供を先に立て、閾が高さうに入つて來たが、其顏は蒼く見えた。

子供は、電車を降りてから目が覺めたと云ふ目色で、人々の顏を見ると、氣難しさうに、加奈子の兩側に喰着いた。

「どうも、遲くなりまして……。」と母親に挨拶をすると、咲子の左側に坐つて、加奈子は女中の背中から乳呑兒を受取つた。

それから、女中が傍においた、ハンケチを釋いて、中から、子供が貰つた西洋菓子や、途中で土産に買つて來た餅菓子の皮包などを皆なの前へ取擴げた。

母親は、急に湯の加減を見て、火鉢に炭を注いだが、女中は奥へ床を延べに立つた。母親と咲子とで寢衣を着せるとき、千枝子は如何かした拍子に難かり出して、メソ〳〵と泣出した。それが延にまで移り出して、此もシク〳〵と切なげに泣聲を立てた。

健吉は、それが胸を壓さるるやうて、煩ささうに顔を顰めた。

「何てすね貴方たちは……歸ると、もう其樣てすか。御父さんのお顔を御覽なさい。」と加奈子は良人に媚びるやうな目を側めた。

母親と咲子と女中とて、子供を埃々した寢床へそれ〳〵擔込んで了つたのが、もう十時てあつた。

加奈子は母親の酌んてくれた茶を呑みながら、「今晩は何だか大分暑いやうてございますね。」と話を爲かけた。

母親は、「東京が陽氣が好うて餘程暮しやすいやうや。」と氣のない返辭をしてゐたが、何處か疲れた樣子が見えてゐた。

蒸すやうな空氣に、人の肌の匂が通ふやうな晩て、子供の寢息が健やかさうに聞えた。

大分經つてから、加奈子は想出したやうに、

「さア、皆さんお寢みなさいましな。」と言つて咲子を振顧つた。

「貴方もお寢みなさい。」

　咲子は目蓋は閉つくやうになつたが、目は冴えてゐた。頰が薄紅く血潮を差して、興奮した頭腦が何時までも醒めてゐるやうであつた。

「咲はもう、お祖母さんと寢るのは休めたら可からう。彼處の三疊なり、茶の室の隅なり、左に右獨て寢る方が可い。」健吉は寢そべりたまゝ言出した。

「え、其方が私……。」と咲子はニヤ〳〵笑つて、「お祖母さん、私今夜から獨て寢てよ。」

　母親は浮かぬ顏をして、「家が狹いさかえ、それも氣毒やけれど……。」

「私玄關でも何處でも可いの。」

「それぢや、貴方は千枝子と一緒に寢ると可いわ。然すれば、お祖母さんには延をお願ひしますから………。」

「え、然してよ、伯母さん」

　咲子は玄關の横の間の押入から、寢衣と枕とを取出して來て、着更をすると、戸の際で皆にお辭儀して、スポ〳〵と寢所へ入つた。

「さア、阿母さんもお寢みなすつて下さい。」と加奈子は起つて、乳呑兒を床のなかへ入れて、それから着替をして、自分や子供の晴着を疊み出した。母親も手傳はうとした。

　健吉はランプの下で、寢轉んで本を讀んでゐたが、ふと、加奈子が手を休めて、齲齒の痛む片頰を抑

えてゐる、それが目に入ると、ヂロリと其顔を見た。

　加奈子は默つて、子供の被布を疊んでゐたが、ふと母親の方を向いて、「何處へ行くにも是れ一枚限て子供も可哀さうでございますよ、數がないと、子供は困りますからね。」と云つて、焦れッたさうにヂウ〱痛い齒の血を吸出した。

　健吉は、それが頭腦へ響いた。それて本の方へ氣を移さうとしても、目がもや〱するやうて、少しも讀めなかつた。

「なぜお前は齒の療治をしないんだ。」と健吉は言出した。

「少しばかり手入したつて、もう迚も追着かないんですもの。」と加奈子は矢張母親に、「私は三十越すともう總入齒だらうと思ひますよ。」

「然ならないうちに、速く自分の身のうへを考へたら可からう。」健吉は冷かさうに云つた。

　加奈子は笑つて、「それは考へないともないんですけれど、子供が三人もあつちや、もう迚も駄目ですわ。」

「子供は阿母さんがついてゐる。咲も居る。お前がゐないたつて、決して心配はない。」と健吉は、別れるなら今だ、と云ふやうな口吻て言出した。

「それに、己の前途も、もう大概見えすいてゐる。健康も近頃滅切衰へたやうだし、何だか、阿母さんより前に死ぬやうな氣もするんだ。」と言つて、其處にあつた猪口を覗いて見て、冷い酒に唇を着けた。

加奈子は疊みかけた延の袷をジッと瞶めてゐて、「そんな事考へると、眞實厭ですね。」
「然いふ事を考へんこと。」と母親は沈んだ目色をした。咲の母親が亡つたとき、如何なるとかと氣を揉んだけれど、怪我も爲ずに、矢張育つて行くのは、誰の力でもない。皆な信心のお蔭やぞね。健の體も然や。それに私も田舍へ歸れば、又如何にもなるしね。」
健吉は漸く疊んだ着物を、隅の方へ積重ねてゐる妻の方を見遣つて、「阿母さんも、もう田舍へ歸りたくなつたさうだ。」と太息を洩した。
「然でせう。私が餘り粗末にしますから。」と加奈子は笑談らしく言つて、「けど、如何してゞせう。阿母さんが、其様な事を仰つたんですか。」
母親は打消すやうな風で、「何にね、私が自分の子や孫の家ぢやもの、歸らうと思や歸るし、居たいと思や居やうし、嫁が如何の恁のと、然いふ事を左や右う氣に懸けるものかね。」と云つて空笑した。
加奈子も浮かぬ顏をして、「然ですとも。」と言つたが、母親の心持が、測知られぬやうにも思へた。而して痛い齒を抑へながら、何時までも其が氣にかゝると云ふ風で、ジッと考込んでゐたが、「それは、私も隨分氣をつけてゐる心算ですけれどね、何しろ家が狹いのに、始終かうやつて、紛擾いてゐるものですから、それは阿母さんもお厭でせう。」
「それぢや恁したら可いぢやありませんか。」
と加奈子は少時してから言出した。「どうせ私も體が惡いのですから、當分田舍へ行つてゐると云ふこと

に……。」と少し間をおいてから、「然すれば、延だけお祖母さんにお願申して、私は二人つれて行きますわ。而してお祖母さんに一切爲て戴いて……貴方も、さうすれば落着いて勉强が出來るでせうし……」

「けど、私は然いふ事を言ふのぢやないわね。」と母親も何か言出さうとしたが、迚も自分の心持が二人の胸に通じさうにも思へなかつた。

時計が十一時をうつと、健吉は壓つけるやうに、「阿母さんは、もうお寢なさい。」と言つた。

加奈子も少し黑んだやうな目をあげて、「どうぞお寢みなすつて下さいまし。眞實に始終こんなとばかり、お聞かせ申して……。」と其處らを取片づけはじめた。

母親が寢てから、座敷の方で何やら言合つてゐる夫婦の聲が、暫く耳についた。加奈子が切なげに泣いてゐるやうな氣勢もした。

母親は薄暗いなかで、延を抱締めてゐた。

明朝母親が目をさますと、咲子が先に起きて、帯を締めてゐた。昨夜の騷ぎが、少女の頭腦に鋭い刺戟を與へたらしく、樣子が何處か變つてゐた。母親は可憫いやうな氣がして、「そないに早う起きても、用事もないてね。」と言つたが、咲子は思の深さうな顏をして、キリヽと身仕度を爲た。

此頃女中が暫くゐないので、母親は自身釜の下を焚つけなどした。咲子は何時もさせられるやうに庭の掃除をして、其からランプの掃除に取かゝつてゐた。能くホヤの曇が取れぬと云つて、綺麗ずきの加

奈子に、自身に拭込んだホヤを差出して、「ホラ、こんなに綺麗になるでせう。」と言れるのが可厭さに、幾度も幾度も拭いてゐた。子供はもう二人とも起出して、其處らを飛歩いてゐたが、母親が起きて出ないので、咲子にばかり絡はつてゐた。

「そんなに綺麗にしたかつて曇るものは矢張曇ることと。」と呟いて、母親は低聲に、「貴方ももう田舎へ歸りたうなつたらうがね。田舎の方が、機嫌氣褄を取る面倒がなうて、何のくらゐ氣樂か知れんぞね。」と言つて、モゾ／＼と燻る薪を、流元へ下した。臺所には、白い煙が一杯に彷徨ふた。

「そして、田舎のお父さんに話して、女學校へ出して貰ふ方が可い。」

「御父さんが出してくれて？」咲子は悧巧さうな目を瞬つた。

「あんな吝な人が、學資なんぞ與れるもんですか。私も御父さんから貰やしなくてよ。」

「そんなら如何すれば可いね。此處にゐる氣かね。」

「居ては惡くて……。」咲子は俛きながら問反した。

「何の、惡いとは些ともないぞね。此處かつてお祖母さんの家も同じことやもの、誰に氣兼も遠慮も要らんけれど、お祖母さんは、あの人達の了簡が些と違ふてをると思ふ。それは、伯父さんも好い人やし、嫁さんも氣のつく人やけれど、後から入つて來たものは、何彼につけ埒明かんのや。」

「私がゐるからなの。」

恁云ふやうな事を、少時ペチャ／＼と辯つてゐた。沈んだ苦勞性の祖母の目には、厭な僻みの影さへ

見えるやうに思つた。

少時經つてから、加奈子が寢室から出て來た。持病の頭腦が痛むと見えて、蒼白い顏を酷く引攣めてゐた。目の色も昨夜ほどは冴えず、髻が散々に壞れて、廣い前髪が、横に崩れてゐた。强さうな其目よ利かぬ氣の其口元を見ると、母親は何時でも、後から來た自分達を逐退けやうとしてゐるやうに思ふのであるが、然う思はれはしないかと云ふ、一種の猜疑心が、始終加奈子の頭腦に附絡つてゐた。

「どうも濟みません。」と加奈子は笑顏を作つた。「どうぞ、もう、私が爲ますから‥‥。」

今日に限つたとてもないのに‥‥と母親は心に思つたが、默つて、七輪に火を興してゐた。

咲子はランプ掃除を仕舞つて、水道口で手を洗つてゐた。

加奈子は味噌汁の支度に取かゝりながら、跪坐んでゐて「もうね、私今日から、臺所の方ばかり働かうと思ふんでございますよ。而して奥向の事は、一切阿母さんに爲て頂いて‥‥。」と云つて、母親の顏を見やつた。

母親は、「何やいね、朝から又そんな事を言出して‥‥。」と些と顏を顰めた。

「でも、昨夜然云ふとに決めましたの。健吉は當分、家が煩いから旅行するさうですから‥‥。」

母親は振顧りもしないで、「健も又何やつて、然いとを言出したのやら。其位なら、私が歸るわね。もう東京も其處此處見物さして貰ふたし、皆なに嫌はれてゐるにも及ばんことや。」と自分で冷笑ふやうに言つた。

「アラ、阿母さんをお歸し申すくらゐなら、私が田舍へ行きますわ。苦しい世帶の心配ばかり爲てゐるより、其方が餘程好いんですもの。」

「でも、其では健が寂しいとこと。」

「いゝえ、宅でも、始終さう言ふんでございますの。私や子供がゐなければ、何樣に晴々するか知れやしません。」

「男は然う言ふたもの。」

母親は、もう小煩い事は聞きたうもないと云ふ風で、茶の室へ入つた。

障子を明放した茶の間には、昨夜の埃が、薄赭い疊のうへに散つて、朝間の涼しい風が、スイ〱通つてゐる。母親は汚れた火鉢の掃除を初めた。

朝飯のとき、健吉も起きて來て、其處へ坐つたが、加奈子は腦の工合が惡いので、箸を取ると、嘔吐を催しさうだと云つて、始終顏を顰めてゐた。而して、中途から子供を懷いて、朝日の差しかけた椽側へ出ると、ペッタリ其處に坐つて、靑々した庭面へ懈い目を曝してゐた。

咲子が子供を幼稚園へ連出してから、母親は健吉の旅行の事を言出した。餘り意外で…何か是非然うしなければならぬ事情があるなら、其も爲方がないが、旅行と云へば、入費もかゝる、先々月歸つたばかりで、又然云ふ事を言出されては、來てから未だ間のない自分が、默つて見てゐる譯に行かぬ…と云ふやうな意味で、夫婦の氣心が見え透いてゐるやうに言つた。目に涙が浮んでゐた。

「阿母さんは、嫉んでゐるんだ。」健吉は傍を向いて言つた。
而して、「恁云ふ、ごた〱の中で勉强が出來ますか。」
「サア、出來んもんなら、廣い家へ引越さうと、人を減さうと、それは如何にもならうがね。」
「それが……爲らんからの事です。」
「そんなら私が歸るわね。家がごたつくと云ふて、主が出るなぞと……。」
健吉は舌鼓をした。
「而して、老年は老年らしく、澄してゐたら可いだらうがな。」と强く顏を顰めた。
母親は默つて了つた。
加奈子も閾際の處へ膝行出して來て、「てすれけど、阿母さんも御心配だものてすから……。」と世辭笑をした。
「お前が又、餘計なヿを辨るからだ。お前の口から出れば、總て物事が妙に聞えるんだ。」
加奈子は伏目になつて、「別に餘計な事は申あげない心算てすけれど……私も阿母さんが御安心なさるやうにと思つて……。」
「それては、まア惡いヿを言出したね。」と母親は曇聲で呟いたが、冷い嫁の胸に、宛然觸れたやうに感じた。
それて三人とも頷垂れて了ふと、部屋が急に闃りとなつて、椽側に座つて遊んでゐた千枝子が、魅せ

られたやうに、内を振顧つた。而して「母さん」と云つて、母親に寄ついて來て、チロ〳〵と人々の氣色を候つた。

少時してから、健吉は口も利かず家を出て行つた。

玄關先まで送つてから、加奈子は痛む頭腦を抑えて、何と思はれやうが、もう可い、と云つた風で、奥の室へ入ると、旋て蒲團を延べて、ずる〳〵寢て了つた。母親の心には、それが太々しい女のやうに思へた。健吉の身のうへが、可哀さうのやうにも考へられた。

其日は晩方まで、子供を相手に、高い聲も出さずに過した。庭の隅や、玄關側の薄暗い三疊へ、目配して、咲子を誘ひ入れると、祖母は低聲で

「あの人達の氣は、今日と云ふ今日、鏡で見るやうに知れたさかえね、もう一日も這様ところに居るもんてはないぞね。大事のお前の體も、どうも此處には置かれんてといね。」と胸に滲みるやうな聲で言聞した。

咲子は胸を壓さるゝやうに思つた。けれど、田舍へ歸つて、又畜の寂しい二人限の生活に復るのかと思ふと、心が暗くなつた。

咲子は父親から、少し金を送つてもらふ事にして、如何しても、東京に殘つて、何かを勉强して見たい、と言出した。

「お祖母さんから、伯父さんや伯母さんに、其事をお話して見て下さい。私、どんな事でも爲ますから

……。然すれば、私どうにかして、其うち必然お祖母さんを見てあげてよ。」
「そんな長いこと、私が活きられるもんなら、言ふことはないぞね。」と云つて、水つぽい目で咲子を瞶めた。
「體を大事にしてゐれば、八十までも活きられてよ。」と咲子は淋しい笑顔を擧げた。
「何が好うて、貴方は又こんな處に居たいね。」と祖母は少し目に稜立てた。「あの人達と一緒にゐると、貴方も彼樣になつて了ふぞね。」
咲子は、爭ふのが、祖母の弱い胸を苦しめるやうに感ぜられた。
「長いあひだ、東京みたいな劇しいところに居るとの、彼の伯母さんのやうに、心配が絶えもんで、終ひにや體を壞して了ふとこと。」祖母は繰返し〳〵言つたが、咲子は不服らしい目を瞶るばかりであつた。
薄暮に、健吉が歸つて來ても、加奈子は息苦しいやうな暗いなかに、括枕をして寢てゐた。家の中が中心を失つたやうで、健吉の頭腦には、もう何かゞ滅茶々々〳〵になつて、如何するとも出來ないものゝやうに思へた。而して一刻も速く何處か深い山のなかへ入つて、廣々とした座敷の眞中で、引くら返つて見たい氣がした。
健吉は、旅行用意の、ノートやインキや、讀本やシャツや……然云ふやうな物を二つばかり包にして提げて來たが、それを奥の室の入口の處におくと、枕頭ちかくにドカリと座つて太息を吐いた。
と、加奈子は蒼い顏をあげて、シバ〳〵するやうな目を瞶つた。
「あなた矢張旅行なさるんですか。」

「何爲？」

加奈子は茶の室の手勢を候ふやうにして、それから私と枕に突伏した。

「何爲と云ふともございませんけれどね……若し貴方に行かれて。後で阿母さんが、國へ歸るなぞと仰やつたら、私困るわ。私、御機嫌も取れませんし、きツと其は、面白くない日を送らなけアならないと思ひますの。」

といふ所へ、母親が裏から、襁褓を一ト抱え擁えて入つて來た。

二三日たつと、母親は一人て國へ歸ることに決まつた。健吉も加奈子も、色々言つてみたが、母親は疑つた。

まだ見遺したところがあるからと云つて、健吉は、母親一人をつれて、芝の御靈廟や、大久保の躑躅など見せに歩いた。加奈子も、新しい袷など縫つて着せた。母親は歸るとなると、もう一途に歸りたくなつて、國の娘の孫どもの事を口にするやうに爲つた。加奈子は「老人と云ふものは現金なものね。」と云つて、笑つた。

立つ前の晩に、加奈子は咲子をつれて出て、國の子供達へのお土產などを買つた。加奈子は、何を買

はうとするにも、一々子供の年恰好を、咲子に尋ねた。

「伯母さん可いんですよ。」と咲子が氣毒さうに言ふと、加奈子は笑ひながら、「いゝえ、此は貴方にあげるのぢやないのよ。」と言つて笑はせた。

咲子は、強いやうな、面白いやうな伯母さんだと思つた。

土産物が、茶の室の襖の蔭に積あげられると、母親は涙ッぽいやうな目をして、お辭義をした。恁した嫁の手際は、なか〳〵巧者なやうに考へられた。

その晩健吉は、用事があつて、九時過ぎに歸つて來たが、茶の室は、未だ宵の口のやうに陽氣らしい話聲が洩れてゐた。健吉は餘り口を利かなかつた。而して、酒をつけさせて、チビリ〳〵飲んでゐた。

咲子は伯母や、伯父に、急に懐けるやうな氣もして、始終ニコ〳〵してゐたが、をり〳〵目に曇みを持つてゐた。

夜が更けるにつれて、人々はみな低聲になつた。それで、折々話が途斷れると、四下がシーンとするほど靜かであつた。はづまない笑聲も、夜の空氣に消えて行くやうであつた。カチ〳〵云ふ時計の音も胸に響いた。

祖母はまだ思切れぬらしく、恁したうちにも、咲子の氣を替へさせやうと力めてゐた。

咲子は切なげに、唯俛いてゐた。

「咲さんは、東京をどんな好い處だと思つて……私なぞは、年中面白いこともなくて、もう飽々しましたよ。」と言つて、加奈子は疲れたやうな欠をした。

それで其晩は、皆な思ひ〳〵に床に就いた。

咲子と祖母とは、床に就いてからも、二時三時まで、ひそ〳〵話をしてゐた。

明朝母親は、二番で立つた。

加奈子は咲子と、夙くから起きて、臺所を働いてゐたが、旋て母親も起きて來た。

「まだ早うございますよ。」加奈子は昨日取つておいた鯛の鹽燒を、もう燒きかけてゐながら、優しく聲かけた。氣の合ぬのは合ぬの、義理は義理と云ふやうなことを考へてゐた。もう逢へぬやうな氣もした。

支度が出來ると、加奈子は咲子に健吉を起させた。而して顏が揃つたところで、膳や銚子を並べて、二人に酌をした。

二人が箸を取つてゐる間に、加奈子は床のなかゝら、一人〳〵子供を起して、餘所行の着物を被せた。

子供は目を擦りながら、不思議さうに、人々の顏を眺めてゐた。

「みんな丈夫に育つてね、今度目に阿母さんと一緒に、お祖母さんの宅へも來て見ておくれ。」と母親は

目を曇ませた。時間が來る前に、健吉は子供を二人つれて、一ト足先へ立つた。

ステーションへ着いた時、母親の心はわく〳〵して、暗くなつてゐた。

「氣が向いたら、何時でも入つしやい。」

「これに、萬望お懲りなくね……家も何時でも、恁てもありませんから。」

健吉夫婦は、子供を差つけてゐながら、言つた。

母親も、「餘まり頭腦を傷めるやうなとは爲んやうにして、氣が腐つたら、時々田舍へ遊びに來てね……

……。」

咲子は始終目を曇ませてゐたが、するうち汽車がスイと動出した。

プラツトホームを打連れて、三人は默つて歩いてゐたが、咲子は、其處等が暗く見えてゐた。

構外の廣場へ出たとき、加奈子は咲子を振顧つて、「貴方寂しいとはなくて？」と言かけると、咲子は

ニヤ〳〵と笑つて、頭を掉つた。

此連中が、藤を見に日比谷へ廻つて、それから家へ歸つたのが、もう午時であつた。健吉夫婦は、「ヤレ〳〵。」と深い溜息をついて、其處へ疲れた足を踏延した。

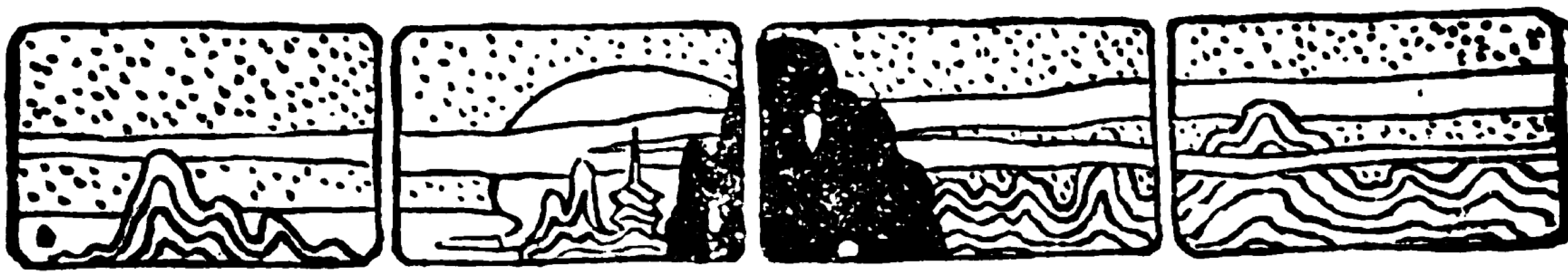
咲子は木陰に暗い、靜かな玄關の次の間の窓の下で、古い机に倚かゝつて、田舍の父親へ出す手紙の文案など考へながら、自分の身のうへに就いて、樣々に思を廻らしてゐた。（をはり）

次號の小說欄には

題未定　上田敏氏譯

祝盃　永井荷風氏作

の二篇掲載せらるべし



枝

眞山青果

一

岸田は此の頃中から、封を切るまいと意を決めた手紙が二つある。その一つは國元の母より、他の一つは尾澤と云ふ或る會社員から來るのだ。

如何に醉つて歸つて來ても、その手紙が机の上に載つてゐるのを見ると、乾度いやな顔して本箱の抽斗へ投込んで了ふ。抽斗の中には封のまゝの手紙が幾十通と溜つた。

尾澤からは貸物の催促である。嘗つて放浪の急を救ふために、その人から女帯を一筋借りた事がある。そして失くした。もう三年も前の事だ。それなのに、品物が無いと決つたこの春からして、實に酷しい催促となつた。帶が無ければその償として三十圓の金を揃へろと云ふ、岸田の使つた金はその十分一にも足りないくらゐてあつた。

岸田は例の癖として、唯一日延ばしに打遣つて置いた。二三度は他人も仲裁に入つて口を利いて見たが、肝腎の本人が動かない。先方の態度ばかり非難して相手にならない。手紙は來ても返事を出さない。「岸田のやうな男も無いものだ。他にものを借りて置いて、催促されると憤るんだ。」と皆手を引いて了つた。貸した方が依估地になつた。金よりは恥辱、外聞に觸りさうな事ばかりを、端書の上に故と麗麗しく紫インキで書いて、幾度も〳〵飽きる事なしに寄來すのである。宿の女中どもでさへ氣が付いて居ると見えて、この端書ばかりは何時もコツソリと留守の机の上に載せて置いた。

國元からの手紙、これとても決つて居る。いつも甚しい窮乏を倅に訴へて來るのだ。母は書く手が無いから、下宿に置く書生どもに代筆を賴むと見えて、番限り筆跡が違つてゐる。

今年の春、或る人を立會に置いて、月々幾らか宛の送金を堅く約束して置き乍ら、岸田は唯の一度もその約定を果した事がない。面疔を疾つて、母が入院した時でも、末の弟が尋常中學に入つて、制服の才覺に窮した時でも、月末には十日にはと、約束のみ固くして置いて、ツイそのまゝに流してしまつた。近頃は母も根に厭ぐねて、そこ許が一晩の酒に費す金があれば、親子三人樂々と半月は凌げる。私の身は何う約めても好いから、學校通ひの子供には貧の恥に泣かしたくないなどと、讀むに忍びぬ厭味を書並べて寄來すやうになつた。流石に氣の毒には思ふ。母は最う五十一。三十七から後家を立て通して、岸田を頭に七人の兄弟を貧苦の中に育て上げたのだ。この頃はメッキリ我性氣が無くなつて、少しの働きに立昏みすると云ふ。濟まない〳〵と思ひながらも、岸田は慌しい、磁石の針の如き今日の動搖に追

はれて、唯の一度も母を慰め喜ばす餘裕がなかつた。

母は煩さく先生をも攻めた。先生も見兼ねてそれを岸田に傳へると、たゞ好い加減に聞いて居て、一向取搬ぶ様子もない。

「何うしたんだね。僕もお母さんと約束してあるんだ。月に十や二十の金なら、促かれなくても送れさうなものだ。」しまいには先生も氣色を損じた。

「好いんです。僕には僕の考があります。まア見て居て下さい。」と餘程曰くのありさうな口吻である。もうキッパリ斷つた。

先生にも押してその以上を責める權は無かつた。それ限り何も云はなくなつた。

それでも母は未だ思ひ切れない。月々三四度は執念く訴へて來る。税金の滯納處分を受けるとか、自分の病氣とか、來る度に餘程大事らしい事を書いて、後五日間に返事が無ければ、家をたゝんで、親子三人厄介になりに行くなどゝもあつた。嚇して見る氣もあつたのである。それでも矢張り返事はなかつた。

七人兄弟の岸田は總領である。下は女が五人の男が一人。上から順々と嫁いて、同家には十四の弟と十六の妹とがある。直ぐ次の妹だけは未だ獨身である。これは千住在の小學校に教師をして、毎月幾らか宛の金を母へ送つてゐる。母はその金を大根に、傍ら書生の世話などして、細々と異體に暮しを立てゝ居るのだ。

家屋敷はとつくに人手に渡して、今は佗しい借家住居である。

二

下戸塚に自分の標札を掛けた家を持ちながら、岸田はこの程から九段中坂下の信濃館と云ふのに下宿して居る。下宿とは云ふものの些いとした旅宿である。書生を先にやつて、そこの一番奥まつた閑靜な座敷を擇ばせた。八疊の間に三疊の小間が附いて居た。岸田はこの家に來る前、相模の或る海水浴場に五六の二月を暮して來た。

相模へは仕事を持つて行つた。某新聞へ載せる長い小説と、外に二三の短篇小説を頼まれて居た。旅立つ時、岸田の先輩は渠を呼んで、生計を二軒にするも浪費ゆゑ、寧そ家を疊んで身輕になつて行くやうにすゝめて見たが身上を疊むとすれば後始末に金も要る。それも不如意だ。而已ならず、歸るに家の無いのも旅する身には便ない。精力を打込んで書いたらば、半月か一月には必らず書終えやうと、立派に約束して家を出たのであつた。

留守の家には下女と二人の書生を殘して發つた。

地にも空にも緑伸びて、慌しきまで風物の推移の急なる四月末の或る晩であつた。目口に滲入る新緑の香の中に、岸田は太い板屋楓に背を凭せて、遠い野面の夕暮を眺めながら、偶とこれまでに覺えぬ或る寂昧の身に薄るを知つた。譯も無く胸の底がそゝられて、凝つとして居れば涙が墜ちさうになる。そ

てらの霧立つた水溜りの中では、カラ〳〵〳〵と蛙が鳴く。大聲に叫んで手でも打揮りたいが、動く事さへ出來さうにない。日が落ちて黒い甲州の連山を眺めて居るのだ。

頸を垂れて岸田の思ふ處は、唯「これぢや居られん。」と思ふそれであつた。何時まで然うして居ると後から追立てられるやうな氣もする。總てのものが馴染み過ぎた。何か新しく生きたい。自分には何時面白いと云ふ日があつた。何時心から安心して机へ坐つた事がある。これは旨いと云ふ旨い物も食はず、これは面白いと云ふ面白い目にも遇つた事がない。仕事の上から云へば、努力の精進のと口では云ふが、書く事は日増に樂になつて、唯の一度その精進に痩せる想をした事がない。舊いものは今まで使馴れた硯でさへいやだ、酒も厭だ、鄕黨友人總ていやだ。何かしら新しいものを見たい、聞たい。

「遠い旅をしやう。」と斯う決めて、岸田は戸山の原を自分の家へ歸つた。暗い入口の戸を開けると、男世帶の空氣は冷やりと頰に當る。土間には口の開いた炭俵が放下してあつて、穢ない書生下駄が五足も六足も、足の蹈處の無いやうに蹈返してある。書生の一人が茶の間の疊に七輪を持出して、胡坐を搔きながら澁團扇でバタ〳〵灰を飛ばして居た。

遠い所、遠い所と地圖を探しても思はしい所が無い。直ぐ近處に居る先輩の晩酌時に膳の前に押駈けての話を持出すと、その人は又例のが初まつたと取合はない。然し押して强情張るので、その人も「では寧そ××にし給ひな。那所の病院には丁度××も居るから、話し相手があつて兩方好いだらう。」と決めて呉れた。その翌日幾干の金を整へて、半ばは留守中の書生に渡し、岸田は張溢れるばかりの希望

を抱いて新橋から汽車に乘つた。

相模へ行つてからは全るて仕事は出來なかつた。そこにはその怠けやうがあつた。考へる暇すら無く怠けて暮した。何所へ行つても獨り居られない人である。故と擇んだ旅屋の掛離れた一室より、荒凉として風の多き海濱より、穗伸の目に立つ麥畑に獨り立つより、溫氣の閉籠つた病院の病室でも、人の居る所の方が岸田には慕はしかつた。多くの時を病院で送つた。岸田はその病人とは一面の識も無い人であるが、その人の作品には數年來魂を打込んで讀んだものだ。未だ世に出ない前の岸田は、この人一人を敵と見做して、何時か一度それを凌ぐ作品を書いて見せやうと、陰ながら血を跳らして居たのだ。その人の家の前を通りながらも、今に見ろと云ふ氣で通る。顏を合はすべき會合へは自分から避けて出なかつた。

病人は何よりも沈默に倦疲れて居た。訪問の客は注射劑だと云つて、如何に身體の苦しい時でも喜んて相手を迎えた。賑かに話して笑つてさへ居れば、總ゆる苦痛を忘れて居た。現に食物も進む。で、一時でも長く岸田を枕元から離すまいとする。一日無沙汰すると直ぐ使して呼付け、部屋から沈滯した空氣を追拂つてくれ給へ、さも無いと僕は死ぬと、本當に死にさうな事も云ふ。何處にも待たれず、何處にも迎えられぬ岸田は、この素懷しい病人の言葉に曳かれ〱て、今日も明日も他に用の無い人のやうに病院へ入浸つて居た。

こうして二月近く續いた。仕事は少しも捗取らぬ。然し、岸田は人一人の魂を救つて殺ろすのだと自

ら慰めて居た。

戸塚の留守宅からは煩さい手紙が來た。でも、その頃は最う病人の病勢が革つて、今日か明日かと醫師も家族も危ぶむ頃てある。仕事は迫つても筆を取る暇は無つた。東京からの人出入が激しくなつて、岸田はその應對に疲れる程てあつた。家の方へは返事も出さなかつた。

六月の末、病人は眠るやうに死んだ。友人どもが集つて火葬にし、その遺骨を守つて東京に着き、更めて葬儀を營むまて五日の間に、岸田は相模と東京の間を三度往復し、三晩眠らなかつた。

葬式は濟んだが、流石に故の家戸塚へは歸れなかつた。東京へ歸つたと聞いて、書生が交る〳〵その家へ呼出しに來て窮迫を訴へるけれど、岸田は唯忙しさうに混雜の態を見せて、明日は歸るとか今晩は歸るとか、一寸のがれを云つて歸した。そして、誰にも默つて、その信濃館へ下宿して了つたのてある。

三

岸田は目を覺ますと、躊はないて直ぐ起きた。未だ新聞も來て居ない。壁の隅々は暗かつた。誰も起きない帳場を通り、急ぎ顔を洗つて來て、次の三疊の窓際に一閑張の机を持出し、そこのガラス窓を一杯に開けた。そして萬年筆に指先を穢しながら、原稿用紙に長い手紙を書出した。

窓近く覆被ぶさつた夏桃の葉蔭が紙の上に青い影を落した。外はシツトリと重き朝の霧。目下の屋根屋根は黒く濡れて居る。仄暗い中から油蟬がヂエツと鳴出した。

手紙は半ばにして早や倦んだ。机に兩肱を置いて、的も無く見詰る目の前に、小蜘蛛が絲に下つて桃の葉からスゥと下りて來る。雫がパラ〳〵と濡れた土へ落ちた。机の上へも落ちた。

昨夜の模様が目に見える。多くの人の集れる愼しむべき席上。その左席の一番上座に新しき佛の位牌を背にして座した人の膳の前に自分は胡坐を組んだ。そして、手酌でグイ〳〵盃を呷りながら、何事かを威高に罵り喋つた。或る人と或る人は目と目で自分を見ながら小聲で何やら囁き合つて居る。「酒だよ。常は誠に好い男だ。」と云ふ或る人の聲も聞える。總ての注意が自分に向いて居る事も知つた。…………突然、パチ〳〵と小氣味よき拍手の響が鎭り返つた座敷中に沸立つた。それは、自分が相手に鋭く遣込められた痛快さを迎ふる人々の拍手であつた。血がカッと頭に上つた。立上つた。すると、一海軍士官の太く逞しき腕が後から來て羽織の上から自分の腕をムヅと引摑んだ。三人四人、周圍を取廻いた。その隙間〳〵から、侮蔑、嫌忌、苦々しさの一座の目がこと〳〵く自分に降注がれてるのを見た。相手の人は前に坐つたまゝ、片手に盃を持つて、その目鏡の上から此方を見て居た。行く所まで行け。機會だと思つて居た時には、最う自分は薄暗い二疊の玄關に引擦出されて居た。「この帽子が然うだ」と誰かゞ麥藁帽子を探して來て被ぶせた。外は糠雨。「本當に迷惑だ、酒喰ひ！」と喃出すやうに罵る年寄つた女の聲を格子戸の内から聞きながら、辛つと下駄を探して、泥濘の中を傘もさゝずに外へ出た。

蒼白く膨上つた岸田の臉はヒク〳〵と絶えず痙攣けた。その多勢の拍手の音が、今も尚ほ鋭く耳に鳴つた。渠は起上つて蚊帳の中から鐵瓶を取つて來て、そぶ臭い溫み水を湯呑に三四杯、有ッたけ立續け

に飲乾した。暗い蚊帳の隅には蚊の唸りが未だ細く幽かに立迷ふて居た。

蚊帳の釣手には濡れた五ッ紋の羽織が肩を擴げて掛けてある。袴は泥撥を乾かして疊の上に擴げてあつた。外にハンケチ、卷烟草入、小豆皮の財布、そんなものがそこらに投散らしてあつた。

岸田は足だけを蚊帳の中へ入れて、仰向きにウト／＼して居た。顏に膏が浮いて、唇ばかり際立つて赤かつた。ホウッと兩の頰に温味を覺えて目を覺ますと、夏の朝の光線が霧の中からカッと明るく疊へ射込んで居た。

岸田は又蚊帳の中へもぐり込んだ。そして幾度か目を覺まし、幾度か眠つて、辛つと起上つたのは午後の一時過ぎ。目の覺める度毎に、昨夜の拍手の音に心を騷がされた。

起きると直ぐ、岸田は着物を着換えて、キチンと机に坐つたまゝ女中に朝飯を命ずると、「又お出掛けなさるんですか。」と不審さうに見て出て行つた。

飯の間も岸田は默つて、不向きながら喰べて居る。怺え／＼て居た女中は、茶を淹れながらブッと噴出して了つた。昨夜の事を思出したのである。

「云はぬ事、云はぬ事。」と箸で拂つて、「最う今日は勘辨して下さい。」と岸田は顏を赤くした。

「可哀さうに、あの藝妓は、姐さん歸して下さい／＼ッて、泣きさうな顏して居ました。何んと云ふ妓なんてす。赤坂だつてぢやありませんか。」

「最う好いよ。」

「だつて昨夜の岸田さんたら、そりや可笑しいんですもの。私今日朝つから帳場で、眞似して、本當にお肚を捩りました。」と小作りな斜視なお初は聲を立てゝ笑つて居る。

岸田は眞赤になつて、帽子を持つて部屋を出た。帳場の女中溜りでは、若い女中どもがクス／＼笑つた。岸田は知らぬ顔して玄關を出た。

外はカッと照付ける雨上りの炎天。石門に乾してあつた番傘がキラリと寢起きの目を射した。門を出て些いと迷つた。坂上の方へ行掛けたが、戻つて飯田町の電車道の方へ歩いた。國學院横の合歡の木影には、運搬車に兩肱をもたせて、俯伏しに小僧が立ちながら眠つて居る。雨上りの路は固く乾いて居た。

四

牛込見附内のある横町。そこの何某といふ素人家の二階に峯岡が下宿して居る。もと岸田の家に寄食して居た事もある人で、岸田と同じ人を師と頼んで居る。風邪を引いたと云ふて、手織の綿入を素肌に着て、薄汚れた白毛布にくるまつて居た。枕元には振出しの茶碗がある。最う昨夜の事を聞いたと見えて、「何しろ大變だッたと云ふぢやありませんか。痛快でしたね。」とその時の樣子を細々しく聞いて、いたはるやうな口振であつた。大抵の事は、今朝××社の番頭が來て話して行つたと云ふ。岸田は事の起因を自分の酒に藉せて、餘り多く云はなかつた。

一加藤さんも驚いたと云ふ事ですぜ。貴方が眞蒼な顔して　頭から濡れて、泥だらけになつて來て金が欲しいと玄關へ坐り込んだ時は。後から小僧でも跟けやうかと思つたさうです。一生の耻辱だッて、泣かれたさうですね。」

「何うせ、僕は損すべき男に極つて居ます。」

と岸田は羽織をまくつて、開前の閾に蹲んで、外を見ながら笑つて居た。

「然し、僕等のやうに貴方を好く解して居る者は、そんな話を聞くと實に心外で耐りません。あの難儀と馬鹿々々しさとを見せてやりたいと思ひます。誰に一人、貴方のやうに進んで馬鹿々々しい損な役を擇ぶ人があるものか。」と吃り口を鋭く云つて、聲を顫はせるのだ。

「誰が何んと云つても、僕等は人一人の魂を喜ばせたのだと思つて滿足するさ。それに、現在接近して居た君等が然う認めてくれるんだもの、遺憾は無いさ。」

「そりや皆知つてますよ。誰だッて認めて居ます。」

「然うだらうか。僕ア何うもそんな心持がしないがな。」と云ふ中にも、岸田の顔色は幾らか軟いて來た。峯岡はたゞ一心に張氣を持たせやうとする。

話が興めば酒がなくて居られぬ。何所か此邊の涼しさうな家に行つて語らうと峯岡を誘つて見たが、眞逆この暑さに綿入では出られも爲まいと笑ふから、下戸塚の家の始末を呉々も頼んで、では××社へでも行つて見やうとそこの家を出た。玄關を出る時、「家の事では、先生より奥樣の方が非常に貴方を恨

んて居るさうですよ。」と話して聞かせる。

「奥様が何んだ。」と、岸田は正直そんな氣になつて、カラ〳〵と辷りの好い格子戸を明けて夕日の横町へ出た。

凉しき夕暮のお濠内を、草土手に沿ふて話しながら牛込の方へ行く二人がある。市ケ谷の××社を出た岸田である。大名縞の薄汚れた白地浴衣に絽羽織を引掛け、パナマの帽子を提げながら行く肥えた方の人はその先輩木澤である。木澤は胸元を掻擴けて、帽子で風を入れながら歩いて居る。岸田は社に居る中から頭を混亂されて、早く外へ出て話さう〳〵と待構えて居たのだ。蒼い顔して居た。

「先生、今井君に僕への傳言を賴んだと云ふのは何んです。氣に掛るから却つて貴方から聞きませう。」

「なアに、些いとした詰らん事さ、後で今井に聞いて見給へ。」と何氣なき體で、下駄の先きに路傍の小石など蹴つて歩るいて居る。丁度通り掛つた、十八九の潮染着た女の後姿を振返して見て、「好いね、何うも夏の夕暮は女を美しく見せる。何うだ些いと氣に入つたらう。」

「いやだ、あんな者。留學生の喜ぶ口だ。」と見もしない。

「止せよ、大きな聲するのは。此方を見て行つたぢやないか。」と高笑ひしながら岸田の傍から飛離れた。

岸田は腹の底が空になつたやうて、呼吸が慌しく騷いだ。「絶交てすね。然うてせう。」

「何うても好いぢやないか。昨夜の元氣のやうにも無い、酷く臆病になつたものだ。」

「然し氣になるてすからね。然うなら然うと明かに云つて下さい。僕ア眞面目に貴方から聞かうと思つて、今井の引留めるのを無理に追駈けて來たのてす。」と道の眞中に立停つた。何處からか枯草を乾す甘く酸性の香がフウワリと大氣を漂はして來た。

「僕ア君と附合ふと損をしなきアならないもの。昨夜も君の歸つた後て、皆が僕を氣の毒がつて、僕一人を憫れむんだ。厭な心持だね。何んの爲に憫れまれるんだ。僕ア君と一生附合ふまいと思つたよ。」と岸田の顏を眞直に見詰めて言放つた。

「昨夜先生が切りと止めた時、僕が喧しい、默つて居ろと云つたのは知つて居ます。」

「相互に少し遠かつて居やうよ。僕は君を容れる程の雅量はない。君に較べて實に小人なんだからね。」とブラ〳〵歩るき出した。岸田も默つて歩るき出した。

やゝ暫くの間、相互に言葉なくて土手の際を歩いた。少し後れて來る岸田は、時々睨むやうな眼付して木澤の後肩の邊を見詰めた。木澤は色々恍けた罪の無い話を爲掛けて見たが、岸田は今の一事に屈托して話が興んて來ない。

「然し、何んとか云ふけど、君の昨夜の態度は憎かつたよ。伊上に關係ある事ぢやなし、伊上も初めの間は好い加減に君を宥めて居たんだ。それなのに終にや實に亂暴な事を言出して、伊上君を困らせるん

だもの、實に始末に不可なかつたよ。」

「知つてますとも、然し忍び難い惡評を世間から受けて居ますからな。この間の新聞なぞは輕い方なんても。今日蜂岡に遇つたら、あの男でさへ大に憤慨して居ました。」

「そりや然し伊上君の知つた事ぢやあるまい。要するに君は調子に乘り過ぎたんだ。死んだ人には舊るい友人もある、親戚もある。それ等の人から見たら、君の今度の態度は實に憎々しいもんさ。自分一人て万事を切廻はすやうに見えるからね。總ての人の反感を買つたんだ。見給へ、あれだけ居る中で、誰一人君に同情する者がなかつたぢやないか。」

「然し、僕は僕の信ずる事をしたんだ。別に悔みもしません。」と云ひながらも、又例の拍手の音を新しく背中で聞かせられるやうに思つた。

「その決心なら好いさ。餘計を云ふやうだが僕に云はせると、君が今度の看病や世話振りは皆自分の物好きなんだ。君と云ふ人が然う出來てるんだ。云はゞお祭り騷ぎさ。そりや、何も世間で噂する如き利慾づくぢやなかつたらうが、盡した親切を賣物にやならんよ。」

「最う澤山。何を云はれても僕は僕でせう。持つて生れた性格だから駄目です。」

「それ見給へ。君ぐらゐ他を責めるに急な人は無い僻に、他に云はれる事を嫌ふ人は無い。直ぐ憤るんだからね。」

「最う澤山です。」

見附の小橋には、白地の浴衣を着た人々が欄干にもたれて涼んで居る。身を橋の柱に折つてお濠の下を覗いてるのもあれば、背中をもたせて遠慮なくヂロ〳〵と通行の人を見て居るのもある。暑い一日は静かに暮れて、濠添の片側町にはチラホラと灯が點つた。

「ガラ〳〵〳〵。」雷の如き響がお濠の中から起つた。舳先にカンテラを點した平駄船へ、岸の上からトロックで搬んだ石屑を打撒ける音であつた。ウッスリと靄立つ夕闇の中に、勞働者の手や顔やが白く見えた。焚火をしてあたつて居るのもある。カンテラからは黒くあくどい油煙が濛々と立上つた。

「何うだい、此所の景色は描けさうだ。チユルカッシユの初めにある、あの港口を思出すぢやないか。君の筆だよ。」木澤は柳の木に片手を掛けて、目を細くして眺めて居る。

「先生、絶交だけは止しませう。僕ア然うすると益々孤立しなきア爲らなくなる。」

「まア、然うとして置くさ。長い事ぢやない、當分、ホンの當分だ。君にも似合は無い弱い音を吐くぜ。」と可笑しがる。

木澤は途中友人の家へ回つて、西洋草花を根分けして貰ふ約束がある。そこへ行くと云ふのを岸田は追駈け〳〵神樂坂の上まで跋いて行き、話もあるから何處かで晩飯を是非一處に喰べやうと云ふのを、無理に斷つて坂上の横町へ外れた。すると、又二三間行つて急に、「岸田君、岸田君。」と小戻りして來た。

「何んてす、先生。」これも戻る。

「嚢から云ふのを忘れて居たんだがね、君の家さ。それを云つたら君は憤るかも知れないが、あれは何うするんだ。何時までもあゝして置く氣かね。僕等が迷惑してるんだ。大家も何も近頃は皆僕の方へ刄向つて來るんだよ。」

「先生より奥樣の方が迷惑がられて居るでせう。」

「家内は無論さ。」

「承知しました、二三日の中。」

「失敬。」と木澤は横町へ曲がる。

岸田は下駄を重さうに、ブラ〳〵と坂を下りた。

五

この頃の岸田は滅多に宿に居ない。四度五度と尋ねて會ひかねる人も少くなかつた。偶々家に居る日は人出入がはげしく、間斷なしの來客に應對しなければならぬ。居留守を使ひたいと思ひながらそれも好う爲ぬ。來る客は大抵年の若い青年で、岸田さんのお客樣の穿物と宿で評判されるほどであつた。年配も風態も違ふ岸田を、「岸田君、岸田君。」と友達附合にして訪ねて來る。紺絣に小倉袴の人も多かつた。二度も續いて居ないと云ふと、若い人達は「大將また遣つてるね。」と笑ひながら歸つて行く。

岸田が近頃一日の仕事は、ある新聞に一日一回の小説を書けばそれで濟むのであつた。毎朝起きると

直ぐ机に向つて、サッサと書流しては直ぐ車夫に持たせて新聞社へ送つて了ふ。三十分か、長くて一時間とかゝらぬ。客が居れば客を傍に待たせて置いて、話しながら片手で書く。書いた後で讀み返すでも無ければ、字一字改正するでも無かつた。その癖これては不可ぬとは毎日思つて居る。時には又夜の間ポッチリとも寢ないで細かく苦んで腹案した趣向を、曉から起きて筆を執る事もあるが、後から〳〵時間に追はれて、唯の一回でも滿足に書終せる事がない。今日は今日だけの事に爲やうと諦めては直ぐ送り付けて了ふ。だからそれが活字になつても、岸田は見るが恐ろしくて唯の一回も自分の小說を讀んだ事が無い。

　家を出れば何處に行くと云ふ事は無い。唯賑かなところ賑かなところと探して廻はるのみだ。他を訪ねても、同じ所に凝つとして話しては居られぬ。何處か出やう、と直ぐ誘出す。先輩の淸水は何時も渠の癖を笑つて「そら又岸田の何處か面白い所が初まつた。自分は何うせ獨り相撲しきア取れない癖に、相手ばかり探して居る。」と評して居た。全體岸田にはこれと云つて親しい友人は無かつた。唯新しい人、新しい人と年中交る境を變えて居たいのだ。新しい顏なら直ぐ逆せ上る性質で、何んの判分も無く直ちに惚れ込んで了ふ。だからこれまで見ず知らずの書生を家に連れ込んで、幾度手を燒いたか知れない。親しく接しない人は誰でも偉らく見えるのである。峯岡なぞもその一人であつた。初對面の粗朴らしいその態度と、激し易さうの話振りがスッカリ氣に入つて了つて、暇を潰してその人の仕事を探して歩いたり、終には自分の家へまで引取つて自分同樣に取扱つて居た。その代りには、人に倦む事も倦み

易い。さア倦んだとなると一日でも默つて傍に見ては居られぬ。イラ〳〵してそれに打衝かる。自分が與えて置いた職業も自分で奪つて廻はる。置いた書生のだらしない朝寢が氣に入らぬとて、二日も三日もその男と同じ食卓に坐る事を避けた事なぞある。馴れた者は最うソロ〳〵倦きられる時分だと笑つて見て居た。

だから自然今となつては極く新しい人か、極く舊るい、忘れて居たぐらゐの舊友を探すの外は無い。この頃中の出來事に關係のある人々は此方から避けて會はない、何も知らぬ人が相手である。同じ道に關はる人で今も時々出入するのは清水ぐらゐのものだ。この人は先生木澤の舊るい親友で、その緣故から岸田とも四年この方交際つて居る。多く考へて寡く云ふと云つた風で、何事にも滿足しないが、その換りには强いて何事にも反抗する事を爲ない人である。これは自分の意見は意見として深く心の底に秘めて飽くまで地味に世を渡る人である。身體が弱いので筆を取るのを何より臆劫がつて、一生何もせず爐傍の前に煙草の烟を見ながらボンヤリ送りたいと云つて居た。

岸田は初めてこの人にその才能を知られたのだ。世間にも認められず、木澤にも唯酒の面白い剛情な男ぐらゐに知られて、房州に放浪落魄して居る當時、初めて力强い自信を心に吹込んでくれた人はこの人である。細く顫えのある、優しい女のやうな聲で、「君は輕業をして終生を送る人ぢやない、眞面目に勉强して世に出給へ。君は今君の財産を銅貨にして細かく拂出して居るのだ。新しい時代は最う戸の外まで來て居るぢやないか。」と濡れた砂濱に下駄の跡を付けながら心から勵まされた。その頃岸田は或

る文學雜誌の訪問記者や責任なき翻譯もの丶助手などして暮して居た。

今度相模から歸つて來ても、一晩、岸田は酒に醉つて西片町の淸水の家へ推參けた。「僕は何んで斯う世間から非難されるんです。果して世間で云ふ通りの惡人なんでせうか。」と激して蒼くなつて居た。淸水は到來もの丶唐辛を肴に麥酒を出して自ら酌してやりながら「君は餘り花役者になり過ぎたんだよ。また爲れ過ぎたんだ。松助か片市になる氣になつて、ユックリ勉强は出來ないものかね。」

「ですが、僕ァ今でさへ寂しくッて不可ないんです。何んの爲めに斯うして世間から惡るく云れ〳〵齷齪働くんだか些つとも解りません。僕を正當に解してくれる人は一人もないんですよ」。

「誰だつて然うなんぢやないか。まアそんな事は止して飲み給へ。」と顫え癖のある瘦せた手でコップを重ねさせて、「でも君なんか身體の自由なだけでも羨しいんだよ。僕等を見給へ。全るで駄目だね。近頃は電車の傍を步いても眩暈しさうになる。今年は僕に肺病が出さうだ。だから血氣な靑年を見ると畏しくなるね、今にも背後から來てグワンと顚覆されるやうな氣がしてならないんだ。」大きな瀨戸火鉢に凭掛つて心から染々と云ふ。

「女房でも持つたら何うでせう。平凡な家庭でも形作つたら、僕の如きものでも少しは自ら鎭靜するだらうと思ひますがね。然うは行きませんかね。」

「持つも好いさ、然し家庭なんか駄目なもんだ。女房を可愛い人はあるかも知れないが、臺所を可愛がる人はあるまい。それに君なんか、女房さへ可愛がらぬ人に出來てるんだもの。まア態の好い不具の口

なんだからね。」と清水は固く小さい顔に皺を溜めて、腹を抱へて反り返つて笑ふ。

「然うかな。僕ア近頃染々女房が欲しくなつた」。

「まア一度は持つて見給へよ。持つて經驗して見るのも好いだらう」。

醉ふほど岸田の調子が激しくなる。終には自分と自分の聲に醉つて、後から〳〵唯最う強い事を云ふ。文壇の人の偏狭を罵つて、何も斯う小さく見世を出して居るものまで、蹈み躙らなくとも好いだらう。廣い世界に活きたい〳〵と云つて、小さな目に涙を一杯に溜めて居る。

「先生、握手。」と岸田は泣きながら手を出した。

清水が固く握つてやると、「然し好いです、世間は何んと云つても、僕は必ず奮闘しませう。弱い音を吐く奴が押除けられる時代だ。」と俯向いて啜泣く。

清水も持餘して「まア好い、何所かへ行つて一晩ユックリ語り明さうぢやないか。君ばかりぢやない、僕も孤獨だ。」と岸田を連れて賑かさうな所を探して出た。

六

國元からは悲しい手紙が頻りに來る。母も取る歳に氣が衰へて、寄來すごとに胸に閊る事ばかりを書いて來る。一生厄介にならぬと立派に云張つた言葉の手前、今更こんな事を云はれる義理はないが、弟妹は現在血を分けたその許の兄弟、私は憎い者としても小さいそれを最惜いと思つて助けてくれと初めか

ら終まで謝つた手紙なぞもあつた。耐らなくなつて、長い〳〵返事を書き、母を慰め兄弟を慰め、金は何日まで必らず纒めて送るゆゑ心配するなと優しい言葉を盡し書並べては見るが、封はしても出す時になると氣が咎めて必ず躊ふのだ。撫でるよりも烘れと云ふ。で、端書に何方就かずの文句ぞ、何れ近々の中には歸着したいと思ふ、万事はその時に決めますと手短かく書いて出すのみてある。年老いた母の心を糧にする情の籠つた長い手紙は幾本も机の抽斗に殘つた。

岸田の友を求める心は餓えた人のやうに激しかつた。訪ねてくれる人は誰に限らず慕はしいのだ。人に歸つて了はれた後が醫へやうなく寂しい。自分の用や仕事なぞ手間を缺ひても客を離すまいとするのだ。雨催ひの蒸熱く鬱して、電燈の熱が部屋に籠る晩など、一人取殘されては些つとても宿に居られない。歸つて行く人は皆温かい家を持つて居るやうに見えた。潮の退跡の如く客の去つた廣い部屋に、敷物やら茶道具やら、書籍菓物の籠など亂次なく引散つて居るのを見ると、最う居ても立つても居られなくなる。財布の錢を改めて直ぐ宿を出るのだ。出ても行く的がなければ、三崎町の橋を渡つて、××座の芝居茶屋に寢轉んで居る狂言作者の大橋を連出すか、それも居ないとなると、神田の通り、神樂坂、何處でも賑やかさうな所を尋ねて歩き廻はつて夜を深かす。寄席へ入つても一時間とは凝つとして居られぬ。追はれるやうに氣が立つてそこを出る。緣日をひやかす氣も無く唯賑やかな町をば那地から此地へと歩るいて廻はるのだ。屋臺見世にも首を突込んだ。

大橋は小學校の時、些いと知つて居る。その後別れて十七八年、相互に噂も聞かずに過ぎて來たのを、

ツイ近頃ある芝居の棧敷で圖らず一所になつて飲んだ。先方では幾らか此方の消息ぐらゐを傳聞いて居る樣子であつたが、岸田は顏を見ても急にはその苗字さへ思出せなかつた。

渠の話に據れば、渠はその後名古屋、大坂、京都、重に關西を遍歷つて、芝居道では可也の苦勞も甞め、少しは人にも知られる身體になつたと云つて居た。自分の書いたもので京都某座に三十幾日打通し演じたものもある。東京の芝居を視察するため今度忙しい間を拔けて來たが、此方の芝居を見て見物の氣受けする急處を熟々悟つたから、今度上方へ歸つたら一生を喜劇作者に捧げ、未だ例の無い喜劇女優一座を組織する積りだと吹聽して居た。現にその第一製作として、甞つて某氏に翻譯された事のあるコツツエーヴの或る作を日本の女判任官に當篏めて、三幕ものにしたものを書いて居る。自を呼んで實演脚本作者として居た。

紅刷の大入札を壁一面に貼付けた、窓の高い風の流らぬ裏二楷に、渠は何時も素裸にネルの腰卷一枚の姿で熱い瓦斯ランプの下に寐轉んで居た。相手には兼さんと云ふ少し智慧の足りない此處の女將の甥が居る。兼さんは人の顏さへ見ると、「大將、如何でやす、旨い趣向がありますか。」と狐憑き見たいな手付しながら厚い脣でニヤ〳〵笑ふのが癖だ。後から女中の背中を甞めたとかで家中を追駈廻された事もあつた。行けば必らず何處へか出掛ける事に決つた。「毎度何うも君に費はせて濟まないが、なアに最少し待つて下さい、今に大阪から來るものがあるから。」と言譯しながら、大橋は碁盤を壓にして置いた一張羅の越後上布に雪駄をチャラ付かせて家を出る。大阪役者の配り扇子と絹のハンケチは必らず

手を離さなかつた。

酒が少し興んで來ると、大橋は岸田の無勘定と我殺とに呆れて了ふ。大橋が柱にもたれて、女中どもを相手にシンミリと話込むか、三味線に合はせて心優しい文句を低く歌つて居る間に、岸田は唯ガブガブと酒を急ぐ。そして、藝妓でも女中でも手當り任せの惡口である。女を呼ぶには「ヤイ、狆ころ。」て通つて居た。酔つて來ると立つて女どもを追廻はす、投飛ばす、大橋が唄つて居る三味線を取上げて、浪花節をやるんだと引搔廻はす。女中どもはキャッ〱云ひながら、そこらの道具を片付け廻つて居る。大橋は髪を眞中から膏油て梳けた角張つた顔を若き女の膝にもたせて、「又初つたね、坊ちやん、泣かないでお遊びなさるんですよ。」と、指まで眞赤になつて苦しさうな息を吐いて居る。女と顔を見合つてはユッタリ笑ひながら見て居る。

「あんなにして遊んて面白いんてすかね。私共にや判からない。あれぢや天て女が寄付きませんや。折角金を出して遊ぶのに惜しいもんだ。第一立引が利きますまい。然うてせう。三度飲みに行つて一度藝妓にうけたまはらせないやうぢや嘘てすからね。女もその欲が惜しい〱て段々深かく嵌まつて行くもんてさアね。」と口癖にそれを云ふのだ。そしては直ぐ上方を持出して「まア一度上方へ來て御覧なさい。遊ぶには何を云つても京大阪てすね。こんな東京のやうに世界が狭いんぢやない。尤も僕等は始終役者衆と一所てすから、先方ても先生〱ッてあがめてくれまさア。名入りの手拭の一筋も遣つて御覧なさい。そりや喜びますぜ。私が御案内しますから是非一度來て御覧なさい。」と、聞きたくも無い遊び

話を、自慢らしく口へ唾を溜めて捲り立てる。

「君は遊びが好きなんだ。僕ア騷ぐのが面白いんだ。」

「騷ぐにしても騷ぎやうがありますアね。君の遣り口は暴れるんだもの、あそこの女中が感心して居ましたぜ、岸田さんは好くあゝ毎日暴れ廻つて暴れ飽きないッて。」

「そんなに上方が面白いなら、一度吹聽ばかりで無く案内したら好いぢやないか。僕ア何時でもお供するよ。」

「好しい、最少し待つて下さい。今の脚本が出來上つたら、必らず案内します。君のやうな人は最う東京へ歸るなア厭になつたと言出すかも知れませんね。」

その脚本も隨分久しい話である。書上げたら何處か雜誌に世話してくれと頼まれて居る。金は入らぬが大坂へ歸る土産にすると云つて居た。岸田は好い加減に聞いて深く相手にならなつた。

その後、戸塚の家から煩さく書生が來て、一日居れば一日困るだけである。自分も他に世話になる家を見付けて、その方から毎日の催促ゆゑ、明日にも型を付けて貰ひたいと云つて來た。岸田は幾何かの金を作つて待つて居たが、その方一切を頼んで置いた峯岡は些つとも顏を見せない。端書を出しても返事がないので、態々俥に乘つて尋ねて行くと、峯岡は四五日前から房州の方へ旅行して居ないと云ふ事であつた。一度拵えた金は持つて居る内に段々少しづゝ減つて行く。

ある晚、西片町に淸水を訪ふたが居なかつた。岸田は靄の深い夕暮を、寂しき心して宿へ歸つて來た。

この頃は妙に自分の宿へ歸りたくない。的は無くとも出る時は譯も無く心勇むけれど、虚しく歸る日は旅の中のやうに心が重い。通る人も自分の後姿を振返つて見て過ぎるやうに思はれる。誰か留守に尋ねて來て居る人は無いか。然も無くば、何か大變な事、急な電報でも來て居れば好い。苦しみ腕くやうな破綻でも好いから、自分を待構えて居れば好い、と、そんな事を考へながら路傍の電柱の傍を歩いて歸つた。

旅屋へ曲る濠端の水道栓に近く、若い女が向岸の夕暮を眺めながら、唾を吐き〳〵後向きに立つて居る。蝙蝠傘で足許の土を突ツつきながら、俯向いて何か考へて居るやうだ。瘠せて背の高い女であつた。そこらの暗らい露路を洩れて來る味噌汁の臭が、嘗つて以前旅した、或る驛路の入口の暗らい夕暮を思出させた。

「兄さん。」若い女は蝙蝠傘を握つて後から追駈けて來た。淺草の或る會社員へ嫁いた妹であつた。

「旅屋へ二度行つたんですけれど、未だお歸りがないと云ふから、今歸らうか何うしやうかと考へて居た所でした。」

妹は絹縮の單衣に、娘の頃から見馴れた友染メリンスの厚ぼつたい帶を締めて、小風呂敷包を腋下に挾んで居た。頰が高く、眉が薄かつた。

「身體は何うだ。」

「今年は存外夏負けも致しません。」

「最う近々なんだらう。」

「えゝ。」と俯向いて、「九月の初め頃だらうと思つて居ます。」流石に小さな聲であつた。

「一緒に宿へ來たら何うだ。」

「又の時にしませう。最う會社から歸つて來る時分ですから。」と怖れるやうに聲を低めて、「實はお母さんから手紙が來ましてね。是非私に一度兄さんの所へ伺つてくれろとあつたんですよ。」と足許を見詰めた目を上げ兼ねて居る。

「その事なら好いよ。私からも昨日手紙を出して置いた。好く知つて居るよ。」

「兄さんもさぞ煩さいてせうけれどね、お母さんも年ですからね。」

「決つたから好い。それよりか久し振りで來たんだから、何所かその邊で旨い御飯でも喰べやうぢやないか。」と岸田は切りと勸めて見たが妹は歸りが急ぐからと心細く歸りかける。

煮沸れる汁の香は妙に人懷しく身に透みて來る。家を離れて牡鹿半島を放浪つて居る頃である。暗い杉櫟林の下をトボ〳〵と歩るいて居る自分の佗しい姿が目に見える。

「おや、半襟でも買ふんだ。」と財布を出して紙幣を一枚渡すと、妹は再三辭退した揚句、それでは折角ですから兄さんの名てお母さんの小遣に送りませうと受取つた。

岸田は懷から再び財布を出して、その中に入つて居る金を殘らず妹の掌へ乘せた。

「ほゝ、お母さんが甚麼に喜ぶか、喜ぶ顏が見えるやうだ、明日早く送つて上げませう。」と喜び〳〵

歸つて行つた。

岸田は電車の角を曲り切るまで、其處に立つて妹を見送つて居た。周圍は最うトップリと暮れて、露店の商人がカンテラを點けて店を擴げ初めた。浴衣がけに夕涼の人がチラホラ見える。

七

「森本さんと被仰る御老人のお方が尋ねて被來いましたよ。」と或る雨の朝、岸田は女中に搖り起された。昨夜の深酒に、もう可也晩かつた。

「森本ッて誰だらう。一昨日來たあの頰髯のある男とは違ひますか。」と蒲團の上にムクと起きた。それなれば、尾澤から寄來す使の者である。帶を返すか名譽が惜しいかと威張り散らして歸つた三百代言てある。

「いゝえ、違います。年寄つた方てす。」

兎に角、遇ふ事として起きた。机の上には××新聞の擔當記者から、激烈なる文句てこの頃の休載を詰つた手紙も來て居る。

ガッシリと肥つて、色の黑い休職下士官とても云ひそうな老人が、腰をかゞめながら入つて來た。顏の割合に聲の低い、勿體振つた物言ひをする老人だ。

「これは初めまして、拙者は××邸内に居りますもので。」と名刺を出して、遜つた調子て云ふ。戸

の家を差配して居る男であつた。
差配は周圍を憚るやうな、要愼深い小聲で、これまでの經緯を並らべ立て、今日は是非ハツキりした御返答を承りたいと落付き拂ふ。
家の整理は一切峯岡に托して置いたゆゑ、相談の上何れこの方から返事すると云つても承知しない。何うあつても確とした日限を聞きたいと云ふ。
「實は借家證にも保證人になつてお出てすから、木澤氏の方へも再三お伺ひ申したが、トンと要領を要ません。私は關係がないから、直接出向いて談判してくれとの事で御坐いました。それに木澤氏の被仰るにはな、中々約束を履行せぬ男だから、行く以上は酷しく談じて、固い約束を取結ばなければ駄目だなんて、そんな事を被仰つてゞした。」
「木澤が然う云いましたか。」
「いや、餘程御立腹のやうてしてね。私どもの話なぞテンから身になつて聞いては下さいません。」
と態とらしく聲を低める。
「關いませんから、何うか高い聲て話して下さい。」
「でもな、こんな話は御同様餘り旅屋なぞへ聞かせたくないものてして。私はお伺ひするにも餘程躊躇致したのてすが、何しろ木澤さんが達つて被仰るものてすから。」と諄々云つて居る。岸田は話するさへ小煩さくなつて、三日の間には必ず型を付けるとキツパリ約束した。差配は念を押し〳〵歸つて行つ

た。

その後へ大橋が、出來上つた喜劇の脚本を見せに遣つて來て、この話を聞いたものだから、そんな事は譯の無い事だ、自分が素手で行つて話を決めて來るゆゑ、是非委せろと造作も無い事に云ふけれど、岸田はそれには委せなかつた。直ぐ峯岡へ使を出した。「馬鹿〳〵しい、そんな古借錢の義理を立てる事があるなら、僕へ貸してくれゝば好いんだ。貸家なんてものは大抵二三割の倒れ込みを初めつから見て居るもんだ。僕ならそれを資本に頭へピンと來さうな冷酒弄花でも引くんだがな。」と齒痒がつた。

晝過ぎ今一度使を出したが、峯岡は來ない。房州からは一昨日とか歸つたが、少し加減を損ねて臥して居ると云ふ。

岸田は妙に氣が焦立つて、直ぐ俥に乘つて峯岡を訪ねた。峯岡は少し間誤付いて赤い顏した。病氣らしい樣子も無く、肌拔ぎになつてセッセと原稿を書いて居た。今朝差配の來た事を話して、先方の不親切を詰ると、峯岡も流石に顏色を混雜させる樣子であつたが、でも飽くまで旅行と病氣とを本當にして云張つて居る。「兎に角、僕の所まで來ませんか、少し聞きたい事もあるから。」と迷惑がる峯岡を連出して九段坂へ出た。そして無理に偶ある洋食屋へ入つた。

雨は最うスッカリ上つたが、空は低く曇つて、秋近い肌寒むの午後であつた。峯岡は糊氣の強い浴衣を切りと搔合せて居た。

「君は木澤先生から何か吹込まれたね。君は先生の下知を受けて僕を困らせやうとして居るんだね。」

「そんな事はありません。そりや貴方の邪推です。」と云ふもの丶、言葉はひどく躓いて居た。

「君は僕を知つて居る筈ぢやありませんか。斯うと明かに云つたら何うです。僕もその方を滿足する。第一男らしいぢやありませんか。云つてくれ給へ何うです。」

聞かれても聞かれても、峯岡は頭を垂れて默つて居たが、餘り立入つて聞穿ぢられるので、倒頭終に、

「僕ア貴方のお世話で兎も角今日の身になつたのですから、こんな事は言へた義理ぢやありませんが、僕の活きる爲めに何うか僕を絶交して下さい。事情は聞かんで何うか、然うして下さい。」と言出した。

岸田は眞蒼になつて顫えながら聞いた。何う責めても峯岡はこの上の口を開かないので、その話は止して獨りで酒を初めた。ハムサラダに垂れるほど辛子を塗つては喰べて居る。

「全く貴方は損な人です。僕ア實際同情しますけど、今の立場から何うにも爲方ありません、然し何れ一二年も經てば相互に解る時があるから、今日はまア何も云はずに居ませう。」と峯岡は憐れむやうに岸田の顏を見い〳〵シンミリとして云つた。その前にある皿は手も付けられずに冷え切つた。

岸田は強いても話頭を他に紛らさうと勉めたけど、胸がモヤ〳〵と焦ち上つて、言葉にはならない。獨りでグイ〳〵酒を呷つて居た。峯岡は切りと歸らうとすゝめても聞かなかつた。酒に連れて何時になく弱い愚痴ッぽい事のみ言出し、限も無く自分を弱い者、意氣地無し、見得場、臆病者と貶して居る。外へ出ても足駄を濘路に拾つて歩きながら、大きな聲で自分の弱點を算へ立てた揚句、「君も心付いて

るだらう、僕は何故斯う世間から非難されて、總ゆる人に疎外されるのだらう。自分ぢや賞められるやうな事をしても惡るく云はれる。決して惡人ぢやない積りなんだが然う見られる。僕ァ先生などに惡るく取られるやうな事は一度もした事だないんだがな。君、君の見る所を正直に云つて聞かしてくれ給へな。惡るい事は屹度改める。僕ァ强さうな事を云つて居るけれど、その實極めて卑怯な男でね、孤獨に耐えない人間なんだ。近頃は最う郷里へ引込んで、小説なぞ止して了はうとさへ思つてる位なんです。」

「そんな弱い事を云つて何うします。なァに世間だつて先生だつて、何時まで續くものですか、長い事ぢやないんです。」

「然し、先生は僕唯一の味方と賴んで居た人なんだからね。僕ァ寂しいよ。全體、世間ぢや僕のどの點を惡しく云つて居るね。それを正直に聞かしてくれ給へ。」

「どの點と云つて、さァ私共にや分りませんけど、××社の今井さんなぞは貴方の人を責めるに急なのと、傍若無人の態度とを始終非難して居るやうです。」

「今井君も、然うかな。」

峯岡は道々岸田の心を勵ますやうな事ばかり云つて、途中から別れて了つた。

宿へ歸つて籐寢臺へ寢轉んで見たが、氣がそゝつて落付けない。古雜誌など讀んで待つて居た大橋が浮々した話を持掛けて切りに誘ふけれど、受答の返事するさへ煩さくてならぬ。默つて窓にもたれて外を眺めて居た。何時の間にか雲が切れて、夕日はウッスリと前の濡れた屋根へ射付けて居た。

「天氣が上つたもんだから、ひどく蚊が出て來やがつた。」と大橋は手まめに蚊遣香を點して、バタ〳〵煽ぎ立つて居る。

西の空は夕燒して、カッと焰のやうに燃えて、壁も柱も、人の顏も赤く映つた。國の母の事や弟妹の事が切りと思出された。

岸田は蚊に責められながら机に坐つて、棚の上から新しい帳面を取出した。墨を磨下しながら色々考へて、表紙には點染記と三字を大きく書いた。そして、その第一頁目には、

八月二十七日

吾生今日に初まる。

退一歩。

眞に人を憎み、人を咀ひ、そして人を退けよ。汝は嘗つて人を憎み得ぬと共に人を愛し得ざるに非らずや。汝は手の先、足の先のみに神經を働かせて、嘗て一度も中樞の神經を働かせたる事なし。

畫一の則を守りて汝の官能を單一にせざる可からず。

と斯う書付けた。そして、直ぐまた宿を出た。

早稻田から奧へ入ると、急に夜が更けたやうだ。暗い長い一本路を、水車場へ米を搬びに行く荷馬車と一緒に行つた。

スッカリ開け擴げた木澤の家は、未だ賑かに明るい。ランプの灯は庭の植込にスウと流れた。先生は

前の草原に篝火を燃かせて、芭蕉の廣葉が被覆さる緣側の蒲莚にビールを飮んで居た。

「先生は少し醉つてお出ですが。」と書生が危ぶむのを無理に會つたが別に話出す用事もないのだ。暫くして、先生の方から、「何うです、近頃は一向お替きなりませんね。」と改つた調子である。

岸田は近々國へ引込まうと思ふ。東京に居ては見込が無い。長々お世話にもなつた事ゆゑ、今日は押して相談に來たと話した。聲が寂しく顫えて居る。然し先生は好いとも惡いとも何方も云はず、ビールを飮みながら迷惑さうに聞いて居た。

「や、岸田さんが來た、岸田さん、」と今年六歲の國夫さんが尻をまくつて飛んで來たが、木澤に叱られてペンを掻きながら引込んで行つた。

臺所には賑やかな笑聲が聞える。中に峰岡の大きな聲も混つて居た。

先生はランプを持つて暗い沓脫の上を見せながら、「最うスッカリ秋ですね。朝なんか寒むいやうです」と外の暗さを透して見て居る。幼ない子息は叉窃つと出て來て、お父さんの裡の外から怪訝さうに岸田の顏を見て居る。

「奧樣によろしく、國夫さん左樣なら。」と表へ出た。

星は沈んて、足許は暗かつた。出角の煮酒屋は奧の佛壇まで明らさまに戸障子を開放して、明るいランプの下に村の若衆が三四人空臑の胡坐を掻いてふざけて居た。岸田はその灯を除けて通つた。咽頭の下が羽根で撫てられるやうて、涙は自然と睫毛に溜つた。

自分の家の前を通ると、森と鎭り返つて灯一つ洩れない。生垣をグルリと廻つて臺處の方から窺いて見たが、矢張空家の如く人音がない、暗い足許を小猫が鳴きながら垣根の中へ入つた。また表へ戻つて背伸びしながら門柱を探つて見ると、自分の標札は未だ掛つて居た。四五間忍び足にそこを離れて、筋向の電信柱の陰から雨戸を目掛けて拳ぐらゐの石を投げ付けた。石は家まで達かずに、植込の中へガサと落ちた。

誰も人の出る氣勢は無い。

着物を夜露に濡らして、岸田は夜遲く宿へ歸ると、大橋は未だ歸らずに居る。芝居茶屋の兼さんも來て、二人てビールなど飲んで居た。相變らず暢氣な事を云つて一人て有卦に入つて居る。

「何うだ、遲いから最う歸つて眠たら。僕は明日少し仕事があるんだ。」と厭な顏を見せても二人とも動きさうも無い。

「大將、罪ですぜ。今日皆聞きました。イボタの虫ぢやないが、主の顏を見ない中は、何うも治らぬ私の癪つて、然う云つてましたぜ。何うです、スッカリ當てられやしたらう。」と奇麗に角刈にした頭を振りながら、假色交りで煽り立てる。

岸田は急に空腹なのを氣が付いた。飲殘りのビール瓶を取上げて三杯も四杯も飲んだ。

「おや、その事、その事。」と兼さんは急に浮上つて、ビールの換りを貰ひに下へ立たうとする。

「最う澤山なんだ、最う歸り給へよ。」と何時に無く荒々しい調子で岸田は苦り切つた。氣の弱い兼さ

んはその一語に縮み上つて、そこに出て居た敷島の袋から両方の耳へ一本宛挾んで、ピヨコ〳〵お辭儀しながら歸つた。大橋は今晩だけ泊つて行くと自分で床を出して寢た。寢ても煩さく話を爲かけるが返事しなかつた。茶屋の女將と何か氣不味い事が出來て、態と今日は面當に餘所へ泊つてやるんだと云つて居た。

九

この五六日は毎日小雨が降續いて、朝晩の冷はとても八月の中旬とは思はれない。人は皆氣遣はしさうに空を見上げて、「眞逆こんな陽氣ではありますまい。」と云ッて居た。岸田は行李から袷を出して着た、夜なぞはそれで出掛ける。

新聞の小説は矢張怠り勝ちであつた。社からは毎日酷しい督促が來る。昨日なぞは給仕らしいものに横柄な聲で二度も電話へ呼出された。それに、小説の氣受は何處でもよく無い。雜誌の批評家は、徒らにダラ〳〵と舞臺ばかり擴げて居るとか、故××の模倣以外に何ものをも認めぬとか、それは甚しい不評である。これを出版する約束になつて居る××社の今井でさへ、「君、少し堕容があるぜ。少しは人氣を取る事を考へ給へ。」遠廻しに時々忠告した。何時も愛讀して感服してるのは大橋唯一人あるのみだ。始終筆耕を手傳ひながら、「こりや耐らぬ。肺腑を突く言だ。こんな深刻なものは日本に無い。」と奇妙な聲を振立てゝ喜んで居る。迷惑がる女中なぞ捉へては始終讀んで聞かせて居る。大橋は其の後ズ

〳〵に遊んで居る。背の高い岸田の寢間着を無態に着て、袂は氣を付けて始終脇腹へ挾んで居た。

岸田は近頃ほど仕事を億劫がる事はない。書けば日に五回も六回も書ける小說が、厭で〳〵耐らないのだ。夜床へ入つてもその事を思ふと、胸元が苦しくなつて來る。他に向つては、無造作な書なぐり振を見せて、「斯うして書いて居るんだもの、これで世間から賞められたなら、それこそ却つて不思議だ。」と笑つては居るもの丶、有樣はその小說の題を思出すさへ不快でならなかつた。

古人の傳記を讀んでも、藝術は骨も瘦せる苦心をしてその天分を竭した。然るに自分にはそれが無い。例を遠い昔に尋ねなくとも、現に先輩の淸水なぞは常に窮々苦しがつて、短い短篇一つ書くにさへ病氣しさうだと云つて居る。然し自分一人を正直に云はせると、この小說を書く事ほど樂な仕事は恐らく有るまい。手紙を書くより樂である。隨つて批評家やその他の人に賞められても貶されても何んとも思はぬ。作品を賞められるより下駄の緖を賞められる方が遙かに嬉しいと思ふやうになつて、これでは不可ぬとは考へる、その以前、初めて世間へ出る時、杉垣のある小日向の薄暗い障子の陰に屈まつて、顫えながら自作の批評を聞いた時は何うだ。あの頃は賞められ丶ば嬉しかつた。譬へ貶されても有り丈けの精力を竭し得た事に不滿は無かつた。何れにしても心から考へて、心から悶えた。

又思ふ事だが、自分は餘りに狎れ過ぎた。せめて一度昔の若々しい心に復つて、藝術の前に畏れ戰慄いて見たい。そして、心からその甘さと苦さを味はつて見たい。

然う思つて、岸田は夜中に寢床を跳起きた事は幾度もある。又今の時代に名ある作品を集めては繰返

しく讀んだ、西洋の著名な作品も出來得る限り獵り初めた。然し書いて見れば矢張り同じ事である。書なぐりに書いたものと何んの違ひがない。相變らず書く事が樂である。こんな筈は無いと苦しみ悶えても、目は矢張り自分の書下した行間を上下して居るばかり、その外には出さうも無い。淸水を初めその他の人々を尋ねてその意見を聞いても、「君の筆は達者だ。」「あの力強い筆付が好い。」と云ふばかりて、誰も滿足な解答を與へてくれない。達者が何んだ、それに飽き果てゝ居るのだ。力強いと云はれる昔の作品は總て噓である。徒らに振動數の多い死文字を並らべたのに過ぎない。自分はそんな事を求めるのでは無い。何かあらう、何かあらうと、夜も好く眠らずに考へてばかり居た。

大橋はそれを笑つて、「ぢや、日本に君以上の作家は誰があります。何を云つても君は天才なんだ。僕等の友人中から君のやうな人の出た事は名譽だ。」と苦々しいべんちやらを並べて喜ばせやうとする。その度岸田は心から怒つて、僕を愚弄するのかと聲を變らせた。何んとかして今の小說を中止する方法はあるまいか、早く止して靜かに考へたい、讀書もしたいとそればかり考へて居る。

唯舊るい者に倦疲れた。新しさに趣かんとする人の努力が尊い。新しいものでさへあれば、舊るいものより好くとも惡るくとも關はない。そこに根強い勇氣と力とがあるのだ。渠は餓え切つた人の如く、毎日の如く圖書館へ通つて、泰西文藝史の、特に繪畫界に於ける新主義新流派の發生經路を調らべ初めた。そして、薄暗らい地下室の倚子に黴臭い食パンを嚙りながら考へた。然し矢張り得るものは無い。如何に讀んでも探しても、並べた活字には熱がなかつた。たゞ然し鋭く渠の頭に彫り付けた一事は、モン

ヲヌブロウの森傍の小家に蠟燭の灯を消して話し耽る人々の顏と、若いラファエル前派の人々の嚴肅なる生活とであつた。その條を讀む渠の心臟は激しく波立つた。

國の母親から小包が達いた。ブリキの古茶壺へ三年味噌を積めて、外には家に下宿して居る秋田の人から貰つたと云ふ手製の奈良漬が貧しく封じてあつた。智惠の晩い弟は母の代筆して、この頃妹から送つた謝禮と、今後の送金の依頼とを、至るて公文書でも見るやうな片假名交りに短かく書いてあつた。國を出て岸田は初めて母から心盡しの小包など受取つた。渠は黒木綿糸で無器用に縫付けた、舊るい油紙さへ皺を伸して疊んだ。

その小包と外に土産など用意して、久し振りに妹の家を淺草の鳥越に尋ねると、その方へも細かな禮手紙が國から來て居た。鄙劣い話だが爲替を見たら、母の頭痛も直ぐ治つたなぞ書いてあつた。妹婿は醉つて話が娓くなり「兄さん、女なんてものは撫てゝさへ遣れば喜ぶもんだから、少しの事だ、喜ばせてお遣んなさいよ。」と繰返しそれを云つて居た。

十

ある日の事。岸田は立膝して未見の青年立見某の手紙を讀んで居る所へ、女中に案内されて先輩の淸水が訪ねて來た。暑い〱と行也背廣を脫いで汗を拭きながら「ほゝ長い手紙だな、何處の女から來たんだ。」と癖のある細い笑ひ方をする。

「まるて、知らない靑年てす。」

「弟子にして呉れかい。君も大家になつたぜ。」と、胃が惡るいのてお茶の代りに素湯を飲んて居る。

「何處かお出掛けてすか。」

「家が面白くないから飛出して來た。近頃は家に居るのが何より苦痛だ。不愉快てならない。何處か靜かな山の中へても行つてユックリ寢て居て見たい。」

それから、顏を合はせる度に必らず出る旅行談が出る。伊豆が好い、上州が好いと溫泉の話てある。淸水は書生時代に九州の溫泉へ湯治に行つて、その日から湯中毒に苦しんだ話なぞして居る。「何處か行つて見たいな、湯槽の縁に頭を凭せて、ボンヤリ湯に漬つて、空の雲を眺めて居る心持つたら無いからな。身體の筋肉がほぐれるやうだ。」と暗らくなるまて寢轉んてサイダを、飲みながらその話てあつた。最う三箱も敷島を空にした。

「時に今日は少し用事あつて來たんだが、君は××新聞へ何か不義理な事したらう。主筆が酷く憤慨して居るよ。」

不義理と云はれるのは、先月の末金に詰つた處から、舊作を大橋に淨書させて、一時それを身變に十回だけの金を受取つた。その後毎日書溜めて。最う先分の穴は埋めて了つた、その事てある。

「何んだ、最う穴は埋めて了つたのか。そんなら何も然う憤慨する事も無いんだが、然し斷然君の小說を中止して君の不德を紙上に發表するとか何んとか云つて居るから、今の中に何んとか交涉して置くさ」

岸田はそれにも及ぶまいと思つた。「憤るなら憤るて中止して貰ひませう。」と飽くまで言張つて居る。「それだもの、君は直ぐカッとするから不可ない。謝つて濟む事は謝るさ。君は今評判が惡るいよ。その事が公にされて見給へ、それこそ又世間はどんな事を云ふかも知れない。」

「然し謝るなア厭だな、正當に罪を着たら好いぢやありませんか。紙上に書きたきア書かせる迄でさ。」

「君はそれが不可ないんだよ。弱い人の僻に強い事を云ひたがるもの、世の中は然う一本調子で行くもんぢや無いよ。明日の朝早く、僕も一緒に行つて上げるから行つて謝り給へ。なアに、謝りさへすれば譯は無いんだよ。」と切りにすゝめる。岸田はその厚意を感謝して、好しく願ひますと頼んだ。

小説を切られる事は何んとも思はぬ。顚末を紙上に發表して殘酷なる制裁を受ける事は、今の場合餘り望ましい事ては無いが、然しこれとても爲方が無い。舊るい自分を自殺する爲めには、却つてその方が諦め好いかも知れない。小さく活きる爲には又元へ復つて雜誌記者でも、飜譯ものでも何んでもする。自分は餘り好過ぎて活きた。自分の考へる自分に合はせて軛は餘り高過ぎた。初から建直す覺悟ならば何時になつても晩くはあるまい、堅い地盤を新しく疊上げる事だ、と斯う心を決めて其の晩は存外平穩に眠つた。

翌朝、朝早く、清水と岸田は俥を聯ねて巢鴨の奥にその主筆が新築の家を訪ふた。朝日は荷車を並べてある前の並木に長く射して、木の陰には暑苦しい蟬が鳴き出した。

丁度來客中なので、それを待合せる間、二人は主筆が自慢の農園をグル〳〵見て廻つた。淸水は銀柄

の細いステツキで西洋草花を名を指して歩いた。空地に投植の朝顏は秋近い小さな花を群青色に咲かせて居た。

「君、謝るんだよ。何う云つても君が惡るいんだ。」清水は素足に透矢羽織を着て、頸筋を突反して背後に歩るく岸田を、幾度も幾度も注意した。

「十一時からはある政事家と會見の約束がありますから。」と主筆は鎖から時計を外して、それを握りながら二人に會つた。間の淺い、狹い西洋室で、デスクの上には紫色の西洋盆栽が飾つてあつた。

壁色の麻の洋服を着た、二十四五貫の上も肥つた主筆は腕椅子の肱に大きな兩腕を凭せて、酷しく岸田を見下しながら一徹にその罪を責めた。社會の爲め、文壇の爲め、かゝる不德漢はその存在を許されぬ。小說の掲載を中止する事は無論であるが、紙上に罪を鳴らして斷然文壇から葬らねばならぬ。かゝる事は容赦する方に罪がある、と飽迄世の道德を後援者として云ひ募つた。清水には殆んど口を開らく暇すら與へぬ。そして、清水が、「岸田君とて惡るい氣で爲た事ぢやない。それに、あの位の例は他の文壇の人達にも間々ある事です。岸田君は極めて下手に露骨に遣つたゞけなんです。」と言宥める一言に縋つて主筆は酷く憤慨した。

「好しい、貴方もその御意見なら、私は貴方とも喧嘩しませう。」と主筆は聲を勵まして立上らうとする勢を見せた。瘦せた清水の顏にも色は動いた。然し言葉には何も云はなかつた。

最初から唯の一語も云はなかつた岸田も、斯うなつては俯向いて足の指ばかり見ては居られない。

「好しう御在ます。小說は切つて下さい。自分の罪を正當に着る方は自分にもサツパリして心持が好い。誤魔化して終るのは厭です。ですから中絶の辭を僕に書かして下さい。決して卑怯な辨解はしませぬ。僞原稿を種に十回分の金を欺き取つた事も、貴方を欺いた事も立派に書いて讀者に謝しませう。又私はその罪は犯しましたが、貴方が御立腹する程の罪惡とは思ひませんでした。一は繰合つても後から返せば好いぐらゐに思つて居ました。それも書きます。ズル〳〵に免されるよりも然うした方が僕にも好い。自分の行爲に對する結果は、善惡共に立派に受取りませう。それで社會や文壇から排斥され葬られるなら、それも爲方はありません。」と頭を擡げて云つた。

「君がその決心ならそれも好いかも知れない。」と淸水は同意した。

主筆は岸田の顏を眺めて居た。

「考へさして頂きませう。」と肩を搖り上げて大きく腕を組み、凝つと目を閉ぢて考へて居たが、「何うです、岸田さん、此迄は此迄としてあの小說を書續けて見る氣はありませんか。」と急に打つて變つた事を云ふ。その男らしい潔白な心持が好い、斯う云ふ人とは知らなかつた。君さへ書く氣があるなら喜んで掲載する。書いて見給へ、書いて見給へと云ふ。唯それには君が小說の後繼として、既に某氏へ賴ん了つた。今更らそれを斷はる譯には行かないから、その人に第一面の位置を讓つて、附錄の五面で不承してくれとの事である。

「何を云つても君と見ると、遙かに舊いまア先輩であるし、特に新しく掲げる讀物は一面でないと何う

も讀者の注意を集中しません。商略上些いと不味い事があるですからね。これて新聞などと云ふものはそんな經營が實に難かしいものてしてな。何うてす我慢して書きませんか。場處が換つたつて實質てすよ、何うてす。」

「場處なんか何處ても關ひません。何うせ掲載する以上は。」

「然う決め給へ、主筆が然う云つて下さるなら、こんな結構な事は無い。然うするさ。」と切りにすゝめるけれど、岸田は容易に承諾の答をしなかつた。「何れ考へました上て。」と兎角の返事を後からする事にした。

主筆は繰返し岸田の潔白を賞めた。「何れ近々の中に××畫伯を招いて晝餐會を開く事になつて居ますから、是非その節は岸田君にも御出を願ひませう。」とまて云つた。

門を出ると二人は激しき空腹を感じた。二人とも未だ朝飯前てあつた。俥を後に隨へながら、朝飯を何處にしやうと相談しつゝ、長い巣鴨の大通りを歩いた。眩しい日は麥藁帽子の上から直射して、眩暈しさうになる。清水は空唾を切りに吐いて、胃の痛を訴へて居た。

暫くして二人は、不忍の湖心なる或る料理屋の、水に臨んだ小座敷に陣取つた。日は執念くも靑蓮の葉に照返して、水紋がクル〳〵と天井の神代杉に渦を卷いて居る。

湯に汗を流して、サッパリした浴衣に着換えた清水は、「あゝ、何時までこの暑さが續くのかなア。」と疊の上に身を投げた。

飲むまい飲むまいと云ひながらも、清水は割合に飲んだ。瞼の邊に赤く出て、顏の線が鋭くなつた。そして、二人の話題は重に木澤の惑溺に關して居た。近頃家に餘り居付かぬと云ふ人の噂がその緒となつた。岸田はそれを極めて簡單に感興の人として解釋して居る。心の墮落ではなく、手足の墮落に導かれる人だと云つた。

「然し無理はないよ。木澤は酒を飲むもの。酒を飲まぬ我々ですら、一切を拗つて惑溺の底にでも沈んで見たい氣がする時があるよ。あゝ厭だ厭た、家庭も何も要らない。僕ア小兒さへ無きア今一度自由な身體になつて氣儘に放浪するがな。」と沈んだ顏色をして居た。

「先生もそんな事を思ふ時がありますかね。僕ア善良なる家庭の主人とばかり思つて居たがな。」

「戲談云つちや。僕にや恐らく木澤以上の苦悶があるだらうよ。」

家庭を咀ふ激しい言葉がこの人の口から多く出た。そして、急に、「あゝ、木澤に會ひたくなつた。會つて固く握手して見たいな、木澤は昔から觸ると溫い人だッた。」と舊い昔の交友時代を思出して懷しさうに話して居る。

「先生、旅行しませんか。」と不意に岸田が言出した。清水にも違存はない。是非一度一緒に歩いて見やうと云ふ。

十一

月が九月に入つて間も無く、愛知の青年立見欣一が突然上京した。初めに長い手紙を寄來して、是非門生にしてくれと頼んで來た時、岸田は自分の位置を書いてそれをキッパリ斷つた。すると追駈け寄來した二度目の端書に、何んと云はれても弟子になりたい、幸ひ父母の承諾も得たゆゑ明後日は上京すとある。停めやうにも端書の着いた頃は最う郷里犬山を發つて居るのだ。然し着くべきその日には來ない。翌日も過ぎその翌日も過ぎた。算へて見て一週間の夜ヒョックリ旅宿を尋ねて來た。大橋は寢轉んて三味線絲を煙管の羅字に卷いて居るし、外にも客が二人ばかり來て居た。

「私立見てす。」紺絣の單衣に茶小倉の袴をシャンと穿いた、色白な軟かな顏立の青年が、入口の閾際に畏つた。岸田の顏を直ちに見分けた。頭を下げながら切の長い大きな目で見上げた。

「何時來ました。」

「八日前てす、九月一日てす。」少し國の訛はあるが明晰な聲てあつた。

皆の話興ずるのを立見は默つて靜かに聞いて居た。時に岸田の聲に耳を傾けた。岸田が時々その方を見ると、微笑んだ青年の目は懷しげにそれを迎へた。見詰められると、ニッとして含羞むやうに俯向いた。

「少しは東京を見物しましたか。」

「いゝえ、唯一度早稻田の學校まて行つたゞけてす。」

「初めてゞすか、東京は。」

「え。」

その物腰と樣子から、不自由なき鷹揚な家庭に育つた青年とは直ぐ知れた。年は十八、この四月まで名古屋の中學に居たと云ふ。

「學校は退校されたんだッてね。」

「え。」と青年は美しい伸びた瞼をポッと染めて膝に目を落した。

岸田はその悠揚として、コセ付かぬ青年の態度に先づ引付けられた。「何うだ、何か食べに行かうか。」と云ふと躊はず跟いて來る。二人の客と大橋も一所であッた。岸田は袴を穿いたその青年と肩を並べて話し乍ら附近の西洋料理屋へ入つた。

飲めとコップに注がれると、青年は別に辭退はしなかつた。行けるのかと聞くと、お父さんに飲ませられますからと笑つた。話し掛けられると「えッ、えッ。」と嬉しさうに頷首くのが癖である。前齒二枚が黒く蟲喰つて居る。

「何所が氣に入つて然う僕に惚込んだのだ。會つて見て失望したらう。」

「そんな事はありやせんです。」とばかりで以上の事は云はない。

家へ歸ると大橋は切りに彼の青年の噂をして居る。「ありや君、餘程好い家の息子さんだよ。あの兵古帶を見給へ。壁色たア氣が利いて居る。下駄ッだて華奢な堂島形だぜ。世話してやつて損はないね。」と賤しい事を云つたものだ。

翌日の朝早く青年は訪ねて來た。袴では無かつた。岸田は大橋を避けて、別座敷で委しくその志望を尋ねた。青年は極めて言葉の少ない方で、問はれる事より外に答へない。云ふより聞きたいと云ふ風であつた。岸田は藝術家生涯の極めて不生産的て、且つ犧牲者の多き職業である事を話して懇々聞かせた。矢張り「えツ、えツ。」と頷首きながら聞いて居る。家はこれまで唐物の見世を張つて居たが、却つて喰込の多い所から、木曾川の傍に家を新築して父はその家に餘生を送ると云つて居る。兄弟は無く唯一粒の後取りである。岸田は遽かにその青年の志望を容れる事をしなかつた。少くとも父母から依頼が無い間は折角の志望も賛成する事が出來ぬと云つた。青年は無論父の依頼狀を取寄せますと云ふ。
「兎に角だ。岸田素秋としてゞなく、一私人岸田源吉として交らうぢやないか。文學者になるとしても君は未だ〳〵修養しなきアなるまい。」と結局の話を決めた。
「えツ、えツ。」と青年にも不足は無かつた。
その日は天氣も穩てあつた。外に親しく出入する桶谷と云ふ青年と二人を連れて、上野から向島の方を遊び暮した。晝飯は山下の何んとか云ふ大阪料理て濟まし、晩は萬世橋の藪へ入つた。二人とも同じ年配の青年である。
するとその翌日の朝、早稻田大學の學生と云ふ小豆ネルの單衣に黑帶して、袋煙草入を下げた小山と云ふ學生と、醫科大學の製帽を持つた學生と二人に連れられて、立見が遣つて來た。その小豆ネルの人が一番上へ坐つた。

「突然ですが、貴方は立見を何うなさらうとなさるのです。」とその小山が先づ口を開いた。

「何を何うすると云ふんです。」と岸田もムッとした。

「茲に居る園田君は立見から見ると從兄に當つて居る者ですが、僕と此の園田君と二人に立見のお父樣から托されて今度連れて上京したのです。」

「え、然うなんです。」と醫科の生徒も云つた。

立見は別に悄げた樣子も無く、矢張りユッタリした顏で三人を見較べて居る。

事譯は斯うである。二人ともこの夏休暇に歸省すると、立見の父がその子欣一を托して、何所か資格の出來る學校へ入れてくれとの事であつた。二人はその積りで立見を東京に連れて來たのだ。それなのに立見は上京以來唯ソワ付て居るのみで何處の學校へも入る模樣がない。

「段々探つて見ますと、毎日貴方の所へ伺つて居るのだと云ふ事です。それでは依托された私共がこの人のお父樣に濟みません。詰り立見は學校へ入ると云つて私どもを欺いて來たのです。初めつから貴方の弟子になる氣らしかつたのです。て、昨晩貴方の所をお暇して歸ると、今朝まで夜明し詰問したのですが、何うしても私共の云ふ事を聞いて呉れません。強く責めると國へ歸る〳〵と然う云ひます。最うず[illegible]と云ふ人を絕對に信じ切つて居て、貴方の云ふ事でなければ聞入ないんです。」

「要するに、私どもの所へ出入しては、立見の爲めに不得策だと云ふのでせう。」

「いゝえ、決してそんな譯ぢやありません。同じ文學を遣るにしても、今は大事な修業期だらうと思ひ

ますから。」と、兎に角岸田から遠ざけさへすれば好いと云つた調子である。

「立見君、君は今まで僕を騙して居たんですな。」と岸田が氣色ばんで云ふと、立見は淋しく笑つて俯向いた。スラリとした肩付が女のやうに軟かい。

その晩、牛込榎木町の下宿屋から手紙を持つて小山の使が來た。直ぐ行つて見ると、今朝の二人が立見を眞中に置いて左右から説いて居る。岸田の爲めには赤毛布の上に更紗の座蒲團が敷いてあつた。然し立見は何んと云つても二人の話に從はない。學校も厭だ、東京も厭だ、直ぐ郷里へ歸してくれとばかり云張つて居る。何故厭だと問へば口を噤んで何も云はない。

「この男の剛情には熟々愛想が盡き果てた。昨夜からマンヂリともしないで説き詰てす。」と小山は厭ね切つた調子である。岸田を頼んでその決心を翻させやうと云ふのであつた。

小山は錢を持たせて立見を煙草買ひに遣つた。その後で小山は要愼深く聲を潜めて、「是非貴方の手で立見を此方に摑へて置いて下さい。今更國へは歸せない或る事情があるんです。」と云ふ。

「それ程固く決心して居るのに、僕が引留めた位で思止まりませうかしら。」

「そりや思止まりますとも、ねえ園田君、大丈夫思止まるね。」と小山は獨りで氣を揉んで居るのだ。

立見は矢張り悠揚として歸つて來た。自分の事で人々が騒いで居るとは氣も付かない様だ。壁際に横座りして、その大きな目で岸田をばかり見て居る。

岸田が二人に頼まれた言葉を傳えて、今更ら國へ歸るの不得策と、學校教育の何になるにも必要なる事を說いて聞かせると、躊ふかと思つた立見は矢張り小山の云ふ如く、「はい、はい。」と二つ返辭で手も無く承諾した。明日からでも入學の準備をしやうと云ふ事であつた。

「あれだもの、厭になつて了ふ。岸田さんは絕對權威なんだからな。我々が口を酷ッぱくして說いても何んにもならない。」と小山は目鏡を拭き〳〵厭々しさうに云つても、立見はその方など見向きもしなかつた。

歸り際に立見は露路の外まで追駈けて來て、「先生、明日行つても好いですか。」と心配さうな目付して云ふ。

「お出てとも。然しあの二人の人に反抗するやうな態度を取つちや不可ませんよ。あの人達に惡氣は無い。唯お世話好きなんだから。」

「え。」と立見は許を得て喜んだ。

立見はその後毎日のやうに岸田の宿へ遣つて來た。來ても何んの話があると云ふても無い、唯ボンヤリ座つて岸田を見て居る。問はるれば簡單に答へるだけて、進んで此方から話出すなぞ云ふ事は一つも無かつた。宿の女中どもは、「繪に書いた白井權八のやうな書生さんです。」と立見の來る度チヤホヤしてもてなした。然し立見は何んにも知らなかつた。

十二

「到頭負けッちやつた。何うも剛情が張り切れないなア。」

或る朝早く、木澤は岸田の寢て居る枕許に立つた。例の白地浴衣に紺絣の羽織を被つて居た。家からては無いと見えて、唇は眞赤であつた。

近所の料理屋からお膳を取り寄せて出すと、木澤は小兒のやうに喜んで、「矢張り下町にや魚があるんだな。戸塚の魚屋は不魚だ〳〵つて鹽鰤ばかり持つて來るもんだからその氣になつて居た。」と笑ひながら、四五杯の酒に最う眞赤になつた。

「先生は僕を使ふ用のある時ばかり遣つて來るんだ。

「そんな事ア無いよ。別れて居ると矢張り淋しいんでなア、何時かも夜中に急に會ひたくなつてね、君の所へ出掛けやうとすると細君が笑ふんだ。××社の今井にも冷されるしね。此方から訪ねて來ると、君は乾度圖に乘つて、木澤の奴め到頭負けて來たなんて吹聽されるに決つてる。それが如何にも癪だからね。云ふよ、君は乾度云ふ人なんだ。」

「何時か戸塚へ上つた時の險幕つたらありませんでしたね。」

「然うさ。僕ア態とあんな態度をしてやつたのさ。」

大概は直ぐ最う人に狎れて了つて、例の演劇論やら道樂話を持出す。お世辭の好い木澤は巧く調子を合はせて、切りに話が興んで居る。二人が盃を突付けて切りにすゝめるけれど、岸田は机の上に無駄書

きしながら相手にはならなかつた。

「岸田、君は非常な美少年を連れて歩いて居るツてぢやないか。オスカア・ワイルドだツて評判あるぜ。僕にも見せろよ。」とスッカリ酔つた。この頃は酷く酒に弱くなつて了つた。

「最う來ませう。今日の午前中に來る筈でした。」

「先生、先生。岸田君に立見の事を少しでも惡るく云はうものなら、それこそ直ぐ御立腹です。」大橋は舌の底まで見せてゲラ／＼笑ふ。

「女の出來ない奴はこれが厭になるね。」と木澤は涙を出して笑つて居た。

木澤は最う手元までフラ／＼して膝前からそこらの疊一面酒に濡らした。大橋に煽られて何所かへ行つて面白く飲まうと云出して聞かない。

門を出る時、入つて來る立見と出會つた。直ぐ歸るからと宿へ待たせて置いて、三人は秋日和の眩しい日射に、額を抑えながら飯田河岸の或る家に飛込んだ。

見晴しの廣間に陣取つて、三州味噌の汁を拵さして三人は氣長く飲んだ。若い、裾を長く着た女が後から後から現れた。木澤は感興の高ぶつた目付に岸田の手を何度も／＼握つた。「最う必らず喧嘩は爲まいよ。君に別れて居ると寂しくてならない。」と云ふて、女どものクス／＼笑ふのも平氣で、目鏡を外しては涙を袖口に拭いてゐた。

河岸の揚場に篝火を燃して、船の中の人顔が白く見えても、木澤は動かない。「All or Nothing!」と

繰返しながら、切りに三番目に來た若い女を指した。大橋は二度三度階子段を往復したが、「好結果〳〵。」と踊りながら入つて來た。

「君、周旋しませう。」と煩さく大橋が付纒ふけれど、何時に無く岸田はそれを拒んだ。そして、水氣の深い夕靄の中を、窃つと遁げて出た。四日の月が白い光を道へ投げて居た。

宿へ歸ると、玄關に出迎えた女中が、「お可愛さうに、立見さんを何時までお待たせなさるんです。」と云はれて初めて思出した。慌しく二階へ駈上ると、薄暗らい部屋の其中に立見は新刊の雜誌など擴げて待つて居た。

「まア立見さんのお堅いッたら、私御飯を差上げませうと思つても、先生が歸つてからと被仰つて、何うしても召上らないんですよ。」と女中のお初は羞飾をして立見に笑ひ掛けた。立見は默つて體裁惡るさうに膝を見た。

「馬鹿な男だな。默つてズン〳〵喰べたら好いぢやないか。」

「え。」とニッコリするばかりだ。

二度も三度も電話が掛つた。初めは留守だと斷らせたけれど、「木澤さんが大變に憤つて亂暴をなさいます、私どもでは何うする事も出來ません。」と先方の女中が泣聲で云つて來るので、「チョッ爲様の無い人だ。」と舌打しながら立見と一緒に宿を出た。

甲武鐵道の橋下で別れる時、「先生。」と立見が立停つたが、直ぐ又思返てて、「あ、好いです〳〵。」

と打消して居る。妻さからの樣子が何か訴へる所あるらしく見えたので、再三押して尋ねたけれど、「なアに、好いんです。」と別れて飯田橋を渡つて行く。茶リボンの麥藁帽子を被つた背の高い後姿が、藍がゝつた宵の闇に消えて行つた。

妻とは別な家の小坐敷へ入つて行くと、藝妓に三味を引かせて、肌拔ぎの大橋は役者の假色を使つて居た。木澤は矢張り飮んで居る。

「どうだ、計略を以つて誘き寄せられたらう。」と笑つて居る。

「僕も飮むさ。」と岸田も夜深けるまで飮んだ。

十三

翌一日もその家。その翌日、木澤の起きない内に歸つた。母からは又悲しい手紙が來て居た。又留守に早稻田大學生の小山が二度も訪ねて來て、立見の事に就きて是非相談したいと云置いて歸つた。

この頃から午後の日が三疊の窓へ射すやうになつた。烈しい殘暑を苦しみながら、岸田は怠けて居た新聞の小說を書いた。酒に爛れた口に生なトマトを幾つも貪り喰つた。

午後、散步ながら榎木町の下宿に立見を訪ねた。すると、下宿の上さんが茶の間から首を出して、「立見さんが大變です。」と云ふ。今日の午後、小山にも誰にも無斷で立見は常に外へ出る姿で國へ歸つた。新橋から出した端書が今着いた所である。

エンフルエンザの小山は寢床の上にひどく憤つて居た。あのやうな我儘者は斷然世話が出來ぬと立見の父宛に長い手紙を書いて居た。何故の出奔か、理由は些つとも分らない。午前は部屋に引込んで居て前置詞用法の本を讀んで居た。それを、小山が晝頃岸田の家に出掛けて居る間に飛出したのである。女中を呼んで尋ねたが別に變つた樣子が無い。

「それにしても妙ですね。郷里へ歸るなら歸るやうに、貴方の所へだけは御相談に行きさうなものですがね。あんなに信じ切つて居た貴方なんですが、不思議な事だ。」と小山は切りに疑つて居る。相談どころか岸田へは停車場からの端書も來なかつた。

「何う云ふ靑年なんでせう。僕は昨今だから些つとも分らない。」

「僕にも分りません。この夏休暇で歸つて初めてあの人のお父樣に賴まれたんです。然し、僕がこれほど親切にしてやるのに、それを何んとも思はないとは實に心外です。僕は兄弟もありませんし、全く弟のやうにして居たんです。」と切りに殘念がつて居る。

兎に角、小山の怒をなだめて歸つた。

立見が新橋で出した端書は宿へ着いて居た。唯急に思立つて歸省するとばかり、外には何も書いては無かつた。岸田はその端書を斯う判じた。世間見ずの立見は唯外から華やかに見える藝術家の生涯に憧憬して居たのだ。渠が想見して戀人の如く慕ふた岸田その人は、今見る如き賤しき、不眞面目な人ではなかつた。渠は放縱なる岸田の生活に恐れ且つ賤んだのである。

「馬鹿、君が損をして御機嫌を取つて、そして、立見にまで愛想盡されたんだ。」と獨語に自分を耻しめた。

木澤は未だその家を離れなかつた。大橋を使に寄來して、切めて今晩だけ附合つてくれと云つても岸田は動かなかつた。厭だと云つてくれ給へ、何時まで然う〳〵他の感情を尊重しては居られない。僕は最う飽々した。」と蚊の出る中に仰向に寢て居る。大橋はあの席上に何か不滿あつての事と思違えて、色々煩さくすゝめると、終には岸田も眞蒼になつて憤つた。戸棚から中古のネルの單衣を出して大橋の前に投出した。外に紙幣を二三枚紙に包んだ。

「君は何時まで東京に居たつて駄目な人だ。これを旅費にして今晩にも大阪へ歸り給へ。僕は總ゆる人と斷つんだ。君等の顏を見るのも厭になつた。」

大橋も終には涙を流して謝つたが、岸田は頑として聞入れなかつた。爲方なしに大橋は例の喜劇の原稿と着物を新聞包にして、それを持つて悄然と出て行つた。」

岸田は暗らい道暗らい道と求めて歩いた。夏の夜の眩しき明さまな店々の灯は、暗らい心の岸田には餘り強く餘り鋭かつた。消魂ましい電車の警鈴と、氣樂さうに群を求めて歩るく人々を避けて、薄闇の夜を的もなく歩いた。シツトリした夜氣は肌寒いほど身に染みて道傍の下水には地蟲がチロ〳〵と啼き出した。何所までゝも行きたい、行つて疲れてそこへ泊る、そして明日は早く寂しい並木の街道を歩いて

居る人になりたい。

欅の大木が厳しく暗中に立並んで、下は幾十丈とある絶崖の端に立つた。上弦の月は凄凉と西の空に沈んで、空は明るく地の上は闇かつた。目下の道を通る下駄の響が宙に聞えた。

杉の木立に圍れた眞下の黒い屋根は、岸田には忘れがたき家である。その人は最う居ない。苦い記憶として殘つた。岸田の凭掛つて居る欅の樹の幹には、潤かに物語りながら樹の皮を拶り取つた、その人の指の跡が殘つて居た筈である。掌て觸つて見たが、夜目には確と判り兼ねた。

「あの頃は無上に泣けたものだ。」と岸田は夢の如き昔の純なる感情を心に呼出して考へた。

岸田は譯もなくこの絶崖を下りて見たくなつた。夜露に濡れた草の根を力便りに、着物の裾をピッショリ濡らしながら這下りた。見上げると欅の中に一本混つた胡桃の幹に月の光が白く射して居た。

崖の中段に、草葺きの大きた廢屋が闇に黒く立つて居る。四五年この方住む人も無く、雨戸を固く締切つたまゝ立腐れになつて居た。それでも時々は貸家札が貼換られて居た。庭は荒れて雜草は膝より深かく伸びて居る。近所の小供が好く蛇退治にこの庭を掻廻したものだ。

岸田は門を明けて中へ入つた。濕り臭い古家の臭がプンと激しく鼻を衝いた。足場の危ない敷板を下駄穿きのまゝて、手探りに奥へ奥へと入つて行つた。冷たき鐵の鏽が手に觸つた。土藏の戸前である。月の光が雨戸の破目から射込んで、幾らか明るい一つの座敷へ出た。床があつて床柱の太い木は手の肌に滑る。岸田はその違棚に腰掛けて凝つと考へ込んだ。人の聲も物の音も、此所へは何所からも洩れて

來なかつた。やゝ暫く然うやつて居たが、眞の恐ろしさは此所にも見出せなかつた。

夜深けての歸り道、旅宿に近い或る酒屋の角で、頭を垂れて來る岸田の直ぐ前を、茶リボンの麥藁を被つた青年の俥が通り過ぎた。

「立見、立見。」と四五間も去つてから斯う呼んで見た。俥はその聲に驚いたやうに、急に速力を速めて走り出した。

「立見、立見。」と岸田は見得も無く、走つてその後を追駈けたが、俥は横町へ曲つて影も見えなかつた。

宿へ歸ると、岸田は清水宛の長い手紙を書いた。それは、一切のものを抛つて旅に出たい。自分の救はれる唯一つの道は新しく生るゝの外に無い。豫ねての約束を一日も早く履行したいと云ふ催促の手紙であつた。今の自分を救得る人は唯先生一人のみだとも書いた。

翌朝とヨックリ立見が歸つて來た。土地名産の忍冬酒を一瓶と、父から直接に岸田へ宛てたその子の依頼狀とをその枕元へ並べた。何うあつても岸田の傍に居りたいのと、今一つは小山や園田が學校を楯に岸田の宿へ出入する事を阻むので、唯眞正直な青年は父の依頼狀を貰ひに態々郷里の尾張まで歸つて來たのだ。二里手前の小牧の旅屋へ泊り、そこから拂曉に父を呼迎えて、この手紙を書かせて來たのであつた。岸田は青年の一徹なる心を喜ぶよりも、寧ろその飽まで他を信じ得られる混濁の無い心を貴いと思つた。

「僕に跟いて來給へ、僕ア決して君を背かせるやうな事を爲ないから。」と涙含んで云つたが。立見はたゞ「え。」と頷首くばかり、別に情を動かせる態も見えなかつた。

十四

九月十三日。清水と岸田は青年立見を引連れて伊豆の國へと旅立つた。湯ヶ原の溫泉。これはこの夏相摸の病院に死んだ先輩××の作品に美しく傳へられた所である。旅宿の名も度々知己になつて居る。その人の書いた湯ヶ原行きと云ふ紀行文を立見の懐に用意させた。

岸田は二三日前から氣が落付かなかつた。他にも話し、獨りでも考へた。讀書は何々、著作は何々、立見には語學の稽古として朝々バイブルを敎へ、斯うして考へ、斯うして瞑想しやうと先から先の日割まで細かに組立つた。用意の書物やら手廻りの道具は三つの旅鞄にも積め切らないほどあつた。殘りは二つの風呂敷包みにした。

「まるで婿入りするやうな騒ぎだね。」洋服扮装の身輕るく、小鞄を一つ下げたばかりの清水はその業々しさを笑つたものだ。

汽車の時間まで、三人は壺屋の二階へ上つた。チキンライスと紅茶一杯に晝飯を濟ました清水は、楊枝を使ひながら、

「然うだ、木澤に遇つて來るんだッたね、君と二人て旅行なぞすると、然も君をすゝめて木澤に反抗さ

せたやうに怨らみはすまいか。」と思出して氣にする。

「何うか決りませんよ。存外寂しがりな人ですからな。」

二人して寄書きの端書を書いて出した。

汽車の中でも、岸田は唯無上に燥ぎ切つて、些つとも默つては居られなかつた。新橋で叩り付けた麥酒の勢もあるが、山を指し川を指して話題のあるだけは煩さく喋つた。××停車場手前では並木越しに××を火葬にした六本松の松森が黒く見えた。

「あれです、××さんを燒いた所は。」と窓からステツキの頭で指すと、清水も伸び上つてその方を眺めた。立見も目を輝かして、久しくその方を見送つて居た。

「君も隨分惡人になつたね。隨分世間の評判は惡るいよ。至るて破德漢扱ひして居るからね。今度は一つ新生涯へ入るんだね。」と清水はシンミリした調子で斯う云つた。

國府津へ着くと、停車場前の國府津館に松田から來て出迎えて居る人があつた。矢張り××の病院で知己になつた人であるが、今度の旅行を新聞で見たとて、二日前からこの宿屋へ來て待草臥れて居た。清水は先を急いで直ぐにも發ちたいと焦つたが、小田原からの輕便鐵道が出ないので、その晩はそこへ泊つた。

その人と岸田は久し振りの酒を初めた。この夏、矢張りその人と來て騒いだ時の女中なぞも出て來て、それからそれと話が興んだ。清水は最う二三杯の酒に苦しがつて、暮近い欄干に凭れながら、暗い空に

刻々沈んで行く大伊豆の出鼻を眺めて居た。

その人も醉つた。然し、あの時分の岸田さんの親切と云つたら、實に見て居る私共が感服しました。誰にだツて出來るものぢやありませんよ。何しろ眞夏二月以上を、毎日々々朝から晩まで病室に詰めッ限りなんてすからね。それにあの我儘な病人てすからね。氣に入らないとピシ〳〵叱責なんてす。それを、はい〳〵ッて介抱して居なさつた。だから、新聞にあの記事が出た時なざア、全く自分の事のやうに腹が立ちましたね。嘘だッてまア好くもあゝ嘘ばッかりを書かれたものてす。」と清水に向つて切りにその頃の事を話して居た。岸田は鷹揚に笑つては居るものゝ、自分も話の緒を貸して、なるべく細かくその樣子を話させるやうにした。

「全く損な男さ、全體、何をしても仕事に完結の無い人なんてす。」と清水は斯う云つて、立見と一所に濱を散歩に出掛けた。

二人は久しく飲んだ。そこて飲んだばかりては飲足りなくて、停車場前の休茶屋へまて出掛けて夜晩くまて飲んだ。立見はその後に跟いて廻つて居るが、別に心配する樣子も無く、穩和しく腕組して見て居る。

「見てくれ給へ。僕の大事な弟てす。僕て無くちや不可ない人なんてす。」と幾度も〳〵立見をその人に引合せた。立見はニッコリするばかりだ。

この青年の顏には甚しく表情が缺けて居た。

晴々しい翌日の朝、その人に小田原まで送られて、そこから輕便鐵道に乘込んだ。相模も西南の端になるこの邊一帶は水も澄み土も軟かく、何んと無く暖かさうに見えた。小砂利地に影を黑く落す松原續き、牛車の通る長い土橋、舊街道筋の小田原の町は、どの家を見ても皆踏込の家造に、丑滿十三人の昔の繁昌を思はせた。橙、蜜柑、然も無くも、葉肉の厚い澤々しい溫帶の綠木が家々に濃かな葉影を投げて居た。

「あゝ、こんな所に住みたいな。」と清水は電車の窓から町の兩側を眺めた。

十五

湯ヶ原は谿流に沿ふて部落した、新しき溫泉村であつた。××の小說で名を聞いた中西屋へ俥を着けると、その別莊の二階座敷へ案內された。三間打通しの廣間を、冷かな秋風が一杯に吹拔いて居る。

「思つたより新しい土地だ。粗雜さうなところだ。」と淸水は着くとより、餘り好もしさうには見えなかつた。然し岸田には見るもの總てが新しく快かつた。譬へば、伊豆と相模の國境、その兩方の谿間を流れる勾配の激しい淸流、その言葉を考へたゞけても岸田の氣は跳るのに、軒に近く逼る靑草の山、山上の卵塔場、谷底の黍畑、蜜柑の林、所々に見える草葺の家、一目して最うスッカリ引入れられて了つた。舊るい時代から見ると人は谷へ谷へと低く下りて來た跡は、上にのぼるほど黑く舊い農家の茅屋根に見られた。

部屋を分けて淸水は、二坪ばかりの花壇を見下ろす一番狹い部室へ棲つた。山百合と鳳仙花が咲いて居た。淸水は大抵小窓に腰掛けて、烟草を喫しながら、ポンヤリこの小庭を眺めて暮した。

清水は湯あたりを恐れながらも、最うその日から幾度と無く浴室へ通つた。「何うだね。今十分。」と手拭を下げて二人を誘つて行く。

湯は低く地底にある。扉を明けると硫黄の匂がホンノリ漂ふて、日は上の小窓から眞直に湯槽へ射込んで居る。湯の色が薄いオパールに光つた。清水はその中へヅブリと頸まで湯に漬けて、手足を浮かせてウツトリと何時までも入つて居るのだ。何か考へて居るのかと云ふに、必らずしも然うでも無い。細かい顫えのある聲で、小さく義太夫など唄つて居る時もあつた。湯の中の手足は恐しく美しく見える。

岸田と立見とは多く湯槽の端に腰掛けて話した。雨聲の如き谿流の響もこゝまでは入つて來なかつた。

「あゝあ、斯うして居ると、國の母が戀しくなる。好く馬に乘せられて春湯治に行つたのを覺えて居る」

と時々清水はシンミリした調子でこれを云つた。

雨の日などは聞く岸田の胸がこの言葉に鋭どく痛ませられた。岸田の母も始終湯治にあこがれて居た。岸田の家へ來てからは、病夫の世話にかまけて、何時に一度氣樂らしく湯湯治にも行つた事がない、木賃持ちても好いから痼疾のリウマチを湯に癒したいと云つて居た。

「何うせ、我々を子に產んだ人は不幸ですな。一生氣樂な目を見せられる氣遣はないんだから。」と岸田は斯う云つて寂しく笑ふ。

「氣樂な目は見なくとも好いから、切めて同じ坐敷だけへでも坐らせたいと思ふけれど、矢張り駄目だ僕の母なんか子供の饗舞の席には出られないやうに產れたんだ。一生暗い臺所で終る人なんだ。」

「全くてすな、母も不幸だが、我々だッて決して幸福ぢやありませんよ。」と云つた。後は二人とも默して考へた。

立見ばかりはこの話に引入れられる樣子も無く、湯をポチャ〱さしてホッと美しく上氣した顔ばかり拭いて居た。然し、渠とて生れながらに母親のない寂しき兒なのだ。

二人とも仕事は有り餘るほど持つて來たのだ。二人とも或る雜誌の特別號に長い小說を書く約束になつて居る。特に岸田は書續きの新聞小說があるのだ。でも、二人が二人とも何うも仕事する氣になれない、湯上りの身體は冷ッこい疊に投げて話ばかりして居る。用意して來た本は包みのまゝて、その一頁をも讀まれた事がない。

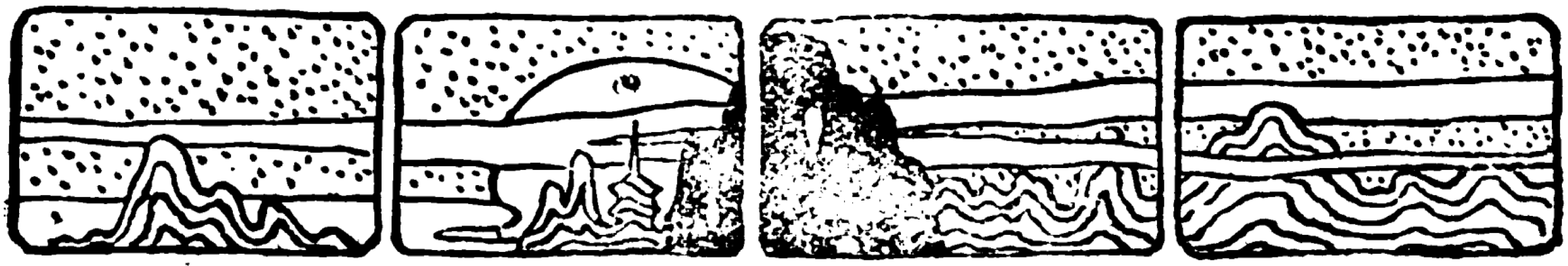
「明日こそは〱。」と云ひながら、一日の日を散歩と湯と無駄話と、そして按摩とに暮した。初めの間こそ、相互に顔を見るたびそれを云つて居たが、今では最う仕事の事を口にするさへ厭になつて、兩方してそれを避けるやうにして居た。

酒は每晩一合宛と初めの決定であつたが、岸田は晩飯の度ごとに宿の娘を責めて、二本三本と銚子の數を重ねた。清水も附合に少し宛は飮んだ。好い加減醉ふと、飯を濟して自分の部屋へ引込んで、怠けた身體を長々と寢る。

「あゝあ、こんな筈ぢやなかつた。」と好く溜息を吐いて居る。

新聞社と雜誌社からはソロ〱嚴しい催促狀が來初めた。

（完）



廢馬

佐藤紅綠

人物

非職歩兵少佐、安藤國太。　少佐の妻、同 環。
密獵船乗組員、安藤陸奥雄。　環の姉、寡婦、安江。
醫師、谷本順。　從僕、十助。
其他安江の兒女、密獵船の水夫、二三、

場所

日本海に面せる某海岸地。安藤少佐の居宅。

時季

夏日、日盛り頃より日没に至る間。

第一場

安藤少佐の居室。日本海に面したる洋館の一室、正面壁の眞中は露臺に通ふ大なる入口あり。帷深く捲き上げられぬ。左右の壁にある一つ宛の窓亦た帷を垂れてあり。

下手は廊下に出る戸一つ、上手は庭へ出る戸一つ、由多織の絨氈を敷き詰め、丸卓子を眞中に――卓子の上には丈け高からぬ花瓶に稍萎れかけし青芒を一抱ばかり挿したるがあり。――腕椅子、ソファ、廻轉椅子など順序なく置く。
上手の窓の下には飾れる日本の甲冑武器等薄暗く光り、正面の帷、風を孕みて動く度に隙間より露臺の彼方波を射る白金の光きら〳〵と見ゆ。
外は晴れたる夏の晝、内は鎖せる薄暗き室。

主人は非職歩兵少佐、色黒けれども少しく蒼褪め、眉濃けれども眼の光鈍りて厚き唇弛めり。腕椅子に凭れ、左脚の義足を次の椅子に延ばしながら、今しも診察の終りたる處なり。
醫師、谷本順（四十五六）額廣く赤ら顔にて頤に一房の髯垂れり。襟を取りたるフロックコートを着す。

谷本（聽診器をポケットに入れ）何に。たいした事はありません。（と少佐と差向に椅子に腰を下す。）
安藤　爾てすか、何しろ此夏は少し暑いと大變に暑さが應へるし、少し涼しいと又大變に惡寒をしますのて。
谷本　貧血をして御出てのやうぢや。
安藤　爾てせう。だが私はどうしても此の海は好かんてすな。
谷本　海をてすか。
安藤　二三年前は其那ても無つたてすが、あの海の音を聞いたり、又た海の渺々とした處を見ますと、何だか恁う恐しい強い獸の息が押かぶさつて來る樣な氣がして譯なしに心細くなつて、いやあな氣にな

ります。

谷本　神經衰弱には海が宜い積てすがな。

奥の方にて唱歌聞えて、足踏の音次第に高る。

安藤　それにあれてす。

谷本　あゝ奥さんの御聲てすな、大勢御子供衆が……。

安藤　爾、妻てす。子供は妻の姉の子てすがゝ、あの通りてす。朝から晩まて歌つたり踊つたり、飛だり、跳たり、全て子供と同樣てすからね。

谷本　お年は若いからてすな。

安藤（苦笑して）今年二十三、私とは十六も違ひますから。

風琴、唱歌、笑聲、舞踏の聲益々激し。

谷本　大分盛てすな。

安藤　あの通りてす。あれには殆ど惱まされるのてす。ねえ谷本さん、どう言ふ譯てせうか、私はあの音を聞くと、ずんと骨身に應へるてすな。丁度、私が海を見ると、いやな氣持がする樣に妻や何かゞ、あゝして騷いてるのを聞くと堪らなく淋しいてす。頭を壓えつけられるやうて、晝は朝から晩迄あの騷ぎに惱まされるし、夜は絶間なしに海の音に襲はれるので實に堪らんて。

谷本　さあ其れはどうしたものかのう。

と沈黙する。
銃擔て十助來る。
十助　あのう銃はもう掃除して了ひましたてはや。
安藤　あゝ爾か、大分錆びて居たらう。今日は天氣がいいから鴎でも射て遊ばうよ。陽炎はどうだ。
十助　大分鹽梅が宜いてはや、鬣斬てやりませうてはや。
安藤　後刻、行て見やう。
十助去る。
谷本　其れては後程、脚部の痃を治療するに參りませう。私の考では或は當分貴方は奥さんと御別居が宜からうと思ふのぢやが、いや海とも離れるが宜いかも知れんて。
安藤（氣にも留めず）何しろあの通り騒々しいので。
醫師去る。安藤卓上の書類を出して讀む。
窓の外にて四五人の小兒と共に夫人環が何かを叩きながら拍手を取て御伽唱歌を歌ふ聲近づき來る。
安藤　ちよッ、騒々しいな。（と顔を顰める。）
唱歌　取つた寶は何々ぞ、金銀珊瑚綾錦。
安藤（窓の方を向き）誰だい、騒々しいぢやないか。
唱歌の音止る。倉本書類を取上げ再び讀む。正面の扉左右に開けて、環、其の姉の子綾子（十二）喜太郎（十）信男（八つ）いく子（六）豊三（四）と共に入り來る。

唱歌　車に積んだ寶物、犬が曳き出すえんやらや。

安藤　騒々しいな。

環（二十三歳）S卷にせる髪の毛額にばさ〳〵と濫りて、白き額に豁然とせる長き眉の下に、夢見る如き無邪氣なる二つの眼、鼻筋通れど豐かに口小くして頤は少しく二重にくびれて居る。物言ふ毎に多少の笑を含めり。少佐の顰蹙に構はず、五人の小兒と共に足踏しながら、

唱歌　猿が後押すえんやらや。（と卓子を廻り始む。）

安藤（書類を措いて）あゝ仕樣がないな。

唱歌　雉子が綱曳くえんやらや。

安藤　どうしたのだ、もう止さんか。

環（構はず）あゝ恁那に閉め切つちや陰氣ぢやありませんか、此の暑いのに貴方。と帷を開き兩方の窓を開く。涼風颯と書類を吹いて頁を裏返す。

安藤（書類を抑へて）寒いぢやないか。

環　寒むいですつて？　貴方、今は何月だと思つて？

安藤　いや瘡痍の痕が疼痛いて來るから風に當らないやうにしてるのだ。

環　其りや氣持よ。こんなに陰氣にして居ると猶ほと其那氣になつてよ。（と夫の傍により）可愛いぢやありませんか。（と小兒等を指し）貴方も一緒に御遊びなさいよ。ねえ。

安藤　私がか。

環　え、そんな苦い顔をなさるもんだから子供等が恐がつてるぢやありませんか。さあ皆さん彼方で御遊びなさい。叔母さんが直き行きますから。

子供等去る。

環　貴方は何をなすつて居たの、又た歴史や何んか。

安藤　うむ。

環　御止しなさいなねえ。歴史だの何だのつて古い事やなんか考へたつて仕様がないぢやありませんか。

安藤　これが私の職業だ。

環　まあ、昔の事を考へたり何かするのが職業なの？　職業てえのはこれから前途の事を考へるのぢやなくつて。

安藤　何だか知らんが、これが私の樂みだから。

環　わかつてよ。歴史に、十助（馬丁の名）に陽炎（愛馬）、貴方の御好きなのは其れ丈けね。そして私にや些とも構つて下さらないのね。

安藤　又始まつた。御前は私の妻ぢやないか。

環　紙に書いたものや、馬や馬丁の方が宜いてせう。

安藤　御前は私の妻ぢやないか。其那ものと比べになるものか。

環　だつて貴方は私と面白く遊んで下さらないぢやありませんか。

安藤 私は不具者ぢや、迚も御前のやうに飛んだり跳ねたりは出來んさ。それに近頃は又た御前の騷ぎやうが段々強くなつたやうだね。

環 一體貴方は傷が御全快になつてから間もなく非職になつて、此の世の中に何も用が無くなつた。三十代でもう隱居したやうなものだ。用が無くとも壽命のつきるまでは、生きて居なきやならないなんて、大變に淋しがつて、其れて、何てもいゝから面白く陽氣にしてくれと仰有つたてせう。ですから私、一生懸命に陽氣にしてるんですわ。其當座一年ばかりの間は、貴方も陽氣に喜んて居らしつたが、其中に段々陰氣になつて、其んな昔の事ばかり調べて、近頃は碌々散歩にも行らつしやらないぢやありませんか。貴方が陰氣になさるから私は陽氣にするんだわ。

安藤 陽氣もいゝが、御前のは騷々しくて困る。空騷ぎといふものだ。

環 空騷ぎても、騷いてる方が、何も彼も忘れられて、宜いぢやありませんか。

安藤 忘れる？ 御前にも何か苦勞といふものがあるか。

環 （笑ひながら）え、あつてよ。

安藤 どんな苦勞だ。（と氣を入れる。）

環 どんなつて、どんなつて私にやわからないの。何だか是れは苦勞といふものだらうと思ふ丈けなの。苦勞といふのは氣が鬱ぐ事なんてせう。

安藤（笑つて、）斯だ。まあ其那ものだ。

環　あつてよ。

安藤　御前のやうな陽氣な女でもか。御前が嫁てから五年にもなるが、御前に苦勞があるといふのを聞いた事はないね。爾だ、五年だね。御前の十八の年て、私は三十四。

環　(噴飯して、)また昔の御話が始まりましたね。

安藤　いゝぢやないか。昔の話をしたつて。夫婦といふものは長く連添ふて居る間に、昔は面白いと思つた事も、左までに面白くなくなるのだ。そこて御前と恁うして昔の話をすると、丁度當時のやうな若い心持になつて、實に愉快なものだ。

環　若い心持てすつて、貴方は未だに若いぢやありませんか。

安藤　年は爾だ。三十九といへば男盛りだが、軍人は戰爭が無くなれば、水に放れた魚のやうなものだ。特更ら恁那不具者になるとな。

環　不具者だつて、年は仍且年よ。

安藤　だが、私が段々老ひ込んで行くのと反對に、御前は段々若くなるね。

環　どうも難有う。

安藤　冗戲ぢや無い。全くの處私は毎日御前の顏を見ると、一日毎に私の方が老い込んで行くやうな氣がする。

環　だから貴方は神經よ。其那事よりか貴方、新井の姉さんも彼方に來て居ますし、陸奥雄さんも直き隊

水浴から御歸りになりますから、彼方で何かして遊ばうぢやありませんか。

安藤　其れは爾と、姉さんも來てるなら丁度幸ひだから、御前あの方の話はどうする積りだ。

環　あの方て？

安藤　養子をするといふ話さ。

環　養子？

安藤　姉さんはあの通り、五人の子供もあつて、後家を立て通すなんて、中々女一人てはやりきれるものぢやない。だから五人の中どれても一人私の方で貰はふと思ふんだが、此間御前に話したのだが、もう忘れたのか。

環　おや爾う？。私大した事でもないから忘れて居たわ。

安藤　大した事でない？。中々重大な事件ぢやないか。

環　どうして。

安藤　究意、御前と私の後を襲がせやうといふ、安藤家の大事な問題ぢやないか。

環　後を襲がせるの。

安藤　爾だ。

環　誰れの？。

安藤　御前と私の。

[illegible] (俄かに思ひ付きて、)あ、貴方と私?、(途切れて、)詰らないぢやありませんか。

安藤 何が詰らない。

[illegible] 必要がありませんもの。

安藤 何うして。

[illegible] 後を襲ぐものはちやんと有りますもの。

安藤 誰が。

[illegible] (自分を指して、)私よ。

安藤 (吃驚して、)何? 御前?。

[illegible] え、私よ。私は貴方の養女ぢやなくつて?。貴方は私を毎時も娘と呼びなさるぢやありませんか。

安藤 爾だ。娘とも呼ぶし、看護婦とも呼んで居る。

[illegible] 爾でせう。これからも娘と呼んで頂戴ね。私貴方の娘ですもの、だから養子なんか厭よ。

安藤 成程、御前は私の妻であつて妻でない。詰り夫婦といふものはほんの名義丈けで、御前は單に看護婦の役を務める許りなので、私は戯れに娘、娘、と呼んで居るが、併し、內實はどうでも、表面は仍且夫婦ぢやないか。第一御前は女だ。女の相續者は面白くないさ。

[illegible] 女はいけない?。

安藤 いけない事もないが、男は正當の相續者だ。

[illegible]（俯向いて考へながら、）もういゝ事よ。私何といつても貴方の相續者だから。

安藤（困つた風にて、）御前は妻ぢやないか。

[illegible] いゝえ、娘よ。貴方の傷が癒つたから看病の用事もなし、私、貴方の娘よ。

安藤 困つたな。まあ御前が嫌だといふなら、此話はこれ限りにして置かう。併し、御前が私の娘分になると、婿を取つてやらなきやなるまい、ハヽヽヽ

[illegible]（殆んど無意識に、）赤い帆船がねえ、貴方。

安藤 赤い帆船？。

[illegible]（吃驚して、）私今何とか言て？、

安藤 赤い帆船と言つたぢやないか。

[illegible]（落着きたる氣色にて、）爾？、何故爾那事言たのでせう。

安藤 爾那事わかるものか、大方小兒の時に見たといふ蜃氣樓でも思出したのだらう。

[illegible] 何故思出したのでせうか。

安藤 ハ……私にわかるものか、御前の癖だ。御前時々赤い帆船がどうの恁うのと言ふ事があるが、貘といふ獸は、人の夢を食つて生きてるさうだね。御前は丁度貘のやうな女さ。爾だ、貘だ。

[illegible] 不思議だわね。

安藤（咎めて、）不思議？、世の中に不思議といふ事があるものか。

環　あつてよ。私今まで何とも思つてない事が、口から出たりなんかするのは不思議ぢやありませんか。

安藤　不思議ぢやないさ、思つてるから言ふのだ。

環　だつて思はないんですもの。

安藤　御前が思はんでも、何處かに御前の口から爾言はせるものが居るんだ。

環　それが不思議ぢやありませんか。

安藤　其れが當然ぢやないか。例令ばだね、御前と私とは夫婦だらう。而も奇妙な夫婦だらう。私は不具者で、生殖の機關を失つて居る。御前は年が若い、肉體上に於て夫婦らしい關係は一つも無いさ。けれども、恁うして五年も連れ添ふて居るのは、不思議と云へは不思議だが、普通と云へば又普通だ。詰り二人を結び付けた或る者が、何處にあるのだと思へば宜いぢやないか。

環　其或物といふのが不思議ぢやなくつて。

安藤　不思議ぢやない。

環　ぢや其れは何んでせう。其れは何でせう（早口に、）あゝ爾だ、其れは何といふものでせう。

安藤　わからん。

環　其の或物が無くなると、二人の間はどうなるでせう。

安藤　わからん。

環　世間の夫婦は。皆んな其那ものでせうか。

安藤　わからん。

環　其の結び目が解けたらどうなるてせう。

安藤　重いものは沈む。輕いものは飛んで行く。陸のものは陸に殘る。海のものは海へ行く。

環　だから不思議だわね。

安藤　不思議は無いさ。

馬の嘶ゆる聲す。

安藤　もう陽炎の聲だ。大分元氣が快くなつたと見えるな。

環　貴方は何故、馬の事だと其那に夢中になるの？。

安藤　又始まつた。まあいゝ其那事は、私は陽炎を見て來る。

と立上らんとす、手を取て、

環　いゝぢやありませんか、何かして遊びませう。

安藤（笑ひながら、）遊ぶ事ばかり考へてるね。

環　だつて何かしなければ詰らないんですもの、私本當に何かしたいわ。

安藤　何てもするがいゝさ。だがどうして御前は氣が忙しいのだらう。

環　だつて用のないといふものは退屈なものよ。

安藤　いゝぢやないか、用をせんでも遊んで食へる。世間から見たら羨まれる身分だ。

環　苦勞をしてもいゝから、何か忙がしい仕事がしたいわ。貴方のやうに朝の中に仕事をした人は、晝過に其仕事を憶出すのが樂みでせうけれども、私は今まで漸う〳〵夜が明けた許りなんですもの。

安藤　ハ……御前は午前の人て、私は午後の人か。いゝ事を言ふたな。(急に感慨に堪へざるものゝ如く、)午前に戰爭をして不具者となり、穀潰しとなり、生きながらの死人となり、恩給と年金と勳章の番人となり、昔の事ばかり憶ひ出してるんだね。爾だ。私は午後の人て、太陽を背後にしてる人だから、自分の影法師ばかりを見詰めてる。御前は太陽を前にしてるから、影法師は見えない、見えるものは何だ、際涯のない海か、地球の端れの白い雲か。

環　赤い帆の船よ。

安藤　ハ……其那ものだ、貘に食はせろ。

と庫太ずん〳〵上手の戸より引込む。環つくねんとしてソフアに身を落して沈思す。

姉安江來る。

安　あゝ環さん此處だつたのかい。おや何を其那に欝いてるの、貴方にや珍らしい事ね。

環　姉さん、私欝いてるのが珍らしくつて。

安　珍らしいぢやありませんか。いつも彼那に陽氣だのに。

環　其りや違つてよ。私氣が欝ぐから陽氣にしてるんですもの。身體を動かすか口を動かすか、何かを動かして居なけりや、一時間だつて苦しくつて堪らないんですもの。

安　どうして爾うでせう。

環　あゝ、あれ海の音が聞えるでせう。あれが岸を打つてざぶん〳〵と言ふ度に、私の身體はひよくり〳〵浮き上るやうな氣がするの、些とも凝としては居られないのよ。

安　今日はまあ妙な事を言ふのね、どうかしましたのかい。

環　いゝえどうもしないけれども、毎時も爾なのよ。まあ何と言ひませうか。例令ばですね、私は今ま旅行中なので、其れが大變急ぎの用なんだけれども、途中に面白いものがあつて其れに引懸つて遊んで居るやうなの、遊んでるけれども其用事が氣になつて氣になつて仕樣がないんですもの。

安　何がそんなに氣になるんでせう。

環　私もわからない事よ。

安　そうして始終氣がせか〳〵して。

環　え、何かに釣られて騷いでるやうで、自分の聲だか人の聲だかわからないやうで。

安　ぢや、上の面丈けが陽氣で騷々しくて丁度あの海の樣に。

環　え、其れで底の方が暗くつて蒼くつて深くつて陰氣で。

安　何だか自分の身體が、決まつたやうな、決まらないやうな氣持て。

環　え、全く爾なのよ。

安　(乾として、)環さん貴方は、離別をしたいのではありませんか。

環　(非常に驚き、)離別？って庫太と？。

安　(自若として、)え、爾てす。夫妻別れがしたいのてせう。

環　姉さん、私なんて爾那事……併し爾かしら、

安　確かに爾てす。庫太さんに滿足の出來ない事が出來たのてせう。

環　どんな事？、姉さん言つて見て頂戴な。私にや私の心がわからないんてすもの。

安　私にも能くは解らないけれども、貴方は始の結婚を後悔して居るのてせう。

環　(霎時考へ、)いえ、そんな事は思はなくつてよ。其れから。

安　後悔してるのてなければ宜いが、併し貴方は結婚は女の一生の行止まりだといふ事を考へて居ないんてせう。

環　其りや爾よ。結婚してからでも未だ〳〵先途がありますわ。

安　さあ其れが大變な事てすよ。女の双六は結婚が上りてすもの。

環　いゝえ振出しだわ。

安　其那事はありません。

環　だつて良人と共に事業をなすのぢやなくつて？。

安　其の事業といふのは。

環　いろ〳〵あるわ。

安　いろ〳〵あつても子供を生んで、家屋を作つて、第二の自分どもを遺すといふのが一番大事でせう。

環　第二の自分つてない事よ。第一の自分も第二の自分も皆自分の事だわ。

安子　其れです。貴方の苦勞といふのは、（悲しげな調子にて、）貴子と私の御母さんはね、御父さんが溫和しい内氣な、どつちかと言へば今の世間には働きのない方の人でしたから、其れを氣にして自然證い〳〵と言つては御父さんの惡口を言つて、喪くなる際までも私が男ならば女房も子供も棄てゝ何か素晴らしい仕事をするのだと言つてゝした。私も若いときは其那氣も出ましたが、子供があつて良人に別れて、恁うして女の細腕で重荷を背負つてるので、其んな了見は全く無くなりました。疲れてぐつすり眠ると夢見る事は無いものです。貴方は荷が輕過ぎるから其那贅澤な苦勞をするのです。何一つ不足の無い結構な暮らしぢやありませんか。

環　だけれども私、姉さんが言ふ樣に其那……仍旦其那氣なのかしら。

醫師谷本順來る、

谷本　やあ、少佐は此室では無かつたのかの。

環　庭の方でムいませう、

谷本　隨分暑いですな。

安　上着を御脫ぎなさいまし。

順上着を脫ぐ。

環　（凝と海を眺め、）何といふ靜なんてせう。

谷本　夏の海てすからな、此那靜な日には蜃氣樓が出るてせう。

環　（急に、）爾う？、此那時に蜃氣樓が出るの。

谷本　爾てす。此海岸に住んて居るものは大抵見る事があるさうてすが、私は未だ見た事がないて。

環　私見てよ、ねえ姉さん。

安　爾ね、もう十二三年前てしたね。

環　私十歳の時よ。

谷本　今だに覺えて御出てすか。どんな工合て。

環　え、知つて居ます。姉さん御話して御上げなさいよ。

安　爾ね、丁度八月の今日のやうな暑い靜かな時てした。私は環さんと彼處の（窓の方を指し、）背岩の上てかくれん坊をして遊んて居ました。尤も環さんは窒扶斯が癒つた許りなので私は御守りをして居たのてすが、環さんは鬼になつて私は岩の穴の處に隱れたのてした。もういゝよ〳〵と二三度呼びましたが返事がありません。其中にもう來る事だらうと思つて居ますと、中々參りません。一體環さんは中々横着者てして鬼になつて私に隱れさして置きながら、知らん顏して自分の好きな事をして遊んて居る事は幾度もありますので、大方其那事だらうと私は環さんを嚇かしてやりませうと岩から顏を出して見ますと影も形もありません。今ても其時の事は能く存じて居りますが、海の向ふは恐ろしい夏

雲て、眞白な一塊りの小山位の雲の中へ、眞黒な雲が横合から割り込ますので、今にもぐわら〱と響かして崩れ出しさうに、大きな瘤のやうなのと火を焚く地獄の鬼のやうなのとが打つ突かります。すると其れが直ぐに混亂になつて、前の白い雲が薄黒い雲に銀の輪廓を取つて恐ろしく光り出します、すると其れと此れと殆んど同時に其等の雲の根が切れて、ゆらり〱と片押しに押し靡いて段々と禿びた鋸のやうなのを海面に殘して沈んで行きます。不圖此時環さんの事が氣になつて、急に環さん〱と呼んで見ましたが音も返事もありません。一丁許り先きの砂濱に赭黒い裸の男が石の上に石を積みあげて居ますので、其音が淋しくかちやん〱と聞えます。私は岩穴を出て上に登つて參りますと、どうてございませう。環さんは岩の一番端れの處に立つて、忸と空を見詰めて居ります。見詰めて居りますが、如何にも何かに靜かに〱曳かれてるかの樣に、例令ば幽靈が戀しき人の枕元に寄るやうに、天を見ながら一寸位づゝ段々岩の端れに近付いて行くのです。秋草模樣の中形の浴衣に、唐菊と丸牡丹を染めた赤いめりんすの帶を締て、左の方の袂は拾つた貝にぐたりと重たく下がつて、右の方は自分で胸の邊りへても手繰つて居たのでございませう。病み上りで瘠せた上に、私が其時流行つた御稚兒さんを結つた赤い帶の小娘が立つて、目に見えない程靜かに動いて行く樣は全く畵のやうでムいました。ですが直ぐ私は環さんが今ま一足で岩から踏み滑る事に氣が付きましたので、夢中に驅け出しまして、環さんと背後から聲を掛けながら確乎と抱き締めました。すると環さんは仍且默つて天を見詰めて居ります。何を見てるのかしらと私は環さんの視線を辿つて見ますと吃驚しました。ねえ環さん。

環　（夢の如き聲にて、）爾ね。

谷本　蜃氣樓ぢやな。

安江　はい爾です。夏の青い〳〵空の眞中から少し右の方に三尺許りの船が見えました。

谷本　龍宮ぢや無かつたか。

安江　其の三尺ばかりの舟は燃ゆるやうな眞赤な帆を掛けて居ります。帆は三角です。何か障りがあると見えて舟の中の人が一生懸命に帆柱に登るやら帆を下すやら舷に出て手足を烈しく動かして合圖をするやら其人間は丁度人形位の大きさで、判然と見えました。すると、其れが搔き消すやうに無くなりました。するとですね、船の出た處から少し離れて何處かの海岸にあるやうな市街が現はれたのです。家といふ家は皆んな五色の輪廓で、道路を歩く人も馬も植木も馬車も皆んな五色です。其れが夢のやうにまざ〳〵と眼に見えたのです。立派な塔や西洋館や全く畫よりも綺麗なものでした。おやと思つてる中に其れが又ひよいと消えたのです。消えるには薄くなるとか、小さくなるとか其那のではありません。其儘そつくり何物かに攫はれたやうに失くなるのです。すると其次には又た前のと同じ赤い帆の船が見えるのです。ずん〳〵私共の方へ進んで來るやうに思はれたのです。ねえ環さん、環さん。

環　無心に空を見つめ居る。

安子　ねえ環さん。

環　（平氣に、）私共の方へ進んで來たのよ。

安子　環さんが爾云ふのです。あれは私を迎へに來たのだつて。

環　確かに爾ですもの。

安子　手巾を振つて居た男がありましたが、あれは私に合圖をしてるのだつて爾申します。

環　姉さん爾思はなくつて。

安子　おや貴方は未だ爾那事思つてるの。

環　だつて其れに違ひないんですもの。私あの時もう一足で船の處へ行けた事よ。

安子　ほ……もう一足で岩から落ちて死んで了ふ處でしたよ。

谷本　いや、其れは何方だかわからんて。

環　（嫣然として）もう一遍見たいわ。

環の從弟、密獵船乘組員安藤陸奥雄七分通り醉ふて入來る。兩眼圓らに眉太く顏色赫黑く骨格鐵の如く逞し。けれども何となく初々しき處あり。水兵服やうのものを着す。

陸奥雄　（荒々しく腕椅子に體を下し、）少佐は？

環　御庭です。

陸奥雄　あゝ爾ですか、僕は今ま酒を飲て來ました。

環　いゝ御機嫌ね。何方で、

陸奥雄　途中で、ハ……歩きながらだ。

谷本　盛んですな。

陸奥雄　盛でもない。陸に居ると、どうも鼻がつかえるやうな氣がして仕樣が無いから、僕は今日中に歸るです。舟を迎ひに來るやうにつて電報を打つたから夕方には來るでせう。

環　そんなに急なの？　何だか御名殘惜しいぢやありませんか。

陸奥雄　環さんと今日別れると、又逢へるやらどうやら解らないが、不思議なものだね、僕が密獵で方々迂呂ついてる中にちやんと奥樣になつてるとはね。

安子（言葉を紛らして、）でも隨分面白い事が御ありなさるでせうね。

陸奥雄　いや何にもありません。うむ爾だ、僕は紀念として密獵の唄を唄つて聞かせませう。面白いです、非常に面白いです。（と衣囊よりウヰスキー壜を出し壜の口より飲みて、）いゝですか、面白いです。（大きな聲にて、）

『水の上には垣根が結えぬ、やあれどつこい、何處の海でも漕いで行け、やあれどつこい、東察加、
やあれどつこいベーリング』

ハ……面白いでせう。

谷本（呆れたる顏にて、）いやどうも早や。

安子　妙な唄ね。（と詰らぬ顏にて環に目配す。）

環　全く面白いわね。もう一返唄つて頂戴な。面白いわ。

陸奥雄　御氣に召しましたか、どうも難有う。其れてはもう一つ、

『死ねば水飲む飲んだる水は、やあれどつこい、地球載せたる海の水、やあれどつこい死にはせぬ、

やあれどつこい死にやせぬぞ、』

谷本　随分殺風景な唄ですな。

陸奥雄　爾てす殺風景です。僕の作つた唄ですもの、其れても僕の船員は能く之を唄ふてす。喜んで唄ふてす。殺風景てせう、其筈です。密獵の唄ですからな。

谷本　密獵つてどんな事をするぢやか。

陸奥雄　密獵は密獵てす。海賊の一種でハ……。

谷本　大膽な話ちやの。

陸奥雄　なあに舟乘りといふ奴は大抵泥棒根性があるものてす。廣い海を相手に働いてるんだから舟の行く處は皆んな自分の領分だといふ氣になるのてす。

環　面白いわね、してどんな處へゆくの。

陸奥雄　重に北の方てす。日の出る東でも無ければ、生温い南でもなく、夕日の沈む西でもないてす。陰氣なく〳〵北の奥てす。氷山が流れて寒暖計が零度よりずつと降つて、木もなく草もなく只た雪て閉された無人島に、アザラシ温肭臍が奇妙な聲を出して遊んで居る處てす。

環　まあ何といふ淋しい處てせう。

陸奥雄　爾です淋しいです。淋しいけれども其處に非常な趣味があります。其邊に立つ者は何人でも帝王の心持になります。法律も道德も凡て內地からの息が全く杜絕してるのですからな。寒さと勞働に堪へ得る非凡の精力を持つて居る者は此邊凡ての島を占領し得るのです。

環　ぢや全く腕づくなのね。

陸奥雄　爾です腕づくです。最も強きものは勝利を得るのです。陸のやうに御世辭や智識や技術や小細工て立つのではないです。膽つ玉と腕力です。原始時代の生活です。時には密獵船が戰ひます。戰と言ても文明人のするやうな大砲の比べつことは違ひます。舟と舟とが突き當るのです。銘々小刀を持て拳と拳との格鬪をやるのです。極めて野蠻です。けれども實力の優劣は一番これが早く解るです。負けたものは船を奪られて子分になるか、若くは島流しにされるのです。現に僕の分捕つた船は新式の外國船て、去年から其れを用ひてゐるです。泥棒同志の喧嘩だから誰も何とも云ひません。實際密獵者は法律なんてものは、弱いものゝ爲めに設けられたものだと思つてるから、負ければ負けたて、男らしく諦めて居ます。

谷本　御話中ぢやが、其れては日本と云はず、露領と言はず、米領と云はずやじやね。

陸奥雄　海の者には戸籍がありません。

谷本　亂暴だね、

陸奥雄　國もありません。故鄕もありません。只だ勞働だけです。

谷本　其れては全て本當の海賊だ。

陸奥雄（ウヰスキーを煽り）ハ……海賊と言はれた處で私は恥辱にも感ぜんです、一體海獸に所有權を附るのは天理に背いてるです。爾ぢやないですか、陸は人のものです。海は誰れのものでせうか、陸地の三倍程の廣さのものを誰れが所有してるのですか。陸には垣根が作られます、境界が設けられます。けれども水の上に垣が結えますか、國標が立てられますか、垣根を作る事が出來ないといふのは即ち海は世界萬人共有のものであるといふ證據です。僕は天理に遵つて海上を荒らすのです。國と國とが條約で決めたといふは、其れは陸の人が決めたのです。海の人には關係ありません。

谷本　大變な議論ぢやの。

陸奥雄　貴方は陸の人です。だから此の議論が不法に思へるでせう。水は始終動いてるものです。其上を行く舟も始終動かねばなりません。水の上に育つ動物も始終動くです。これが千島の臘虎だ、いや東察加の臘虎だと爭ふた處で、臘虎の人相書と戶籍が日露兩國の役場に備へられてない限りは、海の上で射ち獲つた處で其れが何ですか。若し水に法律を置く位なら、何故空氣に法律を置きませんか。どんな鋭敏な水上警察でも十浬奥の沖にどんな犯罪があるといふ事を知りますまい、力の及ばん事です。力の及ばん事は無効です。

谷本　其りや少し極端過ると思ふて、國際の條約は明かに規定してあるぢやから。

陸奥雄　だから僕は其の海上權なるものを非認するのです。其處に面白い處があります。水は動く舟は動

く、水に涯りが無い舟の行衛に極りが無い、絶えず動いて絶えず働く、自由の天地です。若し僕が百哩の沖に出て舷頭に立つて、余れは此の海上の帝王なりと叫んだ處が誰が何と云ひますか。實際無人の海上に一人立てるものは帝王ぢや無いですか。

環　默して首肯す。

谷本　帝王ぢやない、船頭ぢや。

陸奥雄（ウヰスキーをぐつと嚥みて、）爾です、船頭です、船の頭は海の頭です。股引を穿いた帝王です。楫を握る帝王です。荒菰の上の帝王です。臘虎を盜み廻る帝王です。

谷本　ハ……盜み廻る帝王ぢや。

陸奥雄　御待ちなさい、更らに一言を加へると働かねば食へない帝王なのです。其中に樂みがあります。暴風雨のとき、大吹雪のとき氷塊の流れて來るとき、僕の百五十噸の藏神丸が覆りかけたとき、仍且僕は僕丈けの帝王です。帝王の意を失はんのです。

環　怚と陸奥雄の顔を見詰む。

谷本　其れぢや貴方は法律を無視するのぢやね。

陸奥雄　法律は麵麭の代りになりません。道德は臘虎程の價値がありますか。習慣は舟脚を助けて呉れますか。

谷本　貴方は醉ふてる、舟に醉ふてるぢや。

陸奥雄　貴方が陸に醉ふて居るのと同じてす。

環　陸奥雄さん。

陸奥雄（開かず、）陸の息を離れた舟の生活は眞の生活です。眞に人間の生活です。

環　陸奥雄さん。

陸奥雄（構はず、）臘虎なんかは取つても取れんても構はんてす。舟に乘つて水の上を浮いて居れば宜いのてす。豫想の出來ぬ天候を相手に戰ふのが面白いのです。自分で自分の行先が解らんのが面白いのてす。絶えず波と戰ひ風雨と戰ふのが面白いのです。陸の家は地震を恐れて礎を固くするてす。海の舟は可成動くやうにと帆を張るてす。

環　陸奥雄さん。

陸奥雄（意氣昂然として、）人間を離れた生活は眞の生活です。

環　陸奥雄さん、連れて行つて下さい。

陸奥雄（驚いて、）連れて？　何處に。

環（激せる調子にて、）其の氷の山の流れる處へ、アザラシの鳴いてる處へ、嵐の吹く處へ。

陸奥雄　して生命のやりとりをする處へ？

環　間斷なしに働く處へ。

陸奥雄　貴女は人の妻です。今ては僕の友達てはありません。

環　えつ。(と詰まる。)

遙かに船唄聞ゆ。陸奥雄窓に近づき、

陸奥雄　あゝ來た、迎の舟が來ました。

環　(窓より見て吃驚し、)あゝ姉さん。赤い帆の舟が、三角の帆の、赤い舟が、赤い舟が。

一同起上つて船を見る。

(幕)

第二場

其の日の午後、少佐邸内の庭園、正面奥は渺茫たる日本海、荒き竹垣にて砂濱を隔て、竹垣の下には海へ通ふ小さな門あり。門の下に短艇一隻。上手の奥は岩角聳え、午後四時頃の日光斜めに照らす。岩角の陰より舟の赤き帆見ゆ。岩前、垣の中に大きな百日紅あり。其傍の馬小屋を蔽ふ。垣根に鳳仙花、千日草など咲き亂る。

環、爽快なる白の夏洋服にて麥藁の帽を被る。陸奥雄服裝前と同じ。

環　(喜ばし氣に、)あの御舟ね。(と舟を指さす。)

陸奥雄　爾です、あれです。

環　あゝ何といふいゝ船でせう。私があれに乘つて行くんですね。あの向ふに見える白い雲の處を赤い帆で以て拔けて通るんですね。

陸奥雄　いやもつと遠い處までも行くのです。

環　あゝ氷の山や何か。

陸奥雄　其れ許りではありません。貴方の喜ぶ様なものは幾らもあります。妻取草と言つて櫻草のやうな奇麗な花で埋つた海岸もあります。濱辨慶草の紫だらけな島もあります。太陽の光が見えない程に群がつて飛ぶ白鳥も見られます。水の間から顔を出したり、腹を出したりして遊んで居る海獸の輕業も見られます。

環　いろんな珍らしいものがあるのね。

陸奥雄　そんなものを見ながらあの船に乘つて島や岩、濱邊の上を丁度今から十五六年前に貴方と此處で遊んだやうに遊びませう。

環　私を訝めはしなくつて？

陸奥雄　大丈夫です。舟の女王として崇めます。

環　貴方は帝王ね。

陸奥雄　いや船頭でせう。

環　嵐の吹いた晩には？

陸奥雄　私が良人の如く看護しませう。

環　（笑つて）良人の如くにね、して濃霧の強い日には？

陸奥雄　私が自身で楫を取りませう。

環　そして何處迄行くの？

陸奥雄　行先は解りません。永久に貴方と共に居る丈けです。

環　夫の如くにぢやなくつて？

陸奥雄　爾です。

環　ぢや私御舟へ御嫁に行くのだわね。

陸奥雄　今日は新婚旅行です。

環　だから私、結婚は双六の振出しだと言つたんだわ。

陸奥雄　何ですか。

環　いゝえ、先刻、姉さんに爾言つたのよ。

陸奥雄　貴方の言ふ事は凡て胸に深く響くです。

環　でも恁うして將來の事を御話するのは、嬉しいものだわね。

陸奥雄　僕は昔、子供の時、確かに貴方と恁うして一緒に居るやうな事があるだらうと思ふた時がありました。無論其れは十や十二の時でしたが、其れが今に及んで時々思ひ出されるです。

環　其りや夫婦ごつこや何かの時ではなくつて。

陸奥雄　爾です。

環　男と女と寄ると夫婦ごつこをするものよ。私爾思ふわ。人間は死ぬ迄乃且夫婦ごつこて暮らして行

くんだと。

陸奥雄　併し本當の夫婦と、夫婦ごつことは違ふでせう。

環　其りや名義丈けよ。夫婦ごつこと夫婦と何處が違ひませう。

陸奥雄（思ひ付いたる風にて、）其れにしても少佐は何といふでせう。

環　何とも言やしないわ。

陸奥雄　貴方は斷然少佐に斷つて、私と一緒に舟に乘るといふ事を請求し得るですか？

環　斷らなくたつて好いんだけれども‥‥早くあの御舟に乘りたいわ。

陸奥雄　夫婦の關係上、仍且公然となさるがいゝでせう。てなけれや私と公然夫婦になれないぢやありませんか。

環　いゝえ、夫婦ごつこよ。御舟の嫁さんですものね。

陸奥雄（笑つて、）あゝ夫婦ごつこですか。何方にした處がですね、併し少佐には氣の毒ですよ。

環　どうして？

陸奥雄　乾度怒ります。

環（案外と言ふ顏にて、）どうして？

陸奥雄　怒るのは當然です。

環　そんな事はなくつてよ。

陸奥雄　ない事はありません。

環　（考へて、）怒つたらどうしませう。（と舟の方を見て、）あゝ全くいゝお舟ね。私、怒られても構やしないから爾言ひませう。支度をしてからでもいゝでせう。

奥陸雄　私も支度をしませう。

兩人去る。馬丁十助（跛者）腸炎（首の下に大きな瘤のある痩せたる軍馬）を牽き馬小屋より出て來り、鬣を斬り始む。上手より安藤少佐杖をついて來る。

安藤　十助馬はどうだ。

十助　氣分は宜うがすが、瘤が段々膨れますで。

安藤馬に近寄りて鼻づらを撫でゝ、

安藤　可愛さうだな、瘤が段々大きくなるに付けて身體が段々痩せて來る樣だ。（馬に向ひ、）どうだい、氣分が惡いか。痛むか。十助斬髮をしたら男振が上らうぜ。

十助　今罘湯を遣つてやりました。湯上りの理髮床つて洒落てゐますさあ。

安藤　顏が大變に痩せたね。（と登に腰を掛け、）痩せもするわ、こんな瘤が出來てはな、十助瘤を切つたらどうだらうか。

十助　其ないに思ひましたて伯樂に相談したけんど、瘤切つたら生命に係はるつて言ひますて。

安藤　切らなきや痩せて行くばかり、切れば死ぬる、困つたな。

十助　私い此奴い死んだら如何しやうかと、思ふと氣が狂ひさうてなりましねえ。可愛さうに旦那手柄のある馬だて、旦那後生ですから勳章拵へて瘤の處に下げてやつて御呉んなせえ、息のある中にな。

安藤　うむ拵へてやらう。

十助　馬は此の通瘤の病だ。私も此の通り足が不具だ。旦那迄が其那重傷てやつと生命が助かつたが、仍且不自由な身體だ。

安藤　管らない事を言ふな。

十助　お邸中でぴん〳〵してるのは奧樣だけだ。

安藤　何を言つてるか。

十助　不具な者や弱いものを可愛がる事知んねえだて。

安藤　ハヽヽヽ　お前は又酷く妻と仲が惡いな。

十助　御椽先でお目にかゝつたつて陽炎はどうしてるかと、一言位聞て與れても宜ささうなものだ。

安藤　ありや若いからだ。

十助　此處へ來さしつてからも廏の中一度見さしつた事も無えだ。

安藤　氣が附かないのだ。

十助　奧樣の事惡く言つて濟まねえだが、思ひ遣りが無さ過るだて、近所の人が赤兒抱いて立つてゝも赤兒に愛想一つ言つた事は無え。赤坊の嫌な女ちうものは無えだて、誰の爲めでも無え、旦那の爲めに

苫毛が血に染まる程鐵砲玉の中を潜ぐつて來た陽炎だ。旦那が大事なら陽炎も大事だ。畜生だと思つて餘りだ、ねえ旦那餘りぢやあんめえか。

安藤　御前の身にしちや爾思ふだらう。併し面白い、馬もそれ程お前に可愛がられゝば滿足だらう。奥さんの事は氣に掛けぬがいゝ。

十助　氣にかけまいと思つても氣になるだて早や、あの太股の傷の痕を見て下つせえ、あの傷は早や、第二大隊の早や生命を助けた傷だて、陽炎が無かんにや師團も何も總崩れになる所だて早や。ねえ申し日本の名折れになる處を此奴が助けたんで早や、私あの時を憶ふと總毛が立つだ。

安藤　あの時は實際激しかつたな（と急に活々したる顔になり、）あれは十一月の二十三日か。

十助（筵の上に腰を下し、）爾だ、十一月の廿三日だ。

安藤　狼子堡の敵を擊退して、第二大隊が守備をした時ぢやな。

十助　恐ろしい雪の降つた明けの晩で。

安藤　敵は一條の河を隔てゝ塹濠に據つた、兵力は一箇聯隊許りだ。晝の中は何事もなかつた。

十助　何ても莫迦にいゝ月夜だて。

安藤　雪月夜だ。四方見ろ限り白い、薄青く白い、河は殘らず氷つて、氷の上の足跡までが數へられるやうに見えた。敵の塹壘に通ふ坂路は硝子の如く月に光つて人影一人も見えない。靜かな夜だつたな。御前はあの時何をして居た。

十助　陽炎の蹄を直して居ました。

安藤　所、かん〳〵かんといふ鐵槌の音が寒天に響いて聞えたつけ。音はそれ丈けだ、實に淋しい程靜かな雪月夜だつた。すると突然敵の塹壘の中から火の柱の如き眞赤な三本の狼煙が中天に昇つた。

十助　全く凄いもんでしたて。

安藤　火の柱が虚空に消えない中に敵の陣地から突然讃美歌が起つたつけ、と思ふ間もなく敵は一齊射撃だ。味方の兩翼は何時の間にか敵兵を以て滿された。

十助　第二中隊長殿が戰死されたゞ。

安藤　前面の敵五百米突、三百米突、帽廂と帶劍が一樣に波のうねるやうに月に光つて顔が次第に見えて來た。

十助　左翼は土壁の內で死物狂ひだつけ。

安藤　右翼は背後の氷結した池の岸まで詰め寄せられた。

十助　背後の人家は只もう一面の火の手。

安藤　其時私は、

十助　躍進！　と號令を。

安藤　血路を開け、軍旗を護れ、途端に、

十助　ばり〳〵ばりッといふ砲彈の破裂の音だ。土壁も家もぼうつといふ煙の中だて旦那の姿は見えね

え、(狂はしく) 旦那〳〵、副官殿。

安藤 破片でやられた、何處かしらん。腰しのあたりだ。

十助 煙の中にすうと立つたかと思ふと直ぐ倒れたゞ。

安藤 殘念だ、腰が立たない、十助、十助御前を呼んだ。

十助 はあ。

安藤 後備は未だか。

十助 未たゞ。

安藤 本隊へ報告しろ、味方は苦戰中だ、敵の兵力は次第に増加の模樣です。

十助 はい。

安藤 私の馬に乘つてけ。陽炎に。

十助 はあ、行つて來ますだ。

安藤 旦那、死んぢやいけねえぜ、私歸へるまで死ぬ事なんねえぜと御前が言つた。可笑しかつた、ハヽヽヽヽ。

十助 ハヽヽヽヽ。笑ひ事ぢや無え、私は夢中だ。

安藤 實に危ぶなかつたな。

十助 あゝいふ時には早や、私、此の陽炎ほど難有えものは無えと思ひましたて、私其時小いさな聲て言

つたと、陽炎よ、主あ日本の馬だからにや露助の鐵砲玉より早く走れと、沼も畑も一飛びだ。蹄の底から雲が湧いて、鬣と鼻面で風を切つて、私、眼は只た夢中で飛んでるやうだて、大腿の彈丸は後になつて氣が付いた。陽炎の傷も本隊へ着いてから解つたて。(馬の背を撫て、)難有え、難有えだよ。

安藤(立上らんとして蹌踉めきて踏止り、)其時の馬も人も揃ひも揃ふて不具者だ。

十助　もう一遍戰爭する事はあるだがね。

安藤　二人の足が元の通りにならん中は迚も駄目だ、私は非職だ、お前は廢兵、これから先は只た死ぬばかりさ。(悄然として)十助先きの事は思ふまいよ。

十助　なあに、今までの苦勞丈けで澤山だ。

環、さも喜ばしき樣にて上手より來る。

環(押へたる聲にて、)ねえ貴方、私行つてよ。

安藤　何處へ行くのだ。

十助悄々しげに馬を牽て厩に去る。

環　何處つていゝ處へ。

安藤　何處だ。

環　私も解らないの。

安藤　又始まつた、御前始終其那子供のやうな事ばかり言つてるね。

姉安江來る。

安藤　安江さん、環は何處かへ行くんだとさ。

安江　えッ、何處かへ。

環　姉さん、私行つてよ。

安江　何處へ？

環　赤い帆の舟で。

安江　えッ、其りや本當？

環　(良人の方を向き、)ねえ貴方、御暇を下さいね。

安藤　そりや好きな所へ行かがいゝさ。けれども何處へ行くんだ？

環　あの船に乘て方々廻つて見たいの。

安藤　いつ歸つて來るか？

環　そりや、解らない事よ、死ぬ迄歸つて來ないかも知れない事よ。

安藤　死ぬ迄？

環　だから御暇をね。

安藤　御暇とは或る時間の問題か、但しは離別をしてくれといふのか。

環　何方でもいゝの。

安江　環さん、貴方は乾度何かに魅されたのぢやありませんか。
環　いゝえ正氣よ、姉さん、赤い帆の船が迎ひに來たんですもの。
安江　貴方未だ其那事を思つて居ますか？
安藤　舟に乘つて何をするのだ？
環　密獵をします。嵐と戰ひます、霧と戰ひます。
安藤　御前、氣が狂つたのか、何密獵？　嵐？　霧？
環　只勵いて見たいんです。
安江　環さん、氣をお靜め、氣を御靜め、陸奧雄さんの話に夢中になつてはいけませんよ。
環　姉さん、私何も夢中になつて居ない事よ。
安藤　其れぢや本氣で言ふのだね、本當に私と別れたいといふのだね。
環　別に離縁を取らなくてもいゝ事よ、私を舟に乘せて下さればいゝのよ。私は貴方の妻であつても妻でなくても其方はどうでもいゝ事よ。
安藤　わからんね、私の家を出る以上は、私の妻でなくなるのは當然ぢやないか。女の癖に密獵を……環、本氣で言ふのだね。其れならばどうか思ひ返へして呉れ、本氣で思ひ返へして呉れ。
環　もう駄目よ、私約束しましたもの。
安藤　誰と？

環　御舟と。

安藤　(屹となり、)環、御前は私の妻である事を忘れまいね、五年前に見ず識らずの安藤庫太といふ一少佐を慕ふて看護婦となつて介抱した事を忘れまいね。其の美くしい御前の歴史を忘れまいね。

環　(明晰に、)あゝ、知つてゝよ。

安藤　其を知つてるなら何故其戀を死するまで全ふせんか？

環　だけれども其りや私の十八の歳でしたもの、軍人といふものは好いものだと思つたからなのよ。いいえ、私本當に白狀するわ。私は貴方を慕つたのよ。手柄を慕つたのよ。いゝえ、慕つたといふよりか盜まうとしたのよ。爾ぢやありませんか、貴方が生命を懸けて仕出來した軍功を私は夫人といふ名義て以て半分私のものにしやうと思つたのよ、新聞や何かで世間が貴方に捧げた名譽の坐蒲團に私は知らん顔して半坐を占めやうとしたのですもの、卑劣ぢやありませんか、實に穢ない〳〵根性ぢやありませんか？

安江　(驚きて、)環さん、貴方が其那に明瞭と物を言つた事を生れてから今日初めて聞きました。まあどうして其那事が言へるのでせう。

安藤　(構はず、)夫婦は一體だ。良人のものは御前のものぢやないか、穢ないといふ事があるものか。

環　いゝえ、貴方のものは貴方のものです、私のものは私のものです。けれども私にはものと云ふ持ものは一つもありません、貴方には立派な戰功があります、私に何がございませう、私は貴方の血肉に食

ひ込む蟲のやうなものです。夫人といふ名は蟯蟲といふのと同じ意味だわ。

安藤　環さん貴方は何處で其那事を御聞きです、確かに氣が狂つて居ます。

環　誰れにも聞きません。私今日と今日、たつた一時間計り前に自分で氣が付いたのよ。

安江　御自分で？

環　爾よ、赤い舟を見てかち私が妙な事が解つたのよ。（庫太に向ひ、）ねえ貴方、先刻貴方は二人の間は或者に結ばれてるんだと仰有いました。

安藤　うむ。

環　其の或ものといふのが解つてよ。

安藤　何だ、其れは？

環　其れは夫婦といふ名義よ、世間體の名義よ。

安藤　其れがどうした？

環　夫婦といふ名が付けば御互に其名の爲めに縛られるぢやありませんか？

安藤　私はいつ御前を縛つた。

環　いゝえ、心が縛られるといふ事よ。詰らない名義の爲めに貴方も私も愚にもつかない辛棒をし合ふてせう。世間體からよ、そして銘々に仕度いと思ふ事が出來なくなるのよ。

安藤　お前の言ふ事はどうも解らん。

◎

環　貴方は仕事のない人で、私は仕事があるんですもの、今日から仕事が出來たんだすもの、其でも夫婦といふ名義の下に……。

安藤　少しも解らん。

環　私は貴方の養女だと言ひましたね、貴方の後を私が續ぐのよ、貴方は陸で手柄をなすつたから、私は海でよ、解つて？

安藤　解らん、女に何の仕事があるものか。

安江　恁うして居れば、何不足のない結構な身分ぢやありませんか。貴方が今迄辛抱して今度此んな事があつたら今迄の戀が無になります。

環　だつて赤い帆の舟が先約よ、許嫁だつたのよ。私惡い道寄りをしたんですもの。

安藤（乾然と、）宜しい、解つた。暇をやる、畢竟するに私が不具からだ、人の良人たるの機能なくして御前を妻として居たのは私が惡かつた。私は御前を拘留して居たのだ。天理に背いた破倫の行爲だ。

環（恨めしげに、）其那意味ぢやありません。

安藤（杖を大地に突き、）陸奥雄は若い、前途多望だ。私のやうな不具者と違ふ、而も御前とは幼な友達だ。

環　あら其那に誤解しては困つてよ。

安藤　誤解ではない正當の解釋だ。成程、私は有名無實の夫婦といふ名の下に縛つて居た。

環　皆誤解して了ふのね、どうしやう私は養女よ。

安藤 養女だから他に嫁するがいゝ。

環 あら困つて了ふわ、そんなにとられちや。

陸奥雄活潑に上手より來る。

安藤 陸奥雄さん、好きな處へ連れて行つてくれい。

陸奥雄 許されましたか、環さん、其れでは參りませう。

安江（泣きながら）環さん、どうかもう一遍考へなほして下さい。それでは安藤さんに濟みませんよ。

環 考へたつて仕方がない事よ。

安江 ぢやどうしてもいけないのかね。

安藤 安江さん、自由にさして御やりなさい。

陸奥雄 ぢや行きませう、新婚旅行ですな。

環（怪しみながら）誰と誰との？

陸奥雄 貴方と僕との。

環（凛として）違つてよ。私は舟と結婚するのよ。

環、陸奥雄兩人、小さき門より下りて短艇に乘る。

安江泣き伏す。少佐見送る。

從僕 十助鐵砲を提げて 厩より走り出づ。

十助　もう勘弁なんねえだ。御免なせえ。

と銃口に手をかける、其の手を抑え、

安藤　十助待て。

十助　いんにや、私いもう、私いもう……。

と争ふ。

安藤　待て、あれは海の者、私は陸の者だ。立場が違ふんだ、待て。

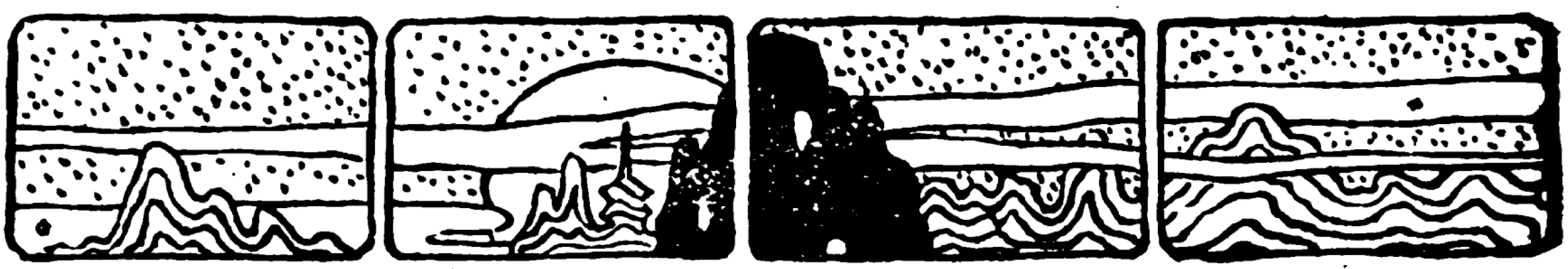
と争ふ機に一發轟然と迸り出づ。厩の中にて陽炎の悲鳴聞ゆ。十助鐵砲を抛つて厩に驅け込む。厩の中より十助の慌しき聲。

十助　た、た、大變だ。彈丸は陽炎に中りました。

安藤　何？　陽炎に？

と茫然眼を落す。彼方の海上より若き二人の活々とした聲にて密獵の唄聞ゆ。

（幕）



惡縁

正宗白鳥

（一）

巽訓一は所在なさに、近くの珈琲店へ行つて、新聞でも讀まうかと、外套も着ず帽子も被らず、臺町の下宿を出た。出がけに故郷の妹からの手紙が玄關に投出されてあるのを見て、急に心がそれに注がれ、その長い解り難い文句を一心に讀みながら、戸外を歩いた。そして讀み終つた頃、足は自然に久我とよ子の宿へ向つた。

千駄木の或通。麵麭屋と燒芋屋とに挾まれた細い路次の奥は、袋のやうになつて、その中に三四軒古びた家が建てゐる。訓一は片手を懷に入れ、滑つこい溝板の上をノロ〳〵通つて、その袋の中へ入つた。狹い空地には、番傘と蛇の目とが道を遮り、鮮かな朝日を浴びてゐる。平生騷がしいこの近所も、今は靜かだ。

彼れは心寛やかに、柔かく濕つた垣根や屋根を見てゐた。忙しさうに首を動かしては、羽を光らせて飛んで行く雀を見てゐた。そして「今日は春みたやうな日だ」と思ひながら、邪魔物の傘を取のけるのも慵いやうに、遠廻りして袋の緣を傳ひ、ソツと窓の側に立つてゐた。

これ迄は此處でよく相圖の口笛を吹いたものだ。指先でコト／＼と障子を叩いたこともある。然し今日は何ともしない。聲をも掛けない。室内もヒツソリしてゐる。「ゐないのか」と疑つて、暫らく耳を澄して窺つてゐると、カサ／＼と新聞か何かを疊む音がして、やがて押入の戶が締つた。机の側へ來る女の足音が聞える。荒々しく肩を搖り上げる音が不快に耳に響く。訓一はその音を聞いて、障子一重隔てた女の顏付が目に見える樣に感じた。氣分が惡くて、モダ／＼するらしい時には、さも衣服が邪魔になるかのやうに、顏を蹙めて肩を搖るのが、其女の癖で、今の訓一にはその樣子が小憎らしく感ぜられる。

室内でも人影に氣ついたのか、障子を細く開けて「あら……誰れかと思つたら」と、机から伸上つて、青白い顏の半面を現はした。

「上らうかなあ」と、訓一は氣の進まぬやうに云つて、緣側へ廻つて、部屋へ上つた。僅かな道具も、今日はキチンと片付けてあつて、風琴の位置もこの前とは變つてゐる。

「何だか異つた家へ來たやうだ」と、周圍を見てから、最後に女の顏を見た。少し赤茶けた油氣のないパサ／＼した髮が、際立つて目につく。

「私、早く外へ移りたいわ」と、とよ子は鼻聲で早口に云つた。

「さうかい、いゝ所があつたら移つたらいゝだらう、何處へでも」

「いゝ所つて、まだ見つからないんだけど、此家は一日も厭になつたんですもの」

「家の者が下等だからと云ふんだらう」と、訓一は懷手のまゝ火鉢の前に座つたが、座り樣が落付いてゐない。

「だつて、始終厭らしい話ばかり聞されるんですもの」と、とよ子は口のあたりに淋しい笑ひを浮べて、

「本當に人を馬鹿にしてるわ」

「そりや仕方がないさ」と、訓一は冷かに云つて、心ではどうせ尊敬される柄ぢやあるまいしと思つた。女は斜に男に添うて座り、青筋の浮んだ薄い手の平を火鉢に翳し、上目で男の顏を偸見しながら默つてゐた。

この頃は二人とも話に夢中になることが少くなつた。少くも以前のやうに、自分達の過去や將來を語り合ふことはなくなつた。その癖二人の心の中では、別々に過去と將來とを思つてゐる。

「今日は暖かいから、久振りに散歩でもしやうぢやないか」と、訓一は氣まづい思ひを強いて振落して、元氣よく云つた。

「だつて、まだ道が惡いでせう。もう乾いてるかしら」

「まだ乾いてやしないさ。ぢや止さうか。どうせ田端の田圃道は歩けりやしないから」と、意味ありげに

目て笑つたが、女は何とも感ぜぬらしく、

「貴郎、今日はお休暇なの。日曜ぢやないでせう。」

「呑氣だねえ。今日は祭日ぢやないか。通りにや旗が立つてるよ」

「あゝ、孝明天皇祭だつたわね、では市は賑かでせう。何處かへ遊びに出て見やうか知らん」と云つて、急に思ひ出したやうに、「さう云へばね、先日のチーハーが當つたんですつて。一圓五十錢とか取れたつて、お神さんは昨日大騷ぎしてたわ。今日は大方そのお金で芝居でも見に行つたんでせう。平生からお金さへありや、何よりも芝居が見たいつて、寢言にまで云つてた位だから。それでね、昨日私にこんな事を云ふのよ。今度は巽さんに判じて貰つて當つたんだから、貴女に三分一ぐらゐお金を分けて上げてもいゝつて。人を見くびつてるわね。誰れがチーハーのお金なんか。……これから何時も貴郎に聞くことに定たと云つてたけれど、貴郎、もうあんな相談に乗らない方がいゝわ。同じやうな人間と思はれるだけ損よ。」

「何、いゝさ。利益を分るつてんなら、喜んで貰つたらいゝぢやないか。いやに上品ぶるね。さう脉く當ると、僕も小使ひ取りに買て見やうか」

「そんなに反對するのが面白くつて」と、女は男の澄した顏を見ながら、親指に力を入れて、男の膝を壓した。そして男の懐から喰み出てる手紙を見て、「大變長さうな手紙ね」と、不審しさうに目を注いだ。

「讀んでもいゝよ、妹から來たんだが面白いことが書いてあらあ」と、訓一は摑み出して與へた。
「あゝ、お美代ちやんからだ。まだ十四だとか、貴下は云つて被在つたけど、大變字が上手なのね」と、とよ子は讀み憎い字を判じ〳〵讀み出した。
訓一は座を立つて、出鱈目に風琴を彈き始めた。すると、今まで靜かであつた向ひの中二階——豆腐屋の店仕舞が親子四人て室借してゐる廊下つきの六疊の間——て、人聲がして、やがてプウーイ〳〵と豆腐屋の喇叭の音が聞える。
「お止しよ、見つともないぢやないか」と、妻君が叱りつけた。
「これても風琴に合せてるんだい。昔取つた杵柄て、上手いもんだあな」
「馬鹿だねえ、この人は」
「さう云ふなよ、この喇叭を吹くと、おれも昔が思ひ出されらあ」
と、夫婦は粗暴な聲て、馬鹿を云ひ合つては笑つてゐる。
訓一は音を止めて振返つたが、とよ子はまだ手紙を膝の上に垂れて讀耽つてゐる。窓は明るい日光を受けて、窶れた女の面が一際目立つてゐる。
訓一は會ふ每に懷しげのなくなるやうに感じた。嘗てはその靑味を帶びた顏、形よく尖つた鼻を見て女神でも見るやうに、氣高くも思つたことがあつたが、今はその頰に自分の接吻の跡があると思つても不快である。自分の初ての戀がこんな女に注がれたかと思ふと不甲斐なくも淺間しくも感ぜられる。

「おい、豊ちやん、僕が久振で「春雨」でも唄はうか、君、彈いて見ないか」と、訓一は以前二人で唄つたり彈ひたりしたことを思つてゐる。

「えゝ」と、女は生返事して、手紙を書きながら、「よくこんなに細かく書けることね、感心だわ。それに東京言葉が味いのね」

「彼れは小説ばかり讀んでるんだらう」と、訓一は元の座に復つて、書きかけの手紙を取つて、目についた一節を指差し、

「これなんか面白いぢやないか………………………照坊もおさいも皆な揃つて無事に暮してゐるのですが、私は毎日寒い川風に吹かれて學校へ通ふて居つても、風邪を引いたことはありません。身體は丈夫だけれど、それでも無事ではないのよ。……東京へ行つていろ〳〵の人達が話をしてゐるのを聞くと、さぞ小説を讀むやうで面白いであらうと思ふと、早く〳〵行つて見たくてならないのですが、父上が承知して下さらないので、ほんとに困つてゐるのよ。……だから兄さんがどうかして學校へ行かして下さいな。おたのみ申してよ………

皆それ〳〵に無事ぢやないんだね。しかし東京の者は皆な小説のやうな生活をしてると思つてるのは面白い」と、訓一は妹の鈴のやうなパッチリした眼を思ひ出した。

「それ程來たいのなら、東京へ呼んでお上げなされはいゝ。二人で家を持ては、下宿屋にゐるよりや、

貴郎のためにも却つていゝでせう。色んな點から、その方が爲めになるわ」と、女は分別ありげに云つた。

「さうだね、僕もそろ〳〵自分の爲を計らなくちやなるまい。もつと氣の利いた仕事を見つけて、家ても持つんだ」と、訓一は眞面目で云つた。

「あゝ、それがいゝは、早くさうおなんなさいな。貴郎に家が出來たら、私も宿りに行けるんだから」

「そんな事は何時の事だか分りやしない」と、訓一はウッカリ世帶染みた話を口にしたのを悔ひた。そして此頃はこの浮草のやうな女が、世帶話になると、眞面目に身を入れて聞き出すのを憐憫に感じた。

「私、どうしやうかしら」と、女は小聲で云つて、俯首いて額を押へた。

「どうしやうつて、何を」と、訓一は先から女が何をか考へて迷ふてゐる様子を察してゐた。

「えゝッ……、何でもないの」と、卒氣なく云つて、白く荒れた上唇を嚙んでゐる。

「お前、考へ事があるんなら、幾らでも考へるさ。僕は行火にでも温つて晝寐をしやう」と、訓一は自分で茶の間へ行つて、行火に火を入れて來て、それに毛布を掛けて横になつた。女は默つて、古い天鵞絨の枕を出した。訓一は何時も用ひてるその枕の、今日に限つて、汚れ目の小氣味惡く、頭が落付かぬので、自分の袂から新しい手巾を出して、枕を蔽ふた。

一時間もして目を醒ますと、椽側にとよ子と豆腐屋の神さんとが話をしてゐる。木鋏の音もしてゐる。

「家の人だつて、貴女、あれて憎らしい程お金を持つてたことがあるんですよ。だからあんな商賣をし

なくつてもよかつたんだけど、一寸した機會で、粋興にやつて見たんさ。今度はもつと氣の利いた商賣を始めやうと思つて、國の親類から資本を借りる筈になつてるんですけれどね、田舍の奴は皆臆つ玉が小さいから、文句ばかり云やあがつて、容易に話が纏まりやしない」

「では商賣を初めるんだと、此家を移らなくちやならんわね」

「どうせ、もう長くは此家にゐられやしないんですよ、室代だつて大分溜つてるんですしね」と云つて聲を低くし、「明日は晦日だから、又お神さんに苛られるこつた。幾ら何と云はれたつて、無いものは仕方がない。」

「もう晦日だわね、早いこと」

「貴女は今月は丸々拂へるんですか。これは内所だけれどね、お神さんが昨日こんな事を云つたんですよ。この前女學生を宿めた時は大變儲かつたから、外の人を斷つてまで貴女も宿めたんだけど、貴女ぢや割に合はないから、早く出て貰ひたいつて。隨分高い下宿代を取つてる癖に、蟲のいゝ事を云やがるんだわね。よく聞いて見るとね、その女學生とかは支那人の妾をしてたらしいの。だから屹度此家の神さんも結托になつて、チヤン〳〵から捲上げてたんでせう。どうして慾に掛けちや、そりや拔目のない人ですからね」と、豆腐屋の神さんは、宿の女房の惡口を散々に饒舌つてゐる。

訓一はそれを聞きながら、起るのも懶く、寢て煙草を吸うてゐた。一昨夜も此室に宿つたので、とよ子に話すべき噂の種も盡きてゐるし、女から聞くべき噂もありさうてない。この頃も女無頼漢の守屋に

脅かされたり、唆かされたりしてゐるらしいが、それを問うた所で、正直に有のまゝを云やあすまいし、又自分で執着する氣もない女が、どうならうと構ふにも及ばぬと、强て聞きたくもない。明日にも何かの拍子で自分との緣が切れ、女の行衞が分らなくなつたつて、結句自分の責任が無くなつて、幸福だと思つてゐる。

しかし此頃も以前と同じやうに足繁く通つて來てゐるのである。勤め先からの歸りにも、散步の次手にも、左右の部屋が賑かで、自分の部屋が淋しいにつけ、夜が寒くて獨寐の足の冷たいにつけ、知らず知らず足がこの宿へ向いて來る。來ると容易に歸らないで、時としては半日を過し、一日を暮らし、勤めを休むことが多い。

この日も早く歸るつもりで、二三本の煙草の消えると共に起上がつたが、從來の習慣が殘つてるのか、いざとなると、この部屋に未練氣が起つて、直には立去れない。そして、とよ子が何處から持つて來たのか、柳の枝を竹筒に生けてゐる姿を見ながら、グツ〳〵してゐたが、その揚句に袂から蟇口を取出して、

「僕は晝飯を食つて行くから、牛でも買つて來てお吳れよ」と、女の前に五十錢銀貨を置いた。

それから二人は臺所から、煮物の道具や食器を運んで、久振に二人で煮ながら、二人で一つ鍋をつゝき合つて食事をした。味さうに肉の香の舞ひ上る間に、二人は盛んに食物の話をし合つた。何が味い、何が食べたいと、二人は暫らくそればかり話してゐた。

（二）

その晩訓一は自分の机の上で、宿の書付と蟇口とを引合はせて、幾らかの不足を認めた。それに明日はとよ子にも多少の補助をしてやらねばなるまいと、遣繰を案じて居たが、毎月の例であれば、さして苦痛をも感じなかつた。それよりも祭日に引續く明日の日曜を、如何にして快く暮さうかと、心は次第にその方へ向いてしまつた。芝居も見たくないではない。一夜宿りで溫泉か海岸かへ行つて、久振りで田舍の爽かな空氣を吸つても見たい、新なるとよ子、もつと美しいもつと生々しい外のとよ子と旅をしたいとも思つた。

一通りこんな事を思ひ過した後、彼れは火鉢にドツサリ炭をついで、卷煙草の吸殼を一つ〱燒盡くし、奇麗に灰をならして、讀みさしの「片戀」を開いた。四方の騷ぎも靜まつて、隣室では碁石の音のみ響いてゐる。耳を澄ますと、遠い空で風らしい音がザワ〱としてゐれど、窓の戶はコトリとも音がせず、隙間には細く月影がさしてゐる。

彼れは暇潰しのつもりで、緩々と讀み終つた。文學好きの或友人が、面白いから是非讀んで見ろと貸して吳れたもので、話の筋が西洋の事だから讀みづらい所もあるが、流石に感に打たれる所もある。アーシヤと云ふ女は變り物らしいが面白い女だ。日本にもこんな女があるだらうか。有るにしても自分がそんな女に接したことはないのだ。「あゝ戀する女の眼付といふ者は……」とあるが、とよ子の目は戀の光を發つに相應しい目ではない。身體も心も荒れて乾いて、溫かい淚一滴ありやしない。

我アーシヤ〳〵と、彼れは心で繰返した。

ライン河畔の景光も彼れの心を惹いた。「櫓に凭れて假寢をしてゐる船頭」は、彼れに昔の記憶を呼起させた。波靜かな内海に膝を抱き舟緣に凭れて假寢してゐる船頭の姿は幾人となく目に浮ぶ。上京前の一夏を或海岸の親戚の家で送り、柔らかい鹽風に身を浸して、放縱の日々を送つたことや、卒業後に只一度の長旅、山陽の海岸を足の向くまゝに旅したことが、取留もなく心をめぐる。甘い酒の香のまだ口の中に殘つてゐるが如く、まだあの樂しい記憶の數々がフハリと殘つてゐる。

牡蠣殼の斑らに喰入つた舟板で圍つた漁家や、夕凪に帆を低く横に垂れた舟や、潮が滿ちると、一面に縮緬皺をつくる穩やかな海。眠を誘ふ引臼の響き、螽斯の鳴き聲。——晝寢に厭いて、游泳に厭いて、机に向つて徒書きを初めると、目も心も自づと青い小島の方へ奪はれて、筆は一字をも下さぬ間に、硯の水は鹽風に早く乾いてしまう。桐の葉が机の前の低い欄干と屋根とに斑らに影を落し、その影が搖れてゐる。蜂ばかりが忙しさうにブン〳〵聲を立てゝゐる。——阿波縮の涼しさうな浴衣を着た子供が庭から聲をかけて「兄さん日が蔭つたから舟に乘らう」と催す。後の山は半ば蔭つて、岸に繋つてる舟には、夕餐の烟が舞上つてゐる。波に搖られながら、銅色の手で、湯氣の立つてる白い飯を食らふ船頭の姿は思ひ出しても懷しい。——春の長き日を岩から岩へ渡つて暮し、黑ずんだ水に垂れた釣竿を引上げると、鮹が手に絡みついて離れなかつたあの時も忘れがたい。——

朝風に浴衣の袖をヒラ〳〵飜へし、草履を穿いて、彌山の方へ雲雀のやうに見えつ隱れつ、消えてし

まつた少女の愛らしい面影は、心が内海の夢の世界に向ふ毎に浮んで來る。あの前夜汽船に乘つて宮島へ渡つたが、同船の客に二三人の從者をつれた肥つた男がゐた。その娘らしい姉妹の女も側にゐた。皆甲板に立つて、涼い夜氣を喜び、向の島にちらつく燈火を見てゐたが、訓一は薄火の間に、その妹らしい女の無邪氣ない面に見惚れた。晴やかな聲でよく語るのを聞いてゐた。やがてかの肥つた男は、何を思つたのか、訓一に近づき、「これて當分天氣は堅まつたやうですな」と、話しかけた。

「はあ、よく晴れましたね」と、訓一は目を張つて、かの男の柔和らしい顏を見上げた。

「貴下は御存じぢやありませんか、この近所に音戸の瀬戸があるさうですが、何方てせう」

「さうですね、よくは知りませんが、何でも彼方の方てせう」と、東を指差した。

「さうですか」と、その方を見てゐたが、やがて、振返つて訓一を見下し、「貴下は御近所の方てすか」

「いゝえ、さうでもありません、」

「かう申しちや失禮かも知れんが、貴下のお顏がこの邊の人の特長をよく現はしてるの快活で聰明な人相てすな」と微笑した。

訓一は少し呆氣に取られて返事にも迷つたが、かの男はさも打解けたらしい樣子て、「これから何方へ旅行なさるんてす」と問ふ。

「明日は岩國の方へ行かうかと思ひます。どうせ目的のない旅行ですから、その日〳〵に、足の向いた方へ行けばいゝんてす。」

「旅はそれが面白いんてさ。私なんかもうそんな眞似が出來なくなつたが、貴下のやうな時代が羨ましい。」

「貴下は東京ですか」

「さうです。實は用事があつて馬關まで行く筈ですが、次手だから此所を女どもに見せてやらうと思つて、日限を遣繰りして道寄したんです」

不思議に訓一に對して親しい態度を見せてゐたが、汽船は既に棧橋に着いたので、それきりで別れてしまつた。

名も知らぬ人の平凡の會話であるが、訓一は何となく懐しい氣がして、そのまゝ別れるのが本意なかつた。如何なる人の何如なる旅ぞと、その一夜心に掛けてゐた。その翌日も棧橋でも停車場でも心をつけてゐたが、最早影も見られなかつた。岩國から更に馬關へ向つたのも、再び會へるかも知れぬと空頼みしたからであつた。

漣の音、綠葉の戰ぎの、今耳元に響くが如く、心が内海の島と水とを巡ると共に、かの雲雀のやうに消え去つた少女の袖がヒラ〳〵と彼れの魂を誘かして止まぬ。

て、誘かされて、いゝ氣持になつてる間にトロ〳〵と眠氣さして、夢の中に寝床へ入つて熟睡に陷つた。

（三）

その翌日彼れは十時頃までも快く眠つて、まだ温い寝床の離れがたく、仰向けになつて、弛い目を開けたり、閉ぢたりしてゐると、澤井といふ此頃頻繁に往來してゐる友人が入つて來た。訓一は笑顔で迎へたが、直ぐには起上らぬ。澤井は立膝で火鉢に當り、新聞を讀みながら、

「一月も今日限りだね、早いもんだ」と、歎息した。

「君は一月中遊ぶと云つてたが、何か面白いことがあつたかい」

「いや、遊ぶ方法を考へてる間に、一月立つてしまつた。」

「君のやうな思想家は、凡ての事がさうだらう。一生の方針を定めるのに一生かゝるといふ方だね」

「さうかも知れん。しかし一朝方法が確定したら、急轉直下の勢でやるさ」と云つて、澤井は訓一を顧み、「おい、もう起きてもいゝぢやないか」

「僕は今今日の方針を考へてるんだ、確定するまでは起きたつて仕樣がないから」

「氣樂な事を云つてるね、この頃は千駄木へは行かんのか」

「もう滅多に行きやしない」

「どうだか。君のこつたから分りやしない、」と、澤井はさも信じられぬらしい顔付をして、「よくあんな女を悅がつとられるね」と、目で冷かすやうに笑つた。

「誰れが悅しがるものか」と、訓一は多少癪に觸つた。この頃は自分がとよ子に迷つてゐるやうに見られるのが不快でならぬ。侮辱を受けたやうに感ぜられる。

澤井はさうとも氣付かず、眞面目になつて、「君もとよ子とは早く手を切つた方がいゝぜ、昨日電車で守屋に會つて、僕は弱つたよ、あの女は丸で無賴漢だね、どんな場所だつて人前を構ふ奴ぢやないんだから、會つたら災難だ。僕は只一度君に連れられて、あの家へ遊びに行つただけなのに、僕を取摑まへて金を貸せいちゆうんだから酷いよ、仕方はない、僕は五十錢貸してやつて、逃げ出したんだが、近に君の家へ來るさうだよ、巽君ととよ子とは私の家で出來たんだから、巽君からも些とはお禮をさせてもいゝんだつて、電車の中で大な聲て云ふんだから、乘てる者は皆吃驚すらあ。あゝいふ奴に係合をつけられちや溜りつこはない。弱點でも押へられてると酷い目に遇ふから、用心しとく方がいゝよ。それにね、彼奴此頃は定職がなさゝうだ、秘密取調會社の方も甘く行かんので困つてるらしいから、尙更此方でも警戒しなくちやならん」

「さうだね、守屋に摑まつちや大變だからね」と、訓一は折角淸々してゐた頭に澤井の訪問で、厭な雲がかゝつたやうに感じた。て、急に跳起きて、顏を洗つて來ると、澤井は小い手帳を出して、新聞から何か寫してゐる。

「何を寫してるんだい、君はよく忠實に手帳へ書き留めるね」

「これでも何時か役に立つことがあるんだよ」と、澤井は手帳を懐に入れて、「さあ、明日からは努力するぞ」と、力を込めて云つた。

「ぢあ今日はまだいゝだらう、酒でも飮まさうか」

「いや、そんな暇はない、今日は杉田さんの家を聞きに來たんだ、轉居の通知をなくして、どうしても思ひ出せんのだが、君は知つてるだらう」

「杉田は竹早町の三十六、確かさうだと思つた、君は何しに行く」

「一寸相談事があるんだ、居るか知らん」と、危んでゐる風であつたが、やがてソハ〳〵と出て行つた。

訓一は見送りもせず、煙草の粉を煙管に詰めて二三服吸ひながら、「澤井は屹度杉田に金を借りに行くんだらう、自分も杉田を賴みにしてるんだが、彼奴に先鞭を着けられちや駄目かも知れん」と、忌々しくもあり、心細くもなつた。

火鉢の側には膳と飯櫃が並んでゐたが、彼れは不味さうな皿の煮豆を見たばかりで箸を執らうともせず、煙草が盡きると共に立上つて、模樣入の奇麗な石鹼箱と二筋の手拭を持つて、風呂へ出掛けた。

濁氣のない湯の中に、肉付のよい白い身體を浸して、前の大鏡に自分の顏の映るのを、暫く眺めてゐた。澤井のやうに角張つた澁黑い顏ではない。目に愛嬌がある。眉が濃い。齒並が揃つてゐる。如何にも若々しい顏付だ。そして彼れはその滑かな柔かい頰を撫でては、云ひ知らぬ樂みを覺えてゐた。限なき希望が自から湧き上る。自分の將來には美しい路が開かれてゐるのだ。自分は臆氣なく、幾多の美しい女に戀を求める資格がある。この紅の唇が一たび動けば、如何なる女でも容易く悅し涙を我が膝に濺ぐに違ひない。經驗は既に戀の容易さを自分に敎へてゐるではないか。

と、彼れはとよ子との馴合ひの初めを思ひ出した。一夜守屋の家で馬鹿話に耽つた時、ソツと後から女の手を握ると、女は澄した顔で握り返した。只それだけの手順であつた。でもあの時は胸がドキ〳〵したが、今は確信して握られるのだ。

と彼れは握るべき美しい手を、心で捜してゐたが、その間にも、絶えずとよ子の顔が目先にチラついて離れぬので、彼は不快な壓迫を感じた。

鏡に映つれる彼れの顔はホンノリと紅味を帶びて、いよ〳〵美しけれど、心に映つれるとよ子の顔はます〳〵醜くなる。彼れはあんな女に何時までも係合つてる愚さを染々と感じた。自分で自分の身體を侮辱してゐるやうに感じた。

彼れは舞上る湯氣に包まれて、獨り樣々の思ひに耽つてゐた。

（四）

一時間も立つて訓一は湯屋を出たが、戸外は今日も温い。斑の淡い雲にも春めいた色が見える。彼れは大學前の通をブラ〳〵歩きながら、左右に行違ふ雜多の人の中から、美しい若い姿を撰り分けては喜んでゐた。曲り角の新しい洋品店には、帽子や手袋や肱掛などを、樣々の色で人の目を惹いてゐる。彼れはこんな物を見るのも好きであつて、飾窓の側に立留まつて、欲しさうな目を向けた。

宿へ歸つて髮を整えて後、晝飯を食べたが、午後の半日はまだ白紙として、彼の前に開かれてゐる。樂しく色取りたい。樂しく送りたい。明日から又一週間、單調な勤めをせねばならぬのであれば、今日

半日は何にも替えがたく惜き心地がする。と云つて千駄木へは斷じて行かぬ。新しい悦樂、新しい幸福……

そして彼れは兎に角同郷の先輩の杉田を訪ねることに決した。行くと、今澤井が歸つた所だと云ふ。

「幾ら金持でも澤井に金を貸した上に、又おれに借して呉れまい。又彼れに貸さぬほどなら、おれには尙更貸しては呉れまい」と、竊かに覺悟して、只世間話をしてゐたが、杉田はお茶の代りに麥酒を出して、機嫌よく訓一の此頃の模樣を聞いた後に、

「君はよく千駄木へ行くさうだね」と、突如に急所を突いた。

訓一は少し極の惡く、伏目になつて、「澤井が何か曉舌りましたか」

「いやその事は以前から聞いてるんだがね、まあ若い間はいゝさ、どうせ君のやうな好男子を野放しにしてちや、無事に濟みやしない」と、杉田は笑つたが、やがて改まつた調子で、

「しかしあの女はあまり性質がよくないさうだ。誰れに聞いてもさう云つてる。君もそんな女は早く見限つちやどうてす。私が一ついゝ妻君を周旋しやう」

「此頃は全く行きやしないんてす」

「どうだかね」と、杉田は笑つてゐる。

「いや斷じて行かんのてす、私だつて抱負のある身てすから、何時までもあんな女に引かゝつてやしません」と、訓一は稍激した聲て云つた。そして澤井や杉田は戀もし戀もされた經驗がないから、一度女

に係合つたら、容易にその女を思切れぬものと、愚な世人の定めた戀の法則をそのまゝに信じてゐるのだが、自分はそんな型通りに行く人間ではないと、心で思つた。

「それなら至極結構だ、君もこれから大に立身するんだから、成べく障害物は避けた方がいゝ、そしてその女とは全く縁が切れたのかね、女の方でも承知したんだね」と、尚不安に思つてるらしい。

「無論です」と、訓一はハツキリ答えて、「しかし私も別れるについちや、幾らか金をやつときたいんですが……それでないとあまり冷酷なやうですからね、それに女も困つてるんですから」と、ソツと相手の顔を見た。

「それは尤もだ、何なら私がその女の家へ行つて話をつけてもいゝ」

「それぢや却つて恐縮します」と、慌てゝ留めて、「實は今日は月末だから、幾らか送つてやつて、それを最後にしたいんですが」と云ひたして、内兜を見透かされりやしないかと恐れる、けれど、相手は左程氣を廻してもゐない。快く同意して、平生のやうに無駄な文句も云はずに、兎に角十圓の金を貸して與れた。そして

「君の身の固まるやうに、適當な妻君の世話をしたい、故郷のお母さんからも、度々手紙で私に頼んで來るんだから、是非さうしたい。所で丁度今私の知つた女で、似合ひさうなのがあるんだ。近日引合すから、來て見玉へ、私の見立てた所ぢや、性質も育ちも申し分ない筈だが」と、熱心に縁談を成就させたい口振であつた。

訓一は「宜しく賴む」と云つて、一刻も急いで暇を告げた。

彼れは戸外へ出て、「杉田さんも善人だ」と思つた。自分はまだ結婚するのは早い。二十六やそこらで家庭の繋累をつくるのは惜しい。殊にある人の取持て、一人の女を授かるのは不甲斐ないことだ。自分はまだ自由な戀を味ひたい。わが唇の朽ちるまで味ひつくして後にこそ、杉田翁の命をも聞かうと思つた。しかしその相應はしい女とはどんな女だらうと、會つて見たくもある。その日の待設けられぬてもない。

（五）

彼れは十圓を懷にして、行くべき筈の千駄木へも行かず、下宿へも歸らず、切通の坂を下つた。何時の間にか日差しが冷たくなつて、寒い風が正面に吹きつける。彼れは爪先に力を入れて、グン〳〵道を急いで、小さい料理屋へ入つた。まだ日は高くて、外に客もなさゝうて靜かだ。柱や疊の汚れ目も目につく。しかし彼れは何となくいゝ氣持がする。自分の食べたいものを矢鱈に注文し、酒も麥酒も埃及煙草をも命じた。

て、誂物の來る間、部屋の中を見廻したり、中棧の硝子越しに戸外を見ながら、去年の暮に友人に誘はれて、初めて此所へ來た時を思つてゐた。――二三人の藝者や雛妓を呼んで、自分等には例のない豪奢を極めたことや、友人が大酒家だから、自分も矢鱈に飮まされて、唄も唄つたし駄洒落も云つたことや、藝者の中で確か小つなとか云つた若い女が仇つぽくて、わが好みに叶つたことや、向うても自分に

親切振を見せたことや――あの時の有樣が目に浮んで、何だか悅い故郷へ來たやうに思はれる。

さう思つてると、ふと金が欲しくなつた。彼れは月々の拂ひに困つてゐても、平生は稍もすれば金の必要を忘れて、時々刻々の夢に沈醉してゐるのだが、偶に差迫つての金の必要を感ずると、さながら寒い風に腸を吹き抉られたやうな氣がする。自分に對し嫌惡の念が起る。

下宿料の停滯は苦にもならぬが、自分の幸福が僅かな金に遮られてゐると思ふと、焦躁くもあり、世界が狹くもなる。

かの友人が「小つなは高いよ、料理屋へ呼ぶだけでも、運が惡いと滅多に見られないんだ」と、勿體つけて云つたが、自分に少しの金さへあれば、小つなだつて新橋一の藝者だつて、さう恐れるには當らない。自分は女に嫌はれる人間ぢやないもの。――

かう思ひながら、彼れは鰐口を出して、見るともなく見てゐた。十圓紙幣に一圓が三枚、五十錢の銀貨が二つ、後は白銅と銅貨と、目で讀んでゐると、女中が襖を開けて膳を捧げて來た。彼れは慌てゝ蟇口を隱して居住いを直したが、もしや今の樣を見られて、卑しい男と思はれはせぬかと極りが惡かつた。

それてテレ隱しに二三杯一息に飮んで、

「藝者でも呼ばうか」と、元氣よく云つた。

「お馴染は」と、女中は蕎麥滓の多い黃い顏を上げて聞いた。

訓一は醜いなと思つたが、強いて愛嬌を浮べ、わざと柔しい聲で「姉さんに任せるから、誰れか面白

さうなのを呼んでお呉れ」

「てすけど、同じ事なら、お馴染の方がいゝてせう」

「僕は藝者をよく知らんもの」と、一寸考へた風をして、「此地に小つなとか云ふ藝者が居るかね」

「小つなさんを御存じて……あの妓はどうてすかねえ、」

「止めたのかね」

「湯治か何かに行つたんてせう」

「お客に連いて？」

「えゝ」と、女中は氣のない返事をして、「ぢや、兎に角掛けて見て、居ませんてしたら、誰れか外の若い奇麗なのを呼ぶてとに致しませう」と、座を立つた。

訓一は手酌て又二杯三杯と煽りながら、埃及煙草を吸ひ、その香しい烟ケ眺めてゐた。柔かい座蒲團の座心地がよい。空腹に温い酒のよく廻つて、艶々した顏が紅に染つた。そして再び女中が座に侍るまてに、一本の銚子が徒らに飲盡された。彼れは放縱な樂みの限りを追ひ求めたくてならぬ。身體の亡びるまても世の幸福を味ひつくしたくてならぬ。世界に滿ちて溢れてゐる悅樂が、四方から自分を誘つてゐる。

て、彼れは嬉しいやうな、そして何となく物に飽足らぬやうな氣がしてゐた。

女中の酌て新な銚子から、更に一二杯を飲みながら、「小つなは二三日て歸るんかね」と、話の問題と

した。

「どうてすかね、あの妓はもう出ないつて噂ですよ」

「落籍されるんか」

「多分そんなこつてせうよ、何しろ△△さんといふ伯爵とかの華族さんが付いてんるんてすからね、去年の暮にも貴下二千圓の指環を買つて貰つたんてすつて」と女中はどうだ驚いたらうと云はぬばかりの口振てあつた。

訓一は二千圓に驚きもしなかつたが、只美人を連れて湯治に行つたといふ事が羨ましく、自分の慾望を他人が先立つて奪つたやうな氣がした。そして女中の醜い顔の次第に堪へがたくなつて、

「遅いね、もう來さうなものだが」と、さも待遠しさうに云つた。

やがて電燈がついて座敷は華やかになつた。障子は夕闇の色を帯びて、戸外を通る下駄や車の音にも風趣が添うて來た。左右の座敷にも客の氣色がして、廊下には忙しい女中の足音がしてゐるが、それ等が皆彼れの心に適つて愉快だ。て、足音の一つが座敷の前に止まつて、黄い襖が開いて、白い丸顔が現はれた時は、彼れは目も心もチラ〱して、半ば夢でも見てるやうてあつた。

彼れは又五杯六杯と、女の注ぐまゝに呑んで、「お前が辰代さんと云ふんか、奇麗だな、惚れた。僕は惚れた」と云つてゐたが、突然にムッツリ肥つた白い手を引寄せ、自分の熱い頬に押當てゝ、「どうだ溫泉へ連れてつてゝやらうか。汽車に乗つて箱根か何處かへ行かうか、今夜これからでも行かう」と云ふ。

「えゝ、連れてつて頂戴な」と、女は邪氣なく笑ひながら、酒臭い息を避けて顔を背けた。

「よし行かう。是非行く」と、訓一は夢中で繰返し〳〵云つてゐたが、やがて女の手持無沙汰に細く唄ひ出した唄を聞きながら眠に入つた。一時間の後、彼れは呼醒されて、車に抱乗せられたが、只夢中で「千駄木へ引いて行け」と叫んでゐた。

（六）

彼れは翌朝早く目を醒まして不快に感じた。自分は又してもとよ子の宿へ來てゐるのである。廣い世間に外に留るべき宿もなく、愛すべき女もないかの如く、又してもこの醜い女の汚い宿へ來てゐるのである。

疲れた頭を振りながら彼れは飛起きた。神田の區役所へ出勤の時間も迫つたし、一刻も早く此家を出やうと思つて、寒さうに震えながら身仕度をしてゐたが、とよ子の姿が見えぬ。昨夜は確に居たに違ひない、幾何かの金も渡したと覺えてゐるのにと怪しんで、襖越しに宿の女房さんに聲を掛け、

「とよちやんは外へ出ましたの」と問ふと、

「久我さんはね昨夕遲く」と、大きな聲をしながら、襖を開けて、「貴下がお休みになると間もなく、守屋さんからお使ひがあつて、直ぐに車でお出掛けになつたのですよ、もう十時餘程過ぎてしたらうよ」

「さうですか、守屋が何の用事で呼んだのだらう」と云つて、訓一は心で、とよ子はまだ守屋に意地められるんだらうかと怪んだ。そして以後斷じて此家へは來んのだから、最後の話をとよ子にして置きた

かつたと遺憾に思つて、
「お神さん、私はもう滅多に遊びに來ませんよ、これがお別れかも知れん」と、神さんを通じて外なから言置くやうに云つた。
「巽さんのことだから當になるもんですか」と、神さんは浮いた調子て云ふ。
「いや本當だ、今がお互ひのために別れ時たから」と、眞面目て云ふと、
「そりやさうてさあね、貴下もこれからうんと稼いて、御出世なさらなくちやね」と、神さんは意外に親切らしい口振て、「私なんかが入らんお世話のやうてすけど、始終さう思つてたんてすわ、久我さんと御一緒におなんなさるにしても、も一二年お待ちなすつて、立派に家をお持ちなさる方が、貴下方のおためてすからね」
「その通りてすね」と、訓一は笑ひながら空々しい返事をして障子を開けると、豆腐屋の神さんが慌てゝ椽側を離れた。今まで立聞してゐたらしい。そして訓一が路次を出ると、後から追駈けて來て、
「貴下、お神さんの云ふことを眞に受けてちや、飛んだ目に遇ひますよ、いけない人なんだから」と、此方から聞けば、何か云ひたさうてあつたか、訓一は只、
「もう彼家へは行かんのだから、どうだつていゝさ」と、相手にしないて歸つた。
四五日は何するともなく過ぎた。寒氣は再び激しくなつた。彼れは晝間は役所て單調な仕事を勤め、夜は火鉢を友に茫然として、只溫かい春の來るのを待つてゐた。

所が次の日曜に、杉田から「今日午後來訪あれ」といふ端書が來た。多分はあの事だらうと思ひ、早飯後床屋へ行つて髯を剃つて來て、帽子の埃を拂ひ、衣服は平生着のまゝだが、足袋は買立ての白いのを穿き、いざ出掛けやうとしてゐると、下女が、

「巽さん、お客樣、女の方ですよ」と知らせた。よよ子ぢやなからうか。惡い時に來たと、立たなり待つてゐると、思ひがけなく守屋が入つて來た。澤井の云つてたほど淺間しい姿はしてゐないで、女らしい吾妻コートを着てゐる。髮も亂れてゐない。だが反齒で色が黒く、女俠客氣取の言葉や態度が荒々しい。

「今出掛ける所かね、大變裝粧こんで何處へ行くの、巽さんは次第に男振がよくなるから方々て女の子に惚れられて困るだらう」と、座らぬ前から高聲で云ふ。

訓一は周圍に氣兼ねして、苦笑ひして、「馬鹿云つちやいかんよ。僕はこれから急用で出て行くんだ」と、帽子を側へ置いて浮腰で座つた。

「久振だから、少しは遊んでゝもいゝだらう。貴郎は些とも私の家へ來ないね。現金な人だよ」

「だつて居場所さへ分らんのだもの」

「千駄木の奥さんに聞きや分らあね、」

「此頃は行かないよ」

「譃をお吐きなさんなよ、其處は商賣柄ちやんと手帖についてるんだもの。」

「だつて貴女の秘密取調はあまり繁盛せんちうぢやないか」
「だから商賣換をしようと思つてるんさ、情婦の取持でも始めちやお金にならんもんかね」
訓一はこの女が此迄に、初心な男と女とを喰付けて置いて、その弱點に付込んで、金を借りたり、品物を捲上げたりしたことをよく知つてゐる。中には裸にされたものもある。とよ子とて衣服の大半はこの女の質草にされたのである。て、忌々しく思つて、
「貴女の商賣にはそれが丁度いゝだらう」と云ふと、
「だけど、貴郎だけは無錢で世話をして上げようよ、可愛さうだから。‥‥貴郎も早くとよちやんなんか思ひ切つて、もつと貴郎に似合つたやうな奇麗なのを見付けなさいな。彼女は猫を被つてるけど、本當は惡い奴なんだよ。貴郎は知るまい。此頃の久我とよ子の秘密を。敎へて上ようか」
「僕は別に知る必要はない、もう關係はないんだから」
「何もさう恐れなくてもいゝさ。私も貴郎にや商賣氣を離れて附合てるんだから、お金を取らうとは云やあしないよ」と心持聲を潜めて「あの子にはいゝ旦那が出來たらしいよ。何でも四十過ぎの老爺さんて、お神さんもあるんださうだよ」
「さうかね、それもいゝさ」と、訓一は冷かに云つて、とよ子だつて多少敎育もある女だから、まさか金づくで妾にもなりやすまいと思つてゐた。
「譃と思ふの、おや今に分るから見てゝ御覽なさい。あの子だつて貴郎に喰付いてちやお金にならんか

らね、」

「そりや初めから定つてらあ」と、訓一は卒氣なく云つて、つい思ひ出したやうに、「先日の晩貴女は久我を呼んだらう。夜遅く」

「何時。私はもう一月もあの子に遇はないんだわ。此方から來て呉れと云つたつて、文句を云つて、中々來りやしない」

「そんな筈はないが」と、訓一は怪しんだ。そして心が落着かなくなつて、頻にとよ子の内幕を聞いて見たが、守屋も詳いことは知らなかつた。

「氣になるの」と、守屋は冷して、もう出掛るんだらう、おや今日はこれで堪忍して歸つて上げようね、家が分つたから、此から度々來るんだから」と、弟にでも云ふやうに云つて、少しも無心がましい事は云はないで歸つた。

訓一は胸に雲の掛つたやうな氣がしたが、兎に角、杉田の家へ急いだ。

「やあ來たか〳〵」と、杉田は卷煙草入を持つて、書齋へ導いた。重着をしてハンケチを頸に卷き、脊を丸くして火鉢に寄かゝり、

「寒かつたらう。私は風邪を引いて二三日寢てたんだ。君は何時も達者で仕合せだが、今の中に無暴な事を謹まにやいかんよ。酒を呑んだり、夜深しをしてると、歳を取つて乾度身體が弱るからね」と、袂からハンケチを出して鼻をかんだ。

訓一は埃を氣にして、風に磨かれて紅くなつた顔をハンケチで拭ひてゐたが、杉田が直ぐ側で頻りに鼻をかむのを見るも不快に感じて顔を背けた。何處からか、雲雀のやうな聲が聞える。

「あれは何でせう、お宅で何か小鳥を飼て被在るんですか、」

「いや何も飼つてやしない、何故だい」

「ぢや隣か知らん。いゝ聲だ」と、耳を傾むけて、「あゝ金絲雀だらう」と、心がその方へ引かれて行く。

「先日の話の女が來る筈だから、君を呼んだのだよ。極く柔順な女で育ちもいゝし容貌だつて、惡い方ぢやない。歳は確か二十だつたらう。まあよく見て君の氣に入つたら、私が受合つて成立たせる」と杉田は云つて、訓一の顔を見たが、訓一が何とも答へぬので、「尤も定つたからつて、今直ぐ結婚しなくてもいゝ。君がもつと收入の多い職に有ついてからでもいゝのさ。私も始終心掛けてるんだが、君のやうな才氣のある青年にはいくらも氣の利いた仕事がありさうなものだ。もつと有望は地位が得られるに違ひない」と、獨りで合點してゐた。

「是非お願ひ申します、私も今の仕事ぢや發展する望がありません」と、訓一は俄に熱心に云つた。

金絲雀の聲が聞えなくなつた。風は尙激しくなつた。

て、一時間ばかり話してると、杉田の子供が駈けて食事を知らせに來た。訓一はその子の冷たい手を握つて薄暗い部屋を通つて茶の間へ行つた。襖を開けると、顔を持上た三人の女が一度に目に入つた。妻君の外は知らぬ女で、二人とも同じ年輩であつたが、訓一の目は瞬く間に撰擇を施して、妻君の手傳

ひをしてる女を取つた。

「巽さん、何にも御馳走はないんですよ」と、妻君はその女の皿に盛つた五目鮨を食卓へのせた。今一人の女は行儀よく火鉢の側に座つてゐたが、小柄で顔立は人形のやうである。名はお絹と云ふらしい。

杉田はお絹に向つて頻りに話を爲向けてゐたが、訓一はそれには氣をつけず、他の女の方へチラ〱と目を運ばせてゐた。自分の家のもののやうに、妻君も遠慮なく使ひ立ててゐる。肉付がよくて眉が濃く、黒瞳の圍周は蒼ずんで、脣は生々と紅く、美人形ではないが、陽氣な顏だ。「秋ちやん」と呼ばれてゐる。

訓一は杉田が自分に見せる女はお絹であらうと察したが、その方を取る氣はしなかつた。て、食事の間にも妻君と秋ちやんとの話に耳を傾むけてゐた。その女の言葉には折々關西らしい田舍訛が交つてゐる。どんな女か話の中に聞分けやうと思つたが、食事が濟むと、杉田が促すので、書齋へ戻つた。

「どうだ、奇麗な女だらう」と、杉田は訓一が直ぐにも諾と云ふだらうと思つてゐた。

「え丶」と、訓一は氣のない返事をして、「女の方よりや、自分で結婚と云ふことを考へて見なけりやなりませんから」と、即座の返事を斷はつた。

杉田はお絹の人となりや家庭の事を管々しく說いて、「彼家には金がある」と、持參金でもありさうな事まで仄めかしてゐたが、訓一はよくも耳に留めず、自分の空想に耽つてゐた。

（七）

その翌日彼れは役所の歸りに澤井の宿へ寄つて、それとなくお秋について聞いたが、澤井もよくは知らぬ。只妻君の姪が東京に來てるとか云つてたから、それぢやないかと云つて、

「美人かね」と問ふ。

「うん、妻君とはちつとも似てゐないがね」と訓一は怪しみながら、若しも姪だつたら、近よられる機會もあるんだがと望んだ。

彼れは暫らくとよ子の宿へ足を向けなかつた。守屋の話も多少氣に掛るけれど、今直ぐ訪ねて行くのは、とよ子や宿の神さんに對して氣恥かしいし、それよりも自分に對して不甲斐ないので、ヂッと辛抱してゐた。

だが、一日二日と辛抱がしつらくなる。身體がイラ／＼する。點燈頃になると心が落付かない。小說を讀んだり、又は自分の身にやがて現はれる筈の美しい夢を描いて見ても、寛やかにそれを樂まれなくなつた。電車に乘つても道を歩いても、女の姿が見別もなく目につく。

或晩も暖かい穩かな戶外を散步して、物足らなさゝうにスゴ／＼宿へ歸ると、下女がランプを點けに來た。「巽さんは感心にこの頃ちつとも他所へ宿らなくなつたのね」と云ひながら、マッチを擦つて手に持つた下女の顏が薄暗い部屋の內にホンノリと浮ぶ。

「さうさ、家にこんな別嬪が待つてるんだから」と、訓一は云つて、下女の首筋をグッと引寄せて唇を鳴らした。

下女はマッチが手を焦がしさうになつたので、疊へ落し、「ひどい人だ」と小聲で云つた。そして再びマッチを擦つて、目で睨み口で笑つて訓一を見た時には、彼れは知らん顔して煙草を吸つてゐる。

散歩の次手に幾度か千駄木へ行きかけては思留まつて引返したが、或晩は壓へがたき慾望に强ひられて、ついその路次へ入つた。すると折惡しく、向うから女主人が來て、いきなり「久我さんはお留守ですよ」と云つて、さも道を防ぐやうな樣子である。訓一は癪に觸つたが、仕方なしに引返した。そして疑惑の念と不快の思ひに胸がダモ／＼したが、そのまゝ宿へ歸る氣になれぬので、その足で直ぐに竹早町へ向つた。

杉田は風邪がぶり返したといつて、來客は斷り、書齋で行火に寢ながら、古書を讀んでゐたが、訓一をば喜こんで迎へて、「どうだ、考へたかね」と云ふ。

「えゝ、自分では分らんから、貴下にお任せしやうと思ひます、しかし今は約束だけにしといて、結婚は少くも一年間延ばして頂きたいんですが」と、訓一はその時の間に合はせに云つた。

「むん、それはいゝさ。兎も角私に任して呉れゝば早速話をつけよう」と、杉田は訓一の承諾を喜んだ。そして妻君をも呼んで、二人で面白さうに緣談に因んだ話を爲始めた。訓一は自分が申込めば、相手の女だつて、女の兩親だつて否と云ふ氣遣ひはないと、妻君が煽てるやうに云ふのを聞いて、愉快に思つた。

「さう定まればお絹さんも仕合せだ」と妻君は結末をつけて後、「お秋の方も早く定まるといゝんだが」

と、獨言のやうに云ふ。

「なに、あれも多分甘く纏まるだらう」と、杉田は相槌を打つて、「秋はもう歸つたかね」

「いゝえ、まだ歸りませんのよ、此頃はお絹さんと仲善しになつて、遊びに行くと、何時も長くなつて仕樣がない」

「まだ友達がないから、彼家ばかりへ行きたがるんだ。家にゐるよりや面白いんだらう、」

「ですけど、あゝ開け過ぎた家へ度々行くのもよかないと思ひますわ」

「ちつとは開け過ぎてもいゝぢやないか今時の女は、お前のやうに昔風ぢや承知しないよ」

「だつてあの家のやうぢや」と、妻君はお絹の家庭の惡口を云ひかけたが、訓一が側にゐるのに氣付いて話を外した。訓一はこの妻君の頑固て、顏にも女らしい柔味のないのを嫌つてゐたが、この時も何か夫に向つて剛情を張りさうな摸樣が見えたので、溜らなく厭氣がさして、暇を告げて家を出た。

面白くもない家へ折角訪問して、お秋の姿も見られなかつたのを悔ひたが、若しもその女の歸るのに出くはしはせぬかと、ユル〳〵道を歩いて、左右に注意してゐた。薄寒い月の光の中にお秋らしい女は幾人も影を見せた。

（八）

二月は末になつた。梅も咲き出した。三月一日は訓一の誕生日であつて、彼れは毎年この日になると、一種の新なる喜悅を感ずる。自分のこの世に生れたことが悅しい。健やかな身體、美しい姿を持つて生

れ出たことが更に悅しい。自分の產聲を上げたのは寅の刻、春の夜の明け方であつたと、祖母が云つてゐたが、その時刻までも悅しい。

て、如何にして今年の誕生日を祝さうかと、彼れはその前夜に考がへた。去年の秋、まだとよ子との情愛が衰へず、將來を語り合つてた時は、次の誕生日には何か趣向を凝らした贈物をされる筈であつたが、それはもう當にならぬことになつてしまつた。澤井の外には常に往來する懇意な友人もなく、杉田の外には知つた家庭もなければ、自分のために祝杯を上げて呉れさうな人は、廣い東京に一人もない。そして自分の前途を祝するには、白い手で捧げられた祝杯でなくては駄目だ。と、彼れは暫らく思ひをめぐらせてゐた。そしてその夜は二三枚美人の繪端書を買つて來て、誕生記念として、故鄕の妹に送つた。翌日は空が澄んで風もなかつた。氣の所爲か、昨日とは打つて變つて急に春らしい。彼れは四時に漸く勤務が終ると、衣紋をつくろひ、華々しい顏をして區役所の門を出て、竹早町へ向つた。

玄關の書生に聞くと、杉田は急用で一昨日から京都へ行つてるさうだ。直接あの厭な妻君に會ふのも困ると躊躇して、書生部屋へ上つて煙草を吸つてゐた。そして、この書生から家の事を聞かうと思ひついて、親切さうに話を仕掛けてゐると、奥から妻君が自分で呼びに來た。珍しいことだと思つて隨いて行くと、座敷へ通して、

「巽さんお奢なさいよ」と、いきなり打解けた聲をかける。顏も平常に似ず微笑ついてゐるが、それが又訓一の目には嫌らしく映つた。

「今日が僕の誕生日だからですか」と、彼れはわざと澄した顔をして云ふ。

「おや、貴下の誕生日！ おや、何奢らなくちやなりませんよ、お絹さんの方も大略纏まりさうなんだし」

「さうですか、ぢや何でも奢りませう」と云つて、訓一は心の中で、「このお婆さんと今年の誕生日を祝するのか」と、可笑しく思つた。

て、差向ひて、お絹さんの噂や、主人の旅立の話をして興がつてゐると、お秋が氣を利かして菓子皿まで持つて來た。そして妻君の後に座つて、面白さうに二人の話を聞いてゐた。訓一は二人に満遍なく媚を含んだ目を送つて、調子づいて話出した。彼れは或時とよ子に、「貴郎は片目を心持細くして片つぼの頰て笑ふと、溜らなく愛くるしくなるわ」と云はれてから、女と差向いの時には、屹度この表情をするのが癖になつてゐる。

「貴女のお國は矢張奥さんと同じところですか」と、暫らくして、彼れはその愛くるしい表情をして、お秋に言葉を掛けた。

「え丶、此女の家も讃岐だけど、所は大分離れてるの、善通寺の側なんですよ」と、妻君が答へた。

「善通寺なら私もよく知つてる、私の遠縁の親類があの近所にありましたから、子供の時分二三度母に連れられて遊びに行きましたが、淋しくつて眺望のあまりよくない所ですね、母が『讃岐て富士とは飯山』だつて、よく唄つて聞かせてたから、どんな山かと思つたら、小ぽけな山ですね。でも、あまり小い

から、直に登れると思つて、誰れにも知らせないで、一人で登つて見たら、思つたよりや高くつて、途中でへこたれて歸つたんです」と、愉快な調子で云つた。

お秋は只默つて口元で笑つてゐた。妻君はお秋には口を利かせぬやうに、自分一人で訓一の話を引受けて、話の途切れる折はない。訓一はこれ迄一度も、かう妻君に打解けて話し込まれたことがないので不思議に感じた。そして妻君の勸めるまゝに、晩餐を呼ばれたが、妻君は主人の書齋から、葡萄酒まで持つて來て飲ませた。

「今日は貴下の誕生日だし、外にお目出度こともあるんだから、幾ら醉つたつていゝんですよ」と、妻君は頻りに置つぎをする。

訓一は甘つたるい葡萄酒の口當りの惡く、氣の利かぬ野暮な妻君だと思ひながらも矢鱈に飲んで、

「私は此家へ伺つてる間だけは家庭にゐるやうな氣がします、矢張故郷の者だと氣持が違うんですね」と懷かしさうに云つて、醉の廻つて弛んだ手で、妻君へもお秋へも、コップを差して、

「僕の祝ひ日だから、飲む眞似でもして下さい」と、邪氣ない聲で云ふ。

「ぢや、ぽつちり」と云つて、妻君は黑ずんだ唇を反らして、二三滴を啜つて、訓一に返したが、訓一はそのコップにかの薄汚い唇の跡があるやうな氣がして、見たばかりで手に執らうとはせず、お秋の拵へた珈琲を飲んで、

「僕はねえ、奥さん、あの緣談はもう中止しやうかと思ふんです、先生があんなに仰在のを斷はつちや

悪いと思つて、うつかり承諾したのですが、今ぢあ後悔してるんです」と、馴々しく云ふと、妻君は、
「何故」と、驚ろいた目付をしたが、やがて「戯言でせう、あれ程熱心に話をつけて、今更厭だと云はれちや、先生がどんなに怒るだらう」と云ふ。
「だつて戀もしない結婚はつまらないからね、僕は結婚は一生しなくても、戀さへしてりやそれでいゝと思ひます。直に話をしたこともない女を、他人のお見立て貰ふのは、馬鹿氣だことですからね。それにあんな感情の冷たさうな女は僕は好まない。萬一あんな女と結婚しなくちやならんとすれば、僕は自分を不幸な男だと思ひます」と、多少芝居がゝつた聲で、感情を籠めて云ふ。
妻君は呆れた風で、「では、その戀した方と結婚なさればいゝぢやありませんか。いくら先生の云ふことだつて、無理に厭な者を壓しつけられなくたつて」
「しかしそれが思ふ通りに行かんです、僕はこれまで二度も三度も戀はかりして、何時も失敗ばかりしました。だから先生の被仰る通りに結婚でも何でもしやうと、失望的に決心したのです」と、訓一は戀物語りを始めた。有ること無いこと。自分の空想に描いたことまで、眞實らしく有り丈の奇麗な言葉で語つて、
「しかしこれは先生には秘密にしといて下さい。」と云ふ。「雲雀のやうに消えた宮島の女」「美くしい聲に引かれて、袖垣の側へ行つて覗いて見ると、女の姿は消えて、大きな白い椿の花が庭に落ちてゐた」ことなど、興に乗つて話してゐる間、自分自身にも夢みるやうに快くなつた。厭な妻君の顔もさう厭らしく見えなくなつた。妻君を憚るやうに碌に口も利かず、光の陰に座つてゐるお秋も、時々身體を崩して

は笑つてゐる。

訓一は例になく長居をした。幾度か立ちかけては又座つてゐたが、やがて意を決して歸り仕度をしながら、「先生がゐたら、僕はお願ひがあつたんだが……友人から取る筈の金が取れなくて困つてしまう」と、獨言のやうに云つた。

「貴下は一人でゐて、何にそんなにお金が入るの」と、妻君は問ふて訓一が答へぬので、「ちつと位は私が都合して上げてもいゝのよ」と、獨合點して奥の間へ行つた。訓一は再び腰を卸して、お秋に向つて、「近に私の家へ遊びに來ませんか、故郷の話でもしませう」と、わざと四圍を憚るやうな素振をして小聲で云つて、素早く注置きのコップを椀にうつして、呑みたさうにした。そしてお秋が氣付いて、葡萄酒の殘りをつぐと、一滴も殘さず一息に呑干した。

「巽さん」と、妻君が次の間で呼ぶので、帽子を持つて、胸苦しい息を吐きながら、其處へ行くと、妻君は薄暗い中で、冷い手で幾らかの紙幣を訓一に手渡して、「秘密よ」と小聲で云つた。訓一の酒臭い息は正面に妻君の顔を打つた。

彼れはその一夜を遊廓で送つた。

（九）

翌日は役所を休んで、飽きるまで晝寝をして、夕方にやうやく目を醒した。風呂へ入つて後、怠んだ身體を横にし、新聞を拾ひ讀みしてゐたが、葡萄酒を矢鱈飲みした報か、頭腦に力がなく、新聞を讀む

にも懶くて、頻りに欠伸が出る。彼れは外に一晩を潰す手段もないので、澤井を誘うて寄席へでも行かうかと、その宿へ行つて見ると、澤井は火の消えた火鉢の側に外套を脊へ掛けたまゝ座つて、鉛筆を甜めては考へ込んでゐる。黒い頰を窪ませてニツと笑ひ、

「どうも原稿が捗らんで困るよ」と、重苦しさうに向直つた。

「まあ緩くりやり玉へ」と、訓一は机の上やその周圍に並べてる手帳新聞雜誌參考書などを見て、澤井が年中この中にモゾ／＼してるのを憐憫に思つて、「寄席へ行かんか」と、立たまゝ見下して云つた。

「僕は先月中にこれだけしか草稿が出來んのだからねえ」と、澤井は二本の指で鉛筆書きの原稿紙を持上げたが、やがて「ぢや行かうかね」と、座つたまゝ外套に手を通して、手帳を懷に入れて、戸外へ出た。埃風の中を俯首いてスタ／＼歩きながら、

「君の緣談は纏まりかけたさうだね。どうして女房に食はせるんだい」

「僕は食はすために結婚するんぢない」

「無暴だからな君は。僕はあの婦人史さへ纏まつたら、家が持てるんだが、まだ容易に完結しさうてない」

「そんな樂みがありや、仕事に張合ひがあつていゝぢやないか」

「さうさ、僕には計劃さへ間違ひなく行きや不平はないんだがね、只あまり長引くと向うで僕を信用しなくなりやしないかと思つて、それだけ氣になつてるんだ」と、澤井は眞面目て云つた。

「女の方でも早く來たがつてるだらう」と、訓一は笑つた。そして澤井が一人の妻君を待設けて齷齪してるのを不憫がり、自分の艶福を思ひ浮べて、身體のむづ痒いやうな喜悦を覺えた。

「なに、女は僕を信用してるさ。只兩親が沒曉漢だから」と、澤井はふと考へ込んだ。

「女さへ惚れとりやいゝぢやないか。」と、訓一は何時か澤井の宿で見せつけられたその女の寫眞を覺束なく思ひ出して、「信用してるつて、時々その女に遇うんかい」

「うん、偶に來るよ、秘密だけど。婦人史もあの女の助言が大分參考になつた」と、澤井は得意の色をする。

「何時か僕に會はして呉れんか。結婚前だつていゝだらう。僕なら。君の妻君になる人なら、早く見たいものね」

「そりや會はせたつていゝさ」と、澤井は見せたいやうな素振であつた。

訓一は一種の好奇心が動いた。寫眞ではよく分らなかつたが、澤井を見込んだ程の女なら、さう美しくはあるまい。いくら澤井が自分の趣味に適つたと自慢しても、女に掛けてこの男の目が役に立つものか。が、しかし、どんな拍子外れて、この男が美くしい女に打付からぬとも云へぬと思ふと、何となく心が安らかでなくなる。で、兎に角、會へるやうに堅く約束させた。

二人は場末の寄席へ入つた。まだ時間が早いので、聽衆は疎に散ばつてゐる。二階の正面に座つて、火鉢を間に、二人は番組を見ては評し合つてゐた。三味線の音色や語手のゆら〳〵動かしてる白い顔に、

澤井も訓一も心が浮々した。

「肩衣姿はいゝものだね、一體に日本の女の衣服は地味過ぎるけれど、あんな者を着ると引立つね」と、澤井は見惚れてゐる。

「さうだ」と、訓一は同意して、「僕は女義太夫に會つて見たい、話にも表情が多くて屹度面白いよ」

「いや、僕はさう思はん、あんな不自然な聲を出しつけてる女は、差向ひて話しちや厭氣がするに違ひない、」

「君が理窟詰て云ふやうなものぢやないよ」と、訓一は明るい光の中に浮上がつたる姿から目を離さない。戀を唄ふ若々しい聲が耳元を嬲りに來る。

二三度簾が下りては上つて、切前の「野崎村の段」となつた。聽衆は何時か空席を埋めてゐる。

「僕はこの語物にや多くの興味を感じない、大切の八陣を待つばかりだ」と、澤井は前の手摺に手枕をして、横向きに頭をのせ、わざと聞かなくてもいゝと云ふ風をした。

「面白いぢやないか、僕はこのかすみと云ふ女の顏立が好きだ」と云つて、訓一は澤井の方を流し目に見たが、俄にこの男を誘つて來たのを後悔した。杉田が留守だから、あの妻君もお秋も誘ひさへすれば來るのであつたらうに、惜いことをした。お秋と一緒に野崎を聽たかつたものをと思ふと、側にゐる澤井が邪魔物のやうに見え出した。

て、彼れは向き直つて、澤井を後にした。そして今まで覺えなかつた物足らぬ思ひをしながら、艶つ

ぽい文句を聽いてゐたが、曲の終りに近づいた頃、澤井は不意に彼れの肩を二三度輕く叩いて、「オイ、一寸此方を見ろ」と、事ありげに云ふ。

五月蠅さうに振向くと、澤井は階下の片隅を指差して、「來てるぜ、彼女が」と云ふ。

「何が」と、訓一はその指差す邊を捜して見ると、横顏のとよ子らしい女が、平たい顏の四十前後の男と並んでゐる。髮は丸髷で消炭色の紋付の羽織を着て、後姿の美しいので、「違ふぢやないか」と、信じなかつたが、澤井は

「だつて、今後を向いて、君の顏を見てたぜ」と冷かすやうに云ふ。

「さうか」と、訓一は無頓着な風で、高座ばかり見てゐたが、折々竊むやうに、かの女の方へ目を注ぐ。

やがて幕が下りて、客席が亂れた。かの女も立て便所の方へ行つた。そして訓一はその姿を追うてゐる間、不快の念に堪へなくなつた。最早疑ふ餘地はない。

「とよ子だらう、何時か君に連れられて行つた時や汚かつたが、今夜は馬鹿に奇麗だ」と、澤井が云ふ。

「芝居や寄席て見ると、汚い女もちつとは奇麗に見えらあ」と、訓一は平氣を裝ふたが、心はますく穩かでない。どうせ厭になつた女だと、見まいとしたが、自然に目がその方へ向く。その男の顏が自分を嘲つてるやうに思はれる。そしてとよ子の姿が次第に美くしく見えてならぬ。

澤井は「酷い女だ、淫賣見たいな奴だ」と罵つて、

「君も彼奴と關係を絶つてよかつた」と尤もらしく云つたが、訓一は

──きに、あの男は懇意な故郷の者なんだよ、二三度あの家で會つたことがある」と、さも辯護するやうに云つた。

とよ子は男と私語いてゐる。笑つてゐる。茶を飲んだ。煙草を吸うた。

て、訓一は靜かに座つてゐられなくなつて、ふいと立つて、僕はもう歸らう、君は終まで聽いてゐ玉へ」と、澤井を置去りにして、一人戸外へ出た。

寒い風が身體の縮むほど身に應へる。彼れは直ぐ側の珈琲店へ入つた。椅子に身を投げ掛け、熱い珈琲を匙で抄つては啜つてゐたが、急に思ひついたやうに麥酒を命じた。そして冷たいのを目を潰つて、ガブ呑みにして、代價を手荒く食卓の上に投げ出して戸外へ出た。風は爪先に染み込む。道を歩いてる人間は皆寒さうに萎けた色をしてゐる。

彼れは引返して、寄席の前を通り、スタ／＼千駄木へ向つた。

「ゐますか」と、格子の外で、勢ひのよい聲で呼ぶと、神さんが家内で、

「巽さんですか、暫くですね」と、柔い聲をして、障子を開けて、「久我さんはお留守ですよ、今夜はお歸りにならんかも知れませんよ」と、疑り深い目で見る。

「でも、今夜來て呉れつて云ふ端書が來たんですから、上つて待つてゐませう」と、訓一は庭へ廻つて、とよ子の部屋へ上つた。神さんが不愛相な顏をするのも關はず、マッチを借りて自分で洋燈をつけ、消えかゝつた火に添炭して、緩り胡座を構へた。「今に二人で歸つて來るだらう、歸つたらうんと油を取つてや

らう。丸で淫賣見たいな奴だ」と、イラ〳〵してゐたが、容易に歸りさうでない。

彼れは煙草を吸ひ盡した。吸殻までも拾ひ上げては吸うてゐたが、自分のでない吸殻も火鉢の中に散らばつてるのに氣がつくと、一つ〳〵それを火の中に投げ込んで燃してしまつた。で、彼此一時間も待倦ぐんだが、二人は歸つて來さうでもないので、彼れは氣拔けがした。腹立しいよりも、心淋しくなつた。理由もなく只とよ子に會ひたくて溜らなくなつた。そして「神さんの云ふやうに本當に今夜は歸らんのだらうか」と、疑ひつゝ、部屋の中を歩き出した。部屋の樣子は一月前と違はないが、風琴の側に新しい座蒲團が二枚と新しい鏡臺とが置かれてゐる。この二つが古い疊や汚い道具の間に、際立つて新しい色をしてゐる。鏡臺の抽出を開けると、新しい蒔繪の櫛や、簪しや、髱止めに元結など、彼れには懷しいものが入つてゐる。

彼れは鏡を立てて見たが、やがて不意にその冷い面をキッスした。鏡は熱い息で一面に曇つた。その曇つたのを見詰めてゐると、路次に人音がして、入口の戸が開く。思はず鏡を離れてツッと元の座に復り、耳を澄してゐると、神さんが男の元氣のいゝ言葉を押止めて、三人でヒッ〳〵話し出した。男は舌打ちしてゐたが、やがて路次の方へ歸つてしまつた。

訓一は「態を見ろ」と、勝利を占めたやうに感じながら、待つてゐると、とよ子は羽織シヨールを持つて襖を開けて、「入つしやあーい」と、甘へるやうな聲をして、澄ました顏で入つて來て、「寒いのね」と、火鉢の側へ坐つて手を翳した。見違へるほど垢拔けがして、品のいゝ奧樣らしくなつてゐる。

「買つたかい　老爺さんは」と、訓一は嶮しい目付をして云ふ。

とよ子は直ぐには答へず、唇を反らして、指先で風琴を彈く眞似をしてゐたが、暫くして、

「あの人は判事なの、奥さんは藝者上りだか何だか、そりや下等な人なのよ。」

「人の妻君の事なんかどうでもいゝぢやないか、それよりやお前の方が餘程下等だ、何だつてあんな奴に關係するんだ」

「關係するんて、何を？　あの人は私が困つてるから可愛相だつて、身の定るまでお金を貸してやると云つてるだけだわ」と、空呆けてゐる。

「そんな馬鹿な事があるものか、馬鹿を云つてらあ」と、訓一は少し口元を震はせて吃るやうに云ふた。

それ以上に相手を羞入らすことを云はうと思つたけれど、どうしても云へなかつたのである。

「だつて貴郎はちつとも入つしやらないんだもの、私、相談する人もなくつて困るわ。」

「いくら困るつたつて、あんな奴に附廻るのは馬鹿だよ、」

「馬鹿々々は貴郎の口癖ね、」

「お前が馬鹿な眞似をするからさ、一體こんな家に居るのが惡いんだから、早く何處か風儀のいゝ家へ移るといんだ」と、訓一は低い聲で云つた。

「だから前からさう思つてるんだけど、當分駄目だわ、食料だつて餘程溜つてるんだし。」

「それ位僕が拵へてやらあ、」

「屹度？」—

訓一は自分の邪推か、女の顏に冷笑するらしい色を見たので、「僕にだつて、その位のことは出來るさ。お前の方で確りしてりや、早くからさうするんだつたのに。僕は下宿屋を出て家を持つてもいゝんだ、その方法もちやんと付いてるんだから」と、感激した口振であつた。

とよ子は「さう」と、冷淡に云つて、伏目で默つてゐる。

「僕も先の事を考へて、當分一人で勉強しやうと思つたから、此家へも遠退くやうにしたんだけど、愛情は衰へてりやしないんだ。離れてちや尚勉强も出來んのだもの。僕の今の境遇ぢや一日も愛がなくちやゐられんのだ。沙漠にてもゐるやうに淋しくてならんのだからね。外に懇意な家庭があるんぢやなし、とよちやんの外に氣心を知合つた女があるんぢやなし」と云つてる間、訓一は自分で自分の感情を籠めた言葉に釣込まれて、悲しくなつた。とよ子を失ふのつらさが初めて胸に迫まつて來た。そして「とよちやんだつて、眞面目に音樂を稽古してたこともあつたのに、今になつて、人の妻になるほど墮落しなくつたつていゝぢやないか。いくら困つたつて、外に方法がないんぢやなし」と、親身で忠告をした。

「酷いわ、妾だなんて。いくら私でも……」と、ムッとした顏を上げたが、訓一が涙ぐんでるのを見て、不思議に感じて、默つてしまつた。

「妾でなけりや何だ。そんな洒落た着物を着て、丸髷なんかに結つて」と、訓一は思つたが、それを口に出し得なかつた。

て、暫らくして、「ぢや、僕はもう歸る」と、フイと立掛けたが、女も氣掛りなのか、慌てゝ止めて、「貴郞はまだ疑ぐつてるんだから、このまゝて歸されないわ。得心の行くやうに理由をようく話さなければ」と、誠らしく云ふ。

訓一は强いて歸る勇氣はなかつた。

（十）

彼れは翌日も缺勤するつもりて、遲くまて千駄木にグツ〳〵してゐて、正午前にやうやく宿へ歸ると、机の上に杉田の妻君からの端書が來てゐる。今日はお節句だから、夕方遊びに來いと書いてあつたが、彼れは左程悅しくもなかつた。行く氣もしなかつた。只とよ子の言葉と素振のみが一つ一つ頭に浮ぶ。澤井が曾て云つたやうに、何處か拔けてる女かも知れん。何時も冷淡て、手頼のない境遇が左程苦にする風もなく、守屋には欺かれ、宿の神さんにも誤魔化されてゐるらしい。あんな愚な女に未練を殘してちや、自分は何時までも澤井なんかに馬鹿にされるんだ。それに自分だつて、あんな無神經な女は厭だ。血の湧立つてる女てなくては、自分の戀を捧ぐに足らんと、無理强ひに決心して見た。が、しかし、あの判事からだけは奪つて、彼奴に鼻を空かさゝねば氣が濟まぬ。これから先どんな男に喰付かうと取合やあしないが、判事の奴だけは凹ましてやる。……

と、彼れは夕方まで同じ考へを繰返してゐた。そして夕餐の膳が出ると、雛節句に招ばれたことを思ひ出して、お秋の顏を見て、白酒でも飲んだ方がましだと思つたが、若しや今時分判事が來てやしない

かと、氣に掛つて、竹早町へは行けさうてない。不味い飯を流し込んて、直ぐに千駄木へ行つた。鋭く耳を働かせて、人目を忍ぶやうにコッソリ窓の側へ近よつた。仄暗くなつたのに燈火も付けず、とよ子が風琴を彈いてゐるのが、隔間から見える。

彼れはそれを亂すのが惜くて、暫らく聲をも掛けずに聽惚れてゐた。音につれて心が躍つてゐた。穩かな夕暮の薄明は戸外にも消えて、蒼澄だ空には星がキラめき出した。

「とよちやん」と、最後の風琴の音の止むと共に、訓一は呼掛けて、女が窓際へ來ると、

「其邊を散歩しやう。急に話したいことある」と四邊を憚つた小聲て云つた。そして自分が人目を避けて會ひに來た戀人のやうな氣がして、妙に初々しくなつた。

「急なお話?、どうかしたのてすか」と、とよ子は上から見下して、「私、今夜は守屋さんの家へ行く約束をしたのだから、これから出掛けるところなの」と、間延びのした調子て云ふ。

「何故あんな家へ行くんだい」と、訓一は疑ひを起した。

「だつて、用事があれば仕方がないわ。着物も取戻さなくちや馬鹿々々しいから」

「金を遣らなくても取戻せるんかい」

「えゝ」と、とよ子は生返事をして、暗闇の中へ姿を沒して、「ぢや待つてらつしやい。私、直ぐに仕度して出ますから。どうせ電車まて歩いて行くんだから、道々話が出來るわ」

訓一はよそ〳〵しい女の樣子にムッとして、「ぢや一人て何處へても行くがいゝや。僕は歸るよ」と、

窃々しく障子を締めて、路次を出たが、やがてフイと足を止めた。四邊をキヨロ／＼見て、軒燈のない引込んだ門の側に立つて、通りを眺めてゐた。そしてとよ子の姿が現れると、目を凝らして見送つて、五六間行過ぎると、帽子を目深く外套の襟を立てゝ、後をつけた。とよ子は大學前の菓子屋に寄つて、最中を買つて、電車に乘つた。

　訓一は一電車遲らして三田行に乘つた。愛宕町で飛下りると、周圍に目を配りながら、守屋の家へ急いだが、道にとよ子らしい女は見えぬ。若しや自分を欺いたのではないかと、心が動搖めいたが、兎に角その家の側まで行つて、筋向ひの板塀に添うて立つてゐると、間もなくとよ子が直ぐ前を通つた。少しも氣付かぬらしく、格子戸を開けて、柔しく案内を乞ふてゐる。

　訓一は多少心の落着いて、その家の前を行戻りして、耳を傾けてた。守屋の男のやうな聲は折々聞えるが、何を云つてるのか、よくは分らない。て、彼れは二三十分間幾度もこの界隈をウロついては、格子戸の前に歸つて樣子を窺つてゐたが、遂にスゴ／＼電車に乘つた。

　その後二三日、彼れは平穩に暮した。夕餐後の散歩が濟むと、有合せの書物を讀んで、眠くなるのを待つて、早くから寢床に就く。とよ子の事が氣にならぬでもないが、多少の金の工面もしないで、續け樣に行くことの憚かられたのか、兎に角行かうともしないで辛抱してゐた。そしてこれまで經驗したことのない哀れつぽい感じが起つて、自分でその感じに耽つてゐた。自分は宿運拙なき男である。熱烈な戀を抱いてゐながら、相手から相應はしく報いられぬ男である、などと思つてゐた。

（十一）

「あゝ疲れた〳〵。二三日徹夜して大分書いたから」と、次の日曜の朝、澤井が髯の延びた青い顔に微笑を湛えて入つて來た。

「ぢや、もうそろ〳〵家が持てるね……未來の妻君は此頃來るのかね」

「うん、久振で明日來る筈だから、會ひたけりや午后來玉へ」

澤井は婦人史の話をし、古來の歷史に、隱然婦人の及ぼせる勢力の大なることなどを說いて、「さあ、又一奮發だ」と正午前に歸つた。

訓一はこの日の午後、杉田の家へ行く筈であつたが、澤井と入違ひに守屋が來た。平生厭て溜らなかつたこの女をも、この日は待焦れてたやうに喜んで迎へた。守屋は地味な瓦斯織を着て、銀杏返しも弛んでゐたが、座ると、可愛らしい金煙管を出して、口元に品をつくつて煙草を吸つて、

「このいゝお天氣によく家にゐたのね、誰れかを連れて梅見にでも洒落るといゝのに」といふ。

「梅見の計劃なんか、ちやんと出來てるさ」と、訓一は得意で云つて、「情人の取持會社はもう成立したかね」

「あゝもう二三口出來たよ、貴郎も一口株を持つちやいかが」

「それにや及ばないさ」

「うまく云つてるね、新しいのが出來たのかね、」

訓一はさう思はれたさに、只笑つて答へなかつた。そしてとよ子の話を持出す機會を待つてゐたが、守屋の話が甘く其處へ寄つて來ないので、待遠しがつて、突如に、
「四五日前にあの女が貴女の家へ行つたらう、どんな用があつたのかね」
「別に用事もありやしないの、だけどあの女もえらくなつたのね、貴郎ももう手を引かなくちや馬鹿を見るよ。今日はその事を忠告しやうと思つて來たのさ。」
「何故？」と、訓一は平氣を粧ひ得ないて、顏色を變えた。
「何故も何もないさ。久我は貴郎を見限つてるんだもの。先日來た時も、散々愛相づかしを云つて、これからもつと音樂を習つて、行々は音樂の敎師になつて身を立てるつもりだから、貴郎にも付纏はんやうにして貰ひたいつて云つてたのよ。乾度宿の神さんが誰れかと共謀になつて、何かしてるんだけれど、貴郎もこれつ切りにしたら、丁度いゝぢやないかね」
　訓一は俯首いて默つてゐた。
「それがいゝさ。男の意地としても、厭がつてる女の側へ行けりやしないやね。」と、守屋は獨りで呑込んで「私はあの女に、巽さんはもうお前さんなんかに未練はありやしないんだと云つといたんさ」
　訓一は强いて苦笑ひしたが、守屋が何て二人の間に立つて、親切らしい口を利くのか、譯が分らなかつた。それにとよ子がさう酷く自分を厭ふてゐるとも思はれぬ。て、守屋が「私が間に立つたんだからもう、二度と行かないやうにしてお與れよ」と云つて、「行つちやあ承知しない」と云はぬばかりの素

振をして歸つた後て、彼れは帽子をも被らずに千駄木に行つた。無我夢中で額に汗を浮べ、息をはづませながら、障子を開けやうとすると、部屋の中で守屋の聲がしてゐる。吃驚して後へ飛のき、入り得ないて、そのまゝスゴ〳〵引返した。

とよ子よりも宿の神さんよりも、守屋が憎むべき奴かも知れぬ。とよ子が守屋に脅されてその餌になつてるのかも知らぬ。と思ふと、扁弱いとよ子に對する哀憐の情も起つて、今はとよ子を離れては、住むに甲斐なき世となつた。

彼れは思ひ亂れて、その晩は机に凭れて、目を瞑り、浮かぬ色をして、一夜を泣き明かさんばかりてあつたが、間もなく眠氣さして、惡い夢をも見ずに、翌朝下女に呼び起されるまで、スヤ〳〵と寢入つた。

そして翌日は役所の歸りに、今日こそと意氣込んてとよ子の宿へ行つたが、女はその朝俄に轉宅してゐた。神さんに行先を聞いても、只芝の方だらうと云つて、詳くは敎へない。「ぢや屹度守屋の家だ」と彼れは失望しながらも、何時かの機會を待つ氣てゐた。

て、五六日は道を歩いても、若しやとよ子に遇ひはしないかと空頼みをし、宿へ歸へるにもとよ子からの音信の來てはゐないかと心待ちにしてゐた。態々愛宕町邊へ出掛けて、一晩ブラついたこともあつた。そして電車や途中て美しい女に出くはしても、それ等の女ては物足らぬ。醜いと知りつゝも、とよ子には何處か外の女には求められぬ懐しい所かあるやうな氣がする。或日もこんな思ひを抱いて大學前

を歩いてゐると、向うから來た女が摺違ひ様に「オヤ」と聲を掛けた。見ると豆腐屋の神さんだ。青肥の顔が歯が黄く、見るも不快なので、直ぐに別れたかつたが、神さんは馴々しく時候の挨拶をして、

「ぢや、あれから些とも入つしやらんので御座いますか」

「はあ」と、訓一は卒氣なく云つて、行過ぎやうとしたが、神さんは何か話したくて溜らぬ風で、

「貴郎、酷いぢや御座いませんか、あの人達は。私は傍で聞いていても、腹が立つてなりませんのですよ。何だか貴郎がお可愛相で。……本當にさう思ひますよ。あれ程せつせと入しつて親切になすつてたのに、その貴郎を出拔いて、あんな眞似をするなんて」と、如何にも同情したやうに云つて、大道の眞中にゐるにも關はらず、聲を高めて、「どうかして貴下仇をお打ちなさいましな。あんな女はどうかしてうんと意地めてやつた方がよう御座いますよ。貴郎のことだつて、そりや惡體を吐いてるんですからね。あの初めから、貴下は厭だつたんだけど、可愛さうだから、附合つてやつたんだなんて云つるんですもの」と、さも歯痒さうに云ふ。

「さうですか」と、訓一は冷かに云つたきり、ソコ／＼に宿へ逃げて歸つた。

歸つて後も居心地が惡い。青脹れの神さんの云つたやうに、自分は羨まれる男ではなくて、可愛さうな男なのかと思つて、彼れは鏡を出して、暫らく顔を映してゐた。顔に少しの痩せも見えず、その色も前のやうに艶々しいが、豆腐屋の神さんの言葉が生命を削くやうに響く。

（十二）

彼れは氣を紛らす術もなくて悄氣てゐた。初めから厭だつたのを、可愛さうだから附合つてやつたのだといふ言葉が錐のやうに胸を抉つて、恨む勇氣も怒る勇氣もない。可憐な心は只絶望に沈んでゐた。曾て經驗のない侮辱に涙さへ浮べた。彼れは自分の涙ぐんだ面を鏡に映して、ウツトリと眺めてゐた。そして彼れはその夜獨りで部屋に靜座してゐられなくて、夕餐前に戸外へ飛出したが、紙入には手頼になるほどの金切はない。當もなく散歩したが、刻々に腹の空つて、物欲しくて溜らなくなる。洋食店は電氣に耀いて、華かな笑聲もしてゐる。只温い夜を樂んでゐるらしい人が前後に歩いてゐる。

彼れは下宿へ歸つて、粗末な膳に向ふ氣になれぬ。一杯の酒と色めいた言葉とに餓ゑて來た。悲みも喜びもない、物撰みもしない。只刻下の慾望の滿されさへすればよくなつた。そして金もなく知人も少い彼れは、手易く行くべき所もなくて、そゞろに世間が狹く見えた。杉田の家へは、一二度端書で招かれたのに、とよ子の跡を追掛けたりして、つい行そこねたので、何か口實がなくては行難くもあり、廣い東京にも自分の行場所に困つてゐた。

だが、彼れはやがて電車に乘つた。躊躇しながら、愛宕町で下りて、守屋の家へ行つた。あの粗暴な女らしからぬ守屋に會ふのは厭だと思ひながら、知らず〳〵家へ入つた。以前に異らず、家の中が汚れてゐる。胸をドキ〳〵させて茶の間へ入つたが、とよ子はゐさうでもない。守屋は疊の上に腹匍いになつて手紙を書いてゐたが、

「いゝ所だ。一寸書いてお呉れよ」と、卷紙を押付けた。

「早速面倒臭いことを言つかるね」と、訓一は不承不承に禿筆を執つて、「何を書くんだい」
「附艶書しやうと思つて」と、守屋は笑つて、「本當は金の無心なのよ、貴下にや不似合だけど、まあ書いてお呉れよ」と、用向きを話しながら、墨を摺つてゐた。
訓一は女らしい文字で書いてゐた。鐵瓶は湯氣を吹いて、ジン／＼音を立てゝゐる。
「今日は馬鹿に靜かだね、何時もこんなのかね」と、訓一は問ふた。
「どうして、今まではゴタ／＼大騷ぎをやらかしてんさ、」
「今は大勢人が居るんかね」
「いゝえ、さう大勢でもないの。久我も四五日前に外へ移つたのだし」
「おや、あれは此處に居つたのかい、今は何處へ行つたのだらう」と、訓一は書損ねた文字を消しながら、何氣なく問ふた。
「それを聞きたいの。今日は久我に會いたくつて來たんでせう」
「さうぢやないさ、あの女が此處にゐやうとは思はなかつたもの」と、訓一は眞實らしく云つたが、そのために重ねてとよ子の住所を聞く機會を失つた。
「ぢや私を訪ねて來て呉れたの。有難いわね」と、守屋はその氣になつてゐる。
訓一は手紙の文面を讀んで聞かせて、宛名を認め終ると、長火鉢の側へ來た。直ぐ歸るにも歸られず、窮屈さうに座つて、側にある長煙管で煙草を吸つてゐると、一年前にこの茶の間で、とよ子などゝ快活

な話をして笑ひ戯れてゐたことが思ひ浮ぶ。あの時は守屋までが懐しくて、座り込んだら動けなくて、ズル／＼てよく夜更しをしたり宿り込んだりしたものだが……今見ると、継剝の襖や黄い斑點だらけの障子や、箪笥の上にのせかけてある薄汚い襦袢が、厭な臭ひを放つてゐるやうである。――屋根の上では二三匹の猫が相寄つて鳴き出したが、その聲が訓一の耳には堪へがたく不快に響くので、彼れは耳を蔽ふた。

守屋は臺所でゴト／＼させてゐたが、やがて銚子を持て來て鐵瓶の中へつけ、「久振だから、今日はゆつくり遊んでお出なさい。御馳走をするよ」と、外へ駈け出した。訓一はその御馳走を薄氣味惡く思つたが、敢て歸る氣にもなれぬ。酒にも肉にも餓ゑてゐる。で、まだ冷たいのを銚子から茶碗へうつして呑んで、食物の來るのを待つてゐた。一杯の冷酒は腸に染み、身體をも心をも刺激して止まぬ。彼れは最早この家の厭はしさを左程感じなくなつた。猫の鳴聲をも氣にしなくなつた。

そして彼れは食厨を索り、唐菜の浸物を出して、一皿をムシャ／＼平げてゐると、守屋が歸つて來た。間もなく味さうな刺身が持ち込まれた。

「巽さん、あれから面白いことがあつたかい」と、守屋は差向ひて座つて酌をする。

「あつたねえ」

「久我の外にいゝのが出來たのかい。」

「あゝ」

「誰だよ、云つて御覧なさい。今夜は惚氣ても聞いて上げるよ」
「一寸云へないね、後難が恐ろしいから」
「人を馬鹿な。貴下を強請りやしないよ。誰れがこんな貧乏な人から。若い身空でピー〳〵してるんだから、お金の少しや貸して上げたい位だわ」と、守屋は濁つた目に笑ひを含んで見た。訓一は今更のやうに醜いなと思つて目を外らして、金さへありやこんな所にゐなくてもと思つた。何時かの若い藝者や、お秋や、來る道に電車に乘合はした奇麗な女が目前にちらつく。その衣服は消えて、艶のよい顔や肉付のよい肌のみが浮んで來る。
「何を考へてるの。思ひ出したんかい。いくら思ひ出したつて、今夜は行かせないから。色男つてものはね、生白い女と舌弛るいことを云ふばかりが能ぢやないよ」と、守屋は亂次なく居住ひを崩して矢鱈に飲みだした。
訓一は幾度か歸りかけたが、引留められもするし、自分でもこのまゝ淋しい下宿へ歸るのも心進まなくて、出任せの惰話に耽つてグツ〳〵してゐた。
下女であらうか、臺所の障子を開ける音がすると、守屋は急いで行つて、その女と何かヒソ〳〵話してゐたが、女は再びソツと障子を締めて戸外へ出て行つた。
訓一は猫板に肘杖をついて、ウツトリしてゐると、守屋が格子戸に繋金を卸す音が聞えて、自分はこの狭い汚れた家に虜にされたやうであつたが、敢て不快をも恐怖をも感じなかつた。

（十三）

その夜は遲く下宿へ歸つたが、下女の知らせによると、留守の間に若い女が訪ねて來たさうである。お秋ではないだらうか。會ひ損つて惜いことをしたと彼れは思つた。しかしこれからだ〳〵と、自分の將來に望みを抱いて快く眠りに就いた。

（完）

題目につきいろ〳〵思ひを凝らし候へど、適當のもの見當らず候へば一先づ「惡緣」といたし置候題目などどうてもよろしく候はずや

正宗生

●[illegible]定價（郵税八錢）[illegible]

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　日本橋呉服町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋鎗屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二、三、一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

廣告一手取扱　神田三河町一丁目　博報堂

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年三月廿八日印刷
明治四十二年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野鉎一
東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

●本號に限り　定價金四拾五錢　郵税金參錢